THE CENTRAL REVIEW

中央公論

懇話會

2-1921

二月號

36

第三十六年 第二號 第三百九十二號

モウパッサン全集

モウパッサンは自然主義小說家の泰斗なり彼の描ける人性は赤裸々にして生命本然の儘なり其技巧に至つては天才の技倆實に驚嘆に餘りあり彼の作物全部は殆んと大膽なる性慾描寫なりと雖も明確淸澄の主觀と嚴正無飾の描寫は却つて人の襟を正ふせしむるものあり自然主義寫實主義の極致を解しフランス藝術の粹を味はんとする人は速かに本全集に來れ。

◎廣津和郎氏譯

第一編 美貌の友

右發賣禁止のため絶版目下改訂中

◎前田晁氏譯（價二圓九十錢 送料十七錢）

六版

第二編 生の誘惑

或る特異の社會に身を置かれたる歌劇女優が此の處女が幾多の惱波に擬せられ遂に生の誘惑に身を委ぬるに至る心理狀態を藝術的に描寫せるモウパッサン作品中有名の傑作にして其他の短編十五種は愛慾に對し或は物慾に對し或は又恐ろしき人間性の本質に對し作者の鋭き洞察と徹底せる批判と溫き熱情とを頗る鮮かに表現したる渾然玉の如き作品也。

◎矢口達氏譯（價二圓六十錢 送十七錢）

四版

第三編 戀の力

中年の畫家が伯爵夫人と戀し年々の重なるに從つて苦悶を感じつゝも尙ほ且つ青春の如き血を湧かす矛盾の性慾を寫し、更に夫人の容色衰ふるに及んで其令孃を戀ふるに至る經路と夫人が褪せ行く容色を自覺して煩悶し情人の愛を繫ぐ事に焦慮せる性的生活を描きたる五大長編中の大傑作也。

◎宮島新三郎氏外二氏譯

新刊

第四編 狂へる戀

（定價金貳圓八十錢、送料十七錢）

本卷は主としてモウパッサンの中編程度のものを集めたるものにして何れも微妙なる心理を深刻に解剖し、人間の奧底深く潜める愛慾を描破して、戰慄を感ぜしむ。狂へる戀、アマ、ルイズロール等は最も深刻を極めたるもの其他の諸編は悉く一大驚異たらざるはなし。

第五編以下逐次刊行

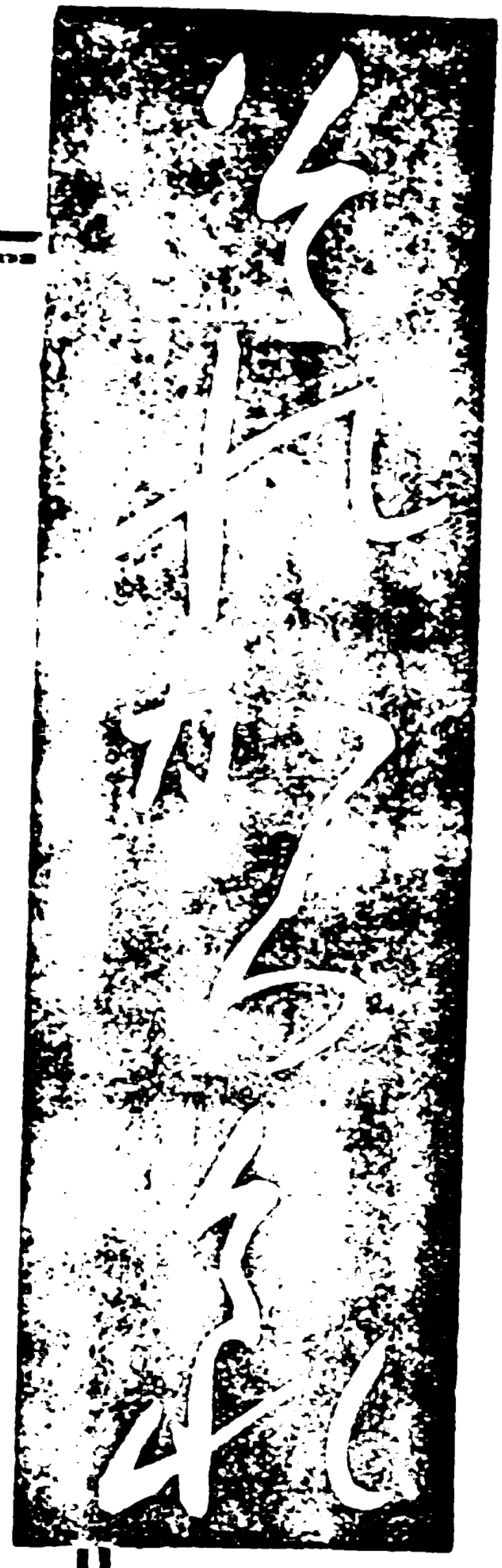
東京市麴町區
飯田町壹の貳

株式會社 天佑社

（電話九段長一一七三番
振替東京一〇一二八番）

文學博士

坪内逍遙先生著



文化運動に對する老博士の新旗幟を見よ

文壇の先覺者として、又風敎の指導者として、世人から慈父の如く敬慕されてをらるる文學博士坪内逍遙先生は、この十數年來その專門の演劇研究に關しての外、沈默を守つて又他を語られなかつた。

然るにこの曠古の大改造期に際して、民衆藝術たる演劇の、民衆敎化に最も深い關係あるを看取し、奮然として文化運動に參加し、社會警醒の任に當られた。その急先鋒として著はされたのが本書である。

即ち本書は先生の一大轉機を示すもので、先生の在來の隨筆集とは全く趣を異にしたものである。文章は先生の獨擅上たる輕妙洒脫の中に、諷示あり皮肉あり同情あり豫言あり敎訓あり、宛ら老博士の溫容と謦咳とに接するの感がある。文藝家好劇家は勿論、學者警世家學生は必ず一讀せねばならぬ。

▽定價一圓八十錢
▽郵稅十錢
▽四六判函入
▽寫眞廿八個入

最新刊

戲曲 修訂 **法難** 七版

文學博士 坪内逍遙先生著

日蓮上人の小松原法難を取扱つた脚本で博士の一大力作である

定價二圓卅錢 郵稅八錢

東京京橋南紺屋町
實業之日本社
振替東京三二六番

蘇峰 德富猪一郎新著＝新刊發賣

大戰後の世界と日本

上製 菊版 定價六圓 郵税廿七錢　並製 四六版 定價三圓五十錢 郵税拾八錢

二十八章二百十回に亘る一大論策

■著者獨語■獨逸の讀者諸君の注意を請ふ■世界大戰後に於ける日本帝國■世界大戰の眞相■獨逸は何故に敗北者となりし乎■英國は何故に勝利者となりし乎■世界大戰の影響■露國革命の因由■露國革命の爆發■ボルヒヴイズム■米國と世界大戰■巴里會議の大立者■巴里會議の經過■對露政策乎對露無政策乎■巴里會議の所得奈何■世界大戰の効果■英國と勞働者■歐米に於ける勞働界の趨勢■世界に於ける經濟的影響■世界大戰の齎せる惡果■惡化の重なる者■大戰後の英國■英國と米國■愛蘭問題■英米の角逐■戰後の英國■日米の關係■排日の始末■日米葛藤の結果奈何■死中活あり

以上 自序二〇頁目次一八頁本文七百八十二頁 合計八百二十頁

著者が現代に對する社會奉仕の精神は日本國民の心琴に深大の共鳴を見第一版より十二版迄四萬五千餘部忽ち賣切れ新たに第十三版を刊行す

大正十年に於ける世界の大勢は如何。順應乎、逆行乎、本書之を明快に說示す。大正十年に於ける日米の關係は如何。之が對策は著者心血を濺ぎたる焦點。是れ天下の志士諸君當面の絶好讀物。

發行所 東京市京橋區日吉町 振替口座一三一〇〇 民友社

ステヤリンカンハアス（手足のあれに）

コールドクリーム（夜のクリーム）

スムーシンクリーム（白粉下クリーム）

オイデルミン（化粧水）

ミルクキウカンバー（美顔化粧水）

シツプポマード（髪の乱れに）

東京 資生堂化粧品部 [illegible]

大阪支店 東區南久寶寺町

帽子と文化生活（其二）

氣候と天候とにより帽子にも種類を異にせねば成らぬ極寒の折柄にも早春の暖かさを覺える日が有ります冬だからとて是非毎日**フエルト**の中折帽子や中山帽子を被らねば成らぬ事は有りません夏だからとて麥稈帽子に限る譯は有りません雪の日には見るも暖かき毛長帽(Velour)が有ります。雨や風の時には夏でも羅紗帽子を御勸め致します小春日和の爽快な御遊歩には**ストローハツト**が一等です。歐米人の室内には何時も必ず四種や五種の帽子が在つて其日の空模様と戸外の氣溫を第一に而て自身の要向と服装に調和する様夫々適當なる帽子を被つて出かけます、で一日中に三回も四回も取替する事は珍しく有りません、帽子は單に装飾品では有りません寒むい日や蒸し暑い思ひや、雨に濡れて嫌やな思をして迄因習に盲從するには及びません御自身本位で保健と装身と嗜好とに調和する様各様の帽子の性質に從ひ自由に─生かして─使ひ分くべき筈のものです、そこで總ての帽子が年中何時でも役立つ事となり又使ひ方に無理が有りませんから其の壽命も永く一年や二年で御捨てになる様な不經濟な事は有りません。此が帽子に金を惜まず鷹印帽子の如き優良品を求められる原因で、我國の様に御着物や御持物に比し不釣合な見掛倒な爲めの惡い低級品を平氣で御愛用なさるのを見て歐米人は何時も笑つて居ます、どうか御頭の御召物ですから御履物よりも御携帯品よりも一層深き御趣味を窺ひ度いものです。

鷹印帽子

純品質主義

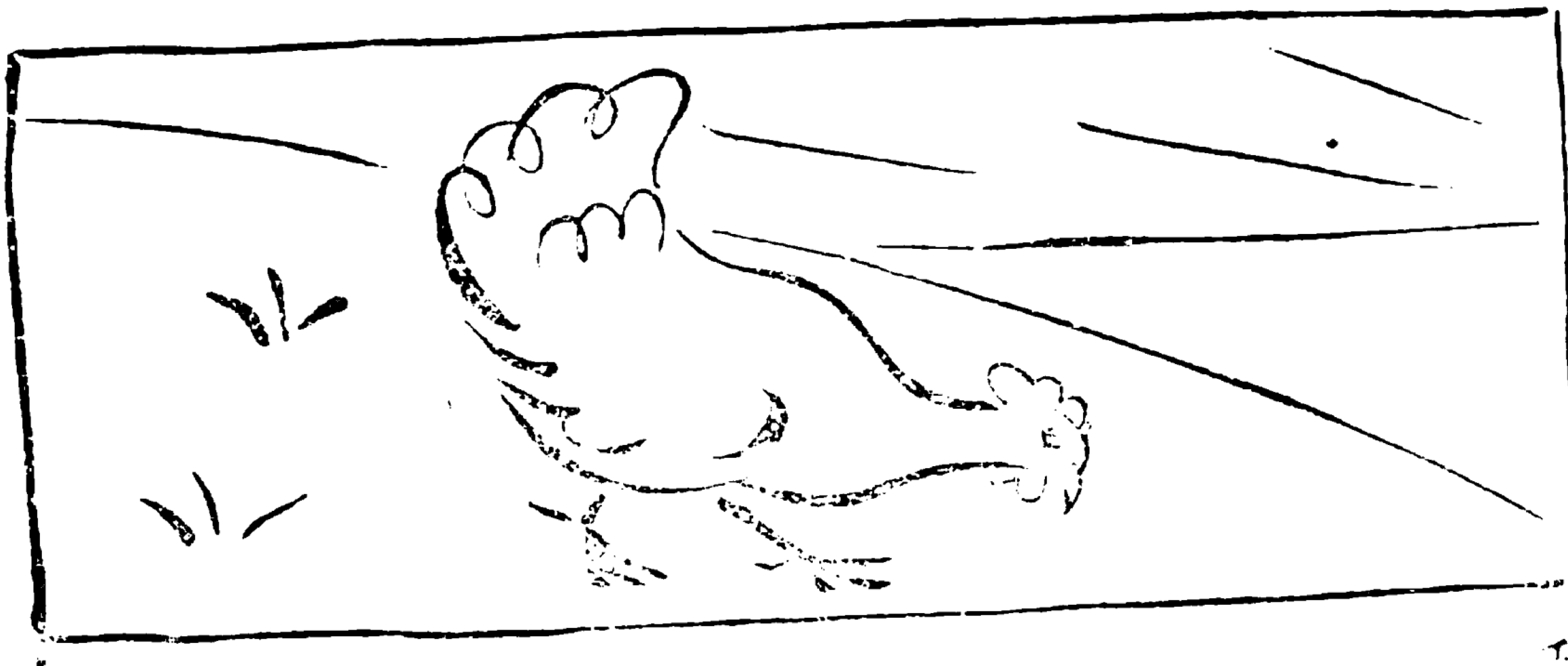


大阪

株式會社 高橋製帽所



中央公論第卅六年二月號目次



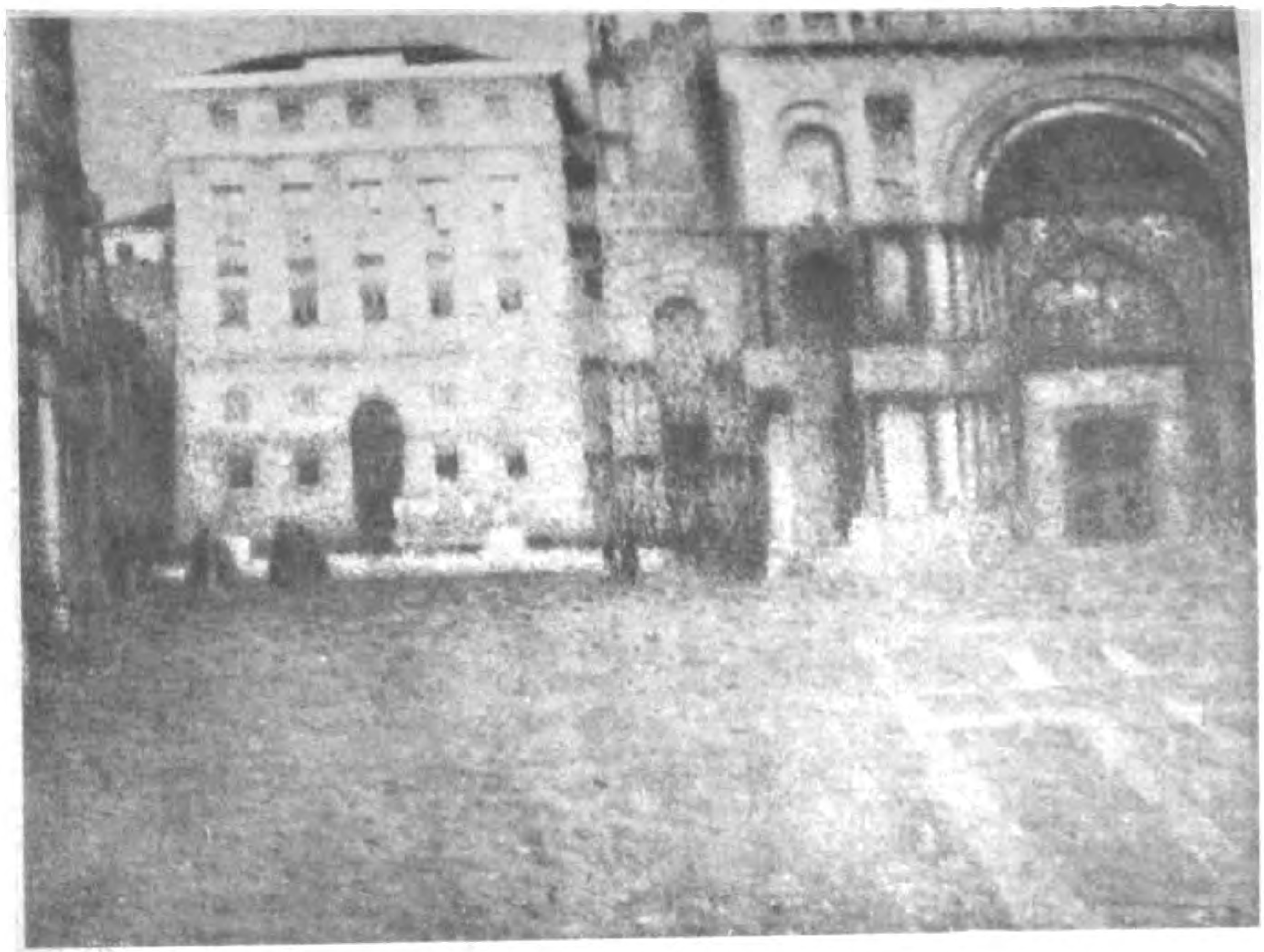
私の婦人問題觀

時論

〔創作〕



スラ〳〵書ける
プラトン
萬年筆
新時代の
優勝インキ
プラトン
インキ
萬年筆用
事務室用
學生用
スタンプ用
PLATON INK
日本文具製造
株式會社特製
中山太陽堂
文具部發賣



"PLACE ST. MARC, CRÉPUSCULE, VENISE" BY H. LE SIDANER

SSS FountPen

◆堅實と熱誠とはサンエスの營業的信條なり◆



現代の各方面に於ける代表的人士の手に執らるゝ

サンエス萬年筆

如何なる人のポケットにも
如何なる家の卓上にも

◆斯て生産するサンエスは當然天下を風靡す◆

東京馬喰町

大阪 名古屋 細沼株式會社 札幌

之からの問題

思想問題の取締に任じてゐる或る高官は、さる會合の席上に於て得意氣に、昨年の思想界はクロポトキンで賑はつたが今年は新マルサス主義が人氣の焦點となるだらうと述べたさうだ。此人は日本の思想界は何等の根柢もなく西洋で流行する固有名詞の跡を追うて猫の目の樣にクル〳〵廻るものと考へて居るらしい。成る程我が國の思想界は一面に於て案外に敏感だ。昨日西洋で問題になつた位のものは今日はや之を論ぜずには置かない。が唯一概に流行を追うて輕薄に轉々するものとのみ觀るのは餘りに上つ滑りの觀察だ。日本國民は此一二年來思想的に可なり深い要求に動いて居るではないか。

然らば國民の現に最も關心しつゝある問題は何か。

第一には何と云つても矢張り國權活動の文化的意義に關する問題であらう。實際問題としては一方に爲政者の盲目的な國權濫用があり、他方之に對する極端な反抗があつて、其爭は益々甚しくなりつゝある。議論としては、所謂國家主義者と目すべき代表的論客の意見も漸次の訂增にチラホラ見えはしたが、大體は人格的自由の保障を基調とする人道的國家觀に歸嚮して居る樣だ。然るにも拘らず政界教育界殊に警察司法の部内に今なほ舊の國家觀を危險視する者の多いのは悲むべき現象である。大正十年は此方面に於て更に一層烈しき爭論を續くるであらう。

社會改造の方針に關する問題も亦前者に劣らぬ重要の地位を來るべき論壇に占むるであらう。之も實際問題としては、政府並に資本家側の無理解と頑迷とに憤激するの餘り、勞働者並に其友は一齊に起つて反抗運動に手を握つて居るものゝ、識者階級の理論的問題としては、之等の所謂改造運動にも自ら二種の相容れざる潮流あることが指摘されて居る。言葉は多少不精確であり從つてまた誤解を招き易い嫌はあるが、夫の物的改造對心的改造の爭論の如きは即ち是れである。之に就ては本誌に於ても從來屢諸家の見を紹介して讀者の參考に供したが、今日の所、學界の定論としては、心的改造の系統を主潮と立てるや疑ない。が併し勞働者自身は寧ろ直接行動を喜んで物的改造を主たる目的とする系統の説に從はんとする如くにも見ゆる。實際の勞働運動と指導階級の主張と斯くも相反することは、可いかわるいかは姑く別問題として、頗る吾人の注目に値する。來るべき一年の中には此方面よりも何等か嘱目すべき新事象が起るに相違ない。

若し夫れ國際關係の問題に至つては、日本國民の當に大に考ふべき問題にして事實未だ深く其關心する所となつて居ない。世界に於ける日本の精神的孤立に心を痛ましめ始めて昨今之を問題とする者漸く多からんとはするも、彼等の言ふ所未だ事の眞相に徹してゐない憾はある。然れども、吾々國民が國際關係を比較的等閑に附せるの結果は、昨今段々色々の問題に現れて吾々を苦しめて居る。神經過敏ならざる吾々でも此上這般の實物教訓に對して何時まで盲目なるを得るだらうか。吾々は此一年に於て亦大に此方面に於ても學ぶ所がなければならない。

中央公論



第卅六年第二號
二月號
第三百九拾二號

人格主義、戒律主義、主觀主義

阿部次郎

一

人格主義は、その生活の中心を何處に置くことを人に要求するか。云ふまでもなくそれは人格そのものである、人格價値の增進と完成とである。これは固より、人格主義の立場から見れば自明の眞理であるが、併しこの平凡を極めた命題を主張するとき、吾々は、人格主義の腹背兩面に敵があることを豫想してゐるのである。吾々の生活の中心を置くべきは、人格そのものであり、人格の全體であるべきが故に、それは人格に於ける正邪の一面のみに着眼してこれを絕對化する戒律主義に反對する。正邪の觀念を擴充してこれを人格價値の全局を覆ふ概念に改鑄しない限り、あらゆる戒律

主義は人格主義の敵である。而も吾々の生活の中心とすべきは、人格の本質であり人格の先驗的要素であることを要するが故に、それは又生活の經驗的主觀的方面のみを强調して結局道德上の虛無思想に導かむとする、或意味の個人主義若くは主觀主義にも亦反對せざるを得ない。人格主義は、この腹背兩面の敵に對して、自己の主張を支持する必要がある。この方面に於ける人格主義の活動は、畢竟一石を投じて二鳥を墜すところにあるのである。

戒律主義は何故に支持すべからざるか――今日に於いて猶この事を問題にするのは、甚だしく時勢後れであるやうに見えるでもあらう。併し傳來の戒律を絕對化する思想が、教育界と云はず家庭の內部と云はず、凡そ社會の表面を一般に支配してゐるといふ事實は、今日と雖も未だ動かすことが出來ない。さうして傳來の戒律がその權威を失つて來た方面に於いて、新たにその勢ひを振はむとするものは輿論の戒律である。戒律の內容は時勢につれて幾度か轉變しても、戒律主義は依然としてその勢力を保持してゐる。然るに人格主義と矛盾するものは、單に謬れる戒律內容のみではなくて戒律主義そのものである。吾々が正邪といふ概念の中に包含させるものは何であつても、苟も一向きな正邪の觀念を以て人格價値の內容を測り盡さむとする思想は、その傾向に於いて人格主義の敵である。從つて人格主義は、單に傳統の戒律を絕對化する思想のみならず、輿論の戒律を絕對化する思想とも亦戰はなければならない。戒律主義の生活から脫却することは、單純な過去の問題ではなくて、又現在と未來との問題である。これを打破するために、出來るだけ明晰な認識の武器を用ゐることは、今日に於いても決して無用な仕事ではないであらう。私はこの信念の上に立つて戒律主義の自滅を論證して見たいと思ふ。

二

私はこの論證を試みるために、戒律主義が眞理であるとする假定から出發する。人間の價値は彼が正しく行爲するかしないか、正邪の岐路に立つて踏み迷ふか踏み迷はないかの一點に懸つてゐるとすれば、他人に對する態度に於いて正しい道を踏み迷はないために、吾々は自ら如何なる條件を充すことが必要であるか。他人の現にとりつゝある道が正路に叶つてゐるかゐないかを見ることのみによつて、吾々の彼に對する態度は常に正しく決定されることを得ようか。換言すれば、戒律主義の意味に於いて他人の正邪を見ることは、吾々を正しい人にするために、いつでも必要で充分な條件であると云ふことが出來るか。

事態を明かにするために卑近な一例をとらう。吾々は自ら正しい人となるために、「罪と罰」のソーニヤと夫に對する貞操の愛なくして而も夫の富貴を誇とする貴婦人と――この二つの者に對して如何なる態度をとるべきであるか。ソーニヤは身を賣つた女である。父と繼母と繼母の子とのためにその身を賣つた女である。併し身を賣つたのはソーニヤばかりではない。彼の貴婦人も富貴に代へるために身を賣つた者である。凡そ夫に對する愛なしに結婚生活をしてゐる女は――縱令如何に法律上の手續きを履んでゐるにせよ、又如何に貴婦人として婢僕の追從を受けてゐるにせよ――悉く身を賣る者である。この兩者は身を賣るといふ不義に陷つてゐる點に於いて、等しく戒律に背き、而も等しく邪淫戒といふ同一戒律に背いてゐるのである。然らば吾々はこの二つの者に對して又同一の態度をとるべきであるか。この兩者を同樣に取扱ふことによつて、吾々はたゞ自ら正しい人となることが出來るか。

否、吾々はこの兩者の罪に對して同樣の態度をとることによつて、甚しく不正な者となるであらう。ソーニヤに對する正當の態度は、彼女に保護を與へることである、彼女の傷ける心を劬り裝んでやることである、さうして汚穢の中に於いても猶純眞の心を保つてゐる彼女の美點を尊敬することである。吾々の男女關係に於ける邪淫的要求、吾々の夫婦生

活に於ける賣買の心持が容易に除き去り難いことを自覺する者は、自ら恥づることなしに一向きにソニヤを責めることはとても出來ないであらう。併し彼の貴婦人に對するとき、何よりも必要なのは、彼女の無反省な高慢に對して一撃を加へてやることである。彼女も亦身を賣る者であること、而も侈淫と虚榮との爲に身を賣るは家族のパンを得るために身を賣るよりも遙かに恥づべきことであること、卑しき動機の爲に身を賣る者は愛の爲に身を賣る者を輕蔑する資格なきこと――凡そ此等のことを自覺させることとである。この二つの態度を區別せざるとき、吾々はソニヤに對しては苛酷に失し、貴婦人に對しては甘きに失して、共に正しからぬ行爲に陷ることを免れないであらう。

然らばこの二つの區別は何處から來るか。この區別が、兩者共に邪淫戒を犯してゐるといふ同一の事實から來ることが出來ないのは勿論である。それは兩者の間に於ける何等かの差別に基いてゐなければならない。さうしてこの差別は純粹と不純との差別、無邪氣と高慢なる無自覺との差別、謙遜と自欺との差別である。自己を犠牲にせむとする心と利己を第一にする心との差別である。兩者の內心に於けるこの差別は、當然にこれに對する吾々の態度の差別を喚起するのである。

併しこの場合に於いても、吾々の態度の正と不正とが、單に兩者を淫邪の罪から脫却させるといふ目的のために有功であるかないかによつてのみ決定されるものならば、吾々の究竟の目的は、矢張り、自らも戒律を守り他人にもこれを守らせることに歸着するであらう。他人に對する吾々の態度を正しくするためには、吾々は唯彼等をして固く定められた戒律を保たしめるやうに仕向けさへすればそれでよいであらう。固よりソニヤと貴婦人との場合に於いては、この方面の制限も亦重要である。邪淫の生活は人格全體の腐蝕を誘起する恐るべき生活である。この生活を永續するとき、如何に純眞な人と雖も、到底「泥水が身に染みる」ことを免れないであらう。この迷路から脫却させるための努力にして、然

淫戒には正當な人格主義的根據がある。從つて吾々は、ソニヤをも貴婦人をも邪淫の生活から脫却させる目的を以て彼等に對しなければならない。この目的を以て前者を勵り後者に一擊を喰はせなければならない。彼等に對する吾々の態度の正と不正とは、一面に於いては確かにこの標準によつて決定される。併し問題は、果してこれが唯一の標準であるかどうかにある。

假に吾々が、唯路側若くは何となき會合に於いて彼等に落合つたに過ぎない場合を考へる。この場合に於ける吾々と彼等との關係は、彼等を救ふか救はないかといふやうな立入つた問題ではない。從つて前の標準は、この場合に於ける吾々の態度の正と不正とを決定するものとして適用することが出來ない。而も猶この場合に於いても、ソニヤに對してはこれを保護しこれを勵る態度をとるのが當然であり、貴婦人に對しては彼女の恥を知らぬ高慢を擯斥する態度をとるのが當然であるとすれば、この二つの態度の差別は果して何處から來るか。それは、吾々がソニヤの純眞を尊敬しなければならないのは、それがソニヤを邪淫の生活から救ふに有功であるからばかりではないからである。貴婦人の高慢を擯斥することを要するのは、單にそれが彼女の迷夢を醒すための最良の途であるからのみではないからである。更に根本的なのは、純眞がそれ自身に於いて尊敬を要求し、不純な高慢がそれ自身に於いて輕蔑を要求するからである。純眞を尊敬せず不純を擯斥せぬ行爲は、結果の如何に關らず行爲それ自身として不正であるからである。ソニヤの純眞を侮辱する態度が不正なのは、彼女が賣笑の生活を繼續するとしないとに關らない。貴婦人の高慢に追從する態度が卑劣なのは、必ずしもそれが彼女の高慢を增長させる結果を將來すからばかりではない。純眞を愛し虛僞の高慢を惡む內面的態度は、結果の如何に關らずそれに相當する行爲に於いてその表出を求める。この場合に於ける吾々の行爲の正邪は、純眞と高慢との內面的價値と不價値とを正當に味會してゐるかゐないかによつてわかれるのである。

茲に於いて外面的戒律主義は自滅に歸せざるを得ない。他人に對して正當な態度をとれといふのは、吾々の行爲に對する規則である。それ自身に於いては外面的戒律主義の意味に於ける一つの戒律である。然るに吾々は、この戒律を徹底的に實行せむがためには、少くとも他人に對するとき彼が戒律を守るか守らぬかを見るだけでは足りないことを發見した。吾々が他人に對して正しく行爲するためには、彼の行爲のみではなくて、その動機やその心情の全體を洞察する必要がある。而も此の如き洞察を要するのは、彼の行爲を戒律に從はしめるための方便としてのみではなくて、動機や心情そのものに獨立の價値があるからである。此等のものをその獨立の價値に從つて取扱ふことを怠るとき、吾々は價値あるものをその價値相當に取扱はぬといふ點に於いて既に不正行爲に陥るからである。過誤なきを期するは戒律主義の理想である、然るに他人に對する行爲に於いて自ら過誤なきを得むがためには、對者の生活に於ける過誤の有無以上、更に深刻に他人の內生を見なければならない、戒律の完成は戒律以上の價値に活眼を開ける者にとつてのみ可能である。さうして既に他人の生活に對して戒律以上の價値の獨立を承認せる以上、自己に對しても亦戒律以上の生活あることを承認しなければならないのは當然の歸結である。戒律に叶ふか叶はぬかの一點のみに着眼して自己の生活を規定するとき、吾々は他人に對すると同様に自己に對して不正を行ふのである。戒律は人格全體のためにあるのであつて、人格全體が戒律のためにあるのではない。この眞理は自他を通じて何の相異するところもないのである。

この結論は平凡にして自明な結論である。併しこの平凡にして自明な結論を正當に尊重することを忘れたために、吾々の社會にはどれほど不正行爲が行はれてゐることであらう。道德や正義や輿論や良風は、それが一向きな戒律主義の意味に於いて主張されるとき、悉く不正行爲を誘起する原因となる。それは他人に對しては、彼の自由な心を萎縮せしめ、彼の改悛遷善の實行を困難ならしめる不正行爲である。それは自己に對しては、自己の人格を全局に渡つて開發せ

むとする努力に、濁つた[illegible]しい口實を回からうとする不正行爲である。欺かむとする心が社會の全體に[illegible]とき、其處には人格の自由な快活な發展を期すべくもない。吾々の社會は、この點に於いて更に痛切な反省を要する。今日の社會を暗くしてゐるものは、戒律に背く者の不正であるか、戒律の名に於いて他人を欺かむとする者の不正であるか、私はこの點に就いて疑なきを得ない。詐欺や竊盜や姦淫や、此等戒律に背く不正が吾々の社會の禍となつてゐることは云ふまでもないが、戒律の意義を反省することなしに傳統の戒律を主張するために頑強な非道と偏見とを示してゐる者、動機と心情とに對する省察なしに外形のみによつて他を審かむとする者、過誤の中にある眞を愛することを忘れたる者、自ら省みて他を宥恕する心を失へる者——此等戒律主義者の身邊から放射する色々の毒氣が、社會の雰圍氣を全體として混濁にしてゐることとは、恐らく前者よりも更に恐しいであらう。此等の不正は大事に於けるが如く小事に於いても吾々の周圍を圍繞する。それは丁度、風のまにまに何處の隙からも侵入して來る細かな埃のやうに、微細に渉つて吾々の社會生活を不幸にするのである。さうして就中最も堪へ難いのは、戒律主義の外貌を被れる利己主義である。戒律を信ぜずして戒律を振廻す者の戒律主義である。自己の利益を最後の目的として正義の主張を敢てし、自己の利欲を遂げるに必要な點に於いて嚴しく他人に戒律の實行を責めむとする者である。私はこの意味に於いて、今日の日本の政治と世界のアングロサクソン的外交とを特に堪へ難く思ふ。戒律主義者は少くともその戒律を眞實に信じ眞實に實行せむとする點に於いて本質的純粹を保つてゐなくてはならない。これによつて自ら律せむとする誠意を缺きながら、徒にこれを他に責めむとするが如きは、詐欺の甚しいものである。日本と世界とはいつまでも此の如き詐欺的戒律主義の横行を許容すべきではないのである。

三

或人は上來の所説に對してかう云ふかも知れない——純粹な心を持て、自ら省みよ、恥づることを知れ、凡て此等の要求も亦戒律ではないのかと。若し吾々がより尊き人格となるために履行することを要する一切のことが戒律と名けられるならば、此等のものも亦勿論戒律である。さうして此等の戒律が相互の間の連絡なしに、此等の戒律を支持する統一的原理なしに、傳統若くは輿論によつて孤立的に與へられるに過ぎないならば、共適用の範圍に內と外と心情と行爲との差別あるにせよ、結局それは戒律主義の意味に於いて人心を支配するを得るに止るであらう。併しそれが人格全體の根本要求によつて統一されるとき、それは戒律主義としての特殊の意味を失ふ。彼に於いては、行爲と聯關する限りに於いてのみ內面的態度が問題となる。此に於いては、內面的態度の表出としてのみ行爲が問題となる。前者は行爲の一點から見て人格の價値を評價せむとする。後者は個々の行爲の評價にも人格價値の全體をその背景とする。故に內面的戒律は、畢竟「十全なる意味に於いて眞正の人となれ」といふ一句に要約せられるであらう。內外の生活に關するあらゆる戒律はこの一つの根本戒律の分派若くは應用に過ぎなくなるであらう。戒律がその一面性と外部性とを失ふとき、それは最早戒律主義ではない。人格の本質に奉仕するものとして戒律の意義が承認されるとき、戒律はその絕對性を失つてしまふからである。此の如き見地の轉換から來る最も顯著な事實は、それが、所謂善人の中にも輕蔑に價する者があることと、所謂罪人の中にも敬愛すべき者があることを教へるところにある。

吾々は人格價値を構成する要素を如何に數ふべきであるか。私は今リップスに從つてこれを三つの要素に要約する。(一)第一に人格の豐富はそれ自身に於いて人格價値の一面である。他の點に於ける比較はどうであつても、更に何等かに生

きることを解する人格は、貧弱な人格よりも、少くともその限りに於いて優れてゐる。第二に人格の力もそれ自身に於いて人格價値の一面である。力ある人格は、力なき人格よりも、少くともこの一點に於いては勝つてゐる。第三に人格の統一點はその人格の向きを決定する。釋迦や孔子もその統一分子に於いては煩惱具足の凡夫であるにもせよ、彼等の生活が道を中心とする點に於いて、彼等は普通の人々よりも遙に高い人格を持つてゐるといはなければならない。吾々が真正に人となるとは、この三要素の孰れをも偏重せずに、全局に渉つて人格の價値を增進することである。人格の豐富なる發展を阻害することも、人格の力を萎縮させることも、人格の中心を顛倒させることと共に自他に對する罪悪である。吾々は、單に人格の中心を正しきところに置くことを努めるのみならず、又正しき生活を豐かならしめ力あらしめるやうに努めなければならない。正邪の觀念は、豐富で發達されることによつて、始めて人格主義の要求に適ふものとなるのである。

但し吾々がこの立脚地に立つとき、常識に對して一個の難問を要求することは到底避けることが出來ない。人格を豐富にするとは、豐富な人格内容の統一の仕方に於いて調和に富む傾向を多くすることである。人格の力を増進するとは、一度吾々が此處に到るとき、人格の中に生活する力を強くすることである。若し吾々の使命が出來るだけ完全に人格を守るところにあるならば、吾々は人格内容を豐富に統一し、人格の力を益々強くすることを使命とするであらう。吾々は、それにも拘らず、人格の豐富と人格の力とをそれ自身に於いて價値ありとするとき、吾々は無力にして貧弱なる正しさよりも、寧ろ豐富にして力ある人格の錯誤を擇ぶことを否認する者でなければならない。(三)豐富にして力ある人格は、錯誤であるからではなくて、錯誤あるにも拘らず價値を持つてゐる。之に反して、吾々が偏へに個々の岐路に立つて踏み違はぬことを希ふがために、恐々兢々として戒律せる一歩を進るとき、幸ひにして一度も戒律に背くこと

なきを得るも、此の如き生活はその根柢に於いて無價値である。何となれば、それは人格の豐富と力とを缺くが故の正しさであるのみならず、彼の求むるところが専ら外面の無過失と世渡りの滑らかさとにある限り、彼の生活の統一點も亦甚だ淺薄にして下劣であるからである。偉大なるものを求むる者の過誤は、矮小に甘んずる者の無過失よりも價値を持つてゐる。人格が偉大であるが故の過失は卑賤なる人格の正しさよりも遙かに優れてゐる。人格全體の價値を第一義に置く限り、これは吾々の當然避け難き歸結である。此處に、戒律主義に對する人格主義の特異な立場がある。

四

併しかう云ふのは、決して正邪の觀念が人格主義にとつて無意味であるといふのではない。此點に於いて吾々は更に新たなる敵に——虚無的主觀主義に應戰しなければならない。豐富にして力ある人格は何事をしても正しいといふことが出來るか。豐富にして力ある人格を更にその內容と方向とに於いて規定する原理は存在し得ないか。彼は、彼にとつて必然でさへあれば、殺人をしても姦淫をしても、自ら恥づることを必要としないか。

この場合の問題は、懸つて「彼にとつて必然でさへあれば」といふ一句の意味にある。彼にとつて必然でさへあれば、といふのは、彼を益々豐富に偉大な者にするために必然でさへあれば、といふ意味であるとすれば、この言葉は正當である。併し彼を——一般に人間を——豐富にして偉大な者にするためには何事が必然であるか。この問題は依然として殘存する。

彼を豐富に偉大にするためには、苟も彼の心中に擡頭する欲望を手當り次第に實現すればそれで澤山であるか。彼が欲するときに始め、彼が飽いたときにこれを捨てればそれで澤山であるか。若しそれで澤山であるならば彼の生活の內

容を規定し彼の生活の方向を指示する原理は全然必要がないであらう。併し若し彼の豐富を益々豐富にし、彼の偉大を益々偉大にするためには、彼がその心身を錬して遵奉しなければならぬ原理があるとすれば、其處に、彼にとつて正しき生活態度と、彼にとつて不正なる生活態度とは當然にわかれて來なければならない。

凡そ豐富と云ひ偉大と云ふのはどういふ意味であるか。其處には豐富そのもの偉大そのものといふやうな抽象的なものは存在しない。豐富とは何物かが豐富なのである。偉大とは何物かが偉大なのである。吾々が豐富であり偉大であるといふ言葉は、豐富であり偉大である前に吾々が何物かであることを豫想しなければ意味をなさない。故に吾々が豐富になり偉大になるためには、吾々があるところのものを、豐富にし偉大にする必要がある。吾々を豐富にし偉大にすることは、吾々があるところのものに——吾々の本性に——精通することである。この道を除いて吾々を偉大に豐富にする道は何處にも存在しない。

而も吾々は一つの個體（インディヴィヂュアム）である。分つ可からざるものである。故に吾々を偉大にし豐富にするものは、吾々の一部分のみを偉大にし豐富にするだけのものであつてはならない。一部分のみを偉大にすること眼の上のたん瘤の如きものであつてはならない。これは吾々を全體とし偉大にするもの、吾々の全人の要求に適ふものでなければならない。既に全體の見地より見て吾々の本性に適ふものを選擇することが必要であるとすれば、それはどうして部分に對する制限的禁止的原理とならない譯があらう。それは、必要な場合には、個々の欲望に對する否定の原理として働く權威を持つものでなければならない。此處に於いて、吾々の生活内容を規定し吾々の生活態度を指示する原理が、吾々自身の内部から發生するのである。この原理に從ふとき、吾々は始めて偉大と豐富とを增進することが出來る。さうしてこの原理に背くとき、吾々は結局次第に人格價値の減少し行くことを見なければならないであらう。宗教的の言葉を用ゐれば、

彼は生命の道である、此は滅亡の道である。

其處には、吾々がその方向に進行しさへすれば、益々豐富となり偉大となるが如き一つの道がある。さうして其處には又、吾々がその方向を轉換せぬ限り、偉大な者は次第に矮小となり、矮小な者は次第に消滅に近づくやうな一つの道もある。自然の恩惠が彼に方向轉換の機會を與へるのは何時であるか、それは境遇と運命とによつて一様ではないが、兎に角それは彼がその方向に進み行く限り遂に滅亡に終らなければならぬやうな一つの道である。前者は彼にとつて正しい道である。後者は彼にとつて正しからぬ道である。正邪の差別は、人格主義にとつてもこの意味に於いて假存しなければならない。

それは個々の行爲に關する概念ではなくて生活態度の全體に關する概念である。人格の豐富と力とに對立する觀念ではなくて、此等の理想を包含せる人格生活全體の方向に關する觀念である。個々の戒律は、この意味の正邪に分關することによつて――又これに分關する限りに於いて、價値を有する。それ自身獨立の權利を獲得し得ざる戒律は、これに依立することによつてその存在の理由を築きあげなければならない。

この意味に於いて正しき方向に向へる生活にも、固より多くの罪過は闖入する。時としては、行詰つてゐた其人の進路が、罪過を通り抜けることによつて始めて開けるといふやうな場合さへあるであらう。このとき、姦淫も殺人も「善知識」として彼の生涯の進路に役立つといふ意味に於いて、彼にとつて善であり得る。併し彼が此等の生活を繼續する限り、彼は滅亡に陷らざるを得ない。彼の生命の道は、方向轉換によつて始めて拓かれる。故にそれ自身として見れば、姦淫や殺人は常に不正であり惡である。惡は利用價値を持つことは出來るが、それ自身に於いて善であることは出來ない。それは常に征服されたければならぬ敵物である。

固より斯の如くにして定立される正邪は、第一に彼の正邪である。彼を生かすか滅ぼすかによつて定まる個人的原理であつて、この個人的原理が同時に人類に通ずる普遍的原理であるかどうか。これは體驗の問題であり信念の問題であるが故に、最も容易し難い。併し人は共通の原理を持たぬところに共通の道を求めることが出來ないことを思へば、人と人との間に共通な何物かが存する限り、吾々の正邪の觀念には或る隠れたる普遍的原理がなければならない。さうしてこの普遍的原理の存在は、正邪に關する觀念に時代差及び個人差があるといふ事實によつて毀滅し得ないことは勿論である。正邪に關する意識の個人差が正邪の原理を左右することが出來ないのは、天文學者の誤算が日の出月の出を早くしたり遅くしたりすることが出來ないと同樣である。彼が自覺するも自覺せざるも、彼が與ひてこれに反抗するもこれを否定するも、事實上彼が支配する原理は依然として彼に對して妥當である。この意味に於いて人類に普遍なる正邪の原理あることを信ずるとき、これは單に「彼の義」であるに止らずに又「神の義」である。この信念の上に立つ者にとつて、「神の義」は凡ての人間にとつて最高の標的でなければならない。「飢ゑ渇く如く神の義を求ふ」ことが萬人にとつて生命の道である。さうして神の義に參する程度に從つて人格の價値は合昭として歩々に實現されるのである。

五

以上私は「快樂主義」と「功利主義」に對するものとして一通り人格主義の立場を明かにした。人格主義とこれに對立する思想との異同を明かにする仕事は決してこれで盡きたのではないが、今は論點を此處に限ることを以て滿足しなければならない。唯最後に一言して置きたいのは、人格主義の一般的態度である。人格主義を折衷的妥協的であると思惟する人達に對して、私は一言を費して置きたいと思ふ。

人格主義は中庸主義であるか。それが折衷主義であるといふ意味においては、人格主義は決して中庸主義ではない。折衷とは豫め與へられた二つの立場を持つてゐるものである、豫め與へられた二つのものの中間に自己の立場を求めるものである。併し人格主義は決して他に豫め與へられたものを假定することをしない。それは最初から人格の絶對價値を認めるところに獨自の立脚地を定める。さうしてそれが獨自の立脚地を持つといふ事實が、おのづから彼の兩側にその反對を喚起するのである。その兩側に彼と反對するもののあるが故に、彼は自然の結果として兩者の中間に立つのである。兩刄の劍を以て所を貫くとき、劍は右を截り又左を斬る。併しそれが左右を斬るのは唯自然の結果であつて、劍の志すところは唯深く貫くことである。實際、深く貫くことを志すものは常にその左右を斬らざるを得ないであらう。正しく貫かむとするが故に不偏不黨であるといふ意味に於いて、人格主義は始めて中庸主義である。立脚地を曖昧にする者の折衷主義は、吾々の最も嫌惡するところである。

或人は又勞働者と資本家との對抗戰に於ける人格主義の態度を見て、これを妥協的であるといふかも知れない。併し勞働者の主張が正當な限りに於いて、人格主義は明瞭に勞働者の味方である。たゞ人格主義が、資本家に對する憎惡の氾濫や復讐心に同感して、この意味に於ける階級鬪爭に加擔することを得ないのは、人格主義が人格主義である限り固より當然のことである。若し歷史の進行は此の如き憎惡の氾濫や復讐心を通して始めて新局面を打開するものであるならば、人格主義の使命は差當り直接に新世界の下ならしに參加するところにあるのではなくて、血腥き階級鬪爭の戰場に於いては赤十字となり、又凡そ鬪爭後の新しき建設に於いては必ずこの精神に從はなければならぬところの永遠の原理を與へるところにあるであらう。この意味に於いて人格主義は永遠なる歷史的使命を持つ。人格主義が一歷史の「鬪爭」を以て自ら甘んずることが出來ないのは、彼が妥協を志すからではなくて永遠を志すからである。永遠の立場から

現在の問題に關與せないとするからである。凡ての組織と制度との中に働いてこれを内から淨める力となり、凡ての組織と制度とを批評してこれに進行の方向を與へ、最後にあらゆる建設に向つて永遠の原理を提供することは、歴史的に見ても決して些細な使命ではない。私は固より微弱なる一代辯者に過ぎないが、人格主義の任務はこれによつて重大の程度を減ずべきではない。

(一)「倫理學の根本問題」第三章(行爲と心術)
(二)同書 一七五—一八一(理想的人格)
(三)同書 八四—八九(根本惡)
(四)「ニイチエのツアラツストラ、解釋並に批評」第七章(超人の觀念)
(五)同書 第六章(個人主義の意味)
(六)「三太郎の日記」五三七—五四四(一つの解釋)
「倫理學の根本問題」一一七(道徳そのもの)
(七)同書 第五章(道徳的正)
(八)「三太郎の日記」五六六以下(奉仕と服從)

現代經濟生活の「日本標準」

（中流階級の研究 其一）

法學博士　森本厚吉

一、序言

新時代の勢力は實に旺んなものである。何程自負心の強い國民でも世界思潮の大勢には逆行する事の出來るものでない。古い〳〵國家萬能主義に囚はれた所謂先覺者の數多い我國でも今迄新思想と危險思想とを混同した愚を演じて居つた事の非を悟り始めて「行き詰まつた我文明を如何にしたらよいか」と云ふ事を稍々眞面目に考へ始める樣になつた事は實に慶ぶ可き事である。然り現代文化の要求は社會の根本的改造であるが其の基調は個人の改造であると云ふ事が漸く理解され始めた。而して個人の改造は先づ各自が人格を尊重し天與の生活權を自覺する事に始まらねばならぬ。斯くなつて來ると生産の基は消費であつて個人の生活問題が社會、經濟問題の中心點となり、是れを從來の樣に古い傳說や、誤まつた習慣や、不合理な常識に任せて置くのは大いなる誤りであるから、矢張日進月歩の科學を經濟生活に適用して生活の内容を充實し其能率を高め國民をして新時代に活かしむる事の必要を切に感ずる樣になる。而して人間らしい生活を營み新時代に活くる事の出來るものは從來は極少部分の貴族とか其他特殊階級のみに限られて居つたが、現今に於ては國民各自の生活權を先第一に認めなければならぬのであるから、國民の大多數をして新時代に適應した人間らしい生活を營ましめる事を先づ第一に考へねばならぬ。換言すれば民衆をして文化生活を營ましめる事が現代文化の第一條件である。然らば國民の目標とすべき標準生活は如何なるもので、かゝる生活を營み得る又は營む可き階級は如何なるものであるか、是等の問題を主として經濟的見地から研究して我國民生活

向上をはかるのが其會の目的である。

二、日本標準

微力ながら私共が全力を盡して從事して居る學問の研究も、學術の講義も、又は文化の運動も其最終の目的は國民全體の福利増進である、從つて國民經濟生活の研究に於て、例へば生活の標準を探究せんとする時に於ても、私共が先づ國民が現在如何なる生活を營んで居るかと云ふ事實を精細に調査研究せねばならぬのは勿論であるが、現在事實の代表的のものを以て恰も完全なるものゝ如く是れを國民の標準として滿足する事は出來るものでない。斯かる標準は餘りに低級であるから是れを向上して時代文化生活の程度迄引上げる事に努力す可きである。從つて本研究に於て「標準」と云ふのは現在の事實を代表せるものを云ふのではなく合理的に標準となす可きものを意味するのである。故に茲に「日本標準」と稱するのは私共が廿世紀の日本國民として當然到達しなければならぬ理想的標準でありて、標準階級と云ふのも其理想的生活の標準を維持し又合理的に向上させて行く中流階級者を意味するのである。

米國では近來生活問題が盛に論議されて米國民としての生活標準を學術的に研究し是れを「米國標準」と稱して居る。而して此標準を維持し又合理的に向上さする事により米國の生産能力を大にし延いて國民生活の幸福を多大にし得るものと認めて居る。元來生活問題は國民の生活條件の相違によりて變化する事は後章詳述するであらうが、國際的關係の密接な今日に於ては國情の相違で生活標準を餘りに著しく異にするものではない。殊に我國では戰後經濟力が著しく大になつて生活の標準が近來大いに向上したのであるから、日米兩國民間に從前の様に著しき標準の相違を存する筈のものでない。茲に私共は先づ日本國民が新時代に於て享受す可き標準を定めて其標準を保ち得る階級者の數を益々增加せしめ、延いては國民全部が共「日本標準」の下に統一され國民擧つて生活標準を明白に認め、以て社會の進歩を徹底的に計りたいのである。斯くの如き意味に於て「日本標準」と云ふ名稱を用ひ其標準を保つ階級を標準階級又は中流階級と呼ぶのである。

三、國民標準と中流階級

人間社會が進化すれば自然に特殊の階級別を生ずるに至るものである。抑も進化と云ふのは、物質の完成及運動の附隨的消散であるが其(行動)の間に物質は不定で連絡のない同質性(Homogeneity)から一定して聯合した異質性(Heterogeneity)に

變じ、又其間に保留されて居つた運動も同様の變化を受くるものである」（註一）人類自身も此進化原則の適用を受くるのであるから今日の様に進歩した社會では其生活の様式は種々雜多で甚だしく異質性のものである事は當然の結果である。時代の變遷に伴ふて生活の變化するのは別として、一定の國一定の場所に於ても上は王侯より下は日傭勞働者に至る迄其生活狀態は千變萬化で各自好むがまゝに生活し何等標準がない様であるけれども文化の進むに從ひ次の様な理由が基となつて生活の標準が定る様になるのである。

一、人類は他動物と異り人としての多くの共通性を有し其身體及精神の動作に於て多くの類似點が認めらるゝのである、從つて生活の枝葉に於てこそ相異はあるが其根本には同種同様の生活様式を有して居るのは何も不思議な事ではない。是れ生活に一定の標準を求め得べき第一の理由である。

二、人類は社會的動物であるから其生活は自然相互間に社會的關係を生じ其關係は外部より働いて止まざるのみならず其勢力は世の進歩に伴ひて益々強大になる、斯くて人類社會は一定の秩序組織の下に次第に同化し遂には特種の標準を認め得るに至るのである。

三、人類の本能である模擬性が生理的及精神的作用により意識的或は無意識的に倣き彼我互に類似し合つて結局生活に一定の標準を保つ様になるのである。

四、經濟生活は財産及所得の消費の上に立つて行はるゝものであるから、現今の如く經濟的壓迫の強い時には生活の様式は各人の所得又は財産の高によりて著しく變化するのが當然である。而して財産は所得の形になつて生活に直接役立つのであるから今日は主として所得の大小によつて生活の標準が決定されるのが常である。

斯かる理由が主となつて生活の標準が定め得るものであるが、夫々同様の標準を有するものが集合して夫々異つた階級を形成し其階級が社會の進化に伴ふて一方に於て複雜になると同時に、他方に於ては一定の體系を具へて秩序整然たる階級別に統一されるのである。而して人類社會の階級別は夫々最初には獨立的存在をして居るのであるが是れが次第に合同し、次に異種階級間に生ずる競爭が盛になり、更に進んで各階級を通じて社會全體の完成（インテグレーション）を計らんとする努力が表はれて來るのが常である。

然らば現今普通に上中下の三階級に分たれて居るものが如何に完成されるかと云ふに中流階級を中心として社會全體の完成を計るのが正當である即ち中流階級が國民全體の標準階級とな

り是れが中心となり自己階級者の生活の安定と共向上を計ると同時に上下の階級の融合を計り以て一層進化したる社会を形成するに至るのである。

四、階級の標準と所得

人類の精神的又は物質的能力が人によつて異つて居る事が階級に上下を生ずる第一の所以である。能力の異つたる人類が社会を組織し色々の規約や制度等を設けたり、或は風俗習慣等を異にする様になる時には、其の階級的色彩が益々鮮明になり、種族、姓氏、職業等又は宗教、政治、教育、經濟等の社會的地位の相違により其々異りたる階級を生ずるに至るのである。而して夫等の階級は種々の見地からして上下の別を附ける樣になる「種族、姓氏、身分、職業等に基く階級的差別及び特權が既に確立し個人の政治上社會上の位地が容易に改變なき場合に於ては種族、姓氏、身分、職業等は上流中流下流を區別する主なる標準となる可し、又或る特別なる目的の爲めに主として各人の知能、教育の程度等を標準として上流中流下流を區別するも可ならん」(註三)併し經濟上の見地から考察を下すと經濟能力の大小が主となりて階級別を生ずるのである、而して經濟能力は各人の財產及び所得の大小によりて測定するものであるが財產が直接に生活に役立つのは前述した通り夫れが所得を生ずるからであるが故に結局個人の所得を標準として生活の標準を決定する事が最も當を得たるものと考へられる、殊に近年財政學に於て所得税が著しく發達して國民の所得が詳しく調査され各人の所得額に準じて個人の給付能力が測定され國民の階級別と所得とは密接な關係を有するのである。故にルーランド博士は中流階級に所得税の標準(Einkommensteuerbegriff)に依て定めらるゝものであると論じて居る。(註四)

五、階級の分類

普通の分類法に依ると人類階級を三階級として居る。(註五)

第一　上流又は貴族的資本家的階級で是れを上流社會(die obere, die aristokratische kapitalistische Schicht, "die Gesellschaft")といふ。

第二　中流階級(die Mittelschaft den Mittelstand,)

第三　下級階級又は細民階級(das Proletariat)

是れと同様の分類をなすものゝ他の一例を示せば、ヘルマン(註六)は次の如き名稱を下して居る。(註七)

一、下流階級(Proletariat)

二、中流階級(Mittelstand)

三、上流階級(Bourgeois oder Kapitalisten klasse)

今更に歴史的に重をなして居る階級別の二三を擧げて見ると千八百五十一年に白耳義のディクペチオ(Ducpetiaud)が政府の助力を得てフレッチャー(Fletcher)及びビッシャース(Visschers)等と協力して約千戸の家計調査を行つた時に家族を三分して

一、窮民(Dependent)救助を受けて漸く生活するもの。

二、貧民(poor)普通生活を支ふるも何等貯蓄の出來ざる者。

三、中流者(Comfortably off)公共の補助を受けず自ら老後の爲めに貯蓄を行ふもの。

此の方法は貯蓄の有無が主となつて貧民と中流とを分ち又公共の補助を受くる必要の有無を主として貧民と窮民との區別を擧げて居るのである。

最近の研究で特に注意を拂ふ可き階級別は北米合衆國政府勞働局の研究にかゝるものである、是れも家族を三分して次の如く説明を下して居る。註(六)

一、窮民(The Pauper or poverty level)

公共的慈善の補助を受け又著しき負債に陷らんとする程度の上にある生活を營む者。

二、貧民(The minimum of subsistence level)

單に動物的存在(アニマルエキッシステンス)を營み得るのみで社會的動物として人類の必要に對しては何等價値のなき者。

三、中流(The minimum of health and comfort level)

是れは前階級よりも少しく高きもので單に食物、住居、被服に對する物質的必要に備ふるのみならず或程度の快樂的慾望を滿足するものである、例へば衣服は着心地のよき物であり又着用者の本能が、自尊(セルフレスペクト)及び合禮(ディセンシー)の感を滿足をし得るものであり又死亡、不具及火災等の重大なる不幸に對する保險を有し、又子供に對するよき教育、或娛樂、及び自己開發に要する相當の費用を備ふる者。

六、中流階級の意義

日本語で中流階級を中産階級とか中等階級とか中間階級とか稱する者があるが中産階級と中流階級は現代に於ては必ずしも同一でない。中間階級又は中等階級とは中流階級と同一義であるが最後の方が最も普通に使用されて居るものであるから私は中流階級と云ふ言葉を使用するのである。而して其意義としては主としてウェルニッケ氏の定義により次の如く定める。註(七)

中流階級とは多少責任ある地位、業務、教育、財産又は所得或は社會的地位により、又は國民としての生活樣式の全部に於て勞働者の大階級の上に立つて居るものであるが、其所得の大

さ左以ては貧乏な家又は富者階級に属する事が出来ない國民より成立するものである。極く簡單に云ふならば新時代に適應した人間らしい生活、所謂文化生活を營み得る階級を中流階級と稱するのである。福田徳三博士は「中流階級とは少くとも所謂文化生活を為すものでなければならないと思ふ」と論じて居られる。（註七ノ二）米田庄太郎博士は「中等階級とは資本又は技能により所謂知識人得と稱するものにより生活をなし社會の多数を占くる人々の階層を云ふ」（註八）と述いて居られる、又内田銀藏博士は「中等階級くは中流と稱するは一定の範囲の所得を有する人及其家族の總称なり」（註九）と。

何等中流階級とは正確に決定の出来るものではない、理論として所得額によりてのみ定めたり、又社會の階級を設くるが如き漠然たる階を主として其存在に存ふるものは適當と認むる事が出來ない。

然らば中流階級に属する者は如何なる者であるかと云ふに夫れは相當生活を營なむに必要な所得を有する事が經濟上第一の條件で其條件を備へたるものは各種の職業者を含ましめ得るのである。ウェルニッケは一般的に考察を下して中流階級は次の者を含有すと記して居る。（註十一）即ち

官公吏の大部分、自由職業者、商賣人（小賣商人を含む）の大部分、手工業者、特殊職業者の大部分、自由職業者、會社員、地代收入及恩給生活者、農夫の大部分、最後に勞働者の上流階級に属する者。

何等社會制度や一國の風俗習慣等の如何によつて中流階級に屬する者は相違をきたすのであつて正確に此階級者を指定する事は不可能の事である。夫れで次の三ツの重要なる特徴を備へたる者ならば總べて是を中流階級者と見做すのは適當であらう。即ち此階級とは次の三ツである。（註十二）

一、安全なる生活を營む者。

二、主として資本及勞働の結合によりて生計を營む者。

三、所得及財産の中庸を得て居る者。

我政府の出版物に於て生活の標準を指定して居るものが二三存在して居るが其分類法に於て殆ど無標準であるものがあるのは、此方面の研究が未だ我國に於て甚だ幼稚であることを示して居るのである。例へば帝國統計年鑑に刑法犯有罪確定被告人犯罪に關する統計中「資産ある者、稍資産ある者、資産なき者、赤貧の者、不詳」又「華美に生活する者、普通に生活する者、質素に生活する者、貧困に生活する者、不詳」と可なり詳細に渉つた分類がしてあるが其區分法は單に常識判断であるから學術上の價値は殆ど存在して居ないのである、此件に關し私が數

ス裁判所長に質問した返事は大體次の様なものであった「……統計は各裁判所に於て製作したる犯罪登記簿に基き作製するものなり、而して該犯罪登記簿中に御尋ねの如き資産ある者……とを記載す可き者の命令あるにより夫々區別を立て記載をなし居るも、其區別の標準又は定義等に就いては本省より何等示す處なきを以て犯罪者各個に就き其社會上の地位と日常生活の實況とを參照して其區別を附する取扱となし居れり、從つて該區別は該刑事記録に表はれたる犯罪者の陳述其他に基づく事勿論なるも、製作者の常識判斷を以てするものと見做して差支なきものなり、獨其製作者は刑事の主任書記にして監督官其れを檢閲し承認を與へたる後是れを司法省に報告する事となり居れり。大正九年十二月四日〇〇裁判所」

右は我國に於て此方面の研究が今一層進歩發達して學術的研究に役立つ統計が製作されん事を希望するが故に冗長に失する嫌があるが是れを記述したのである。

七、戰前中流階級の所得

中流階級を所得額によつてのみ決定するのは必ずしも當を得たものではない、能力別、身分別、職業別、知識別等所得以上に有力なるものが存在して居るのであるが、現代の如く經濟生活が他の生活に比して比較的に重要視され而かも近來生活の資料が騰貴して國民の所得が是れに伴はず、爲めに經濟生活の安定を得る事の出來ない場合に於て、一家の生活に最も直接に影響を及すものは所得であるから、經濟上の見地から所得額によつて人類社會の階級を區別し中流者の決定を所得高によつて行ふ事は必ずしも無益の業であるまい。

今主なる研究の結果を列記せんに千九百十二年に出版になつたヘルマンの著によると、獨逸に於ける中流階級の所得は九百圓乃至九千圓で(註十二)ウェルニッケは千圓乃至五千圓とし、(註十三)エンゲルの研究によると九百圓乃至千二百圓として居る。米國に於けるチャーピンによると紐育市住民中ボヘミヤ、オーストリヤ、ロシヤ、イタリヤ人は千五百圓乃至千六百圓、亞米利加人、チュートン人、アイルランド人は千八百圓乃至二千圓を中流階級の最低標準として居る。(註十四)グードイーヤ氏は之に對して同じく紐育市に於て千六百圓乃至千八百圓とし(註十五)ストレートフも是れを裏書(註十六)し、モアーは同じく紐育市に於て二千圓を中流階級の標準として居る。(註十七)ジョン、ミッチェルは人口十萬人以下の都會では千二百圓、(註十八)ハンターは紐育市で千二百五十圓を以て中流の最下級として居る。(註十九)是等は主として千九百年乃至七年頃の事實である。千九百十五年に紐育市役所の調査によると千六百八十圓。

州に於ける都會自營では紐育市に於ては千七百五十三圓、ペーハロー市では千五百八十五圓が最少生活費であると發表して居る。

是れを要するに以上の調査に於ては生活費の最も高い米國の都會では千五百圓乃至五千圓位、歐洲の都會に於ては千圓乃至二千圓位が中流社會の生活標準と認むることが出來るであらう。

我國に於ては大正五年に於ては中流の下は七百圓乃至千二百圓で、中流の上は千二百圓乃至千八百で千二百圓位を以て中流の中の所得額と認めたのである。(註二十三) 然し其れが後で論ずる様に大正七年には二千圓、八年には二千九百圓、九年には三千圓に增進して居る、世界各國共に戰後に於て生活條件が著しく變化したから戰前の所得額を以て決定した中流階級は今日では決して當を得て居るものでない。然らば現在中流階級の所得額は如何なるものであるかに就いては後節是れを討論するであらう。

八、中流階級生活標準の理論

中流階級の意義を一層明かにせんが爲めに理論上から考察を下さんに元來生活の根本は欲望であるから是れを土臺として分類すると生活の絕對的標準(Absolute Standard of Living)と生活の相對的標準(Relative Standard of Living)の二つに分つ事が便利である。(註二十四)

一、絕對的標準とは人の必然的欲望のみの滿足に適用する生活を測定したものであるから是れは辛ふじて人類の生活を續け得るに過ぎないもので貧民即ち(mere subsistence level)の階級が保つて居る標準である。主として衣食住に關する必然的欲望を滿足し得るのみで何等生活に餘裕はないのであるから人間としての生活を營むと云ふよりは寧ろ露命をつないで生存を續けて居ると云ふ方が適當である。かゝる標準は其自然的關係によりて多少の相異があるが、一定の時と場所に於ては此社會的關係が略同一であるが故に、一般的に云へば人類の絕對的標準は稍々固定したものである。而して此標準が土臺となつて相對的標準を定めるのである。

二 相對的標準は必然的欲望のみに限らず、身分的、快樂的、及奢侈的欲望の滿足に適應する生活を測定したものを云ふのである。故に單に辛ふじて露命をつなぐのみでなく、社會の一員として身分相當又は相當以上の生活を營むのである。自然經濟時代を脫した現代であるから單に原始的生活を營む事に出來ない。よろしく必然的欲望以上のものを滿足させて能率の大なる生活を營まねばならぬ。換言すればライナン教授の所謂人類たる品位を保つに恥かしくない生活を營まねばならぬ。更に詳し

く言へば、現代の經濟社會で相當と認む可き程度に於て必然的及身分的欲望の外に奢侈に流れざる範圍に於て快樂的欲望を滿足せしめ、以て能率の高い樂しい生活を營まねばならぬのである。かゝる生活の標準を「國民標準」と稱す可く、其標準を保つて居るものを「標準國民」又は「中流階級」と稱するのである。

パロック教授は「人類は一定の階級に於て習慣的に樂み得る快樂又は奢侈の量が生活の標準を形成す」と云つて居るが快樂と奢侈との區別は正確に是れを明かにする事が殆んど不可能であるが如きものもあるが、快樂の結果は眞正の意義で能力の增進を意味し、奢侈の結果は其反對の惡影響を生ずるものであるから、中流階級の生活標準に於ては快樂的欲望の滿足を許す事は必要であるが、奢侈は絕對的に禁ず可きものである。ロッシエルは欲望を三分して自然的、身分的及奢侈的として居る。[註二十三]奢侈は時代の變遷で著しく變化するものであるから、ロッシエル時代と餘程變つて居る現代では身分的欲望奢と侈的欲望との間に快樂的欲望なるものを奢侈的慾望から分離して其滿足に適應する程度迄生活の標準を高めねばならぬ。斯くの如くにして生活の相對的標準より奢侈的慾望滿足の行爲を除去したものを特に生活の能率的標準(Efficient Standard of Living)と稱す可く其定義として次の如く說く事が出來る。卽ち「一定の時及場所並に一定の社會に於て必然的、身分的及快樂的欲望の滿足に適應せんとする活動の狀態を生活の能率的標準と云ふ」此標準を具備したるものの家族及び團集を「標準國民」又は「中流階級」と稱するのである。

生活の標準を決定するに深く考慮す可きは生活標準に變化を來す種々の原因を明かにする事である、其重なるものを擧れば

一、文明進步の程度　文明の進步に伴ふて欲望は其質と量と共に增大するものであるから、時代の相異より社會的關係が變化してそれぞれ人類の生活に一定の樣式を備ふる樣になる。從つて昔は上流と稱したものでも今日は中流又は下流に降る者が多いのが常である。

二、地方別　地方の相異で氣候風土等の自然的關係や種々の社會的關係が變化するのであるから、國により或は地方、都會、又は村落等によつて生活標準は變化するのは當然の事である。

三、職業別　同一の時代及地方に於ても職業の相異によつて生活の樣式に變化を來すのである。殊に印度其他東洋諸國に於て勢力を占めて居る階級制度の如きが行はれて居る時には、猶更職業別によつて上下の別を生ずるのである。乍併此等の區別は文明の進步に伴ふて次第に其勢力を弱くして次のものが力強くなるのである。

四、個人別　個人の財産、所得、性質、能力、知識、道德、宗教心等の如何によりて生活は變化するもので、其の中最も有力なるものは財産と所得である。乍去財産が生活に設立し得るのは所得によるのであるから所得が最も强力に生活の標準を決定する要素となつて居る事は前にも述べた通りである。

九、中流階級の職務

國民全體の標準となつて居る中流階級の職務は實に偉大なものである。彼等は合理的で又經濟的なる生活の樣式の範を一般國民に示し、模範的の生活を送つて能率の高い愉快なる生活を一般社會に普及する職務を有して居る。是れが爲めには先づ奢侈的消費や有害消費に對して極力排斥し上流階級の反省を促し彼等が彼等の消費を省いて是れを有益に消費し得る樣經濟的行動を採らなければならぬ。下流階級に對しても彼等の低級なる生活は結局個人の爲めにも又社會の爲めにも不利益であるから生活を改善し得るが爲めに下流階級に對し生活改善の指針となり彼等を中流階級に引き上ぐる樣努力す可き職務を有して居るのである。故に中流階級は先づ第一に自己の生活標準の維持發達に努力しなければならぬ。而して次に上下階級の調和を計り貧富の差を最少にする事に注意しなければならぬのである。

現在の社會、經濟制度は種々の缺陷を有して居るが故に、之を改善して將來大いに進歩發達す可き必要を認むるのであるが、殊に富の分配問題に於て現在の事實は私共の理想を離るゝ事が最も甚だしい。分配の公正と云ふ事は結局「各人が其能力によつて働き其の必要に應じて分配を受く」る樣になつて始めて經濟上の黄金時代が現實されるのである。然るに現代の經濟的分配はまだ各人の能力によつて働き、各人の功績によつて頒つと云ふ程度に迄も達して居ないから、前途甚だ遼遠なるものである。夫れで私共の最終の理想に到達するが爲めに最も必要なる事は中流階級の個人的努力又は其階級的同盟の力によつて、先づ肉體的勞働者を中心として居る下流階級をして「日本標準」迄引き上げ彼等と現在の中流階級とが握手し協力して上流有産階級の不當なる富の獲得の非を悟らしめ、止むなくんば階級的鬪爭を起し以て上流階級を國民標準に引き下げる樣にしなければならぬ。かゝる大なる職務を有して居る中流階級は啻に知識階級の大部分を包含して居るのであるから、彼等が主動者となつて起す階級鬪爭又は其他の社會運動に於ては普通筋力勞働者が行ふが如き極端に亂暴なる鬪爭に陷らしめざる樣にして、然かも産業上及社會上のデモクラシーを現實し、一般國民の福利を

増進し眞正の意義に於て社會の發達を期する事が出來るであらう。

十、「日本標準」決定法

中流階級者の生活の標準を決定するには、先づ其基礎となる可き變化の少い生活の絶對的標準を定むる要素を測定するのか當然の順序である。從て上流階級の標準を定むるが如きは餘りに複雜であつて、變化が多く、現在の知識では殆ど不可能の事に屬する。故に先づ固定的の絶對標準に於て、其最も重要なる要素である食物の研究より始めて、次第に他の生活の要素に及ぼす可きである。幸ひ近來食品化學、生理化學、衞生學等の研究が進歩して生活問題の根本的原理を示し得るのであるから、夫等の研究の結果を借りて先づ人類の必要とする食物は何であるか其質、量、價格等の決定を見る事が出來たならば、夫れを基として中流生活に必要なる所得の範圍を測定する事が出來る今此問題を研究するに當り二つの問題を前提として論究するであらう。

一、中流階級の特性の一ツとして生活の安全と云ふ事が擧げられて居る以上は、夫等の攝取すべき食物は生理的及社會的に考へて合理的で且能率的のものでなければならぬ。即ち安全食料又は標準食料或は保健食料と稱するものが中流階級の食物でなければならぬ事。

二、生活の安全を保證する爲めには其の生活をして快樂的欲望の滿足に適應す可きものとしなければならぬ。是れが爲めには食衣住に關する動物的物質的欲望滿足の他に所謂文化的慾望滿足を許すだけの餘裕を生活に見出さなければならない。之が爲めには食費は生活費の一小部分でなければならぬ事。

第一の問題に關して幸今日知られて居る科學の發明によつて所謂安全食料の費用を計算する事が出來る。第二の食費の總生活費の百分率に關しては先づエンゲルの消費の第一則を根據として一家の所得が增加するに從つて食費の百分率は減少するものである事は假令エンゲルの第二、第三法則即ち衣服、住居、光熱に關する法則に變化があつても、其第四法則即ち食衣住以外の生活費に關する法則と共に動かす可らざる事實である。而して或るアイヌの家族の生計に於て食費が總生計費の九割に達して居るが如き極端な例は別として、多の實例の示す處に依れば普通には三割乃至六割で、最近の文明國で行れた調査によれば普通に約三十五パーセントである（註二四）今重なる研究の結果を見るに食費の生活總費に對する百分率はエンゲルの研究に於ては五十五パーセントの多きに達して居るが、是れは勞働者階級の中流の者に就いて調査したのであるから眞の中流階級に對する

もつとして見る可きでない。千九百一二年米國で一萬一千百五十六家族の中より、一千五百六十七家族に就いて調べたものを見るに年收千二百圓乃至二千四百圓の者は四十三乃至三十六パーセントの食費である。紐育市でモーアが二百家族に就いて調べた結果は年收千二百圓乃至千四百圓が四五、五%千四百圓乃至千六百圓が四四、二%千六百圓乃至千八百圓が四五、八%千八百圓乃至二千圓が四五、八%二千圓乃至二千四百圓が四三、六%二千四百圓乃至三千圓は三九、五%となつて居る。同市に於てチエーピンが千九百〇六年十一月より三百九十一軒に就いて調べた平均を見るに千二百圓乃至千四百圓が四四、六%千四百圓乃至千六百圓が四五、六%千六百圓乃至千八百圓が四四、三%千八百圓乃至二千圓が四四、七%二千圓乃至二千二百圓が四五、六%二千二百圓乃至二千四百圓が四五、六%二千四百圓乃至二千六百圓が四五、六%二千六百圓乃至二千八百圓が四三、六%三千圓乃至三千二百圓が三六、八%となつて居る。ストレートツは一家の所得の增加に伴ふて食費は米國全體で五〇—三七%紐育市では收入二千圓に達する迄は殆ど四五%であると云つて居る。以上の事實を參照して千九百年前後に於て米國では標準的生計を營むには少くとも千六百圓以上の年收を必要とし、其三五—五〇%を食費に用ひて居つた。其後食物以外の生活の必需料外に文化的慾望滿足の費用が甚だしく增加したのであるから食費の百分率は一層減少する必要があるからして現在では中流階級者の食費は三〇—四〇%を以て標準とする可きである。

十一、食料の決定法

生物化學の研究の結果によると人類が普通の輕度勞働に從事して生活して行くには次の養分を要する。即ち日本人の平均體重を十三貫八百三十匁とし、歐羅巴人十七貫二十匁に對して體重の比例二三%の割合としてフオイトやアトワーターの指定して居るものから計算すると

蛋白質九六瓦、脂肪四五瓦、炭水化物四〇六瓦の養分を一日一人が必要とするのであるが我が内務省衞生試驗場では日本では肉食の習慣が少く、淡白な食物に慣れて居るから脂肪をより少くし炭水化物をより多くする必要を認め標準的保健食料の養分を一日一當り

蛋白質九六瓦(二五、六匁)脂肪二〇瓦(五、三匁)炭水化物四五〇瓦(一二〇、一匁)

が適當であるとして居る。

其當時と今日とを比較すると日本人の食物習慣は餘程變化して居る。今日では都會に於ては肉食が相當に行はれ脂肪に對す

る嗜好も餘程大になつたのであるから上述の如く脂肪を攝取し人に比して半減以下に下すと云ふ事は不當と認むるのであるが、是れが爲めに食費は低減する事が出來るのであるから假りに內輪に食費を計算するとして其儘是れを採用する事にする。

勿論營養物の必要量に對しては種々の異說がある、例へばエール大學チッテンデン敎授の研究によると人類の要する蛋白質の量は左程多量なものではなく「百十八瓦の半分で十分である」と云つて居る。(註三十) 併し ヨルダン博士の書いて居る樣に此種の異說は未だ確定されて居ないから一般に認められて居るフォイトの說を採用して論ずる方が適當と思ふ。(註三十一)

此標準によりて作つた保健食料を計算すると最も經濟的のものが一人一日大正九年一月より六月迄の平均價格で八十七錢で、大正八年が約七十錢、大正七年が五十九錢である。(註三十二) 最も經濟的の獻立と云ふのは西洋食と日本食の長短を調和さしたものである。若し純日本式又は純西洋式の獻立を用ゐるとそれ以上に食費を要する。例へば衞生試驗所にて發表して居る純日本式保健食料は約十錢高くなり、海陸軍兵士の食料の如く成る可く調理の手數を省かんとして不經濟な獻立を作ると是れも同樣高價になる。

斯くの如くにして定めたる一日平均の食費を基として次に一家族の食費を決定しなければならぬ。一家族の食費の測定には家族の年齡別による食物消費指數によつて計算をするのである。(註三十三) 最も普通に用ひられて居る消費指數は次の如くである。

男　成人一、〇　十五歲—十六歲〇、九　十三歲—十四歲〇、八　十二歲〇、七　十歲—十一歲〇、六

女　成人〇、八　十五歲—十六歲〇、八　十三歲—十四歲〇、七　十歲—十二歲〇、六

小兒　六歲—九歲〇、五　二歲—五歲〇、四　二歲以下〇、三

此の指數を用ひて計算すると標準家族と稱する夫婦に十四歲以下の子供三人の家庭に於ては約三、三人になる故に、一人一日の食費（大正九年は餘りに暴騰した時期であるから）大正八年の七十錢を用ひると〇、七×三、三＝二、三一錢が一家族一日の食費で即ち一ケ月の食費は約七十圓一ケ年約八百四十圓を要するのである

今若し最近の事實として大正九年前半期の物價で計算すると一家族の食費は一日二圓九十錢、一ケ月八十七圓、一ケ年約一千圓を要する事になる。是即ち現在の科學が示して居る標準的即ち理想的の食物に要する費用である。中流階級者は此程度の食物使用を必要とするのであるが物價の騰貴した今日では一ケ月八十七圓を食費に投じて必要なる養分、蛋白質廿五匁、脂肪九匁、炭水化物百二十五匁を各人が攝取して居る家族は實に少いので

ある。其結果として國民の多數は大體次の如きヤリクリをして次第に其悪影響を各自の生活に及ぼして居るのである。

一、絶對的に食量を減ずる事

二、動物性蛋白質の代に安價なる植物性蛋白質を代用する事

（全蛋白質に對し動物性蛋白質は子供は四十%大人は二十なるを要す。）（註三十四）

三、脂肪の量を減ずる事

四、安價な澱粉性の炭水化物を過度に使用する事

五、新らしい養分であるヴイタミンの消費が不十分になる事

斯かる切詰の結果は恐る可き障害を發生して遂には中流階級の特性である可き生活の安定を破り中流階級の破壞を來すに至るものである。必要なる食費を投ぜざるが爲めに粗食に陷り、因に起る弊害を擧ぐれば次の如くである。

一般に蛋白質の含有量が十分でも動物性食物を攝取せぬ時は勞働者は其仕事の行程を減ずるものである。若し植物性食物のみにより人體に必要なる量を得んとすれば甚だ多量の食物を攝らねばならぬ、此の過食は消化機關に故障を來し胃腸病を起す事が少くない。且又斷然たる植物性食物に固執する時は病氣に對する抵抗を減ずるものである。（註三十五）

ハチソンも同様の意を說き更らに「生長中の子供に對しては蛋白質の不足は更に有害である。蓋し身體構成に必要なる物を缺く事は發育上有害で其結果は一生涯に及ぼすものである。（註三十六）

ケレー、ドツト、ハレー等皆此種の説に裏書をして居る。最近にマカラム博士が精細なる實驗の結果動物性の蛋白質に缺乏したる食物を攝る時間には國民は元氣が乏しく何事も保守的で舊式の器械に滿足し其經濟進歩は甚だ鈍い事を痛切に說いて居る。（註三十七）

十二、「日本標準」所得と中流階級の決定

「日本標準」を保つて居る中流階級者の食費は、生活費の三割乃至四割に當る可き筈であるから、假に三割五歩とすれば、其殘餘の六割五歩は如何に消費されるかといふに、調査の結果によると、大約被服費として一割、住居費として一割七歩が絶體的に必要費目として使用され、其殘り三割八歩が主として文化的欲望滿足に要するものとして用ゐらるゝのである。卽ち大正九年前半期の平均價格を以て計算すると、日本標準の生活を營むが爲めに要する一家五人の生活費は、大都會に於ては一ケ年約三千圓である。之れを費目別にすれば、食費千〇四十八圓、被服費二百四十三圓、住居費五百六十二圓、其他千百九十五圓、故合計三千百四十八圓である。

今後物價約二割下落するものとして、大正八年位の物價が當分普通になるとすれば、一ヶ年の生活費を約二千六百圓となる。即ち食費八百四十一圓、被服費二百九十圓、住居費四百六十二圓、其他九百八十九圓 合計二千五百八十二圓である。

今之れを更に年度別にして列記すると次の表の如くである。

中流階級標準生活費

東京市・一家族五人・一ヶ月金額）註（イ）

	食費	被服費	住居費	其他	合計
	(圓)	(圓)	(圓)	(圓)	(圓)
大正三年 註(ロ)	33[illegible]	90	16[illegible]	36[illegible]	96[illegible]
大正五年 註(ロ)	29[illegible]	117	186	3[illegible]	1,[illegible]01
大正七年(1—6月) 註(ロ)	6[illegible]	22[illegible]	38[illegible]	8[illegible]	2,076
大正八年 註(ハ)	8[illegible]1	[illegible]9[illegible]	46[illegible]	93[illegible]	2,5[illegible]2
大正九年(1—6月)	1,040	34[illegible]	5[illegible]	1,19[illegible]	3,14[illegible]
生活費に對する百分率	33%	11%	18%	38%	100
同下百分率限界	30—40%	8—15%	12—20%	30—45%	—

註（イ） 夫婦、十四歳以下子供三人、大人換算數[illegible]人

註（ロ） 大正三年乃至七年の數字は財政經濟學會[illegible]中森本[illegible]著[illegible]頁に依る

註（ハ） 大正七年乃至九年の數字は銀行通信錄第四百二十號（大正八年十月發行）生活必需品の指數比較に依りて計算したものなり

以上の事實を基礎として考察すれば中流階級が標準生活を營むが爲めに必要とする一ヶ年の生活費は、大正九年前半期に於ては三千圓を以て標準とするのであるが此調査を東京市の事實を根據として行つたのであるから、小都會又は村落に於ては、生活費が東京市よりも少くて足りるといふ事實及び其所得額が家庭によりては必ずしも經濟的に消費されず、諸種の浪費があるといふ事實等を考慮して、中流階級の所得の限界を大體二千圓乃至五千圓とする事が適當と思ふ。前述の如く若し今後物價二割方下落するものとすれば、中流階級の所得は大體大正八年と同様に、千五百圓乃至四千圓とする事が出來るであらう。今此中流階級の所得を基として、上流及び下流の所得額を測定し、上中下階級の所得標準を示せば、次の表の如くである。

上流階級（富者）	
下	上
(圓)	(圓)
1,500—6,000	6,000以上
3,000—10,000	10,000以上
4,000—20,000	20,000以上
5,000—30,000	30,000以上

上中下階級の標準

（東京市・一家族五人・一ヶ年所得額）

	下流階級（貧民）		中流階級	
	下	上	下	上
大正五年	(円) 200 以下	(円) 200—700	(円) 700—1.200	(円) 1.200—2.000
大正七年	550 以下	550—1.000	1.000—2.000	2.000—3.000
大正八年	600 以下	600—1.500	1.500—2.500	2.500—4.000
大正九年	650 以下	650—2.000	2.000—3.000	3.000—5.000

十三、日本標準生活の内容

「日本標準」即ち中流階級者の生活の内容は如何なるものであるかといふに、先づ食物に於ては一人一日に大約白米四合、味噌九匁、野菜五十匁乃至百匁、魚又は獸肉四十匁乃至六十匁、牛乳一合又は玉子一個位のものを日本食ならば攝取するのである。而して其含有營養分は前述の通り蛋白質二十五匁、脂肪五匁、炭水化物百二十匁で夫だけのものを含んだ食品を最も經濟的に嗜好に適する様に調理さるべきである。

被服に於ては次表の如く我國從來の習慣に依ると中流階級者は主人は和服及洋服を備へ、四季に要する夫々異りたる衣服を所持して居るのであるから其種類の多き事又其質の良好なる事は、他の文明國に於て殆んど類が無い。随て現今中流階級が普通と認めて居る被服は大いに改良する餘地が存在して居る事は既に一般に認められて居る事實であるが、未だ具體的の改良が運びをして居ないから止を得ず在來の被服状態に要する費用を根據として論ぜねばならぬのである。而して其改良法に關しては別に之を論議するであらう。

服装級 註(イ) 其一 和服類

	主人 個數	主婦 個數	男兒 個數	女兒 個數
履物	4.5	5.2	3.7	4.0
足袋	5.1	5.1	4.0	4.8
帯	3.	6.[illegible]	....	5.3
帯止	—	2.[illegible]	—	...
帯上	-	2.[illegible]	—	...
腰紐	—	2.5	—	...
コート	—	1.7	—	...
手袋	以下洋服類中に記す	0.[illegible]	以下洋服類中に記す	以下洋服類中に記す
ショール		2.[illegible]		
ハンカチーフ		5.0		
傘		1.[illegible]		

中流階

		主人 個數	主婦 個數	男兒 個數	女兒 個數
羽織	絹	6.1	4.6	0.5	3.1
	メレンス	—	—	—	2.9
	木綿	3.3	3.3	3.2	3.1
綿入	絹	4.[illegible]	4.6	0.[illegible]	3.4
	メレンス	—	—	—	2.4
	木綿	3.0	3.9	4.1	3.6
袷衣	絹	2.2	2.4	0.5	1.9
	メレンス	—	—	—	1.8
	木綿	1.6	2.7	2.0	2.3
單衣	絹	3.1	4.5	1.2	2.6
	毛	2.4	2.4	1.4	2.1
	木綿	6.7	6.2	6.0	7.7
袴		2.[illegible]	—	1.2	1.4
襦袢	絹	4.3	2.7	3.3	5.6
	メレンス	—	2.4		
	木綿	....	4.[illegible]		

註(イ) 東京、神戸、名古屋にて[illegible]家族の平均數
一家族平均所得額は[illegible]圓
一家族の被服類價格は[illegible]圓(大正七年)
詳細は森本著生活問題第十六章を見よ、

中流階級被服

其二 洋服類及其他

	主人 個數	男兒 個數	女兒 個數
セビロ	2.[illegible]	1.1	(0.3)
フロックコート	1.6	—	—
外套	2.4	1.0	1.0
帽子	3.5	2.0	0.[illegible]
シャツ(上)	3.9	3.8	1.[illegible]
シャツ(下)	5.3		
ズボン下	4.1	3.0	1.5
ネクタイ	4.1	—	—
カラー	5.3	—	—
カフス	1.2	—	—
手袋	1.9	....	....
靴	2.2	1.4	1.4
オバーシューズ	0.[illegible]	—	—
靴下	4.6	3.2	1.[illegible]
衿卷	1.2	—	—
ハンカチーフ	6.3	—	—
洋傘	1.3	1.1	1.1

雜用品類	一家族用費 (圓)
ボタン類	9.51
ピン類	11.[illegible]9
櫛	16.49
白粉類	2.17
香水油類	4.[illegible]6
調髮費	6.03
入浴費	10.38
洗濯費	7.27
洗濯用品	4.68
仕立費	11.31
糸針費	1.58
雜類	15.[illegible]0

住宅に關しては我國全般に亘つて、調査したものゝ中で代表的と認むべき中流階級三百八十八家族の調査の結果によると、一家の建坪は三十二、八坪其室數は七、四室、一室の疊數を五、七疊、一ケ月の借家料を二十九圓、一疊當りの借料七十二錢となつて居る。(註二十八)

	建坪	室數	一室の疊數	一家の一ケ月借家料	一疊當借料錢
大都會	二九、八坪	七、八室	五、〇疊	三六、八四圓	九六
小都會	四一、八	七、〇	六、四	二一、一四	四六
平均	二、八	七、四	五、七	二九、〇〇	七二

今此日本標準の內容をアメリカ中流官吏の生活に比較すると次の表に現はれた樣に興味ある相違を見出すのである。該表は大

[illegible]四八年にワシントンで官吏の生活費の研究を行つた結果として中流官吏の標準生計費を定めて發表したのである。日本のそれは米國よりも非常に低いのであつたが、近來甚だしく騰貴して殆ど生活の必要品が無制限に高くなつたのに反して、米國では政府の力及び社會的制度によつて價格に制限を行ひ暴利の取締りをしたのであるから夫れ程騰貴せず、且つ東京以外に大阪はニューヨーク市やシカゴ市よりも生活必要品が高價になつたのである。食費に米國の三割四歩に對し、日本は三割三歩であるが之れは彼等が全ても安く食物を得つた場合を假定するのであるから別に問題にする必要はない、被服費は米國の二割三歩に對し、日本は僅かに一割一歩であるのは、米國で世界大戰後大幅に[illegible]騰貴したのと、彼の國の習慣として[illegible]、晴衣を[illegible]これを[illegible]の[illegible]に流行を追はんとするのに比して、我國では大服に[illegible]するのは主として上流社會で、中流以下のものに比し、的にも大差は無い、[illegible]を除いて居る位。又假令米國に比し、或るを數の少い衣服を所有して居ても、之れを使用する方法が甚だ多く平且それ故に高價なるものを着用する事。更に米國の如く流行が盛でないから、同一衣服の着用年限が非常に長期であるが為め等の理由に依るのである。

住居費に於ては彼れの一割九歩に對し、我れの一割八歩で殆んど同一である。

最も著しく相違するのは「其他」で、彼れは二割四歩であるに比して、我れは三割八歩である。之れ我國に於ては無意味なる贈與の習慣や社交の費用等が多き外に、社會政策的施設が不完全であるが爲めに、例へば修養、教育費の如きが比較的多いが爲めである。之等は我生活改善の餘地が大である事を暗く示して居るのである。此問題は後章で詳論するであらう。

米國中流官吏標準家計表(イ)

(1[illegible]・ワシントン市)

	價格	百分率 米國	百分率 日本	各費目に於て節約し得る 百分率	各費目に於て節約し得る 價格
食費	1,5[illegible].[illegible]6	34%	(33%)	7 1/2	11[illegible]
被服費					
主人	[illegible]12.32				
主婦	[illegible]2.52				
男兒(七歳)	193.20				
女兒(五歳)	165.00				
男兒(二歳)	94.00				
	1,[illegible]27.44	23	(11)	1[illegible]	102.74
住居・光熱費	856.00	19	(18)		6[illegible].00
其他	1,[illegible]93.04	24	(38)	20	215.00
合計	4,524.94	100	100		493.82

節約したる場合にて差引最小生活費4331.12

註(イ)U.S. Dept. of Labor, Monthly Labor Review Dec.1919. p.28.

十四、中流階級の現在數

現在我國に於て「日本標準」を保つて生活し得る所得を有する眞の中流階級者の數は何程であるかと云ふ事は、中流階級問題ばかりでなく、一般社會政策の根本義となるべき重要なるものであるが、不幸にして此研究に役立ち得べき材料は甚だ尠ないのである。從て此問題の決定の爲に使用した統計材料は東京稅務監督局發行稅務彙報大正八年十一月十五日發行第十八號に依つたのである。故に大正八年四月より大正九年三月に至る一ケ年の事實に就て我政府の當局が國民の所得申告に基きて調査したるものを基礎としたのである。此種の調査事實に對しては或は其事實が頗る內輪に失したり或は正確を得なかつたりして居るから、其統計には信を置く可きもので無い事を極論する學者もある。私自身も決して斯かる統計的數字を無條件で信頼する者では無いが、更に他に頗る重要な問題の研究に役立つ殆んど唯一の研究資料として私は政府當局に感謝して其統計を敢て使用したのである。從て私の以下論ずる事はたとへ數字を以てするも決して數學的に正確なるものとは信ずるので無く、唯不完全ながらも我國に於て現在中流階級が全人口に對して如何な

る割合に存在して居るか、其大體を示して、以て其社會政策の方針を定めんが爲にするのである。

尙更らに注意すべきは私の使用した數字は單に第三種所得のみで第二種所得卽ち公債及社債の利子收入は計上されて居ない事と、第三種所得中俸給、給料、手當、歲費の收入に對して十分の一を控除したものを所得額とされて居る事とであるが、前者卽ち第二種所得は第三種所得に比すると甚だ少なく大正七年度では總計僅に四千八百三十三萬圓に過ぎず、十分の一の控除を行ふた額は第三種所得の一二・七六パーセントに過ないのであるから共に大體の趨勢を示すには餘り重大な數字でない。之等の條件を考慮した上で中流階級者卽ち一ケ年二千圓乃至五千圓の所得を有するものを計算すると其家族數を約十萬戶（十萬五千三百九十六戶）である。尙詳しく云へば六百五十圓以上の所得を有して納稅義務を有するものは總人員百三十八萬七千四百七十三人であるが、其內同居家族員で納稅して居るものが三十萬七千七百一人あるからこれを差引くと百七萬九千七百七十二人で其人數によりて表はされて居る同數の家族が六百五十圓以上の所得を有して居るものと考へる事が出來る。我國の現住總戶數は千四十六萬九千六百十六であるから。註(十九) 六百五十圓以上の所得のある家族の數を總戶數の約一割（一〇、三〇%）に過ぎないの

であるから約九割(八九、六九%)は六百五十圓以下の年收のものと認めねばならぬ。然して中流階級十萬五千家族を總戶數に比較すると、約一分(一、〇一%)に過ぎず、五千圓以上の所得を有して居る上流階級は、其家族數三萬四千で僅に〇、三二%に過ぎないのである。今之等の事實を次の表によつて示す事にする。

階級別による家族數の分布(大正八年)

階級別	等級	一ヶ年所得額	家族數(註イ)	總家族數に對する百分率 細別	總家族數に對する百分率 大別
		(円)	(戶)	%	
下流階級(貧民)	下	650以下	9,39[illegible],594	89.69	99.67
	上	650—2,000	[illegible]	[illegible]	
中流階級(日本政府)	下	2,000—3,000	63,520	0.61	1.0
	上	3,000—5,000	41,57[illegible]	0.4	
上流階級(富者)	下	5,000—30,000	31,98[illegible]	0.31	0.3
	上	30,000以上	2,01[illegible]	0.02	
			10,469,61[illegible]	100	100

註(イ)　家族數は東京稅務監督局大正八年十一月十五日發行稅務彙報第十八號第三種所得稅個表に依りて計算したるものなり

十五、官公吏の所得

中流階級の中堅である智識階級を代表して居る官公吏に就いて、其所得額を調査し、夫れによつて生活の標準を決定する時には、次の如く驚くべき事實を發見するのである。

即ち我國文官(勅任奏任判任嘱託)總員數二十四萬二千九百四十四人の內で中流に屬するものは、其各階級の平均所得額によつて論ずる時は、奏任官九千四百四十二人の平均所得が二千三百七十五圓であるから、此階級者のみが中流に屬するのみである。八百十二人の勅任官は其平均所得五千五百六十一圓であるから、此階級者が僅に富者の下級階級に屬し得るに過ぎない。七萬七千五百九十一人の判任官(平均所得七百四十四圓)八萬七千八百四十五人の雇傭員(平均所得四百七十五圓)は貧民階級に屬するものである。一萬五千四百七十二人の有給市吏員(平均所得七百三十六圓)及び五萬七千八百五人の有給町村吏員(平均所得二百四十二圓)も皆同樣下流階級に屬するのである。更に十六萬九千四百六十人の小學敎員にありては其所得僅に七百十圓で同じく貧民階級の悲慘なる生活狀態を呈して居るのである。

所得に依る階級別官公吏の俸給

（一人一ヶ年平均・武官を除く）

	大正七年末俸給額（註イ）	増額率	本俸八割増給額（註ロ）金額	所得に依る階級別
	（円）	%	（円）	
勅任（8.721人）	4.061.3	3.	5.561.3	富者・下
奏任（9.442人）	1.517.5	57	2.375.0	中流・下
判任（77.501人）	415.8	79	718.7	貧民・上
雇傭（87.815人）	237.5	100	475.0	貧民・下
有給市吏（1[illegible].72[illegible]人）註（ハ）	[illegible]1[illegible].0	13[illegible]	735.3	貧民・上
有給町村吏（57.[illegible]05人）註（ニ）	1[illegible]2.	13[illegible]	242.1	貧民・下
小學教員（1[illegible].461人）註（ホ）	3[illegible]4.8	13[illegible]	710.0	貧民・上

註（イ）日本帝國第三十八統計年鑑八三頁に依る（臨時手當を含まず）
註（ロ）增額率は大正九年四月文部大臣の通牒による文部省所屬官吏增俸の例により一般を計算せるものなり
註（ハ）小學教員の增加率を適用す
註（ニ）同上
註（ホ）增額率は札幌區長の報告に依る札幌小學校教員平均增額率を適用したるものなり

十六、結論

國民生活は如何に複雜を極め又其特性が強くあつても、科學の進步や社會の發達に伴ふて一定の秩序を保ち國民の目標とすべき生活の標準は決定され得べきものである。今本論に於て我國に於ける標準生活の如何なるものであるか又其標準を保つべき中流階級に關する事實を研究した結果、當然中流階級に屬すべきものにして其所得が之に伴はず、中流階級の特性である生活の安定が保證されてないものが甚だ數多い事を知つたのである勿論。中流階級は重大なる職務を有し、國民の模範生活を營むべきものであるから社會はこれに無形の報酬例へば名譽、地位等を與へるを惜しまないであらう。然るに現今の如く誤つたる經濟制度の下にあつては、不當なる經濟的壓迫が日に月に頭[illegible]く中流階級の上に加はつて、無形の報酬の如きは有形の所得又は財產等の爲めに其價値を消失せんとして居るのである。斯の如くにして現今中流階級は我國に於て殆んど滅亡せんとし其中堅である知識階級の大部分は今や實に憐むべき社會的境遇に處して居るのである。斯る事實は單に中流階級自身の問題ではなく、國民全體の運命に關する重大問題である。茲に於て中流階級問題が一大社會問題として、考究されなければならぬのである。本論に於て表はされし中流階級の事實は當然「中流階級の社會運動」となり、又引いては「中流階級大同盟運動」を引き起さ

ぐれぐに止まないのである。此等の問題に關しては項を改めて引き[illegible]することであらう。

註(一) Spencer: First Principles, P. 285.

註(二) 金井教授在職二十五年記念[illegible]社會政策[illegible]内田銀藏論文二九六頁

註(三) G. Ruhland: System der politischen Ökonomie, S. 152.

註(四) Wernicke: Der Mittelstand und seine wirtschaftliche Lage, S. 2.

註(五) Von Franz Hoermann: Glücklicher Mittelstand, S. 12.

註(六) U.S. Dept. of Labor, Bureau of Labor Statistics Monthly Labor Review, Dec. 1919, P. 23.

註(七) Wernicke: Der Mittelstand, S. 4.

註(七の一) 河津暹「俸給生活者の保護並に選擧」(中央公論十年一月號)

註(八) 新[illegible]「俸給生活者生活問題」一六頁

註(九) 金井教授在職二十五年記念[illegible]內田銀藏論文二九七頁

註(十) Wernicke, S. 12.

註(十一) Hoermann: Glücklicher Mittelstand, S. 12.

註(十二) Hoermann, S. 12.

註(十三) Wernicke, S. 3.

註(十四) Chapin: Standard of Living in New York City, P. 247.

註(十五) Goodyear: Charities and Commons, Vol. XIX. P. 1039.

註(十六) Streightoff: Standard of Living.

註(十七) More: Wage-earners' Budgets, P. 168.

註(十八) Mitchell: Organized Labor, P. 118.

註(十九) Hunter: Vicious Circle of Poverty, P. 51.

註(二十) Ryan: Distributive Justice, P. 379.

註(二十一) 森本厚吉著生活經濟の[illegible]一一一一一五頁

註(二十二) Morimoto: Standard of Living in Japan, Chap. 4.

註(二十三) Roscher: Volkswirtschaftslehre, B. I, S. 1.

註(二十四) Monthly Labor Review, Dec. 1919, P. 28.

註(二十五) 18th Annual Report of the Commissioner of Labor, Pp. 581-585.

註(二十六) More: Wage-Earners' Budgets, P. 55.

註(二十七) Chapin: Standard of Living in New York City, P. 70.

註(二十八) Streightoff: Standard of Living, P. 20.

註(二十九) 衛生試驗所彙報「飲食物[illegible]」一八一—一八三頁

註(三十) Chittenden: Physiological Economy in Nutrition, P. 475.

註(三十一) Jordan: Principles of Human Nutrition, Pp. 193-194.

註(三十二) 森本厚吉「生活問題」一〇六—一〇七頁

註(三十三) U. S. Dept. of Agriculture, Farmer's Bulletin, No. 142, P. 23.

註(三十四) Kellogg and Taylor: The Food Problems, P. 112.

註(三十五) Friedenwald and Ruhräh: Diet in Health and Disease, P. 58.

註(三十六) Hutchison: Food and Dietetics, P. 175.

註(三十七) McCollum: Newer Knowledge of Nutrition, P. 150.

註(三十八) 佐木[illegible]雜誌第二十[illegible]

註(三十九) 日本帝國第三十八統計年鑑 二十七頁

自國本位主義對國際協同主義批判

自國本位主義の解剖

長谷川如是閑

一

自國本位主義は、今日の實驗的社會學者の否定する「社會我」の觀念に基き、その最高表現としての「國家我」なるものを空想して、そこに國家的主我主義を建設しやうとするものである。私は茲ではそれについて一般論をするのではなく、主として今の我が自國本位主義者の立場を解剖するつもりである。

社會的にしか生活することの出來ない人間は、その本能も社會的にばかり働き相な話であるが、實際に於て人間の歷史は、本能の社會破壞、社會の本能破壞の記錄である。然し考へて見れば、それが人間の意識的生活の發達の足ないのである。意識は生活が、生物學的の必然にのみ從つてゐる動物の間には少しも發達してゐない。何故ならば、彼等は、意識しないでも、各自の生活目的通りに、生物學的必然法に從つて行動し、生滅して行きつゝあるので、生存の必要の爲めには、意識を働かせるに及ばないのである。で彼等の生活には努力はあるけれども、意識的の努力がない。反之人間に於ては、その生活が進むといふことは、意識の複雜化することであつて、生物學的の意識のみが他動物の意識（動物にも意識ありとすれば）であるに反し、人間の意識は何處まで分化し、何處まで發達して行くか、到底現在の人間の知識では知り得ないやうな發達法を採つてゐる。さうして各人は此の意識によつて、それ〲各自の生活の向ふ所を發見して、その生活を、意識した目的の下で營むこととなる。然かも此の目的は、社會的であることもあり反社會的であることもあり、互に平和的協同を保ち得る性質のものであることもあり、又互に相反撥する性質のものである。此の意識的の生活に於て、人間は、或は社會と協同し、或は社會と衝突する。

而して此指標と戰鬪とが人間の進化であり、進歩の形式である。人間的進化は、決して個人が本能的生活に復歸することではなく、その障碍に對する戰鬪によるのである。それは、即ち社會の生活の歴史に外ならないのである。

二

人間が社會的生活に於て、目的を持つといふことを、社會が意識的目的を持つて進むと解する人もあるが、私はこれを採らない。個人は意識的生活に於て目的を持つことは確かである。――意識的生活に於てだけである。人間の生活は、常に意識的生活ばかりでなく、より廣くより深い無意識的生活を持つてゐる。これに就ては、各人は決して一定の目的を持つことは出來ない。偉大人間には、自分を意識するといふことに於て、意識目的を持つた人であるのが、彼れの一生を方向づけたものは、彼れ自身の意識した目的ではなく、その人格の無意識的發展であつた。そこで想ふと、意識的生活は、人間に於て、非常の發達を遂げたとはいへ、人間の全生活に於て意識的生活が受持つてゐる部分は、尚割合に狹い範圍であるといはねばならない。

個人は意識目的を持つが、社會は、千差萬別の意識目的（個人の有する）の綜合――即ち多數の目的の生存競爭――によつて進んでゐる譯であつて、決して一定の目的意識を有たない。從つてそれ自身の意識目的を持つ譯がない。

尤も個人又は個人の集團が、社會はかく／＼の意識目的を持つと考へることは出來る。例へば、爲政者が、國家を以て、社會の意識目的の具體表現であると考へ、國家の目的を、そのまゝ社會の意識目的であると假定して、その意識の下に生活目的を實現せしめて行かうと考へるわけである。

國家は社會そのものではなく、たゞ社會生活の一部を爲してゐる『制度』に過ぎないことは、極めて明白な事實だが、爲政者の一部では、自分達の生活意識の與へた生活目的を社會が具有すると考へ、その社會目的を、最も完全に國家が具有すると考へたのである。即ち彼等に云はせると、社會目的は、國家目的に於て理想的に具象されてゐるといふのである。

この考からして、所謂自國本位主義なるものが出る。即ち我々の生活目的は、『國家』によつてのみ實現されるのであるから、國家を措いて、生存の目的を任かすべきものはない。さうして、自分の生活目的を具象するものは、自分達の國家なのだから、自國の國家的生活の外に、生活の目的はないといふことになる。

然し『國家』がさういふ風に、自分の生活目的を實現してく

れる、唯一のものだとしても、日本人も英吉利人も、佛蘭西人も誰れも彼れも、皆別々の自分の國家を持つてゐて、何れも、その國家だけが、自分達の生活目的を表現させる唯一のものと信じない譯に行かない。從つて自國本位主義者に二つの區別を生ずる。

第一の自國本位主義は、前の獨逸人のやうに、獨逸といふ國家だけが、啻に獨逸人ばかりでなく、全人類の生活目的を實現せしめる使命を持つた世界唯一の國家であると信ずるので、第二のものは、各國人は、各自の屬する國家生活に於てのみ生活目的を實現せしめ得る、といふのである。日本の自國本位主義者にも第一第二の兩方がある。

第二の自國本位主義は、第一のそれが誇大妄想的、自我狂的なるに對して頗る反省的で、努めて他國の地位を認めて、彼等の自我的行動をも、彼等自身の自國本位主義を承認することによつて肯定し、であるから、我が國も、彼等に劣らず自國本位主義に立つて思想し、行動しなければならないといふ位のものである。上杉愼吉君の如きも、以前は、第一の自我狂的自國本位主義であつたやとらだが、此頃は、第二のそれに退却したとかいふ說である。敢て上杉君に限らず、前獨逸が滅びたので、大抵の誇大妄想的自國本位主義者は生醉ひ本性違はずで、第二のものに退却したらしい模樣である。

三

此の第二の自國本位主義即ち各國人とも、自國本位であるから我國人も自國本位に行動せよ、といふ說は、實用的には、たいして差支のある說ではなく、事實亦そんなことになつてゐるのであるが、然しそれを主義とか、道德とか、思想とか、大さうなものにして舁ぎ廻るのは考へものなのである。

我々の社會生活でも、各人は主我的に行動してゐて、中々協同的には行動しない。それは事實で、その結果ぐづ／＼してゐると生馬の目をぬかれるやうな目に遭ふから、めい／＼確乎しろ、といふだけなら、誰れも異議を挾む必要を感じない。けれども、學者ぶつたものや、豪傑ぶつたものや、指導者ぶつたものが、だから、めい／＼は主我的の立場に據つて、何處までも主我的に行動しろ、と太鼓を叩いて廻つたら、世間は大に迷惑を感ずるに違ひない。自國本位主義者も、それを主義とか國家理想とか、人類の生活目的とか、大さうな名目の下に觸れ廻るならば、右の太鼓叩きと同一に片付けられなければならない。

殊に第二の自國本位主義者は、第一の誇大妄想患者から見ると、頗る徹底してゐないのが甚だ氣の毒である。誇大妄想狂者

の自國本位は、更に或る幻像を描いて、その迷妄の生活から一歩も出ないで、場合によつては、その幻像を追ふて國と共に亡びるを辭せざるの概があるのだから、他から手がつけられないだけ、本人は自己完成を感じないとも限らないが、第二の反省的自國本位主義者は、他國の廣大にして偉麗なる自國本位的發展の現實を目の前に見て、その羨しい光景に仰天しても、尚ほ人心地は失はないので、甚だ始末に惡い。卽ち現實を無視して幻像に生きるだけの、勇氣も足りなければ、精氣も足りないので、生氣を失ひ切らない生醉ひの如く、醜弱であり、不徹底である。

彼等は、戰後の佛國がアルサス・ローレンを恢復しただけでは滿足しないで、ザール流域に垂涎し、中歐に隷屬的國家を作つて、覇を唱へやうと企ててゐることや、英國が、歐大陸の經濟的、軍國的死命を制せんとする企圖を着々進行せしめ、その上、露國と競合地であつた小亞細亞地方を手に入れて、大に東進の禍を逞うしてゐることや、伊太利が、自國恢復以上にバルカンの西海岸に力を伸さんとすることや、米國が、極端なアメリカ第一主義を發揮して、自國の主唱した聯盟に加はらず、世界最大の海軍國資本國たらんとする野心を包藏して、大活躍を試みやうとしてゐることや……何かしら此種の事實を澤山に目の前に見て、彼等の口吻を借りれば、魂天外に飛んで、これは大變である。日本も大に彼等を學んで、自國本位に大飛躍を試みなければ、明日にも亡びてしまうと絶叫するのであるが、彼等の觀たところのものが、第一主義者のそれの如く幻像でなかつたことは、此上もなく、彼等にとつて不幸なことであつた。

四

で彼等は、自國本位主義を國家理想、國家目的、國家主義、國家何々の根柢に置かうといふのであるが、さて然らば、我國が如何にして、その廣大無邊なる世界各國の自國本位主義の國家競爭中に立つて、よく我が自國本位を押し通すことを得るか、といふ實行方法に至つては、彼等反省的自國本位主義者は、甚だ曖昧若くは無策である。

それはその筈である。彼等のいふ通り、英吉利は、世界の地圖を眞赤に染めるやうな大帝國であり、その國力の強靱なる殆んど圖が知れないし、米國は、大正何年かには、日本に何倍する海軍を有するに至り、その武力を後援する國富は、日本の何十倍なるを知らず、又佛蘭西は何う、更に伊太利は斯うと數へ立てれば、何れも、日本人の驚異ならざるはない。その間に介在して、彼等のいふ通り貧弱なる日本が、何うして自國本位の意地を張り通すことが出るか、彼等ならずと雖も、思案に餘つて

悲慘慷慨するの外はないのである。自國本位どころか、已むを得ざる必要から、人口の捌き口を外國に求めやうとしても排斥され、ほんの少しばかり自國本位衝動を發揮して、西伯利亞の關係を少しでも深入せしめれば、八方から尻が來て居たゝまれず、又支那に對する自國本位の行動は、對支關係を今日の暗礁に乘り上げる結果となり、朝鮮に對する自國本位は、却つて朝鮮人自身の自國本位を誘發する基となつてしまひ……自國本位主義も、和製は甚だ貧弱であるといふ外はない。

何しろ大正何年度には、日本に何倍する海軍を有するといふ米國に對し、日本に、同じ年に、彼れの何分の一の海軍力を有することにならうとしてさへ四苦八苦の有樣であつては、米國の自國本位は通るかも知れないが、日本の自國本位はとて、通り相にもない。英國に對しても、世界を領土とする大帝國、世界の資本國たる大帝國にとつて、自國本位は調法でもあり、痛快でもあらうが、それよりも小さく、それよりも貧乏な國にとつては、自國本位主義は、その主義を何處までのさばらして見たところで高の知れた話で、殊にそれをする自由にすら乏しい國には、甚だ有りがたくない主義に違ひない。自己本位が強者に便利であり弱者に不便であることは、我々同士の日常生活がそれを證してゐるではないか。

自國本位主義は、我儘勝手を振舞つても、誰れも何うすることも出來ないやうな強い國か人、又は強いと妄想してゐる國か人の唱ふべき我儘無體の主義であつて、それほどの力のない、そんな我儘無體をすると、すぐに[illegible]れるやうな、貧弱な人間や國家の唱ふべきものではない。

日本が右の前者に屬するほどの強い國ならば、自國本位主義を唱へるも面白からう。

五

然しその前に考へなければならないことは、我國の自國本位主義者が歐米の國家について述べ立てゝゐるやうな事實は果して國家の強大を證するものであるか何うかといふことである。例へば佛國が、舊國家的衝動の動くまゝに、領土を欲し隣國を威脅し、國內の不安分子を強壓する等のことは、我が國の自國本位主義者が、佛國の強大を證するものとして擧げて居る事實でその他英國や米伊の行動についても同じやうな事實を澤山に擧げて、その國家の強大を示すものとしてゐるが、國家の強大とは果して、そんなことをいふのだらうか、彼等がその舊國家的衝動を傍若無人に働かしてゐることは、果して彼等の國家理想を達成する所以であらうか。舊獨逸が嘗つてさう考へて、その

爲に亡國に陷つたので、自國本位主義者も、同邦に對してだけは、さう云はなくなつたが、他國に對しては、依然として、獨逸が失敗したと同じ義務を、もつと弱い度合で採つてゐることを――前世紀を嘲笑したと同じ調子で――嘲笑してゐるのは、何ういふ譯であらうか。それは強盜の梟首されてゐるのを見てゐる群衆のうちで、他人の懷中物を盜んだものゝあるのと、同じ心理で説明し得ることではあるまいか。即ち彼等はかう解するであらう。梟首された強盜にとつては拙なことは缺點であつたが、まだ梟首されない――これから梟首される――強盜にとつては拙なことは、生存の道であると。

從來の國家が、領土主義、資本主義の極度に達した、その傳國家目的を保持する爲めに、最後の死物狂ひを試みてゐるのを壯快がるのは、ラオコンの蛇と鬪ふ彫刻を見て、ラオコンは永久に蛇と鬪ふ痛快を感じてゐたと思ふ類である。

從來各國の將來の運命などを豫言するのは、氣狂ひの仕事にして置いてもいゝが、然し現に彼等の外貌であるところの「强大」が、そのまゝに、彼等を運命づけるものでないことは、常識あるものの當然認むるところであらう。それは、一種の國家的ラオコンなのである。現國家の『强大』は、その苦悶の相に外ならない。それを羨ましがつてゐるものもあるとは、蓼喰ふ蟲も好き〲といはざるを得ない、

六

何故に、そんな風に、錯誤に充ちた自國本位主義といふ如きものが發生したかといふに、それは、冒頭に云つたやうに、我々人類の生活の實際の歴史は、本能の無意識的發展である。本質上生活の發展には、意識の働く範圍は極めて狹いといつていゝが、然し人類はその本能的發展を、意識の生活に於て認識することを自己の生活の特徴としゐる。さうしてその認識に於て、人間は、自己の生活を合理化せしめ、そこに規範をも用さうとするのである。さうして事實亦さういふ意識によつて逆に生活を合理化せしめやうとする努力が生ずることも前いつた通りである。で生活の動力であるところの本能も、その發展の過程に於て、無意識的より意識的に進んで行くことが、人類の生活に於ける特色である。性慾の本能が、愛に進む如きは、この最も顯著な例である。

國家は、人類の征服本能――それは遊戲本能と本質的に共通の衝動で、寄生的生活の必要から發生したものであるが、遊戲本能のやうに、協同生活に於ける平和的發動に滿足しないで、敵對行爲と發展して、非協同的征服の完成に於て滿足する[illegible]

れと異つてゐる——に發展してゐる一つの制度で、集團内に於ける個人の、集團に對する征服慾、又は一つの集團の、他の集團に對する征服慾の滿足であるが——事實上國家は多く右の後者に屬する。日本もさうである——それでも、國家が成立し存在する爲めには、その征服者の本能に、無限無障に昂進せしめることは出來ないで、或る程度までは、集團の協同生活の可能の爲めに制約されたのである。その制約を肯じない本能の昂進は、却つて國家の生存を破壞して、さういふ國家は、直ぐ樣、亡國に陷つたのである。

かういふ進化の過程が、如何に人間の意識的生活に反映したかは、察するに足りることである。即ち國家意識——各人の意識に現はれた國家——は、事實上の國家が征服者の本能の滿足から發程してゐるに拘らず、早くから、より道德的、合理的、社會的であつた。日本人の國家意識なども、隨分早くからさうであつたことは、神話的歷史にも現はれてゐる。

國家意識が道德化されたことは、國家生活を本能的起原から離して、道德的存在としての働きをさせたと同時に、他方に於て、それが、かの自國本位主義、國家萬能主義のやうな空想的國家觀念を産み出す基になつたのである。

人間の意識に現はれた國家が、如何に道德的存在となり了うせても、事實上の國家は頗る反道德的、反社會的本能の發露たることを罷めなかつたのは、人間の意識に現はれた人間といふ生物が、甚だ道德的、合理的生物であつたに拘らず、實際の人間は、不道德的不合理的本能の主人公であつたのと變りはない。

七

實際の歷史國家は隨分亂暴な國家であつた。封建國家は斬取り强盜の結晶であつたが、今云ふ文化國家だつて、根つから行儀が好かつた譯ではない。此事は、自國本位主義者や軍國主義者が、列國の例を以て明示してゐる通りである。然し彼等にそれが爲に國家の意識に現はれて國家の道德性を捨てるといふはとしたかつた。自國本位主義者は、一方では、此道德的國家觀念に基いて、自國の共存圓滿を信じ(?)、他方に於ては、事實上の歷史國家の征服本能、所有本能の發揮を認識して、それを國家の對內的及對外的の生活の信條としやうといふのである。だから國內的には、專制を主張し、國外的には自國本位を主張する譯である。

然しこれは餘りに勝手過ぎる。國家が道德的に共存圓滿の完全體であるならば、事實上の國家の本能的征服や、掠奪は廢止せしめなければならない。これに反し、若し國家を事實通りに、征服掠奪の機關であると認めるならば、國家を以て、人間の集

國の道徳的生活の極致であるといふやうな國家神聖の宗教を捨てなければならない。

前云つた通り、事實上の國家も、その征服掠奪の本能を極端に昂進せしめると往々亡國に陥るから、國家は、動物的制約を蒙つたに相違ないが、それは各國家が直ちに立派な道徳的存在たるに至つたといふことではない。人間が、その征服本能や所有本能を相當制約されて生活して來たことは、直ちに、すべての人間が聖人になつたといふことではない、だから、人間に聖人がないやうに、國家にも道徳的國家はない。即ち各國家が自國本位に傾いてゐるといふのは、各國家が征服國家掠奪國家でもあるといふことである。

自國本位主義者は、一方で、各國家が征服國家掠奪國家であることを承認しながら、他方で、國家は人間の社會的生活の最高表現であるとは何の事だらう。征服や掠奪が生活の最高表現でない限り、征服の事實、掠奪の事實から成り立つてゐる國家——私はさうまでは思はないが、自國本位主義者は、現代國家がさうであると、盛に其事實を擧げてゐる——が道徳や文化の最高表現であり得る理屈はない。況んやそんなものが、我々人類の個人の生活の最高本位にも、國家生活の最高本位にもなり得る譯はない。

八

自國本位主義の好い所と惡い所とは、何處にあるのだらうか——私は冒頭に云つたやうに、人類はその本能の生活を、意識的に合理化しやうとする傾きを持つてゐる。「盜賊にも三分の道理がある」といふやうな合理的の作用は、動物の決して持つてゐないところで、人間だけが持つてゐる働きである。で國家も人間の意識に上ると、其の不合理を國家自身の立場から合理化しやうとする。が國家は人間生活の全部ではないから、その合理化は當然に、違つた立場から批判されて、その本質的の不合理を暴露せしめられることを免れない。自國本位主義者のやうな國家萬能主義者は、自己生活の立場から作られた生活意識目的觀を、そのまゝ社會目的と認て、その實現が、人間的生活の極致であると考へるのであるが、私の既に云つた通り、社會は其れ自體の意識目的などは持つてゐないので、畢竟多くの意識目的の競合の下に進化するのであるから、或る意識目的は、他の意識目的と生存競爭を始める。何れの目的が社會的生存の爲めに合目的であるかをその競爭で決する。征服本能の表れである國家——即ち征服者の本能の發揮であつた國家——も、右の意識目的の生存競爭の結果、次第に社會的に合目的的なる意識目的

に打ち敗かされて、征服者の國家意識は、次第に社會化して、人民の生存の爲めの國家といふやうな——その本能的起原とは大分違つた——觀念にまで矯正されてしまつた譯である。それが即ち國家の道德化で、その昂進したものが、今日の國家萬能國家神聖主義である。それは即ち自國本位主義の、好い所といへば云へるのである。

然し意識の上で、さう道德化した國家も、前云つたやうに事實の上では、依然征服本能的なので、實際國家は、お互に征服國家の働きを廢めることは出來ない。自國本位主義者は、こゝでは、他方の意識的立場とは正反對に、征服本能主義を採用して、征服慾所有慾の無制限の發展を嘆美し、追求してゐるのである。これは自國本位主義の悪いところなのである。

而かも、國家本位主義の好い所——即ち國家を道德的存在とすること——は全くの空想であつて、同主義者の悪い所——國家を征服本能の主體とすること——は事實なのであるから、自國本位主義者は、自己の立場の道德上の肯定を求める時に空想家であり、その不道德な立場を主張する時だけ實際家であるといふことになる。

目下の我が自國本位主義者が、國家絕對を唱へる際に述べ立てゝゐる觀念は、認識の錯誤で、その根柢は空想である。これに反して、彼等が、外國の國家的行動を擧げてゐる際に數へ立てゝゐるものは、正しい認識で、悉く事實である。がその事實は、斬取り强盗の事實である。その斬取り强盗の事實を、空想を根柢とする意識で道德的に肯定しやうといふのが自國本位主義者の所存である。そんな馬鹿〳〵しいことが出來る筈がないと常識あるものは思ふであらうが、成金が自己の蓄富を貪ることを愛國心で肯定しやうとし、國家のうちにはそれに同意してゐるものもあるところを見ると、國家といふ生活の範疇內では、さういふことが可能なのかも知れない。

武力主義と戰ふ文化主義の楯の寸進

杉森孝次郎

嘘から出た誠といふ意味が、目下の國際聯盟には若干帶ばれてゐる。ウィルソン氏が、巴里へ乘り込んで間もない當時、米國の一滯歐記者が、本國の一雜誌へ寄稿した。要點は、ウィルソン氏の時代は過ぎつゝあるといふにあつた。其理由はウィルソン氏

が、たしかに手振らで國際聯盟創設へ固着したらしいといふ症候に對する記者の診斷にあつた。列國の理想家と、一部のためにするところある歐洲の現實政治家とに祭り揚げられて、國際聯盟の理想的原則だけを堅持し、いさゝかもそれの具體的實行案を研究討議しなかつたのはウィルソン氏のたゞの過誤であり、過誤であつたといふのだ。ウィルソン氏が、具體案を準備しなかつた事は、その後、同僚の諸氏自身の口からも證明された。

クレマンソー氏が代表した佛に、聯盟案には終始反對であつたが、ロイド・ジョージ氏が、ロー氏を第一の友として、名は聯立、實に保守の脚の上に立つ内閣の首相であつた英も、聯盟案には、反對が大多數、氣乗りのしない者が多數、疑惑を抱いた者は實に少數であつた。勿論ブライス、グレイ等の紳士型自由主義者及び勞働黨の穩健派のなかには、多少良心から聯盟贊成の人々もあつたが、それらの人々は、同情者であり、在野の士であり、議員の責任代表者ではなかつた。聯盟成立の曉には、自國が、黄色人の黒色國とも、對等に伍せねばならぬかも知れん。獨國とも讓歩せねばならぬかも知れん。軍備制限の名に於いて、英の海軍に縮小の手が着くかも知れん。誇りの削られた、偉大な世界に住む國民の身の上となるを憂慮したのだ。

しかし、それに英人なみの具體的問題であつた。それだけに多數乃至大多數者の心理であつた。ロイド・ジョージ氏自身は、改革好き、冒險好み、自由主義の性格だ。一身の功名心と、英帝國の安全擴張とに關係さへ發見されゝば、新國際組織を提起するに勇みたい人だらう。けれども、かれには、國際的知識、從つて良心も缺乏してゐる。かれに取つては、問題にウィルソンご聯盟ではなかつた。聯盟案に賛同をおしむ事は、ウィルソン氏を怒らす事であつた。怒つたウィルソン氏は、袖引く英、遂に米國化するかも知れん。さうなると、英の明日は依然暗澹だ。翻つて英國に於すれば、聯盟が幸ひに成立して、英國の[illegible]海國間に、役だと英帝國が制度的に不可能にされゝば、英は勝負の打ちやめだ。英國のあたらしは流産に終はる。ほつかに案ずる研究すれば、ウィルソン氏には、理想的原則の布告だけあつて、その内容に空虚だ。南阿出身の現實、理想兩刀使ひの雄たる、スマッツ將軍に意を含めて、ウィルソン氏の布告に案合すると同時に、戰時保守内閣の英の民情に、出來るだけ小なる不滿足を與へ得るやうな内容に仕立てさせるといふ策略の妙技に到着した。英帝國の制限を除外した「海の自由」も[illegible]亞の天恩も、經濟的障壁の撤廢も、いちいはゆる十四ヶ條の柱礎は、さしあたつての政策目的には不用とされた。

現實主義の共和黨が合衆國の政治的潮汐となり、遂には主潮

となり、ウィルソン氏の聯盟試設を押し流した。現る聯盟各國の態持ちは英だ。大體からいうと、理想熱に驅られて聯盟に參加したのではなく、利害の打算が寧ろ勝つて聯盟に參加した英だ。目下の國際聯盟の最弱點は、恐らくはソヴィエット政府に比しては、その起原に於いて、發達の徑路に於いて、著しく新理想の衝動と想像に不足してをる點にあらう。

けれども、國際聯盟を、ウィルソン氏の理想主義と政治的新企圖の、崇高雄大にすくなくとも半現した興味と、ロイド・ジョージ氏の打算とに歸して說明する事は、部分的意義を有するに過ぎない。「力の權衡」の體制下に於いては、第二の世界戰爭が早晩爆發しよう。他面に於いて、國際協力は、各國の意思ではなくても、必要であり、行動であり、功業である。時の大部分を通じてだ。經濟的、文化的交通が即ちそれだ。それと同時に、最近代の發達に屬する民族的團結心と愛國心とに、大戰の怪物を宥めて辟易しまるほどの[illegible]現象でない。人は社會を愛欲する理由を有する。社會は協力だ。協力は個性保護だ。けれども、他のすべての善がさうである通りに、社會といふ善も、たやすくは手に入らない。家族、氏族、部落、藩といふ規模を超越して、民族一家の規模に吾人の社會生活が進んだのは、しばらく[illegible]觀究に値ひする功績だ。民族的團結の強い底のしづくをまでも飲みほさんとして、人類的團結の大盃の豐醇を試嘗だにしたがらない列國大多數者の心理は、決して不可解ではない。民族自決の一項が、國際聯盟の一大條件として現はれた理由も、隨つて不可解ではない。

協力の範圍、即ち社會が、事實上國際大になつて來たから、國際連帶の責務が、各國の要素として公定される時運が開けた。同時に、民族的社會の樹木が、まだ伸びうる限り伸び盡さないから、求心的勢力が雄猛りに猛る。愛國心は最近代の人類の多元的求心傾向だ。國際主義乃至世界主義は、今明日の人類の一元的遠心傾向だ。國際聯盟は、軍備の制限、宣戰の不自由を主張する事によつて現代人の一元的遠心傾向を示し、民族自決を高唱する事によつて現代人の多元的求心傾向を示す。

しかしながら、多元的求心力は、進み進んで、人格的個性の[illegible]全發展にまで到達しなくては不完全だ。これを本據としての國民主義的新征服であり、人類主義的新征服であるべきだ。人格的個性主義を前提としての國民主義に、早晩國民を[illegible]て、人類を引きとめねばやまぬ矢だ。[illegible]團結の結果を貪い、[illegible]き足らずし一人[illegible]の結果を[illegible]一巨人が、個性[illegible]存[illegible]國際聯盟の根本條件は、人格的個性主義の深い根底に十分[illegible]した經路がないといふ事實にある。[illegible]なる理由[illegible]す。

けれども、吾人は一事に萬能を期待し、一人に諸事を要求すべきでない。責め求むべきでない。ウィルソン氏が、蘇人の國際性と執拗力とを、國際聯盟の一理想に傾注して、錢湯のクレマンソーをも、手品師のロイド・ジョージをも、いや應なしに網にからめて、大小列國のせい揃ひをさせるまでに持ち運んだ事は、史上に特筆せらるべき一偉業だ。一矢は百間を飛ばゞ足りなん。次ぎの百間をば、新に、陣頭に立つ射手の矢に待つべきだ。嘘から出た誠でも結構だ。帝國をしても、乘りだした後の勢ひを国闘から保護して、國としての聖戰主義の千浪萬波を起こさしむべし。地上に於ける作戰的生命の理想鄕は、既に趣味の一眼を持ち、將にまたその新興を持ふ歴史的努力を必要とする。國際聯盟は、文化と道德の兩の手段だ。文化主義が、武力主義にむかつて、ふる矢のなかを前行する手段たる過程を、國際聯盟は段階として有するのだ。吾人は、この段階に十分なる賛想と贊從とを與ふべきだ。

競技は人生に附隨すべきだ。國際オリンピク競技でも愉快に且つ晴れ〳〵しいではないか。負け勝ちの間に、負け勝ち以上の友愛的、協力的興味が洋溢してゐる。諸民族間にも、競技に等しい競爭は、繁榮する方が、眞趣をも増すが、利益等偶をも加へる。國際聯盟が、異民族間に、文化的、經濟的諸形式に於ける競技的競爭の自由をも拘束するならば、その國際聯盟は則に疾病があるのだ。そも〳〵今後の國家は、銀行の如く、學の如く、機能的一面を、國家特有の地方的一面と共に、いかにも高く發達させる必要がある。自由貿易と自由移住とが今後の國際關係のヒーローとヘロインとであるべきだ。各國はその土地の富美と、その制度習慣の華美との力によつて、國民を引き付けるやうであるべきだ。各國をして、人類の各方面の理性の前に、公平に開かれたる機會たらしめよ。新國際組織が現實よりも引力あるまぼろしとして、吾人の眼前に描現し、否なむしろ明視されるのは、實に唯だその新國際組織が、上述の條件を具備したものである場合に限る。現存の國際聯盟は、その形の新國際組織にくらべては、筍と竹との差であるより、種と竹との差に近い。

筍は暫らくしても竹とはなれん。吾人は、新國際組織の筍を植ゑねばならん。しかしながら、苗圃を濟ましてはならんと、新舊戰を起こさせるところにさへ、苗の價値は無視されない。況んや、國際聯盟には、幾分は筍の性もある。早きに及んで、十字街頭に立つ駒に、正路を、智識と感情の斷從で、誘き導いて、歡迎の誠意を表すべきだ。

國際聯盟は、加入列國の國家的主權に制限を設けるといふ理

由で、しば〳〵非認され、または懐疑される。この問題に關しては、吾人は、各國の成員たる人格的個性の主權が、國際聯盟の有無によつて、いかなる增減變化を受けるかを第一に、且つ究極的に研究判斷すべきであると主張する。すべての制度は、生活の或る道具だ。すべての道具に對する吾人の態度の理想的原則としては、およそ新道具が、舊道具を廢用にするからといふ理由で、吾人は新道具の採用を躊躇すべきでない。舊道具の目的を、新道具は一層有效に達しうるかどうかをしらべて、新道具の採否を決すべきだ。立國の根本目的は、國民の人格的個性の保護だ。その根本目的が、出來るだけ十分に、完全に達成される制度、習慣、社會組織が、愛國者の當然要求すべき事實だ。愛國者としての吾人の第一主要條件は、自覺だ。

一民族が、民族的に團結して、他民族を侵攻する可能が存する限り、その他民族の成員たる男女の立ち場からいへば、同じく民族的に團結して、自衞自存を安全にする必要がある。吾人が、國民主義を重視する所以は、實はこの民族的侵攻の可能が容易に熄滅しないといふ事實判斷にある。教育が世界の人心を一變するまでに新生傳播しなくてはいかん。人類的啓蒙運動が必要だ。第一、二、三世紀に、ヤソの思想が、枯草の原野に落とされた紙卷烟草の吸ひ殘しの如くに點火し、飛び火し、折り々々の風に煽られて、ついには地上の權力の最中心に燃え付いたやうに、國家の新位置に伴ふ國際的自覺が、ひとたび人類全的の火となれよ。新人類主義、即ち新個性主義の大感激と大狂熱とに、各人の胸は、しばし、古昔の豫言者の如くに燃えよ。各人の眼は、しばし、古昔の使徒の如くに輝け。詞と、業とが、各新人の唇と手から、新世界建造の工事を、奇蹟の如くにはかどらすやうであれ。

國際聯盟の否定命令は戰爭にむかひ、國際聯盟の肯定命令は生産と分配の國際的協力にむかへ。自然資源の開拓と、富の生分配とが、現時の國際病ではないか。一日米問題、一日支問題の解決にさへも、世界各國の根本組織に改作を施す必要がある。

一方は事實・一方は空想

紀平正美

記者が余に與へた問題は「自國本位主義と國際聯盟主義との批判」と言ふのであるが、現今世界に一獨立の國家を組織して居る國にして、自國本位ならざるものが果してあるであらう

と考へて見た場合、自國本位と云ふ事は、事實であつて主義と名づくべき性質のものではない、從て此に對する批判は、其の事實をどこまで合理化、必然化し得るかといふ事に於て存立する。さて又、人道主義といふものが、果して何れに主張として存在するであらうかを考へて見る。少くとも現今唱へられ、考へられて居る所のものは、自由な範圍では或る範圍に對抗することが出來ないといふ、直接には自國本位の政策から出た、國家的範圍に於て「人道」「全世界的に「人道」「正義」といふ樣な、抽象的なる理想によつて、論理的に理屈付けをしたものに過ぎない。斯く考へて見ると、當面目に此の主張を一の主張として作られるものでありとすれば、[illegible]人道」だとか「人道」などが抽象的理想であると考へる所の論者の見方——殊に科學的態度に立つもの——のみであらう。而して此の論者は[illegible]學的といふ事を其の特色とするが故に、此の點に一種の暴力を有つ現代に於ては、如何にも非常に何等かまるらしく感ぜしめられそのである。而して是れ何なければよく反省して[illegible]ない。そこで斯へられたる問題の根本的に問題となるのは、斯る抽象的の理想が、果してよく自國本位といふ事實を合理化、必然化し得るかといふ事に歸着せなくてはならぬ。余は[illegible]の爲に[illegible]關心の論理[illegible]して[illegible]問題[illegible]に掲げられたるラッセル氏の「[illegible]關心の功道」に存する論理的缺陷を明にして置いたが、今又此の問題を論ずるに於ても、自國本位（感情上から云へば、それは愛國心である）が現代に於て一般的の事實となつた事の歷史的の意義や、「人道」や「正義」等が畢竟抽象的のものであることを、等しく亦歷史的及論理的の立場で明了にせなくてはならぬ事となるので、此れは實は簡單に往かない、今は其を十分に論じて居る暇を有たないのを遺憾とするのである。それで今茲では唯く簡單に始末を附けるであらう。

宗教的生活組織が自己に内存する論理的缺陷の爲めに自己を破壞したのは、宗教的信仰によつて得られたる、個人の力の意識であつて、此の意識を起し且つ強めた諸條件は相よりて近世の國家・個人主義を確立せしめた。而て其の條件の主なるものは、實際生活の上にありては經濟的關係と、理論の上からは、數學的に考へられた抽象的の理であつた。此故に斯る個人主義からは、國家の如きも亦人の功利的關係に於ける結合に外ならない。而て更に此の時代に於て人が面前に見る所のものは「ギルド」と、經濟的結合である所の都市及都市の同盟とであつたのである。更に簡單に云へば、封建制に於ける騎士道を打破したものは、經濟的關係よりのみ考へられ又訓練せられたる道徳即ち町人道であつたのである。古く騎術的生活組織に於ける「人道」「正

義」或は宗教的生活組織に於けるそれ等は、自國或は自教會內に限られてのものであつた事は止むを得ぬにしても、其の「人道」「正義」は超個人的であり、而も其の時代に於てはそれが實際生活を組織する具體的の原理であり得たのである。町人道は其の自國、自教會といふ範圍を打破したといふ長所を有するが、其の結合の原理を單なる功利的のものに爲した事は、現今の資本主義を起した根本の理由であつたのである。功利の原理は外的條件によつていくらも動搖する、從て功利的に即ち資本主義的に考へられたる國家が、必然性を有せたく見られるのは又當然である。從て現今でも、抽象的のものを抽象的方法で組織することを以て其の本質として居る科學者が、國家を偶然的のものと見るのは、其の出發點に於て同樣の態度を取るからである。然し其は個人主義時代の思想を脫却せぬ時代錯誤論たるに過ぎぬ。それで國家を偶然的のものと見るが故に、其の組織の不完全なる點を意識した場合には、所謂「正義」だの「人道」だのによつて批判せられた、又批判の原理を其に求めんと考へるが普通である、然しそれは近世初期に出たモアーの「ユートピア」がよく其の思考方法を代表するが如く、畢竟ユートピア論に過ぎない。(プラトーンの「理想國」をも亦斯るユートピアと同一視する人が多いのであるが、其は無思慮の致す所であることを附記して置く)。畢竟するに各種の社會主義は、又皆な斯るユートピアに生きたものに過ぎない、抽象の幻影と、現實と混同したものである。社會主義が資本主義を打破せんとして、其實自己が他種の資本主義者たることは、甚だしく滑稽である。(此の滑稽は町人道の上からは、「人道」だの「正義」だのは無力であることをよく證明して居る。而も斯る滑稽は何れにも演ぜられて居る。抽象のユートピアを提げて會議に臨んだウイルソン氏の口から、民族自決主義が唱へられ、我が日本の使節から、人種差別撤廢の議が提出された、而てウイルソン氏の本國は今以て國際聯盟に加入せぬのである。ユートピア論者は此る
觀て愈以て末法の世と慨嘆するであらう。

大凡我等の思惟が我等の經濟を組織する場合に其が「一」經
として完成せらるゝ限りは、「一」としては單純化され、多
「一」とする限り轉化せられ、而て其の多に對して、其の組織は
全體としての命令力を有する。斯る思惟力を有する人間の集
體は、其故に單たる數學的の總和でないといふ事は、個人主
より出た民約說が、ルッソーに到りては、個人意志の單なる總計でない所の一般意志を認めた事によつても明了な事である。一般的意志とは即ち個人意志の轉廻であつて、而て其は同時に
個人意志に對して命令の威力を有する事となる。抽象的

を取扱ふに慣れた科學者は、此の威力を嚴しく抽象的概念たる法則の上に認めるに正當であるが、此れを直ちに人道や正義の上にも認めんとすることは、一種の論理的跳躍に過ぎない。何となれば「人道」や「正義」を法則の形式にすれば直ちに指導原理たるの力を失ふ事は、既に古くプラトーンが說明した通りであるからである。此等の概念は即ち實現の自覺によるべきもので抽象的に規定せらるべきものではないのである。上述の如く抽象的なる態度より云へば、命令と生命（此等の最も具體的のものとしては國家）との區別は出來ない、等しく功利的關係による均衡にして、只だ小差は其の關係の差違を起す自然的條件の相違といふ位にのみ、其の相違點を定めるより外には出來ないのである。然し吾人の如く、組織する人間の働きに其の根據を置いて考へる場合には、個人的のものが轉遷せしめられ貫通せしめらるる所に、其の結合の原理を認めなくてはならぬ。從て社會即ち國家には、其の特色がある、即ち特定の實現せられた正義がある。換言すれば國家は一文化單位としてのものであつて其れが個人に對して、始めて具體的なる命令の威力を有つことになるのである。而て純論理的の立場に立つて云ふならば、國家は自己が自己たるが爲めに、即ち生命と光とを得んが爲めに換言すれば自己が全體たる自己と結合せんが爲めに、自ら作れる必然的媒介である。即ち是れが自國本位といふ事實の論理的基礎である。感情としては其れが即ち愛國心である。此の場合彼此の比較對照といふ如き事は、功命偏狹心の打破といふ[illegible]には何の力があるか、却て其に止まり自己の力を無力ならしむるといふ[illegible]を考へなくてはならぬ。斯る比較對照の抽象論よりして[illegible]位、愛國心を邪とするが如きは、其故に恰も自己を捨てよ[illegible]ふに等しく、昔の禁欲的[illegible]や宗教的の組織で滿足せるものなら[illegible]ともかく、自己中心的なる現代人に堪え得らるゝ事ではない。其故に自國本位を捨てゝ、國際聯盟を本法とするといふ如きは事實に於ても亦學說に於ても存在しないのである。

殊に文化といふ事を考へに入れる以上、其の文化の保存發展は何によつて爲されるかを考へに入れなくてはならない。故に民族の相違といふ事が又必須條件として考へられる。混血が立派な文化を作り得た事は歴史上にも其の例を見ない。文化の崩壊の始まりは、民族の血液の純粹性を失うた場合を意味する。斯くして又其の血液の相違を無視し、全人類を一に組織せんとする企ての如きは、只功利的關係に於てのみ考へ得らるゝ抽象に過ぎない、從て斯る抽象論者のユートピアは、妥協的安逸の世界に過ぎぬことも亦明了である。文化主義より云へば自己文化の滅亡は自己民族の滅亡を意味するが故に、自己の滅

亡か發展か、我等は敢て戰を辭せぬのである。而て此の戰のみよく「我」を純化し得るのである。

之を要するに事實である所の自國本位主義より出づる國際聯盟の成立と運用とは、どこまでも功利的關係よりのもので、資本主義町人道の「人道」「正義」の如き抽象的全體の假面をかぶれるものに過ぎない。自己本位を合理化し必然化する所以のものではない。眞なる組織のみよく又組織する。國家は我が我たる爲め、卽ち人格者たる爲めの直接且つ必然の組織である限り、自由への唯一の保證であり媒介である。其故に若し利益上からにしても、國際聯盟が要求せらるとするならば、其は各國が特自の文化を發展せしむる力に於てのみ存立し、且つ有效ならしむることが出來よう。然らずんば國際聯盟なるものは、支那戰國時代の覇者の政略と同一になるであらう。抽象的なる「人道」「正義」論者は、自國を此の覇者の手段に提供するのと同じ結果となる。（一〇、一一、一九、）

自國本位主義に立つて國際聯盟主義の活用

文學博士　三宅雪嶺

〔一〕

今の世界列國は絶大規模の封建制度を實現しようとして、未だ緒に就かぬ狀態になつて居る。緒に就くまで幾多經緯を經ねばならず、緒に就いたとて、それで將來の事が定まつたのでなく、恰も封建制度が變改した如く、國家の形體を變改するを免かれぬ。今の國際聯盟案は戰國時代の五大老五奉行の規定に似て、如何になるかゞ明白を缺き、之れで一先づ安定するとし、決して永く安定せず、その一先づさへ覺束ない限になつて居る。

現在の國家を以て何事を爲すとも、平和を保障する事が出來ぬ。事によつて半世紀一世紀間平和に過ぎ得るであらう、或は數世紀間斯くて過ぎ得るであらうけれど、要するに過去の封建制度に類し、何の時代かに變改の機運に遭遇せずに居れぬ。一千年で十分でなければ數千年後、顧みて現代の列國を見る事、過去の封建制度に於けるが如きであらう。今の社會も停止した

と云へぬが、過去の封建は到底永續さすべきものと思はれぬ。封建當時に於て、それで永續さすると考へるものがあり、德川時代に柳子厚の封建勢也、非聖人之意也といふを難し、聖人之意也と論じたりした。德川時代に封建が郡縣になるに考へ及ばなんだ。今と成つて考へれば、能くも彼の如き制度で平安を保ち得たと不思議に感ずる位である。幕末に諸侯を糾合し、國事を議しようとした時、斯くて國事を決定し得るとし、經濟關係の必要に想ひ到らなんだ、經濟關係を企つるにも、やはり時勢の熟到を待たねばならぬ。

二

今の國際聯盟は人によつて或は之で安定を得ると考へるが、やゝ將來を考へれば、過渡期の出現たるに過ぎぬ。何としても十分に作り上げる事が出來ず、さりとて全く破棄する事も出來ず、何とかして維持せねばならぬ状態になつて居る。之を破棄して何物を以て代へるかゞ疑問に屬する。然し米國が離れて居り、獨逸が加らず、露國が加らず、それで國際聯盟の效用を期待し得るか何うか。悉く加はり、理想なる聯盟を作り上げてさへ、尚ほ疑問の多いのに、大なる除外例を設け、それで安全を望むなど、初めから難しい相談になつて居る。今のところ現在の國際聯盟で續け、漸次米獨露等の加はる様にするか。米國で案出しつゝある國際協議と折衷するやうにするか。何とも纏めやう無いとし、國際聯盟相似のものの付き纏ふのを承知せねばなるまい。如何に效用の薄くとも、之に注意を拂はねばならなくなつて居る。世界戰役に關聯して生じた一の重要現象たるを失はぬ。但だ永遠の平和を保障する所以のものでない丈けの事を心得るを要する。

三

それで國際聯盟に十分な事を望むべくもなく、現在の勢で如何にするのが最も好いかと云ふに止まる。或方面で最も好い案としても、之に贊成せぬのがあつて、何とも仕方が無い。贊成せぬ者もまた單獨で世界に立つとも考へず、同じく國際的規約の成立を希望して已まぬ。謂はゞ國際聯盟主義は、最早生れ出で、何とか育てねばならなくなつて居る。而して之を育てるのは、何の目的に於てするか。自分の爲めにするか、生れたる當人の爲めにするか。双方の利害を共通にしようとするか、國毎に趣を異にして居る。國際聯盟主義が本來何の爲めに起つたか、煎じ詰めれば人類の頭腦の根底に世界の平和を冀ふ所あると云へるが、差當り自國の利害が問題になつて居る。何か國際聯盟相似の事を必要としつゝ、之に力瘤を入れるのは、自國の立場よりして居る。スマッツ將軍が考へたのは、英國の勢力を

切崩すの意があつたと疑はれる。邪推の嫌ひを免れぬけれど、周圍の事情より推して斯く疑ふものがある。

そこで英國は何うかと云ふに、國際聯盟で現狀を變化せぬ限り、今に於て聯盟で事を定めて置く方、太陽の沒せざる領土を維持するに有利である。英國は世界戰役で多大の犧牲を拂うたにせよ、莫大なる利益は之を補ふに餘りがある。當分疲弊の極に陷るにしても、阿弗利加に印度に太洋洲に、無限の力を伸ばす希望がある。佛國にしても、獨逸の恢復して復讐戰を敢てするのを防ぐが爲め、豫め列國の力を以つて之を抑へるのを有利とする。勝利を得た大國は、損しても利する處があり、現狀維持として割の惡い譯が無い。米國は他國の力を借らなくても、自ら安全にするを得、聯盟など餘計な拘束を來たすとするが、一度び聯盟案の出でゝより、之によつて利益を得ようとする者が續出し來つた。小さい國弱い國に力づくて強大國に威脅せられ、頭を擡げる事が出來なんだのに、聯盟で發言權を得れば、事によつて小國聯合し、大國に勝る事が出來る。初めから難しい聯盟が、出來立て早々の事とて不備の點多く、隨分隙を得て氣焰を揭げ得られる。若し大國の名あるものが眞に力に富み、小國が何と云ふても構はぬといふ勢たらば、それで通して行かうとするであらうが、大國とて力に限りがある。太陽の沒せざる英の領土とて、小國の集りと云ふべき形を呈し、小國の不利益を慮らずに居れぬ。勝手の事を云へるは何時も米國であり、現に勝手な事を云ひ、他國を困らせて居る。世界に橫車を押出すものは彼れ米國であり、當分威張つて通つて行くであらう。

□

現在の列國關係は中途半端なもので、聯盟に加はつた國々は乘り掛かつた船から下りる譯に行かず、乘りながら危險の無いやうにとて遠くへ出でず、之に離れて居る國々は、其船が何うなるかを見て居る。早晩國際聯盟の效果の現はるべき順序であつて、其早晩が普通人間の生命で云ふ所と違ひ、子の時代か、孫の時代か、何の代か判明せぬ。效果が現はれ來つたかと見れば、後戾りをして現はれず、全く無效に歸したかと想へば、再び現はれ來るなど幾變化を免かれぬ。今のところ自國本位主義を持つて、國際聯盟主義を理想にし、或は其理想を利用しようとする狀態になつて居る。五大强國は豐臣時代の五大老に似て、遙かに大袈裟なものである。其の五大老は二と三とに分裂し、德川氏が勝利を得、幕府を建設する事になつた。今日のところ英米が優勝者たるの形ないとせぬが、德川氏は決して彼の如く續くべきものと限らず、若し外國と交通が多かつたらば、夙くの昔に勢が變つたらう。熊澤蕃山が變亂の近きに迫るのを考へ

たのは、判斷を誤つたのでなく、實に共勢の迫つたが、偶々國内のみで太平を樂しむを得、寧ろ僥倖と云はねばならぬ。英米が何時まで世界に力を逞しくするか。將來の露國は如何になるか。小さな巴爾幹半島でさへ常に紛亂の導火線となり、更に之を大にした中歐諸國は如何に變化するか、豫め測り難い。世界の平和は容易に望ふる事が出來ず、國際聯盟など焼け石に水ほどの效用も無い。然し吾人世の一生を標準としての事であつて、幾世紀幾十世紀を通じて見れば、極めて遅い速度を以てしつゝ、封建が郡縣に移るが如き道行を辿つて居る。今日如何に妙案を作り出し、列國一致して之を實行し得るにしても、唯現在より優ると云ふに止まり、遠き將來の安寧を保障し得べきものでない。

〔二〕

國家として現在の列國を以てして、知れたものである。國際聯盟に依り暫く、從いて絶えず世界の平和を保たされるとして、容易に國家の形態を變ずる所迄は出來まい。故に亂雜を極めて居る。英の如き國があれば、米の如き國があり、それかと云へば佛の如き國があり、獨の如き國があり、孰も依然國家たるを失はぬ。封建時代、土地によつて事情を異にしても、それほど甚しい事は無い。十年二十年の人間の働きで之を變改する事が出來ぬ。

ナポレオン一世はヘレナ島で人に語つて曰ふた。自分は永遠の平和を豫期し、歐洲諸國を適當の大きさになし、相侵す事の出來ないやうにしようとした。英國で終始失算と邪魔をしたが、將來必ず悔ゆる時があらう。露國をあの儘にして置いては、歐洲は哥薩克兵の跳梁する所となるを免かれぬ。予が露國での失敗は歐洲の不幸であると。彼れ不出世の英主の名があり、而して本年其歿後一百年に相當し、其間如何に變化の著るしかつたかは注目に値する。不世出の英主の眼の及ぶ所も遂きに誤られて居り、彼にして今日再生せば、意外の感に撃たれるであらう。今の國際聯盟は兵力を以て強行するでなく、關係諸國の一致を求めようとするのであり、その何の效用あるか、希望を漏するは失望に終るの外無い。然し數百年後數千年後を通じて見れば、進むべき道に進んで居る。水が低落し迂り曲りして、何時進むか知れぬやうで、永い間に何程か進行する。

〔三〕

自國本位主義が可いか國際協調主義が可いか。現在の状態で多くの條件付きになつて居る。往昔獨逸は專利を事とし、全力を之に注ぎ、以つて得たりとした。後より考へれば、何等が如何になつたとて、何程の影響も無さそうであるが、それも避くべからざる道行きであつた。現代の社會は其道行きを進んで到達した

所にかゝる。自國と云ふも、國際と云ふも、人類から出立して居り、人類の進歩を遂げるのに缺く事が出來ぬ。世界人類聚つて一國をなせば文句無い筈の處、さう行かず、各土地を限つて國を作り、各國互に爭ふやうになつたが、爭ふ丈け爭ふた後、爭ふに及ばぬ事になる。各藩互に爭ひ日夜警戒したが、今は其跡形を見ようとしても難しい。封建は現代の日本國家を形造つたものであり、世界列國は人類の發達が促すものであつて、後より顧みて異様に感ずる事が少くなからう。然し遠い將來の發達は、斯かる複雜なる状態を經過して成るものであるを認めねばならぬ。今日の如何なる名案も相對的であり、時代を經て改善すべき順序になつて居る。今日案を立て之を絶對とするのは實行の便宜よりし、幾時代を經ても眞の絶對に達する事は出來ぬ。唯顧みて餘程の變化であり、著るしい發展であると思ひ付く事があるとする。數千年後は如何になるであらうか。星を凝視めて歩いては溝に陷る事がある。人間の力の及ぶ所に限りがあり、其限りで最善を盡くせば足る。

國家主義と國際主義は矛盾せず

永井柳太郎

(一)

獨逸の詩人シルレルは、「世界の歴史は世界の法廷なり」と云つたが、それは至言である。人類の歴史を一瞥すると、掠奪、强盗、殺戮、戰爭の果しなき連續の如く見ゆるけれども、これは皮相の觀察であつて、其根底には正義の觀念が潜在し、それが時間の經過と共に次第に進歩發展しつゝあることを否むことが出來ない。法律家の定義に依ると國家の主權は絶對無制限にして、自己の意志に基きて自ら制限を加ふる外、他の何者に依つても其意志を拘束されない筈であるが、然し之は法律上の解釋であつて、如何に主權と雖も、道徳上に於ては絶對無制限であり得ない。國家が單に他より優越せる力を有すると云ふ丈の理由に依つて、無制限に、又恣に、其慾望を遂げんとすれば、其結果は必ずや他の復讐となり、又國家自身の墮落となるのである。

固より強大なる權力を有する國家は、其爲さんと欲する所を無制限に、又恣に、爲す事が出來るが、然し善惡共に其行爲の結果を避ける事は出來ない。善き行爲に對して善き結果を收め、惡しき行爲に對して、惡しき結果が生ずる事は、之即ち宇宙の大法である。國家は其行爲を選擇する自由を有するけれども、然し其の結果を選擇する事は出來ない。例へば日清戰爭後に露國が佛獨兩國と共に、其國家の優勢なるを恃みて、日本が正當なる條約に依りて清國より讓受したる遼東半島を返附せしめ、而して自ら代つて直ちに旅順其他の土地を租借したものゝ、後に至つて之が反つて日本國民の反感を激成し、日露戰爭を惹起すべき動機の一つとなつた。又獨逸は其武力の強大なるを恃んで千八百三十九年のロンドン條約を無視し、ベルギイの中立を蹂躙したけれども、之が爲めにベルギイの猛烈なる抵抗に出逢ひ、反つて英國に獨逸を攻撃する口實を與へたのみならず、國際的信義を重んずる國としての信用の地位は消滅した。而て斯くの如き不正行爲に對する因果應報は、時として二三代又は一世紀の間に現れて來ぬ事もあるが、國家の長き生命中何時かは必ず現れて來るに相違ない。故に國家の活動の根本方針は内に對しても、又外に對しても、常に正義を確立する事でなければならない。此點より觀る時は彼の國際聯盟の成立は實に重大なる意義を有する。何となれば國際聯盟は、其根底に於て、國際的正義の確立を目的とするからである。

（二）

思ふに、國際聯盟の目的は大體に於て、之を二種に分ける事が出來る。第一は戰爭を豫防すると云ふ事である。此度の戰爭の爲に交戰各國の受けた損害は、實に莫大なるものであつた。全世界が此戰爭の慘害より恢復するは實に容易ではない。故に何とかして戰爭の再發を豫防せんとするは人情の自然にして、國際聯盟を組織するに至つたのも、其動機の一つは確に此處に存した。現に國際聯盟の發案者の一人たるウイルソン大統領が、一昨年九月十七日サンフランシスコの婦人大會に於て演說した時にも、國際聯盟の中心は其第十條に在ると云つて居る。第十條こそは將來若し他國の領土を侵掠し、他國の獨立を脅さんとする者あれば、之を國際聯盟の敵と見做し、國際聯盟の力を以て抑壓すると云ふ規定である。然し國際聯盟には第二の目的があつた。それは政治的及び經濟的強者の專橫に對して、政治的及び經濟的弱者の生命及び自由を擁護し、以て世界人類の幸福を增進し、其文明を促すと云ふ事である。即ち或國の政府が資本家と結托して勞働者を虐待すれば、國際聯盟の力を以て

働者を保護する。又或國が其植民地や屬領地の土人を壓迫すれば、國際聯盟の力を以て其壓迫を防ぐ。國際聯盟規約の第二十二條及び第二十三條は共に此目的のために存する。故に國際聯盟は、大體に於て、人類の正義を確立せんとする動機に出たもので、世界文明の進歩の象徵であるに相違ない。從て其大成は願はしい事ではあるけれども此聯盟規約に調印した各國が果して如何なる程度迄其目的の大成に努め得るかは大なる疑問である。何となれば今日の國家は、彼のポールラインシュ氏が云へる如く、孰れも尚未だ「他の利福を增進するがため、自己の貴重なる生命と資本とを犧牲とする程大なる他愛心を有しない。」からである。

第一に國際聯盟をして眞に世界平和の有効なる保障たらしめんと欲するならば、國際裁判の權威を確立する事が急務である。而して國際裁判の權威を確立する爲には總て其聯盟に屬する諸國の主權を制限せざるを得ぬ。若し聯盟諸國が何れも絕對自由の主權を固執し、如何なる場合に於ても、其制限を受くる事に同意しなければ、國際聯盟ありと雖も實は國際無政府に等しく、世界平和の保障は不可能である。然るに國際聯盟に屬する諸國は從前より其主權を束縛せらるゝ事を欲せず、各國は各ゝ其獨立又は興廢に關すと認むべき重大問題は、假令國際聯盟の裁判を仰ぐとも之に服從せざる自由を保留したるのみならず、米國の如きは其發案者でありながら、其主權の絕對無制限を主張する餘り、遂に其聯盟を脫退した程であるから、之丈でも國際聯盟は、實際に於て、尚未だ國際生活を統制する力なきことが分る。第二に國際聯盟なるものは武斷的帝國主義に對して世界各民族の獨立、自由及び平和の保障を目的とするのであるから、其根本思想は世界的民本主義又は國際的機會均等主義であらねばならぬ。然るに國際聯盟が、新に國際聯盟の所有權に屬したる舊獨領殖民地の處分に關する規定を作るに當り、少しも人種間に於ける機會均等主義の精神を示さゞりしのみならず、反つて濠洲が其委任統治に屬する地域に人種の差別的待遇を目的とする法律を施行し得るが如き規定を設けた事は一大矛盾であると云はねばならぬ。第三に國際聯盟は世界的民本主義を體現する事を目的として生れた以上、國際聯盟に屬する各國は、國際聯盟の方針を決定するに當り、其國土の大小强弱に拘らず、總て同一の決議權を有しなくてはならぬ筈である。然るに事實に於て、國際聯盟の指導權は所謂五大國に掌握せられたのであるが、此五大國なるものは何れも世界の所謂强國にして、總て强大なる海陸軍の所有者である。故に英國雜誌ネーションが、聯盟成立當時、其社説に於て國際聯盟を非難し、「今日の如き國際

國家は其民族に於て強國的個人主義の發現なり、是れ世界の所謂帝國主義にして其帝國主義的野心を遂行せんとするに外ならず。と云へるは至言である。此の強國が斯くの如く不徹底、且つ不完全なる狀態を脫せざる限り、斯くの如き國際に依つて世界平和を保障し、國際的主義を徹底せんとするが如きは、將來尚不可能なりと云ふべく、國家的主義の理想が實現せらるゝは、寧ろ至難なりと云はざるを得ない。

（二）

國際協同と云ふ思想は古代に於て既に存へると共に古くから存在したので、彼の國際法學者の鼻祖と云はるゝユーゴー・グロシユースの如きは千六百二十五年に於て戰時平時法規に於てクリスト教國間の戰爭を論じ、クリスト教國の代表者の會議に於て解決すべし、國際上の紛爭に訴ふべきに非ずと言じた。斯くの如き思想は十八世紀に入りて益々發展し、英國の哲學者ベンサムの如き、又ミルの如き、獨逸の哲學者カントの如き、フィヒテの如き、又セーリングの如きも既に之に就て論じて居る、ルッソーの如く、斯くの如き不和の日を形成する前に各國は先づ革命を經過し、人心を一變せざるべからずと論じたる點において、之等の人々に異なるけれども、世界平和を主張し、各文明國の代表者の會議に依りて國際的爭議を解決するの方法を講ずべしとなす點に至つては同一であつた。近代に至り世界平和及び國際協同に關する種々の具體案が研究せられ、或は國際裁判所の設立とか、或は國際社會主義とか、或は世界的聯邦主義とか、甚だしきに至つては世界國家の建設とか、種々な理想が見られるけれども、之等は結局一片の理想に過ぎないのであつて、斯くの如き理想が實現せらるゝ迄には、世界に於ける各民族は、もつと共存共榮的の文明を完成しなくてはなるまいと思ふ。

蓋し世界には幾多の異なれる民族ありて、異なれる地理的環境の間に生活し、異なれる社會的要求を持つて居る。この社會的要求に應じて出來上つたのが即ち近代國家であるから、近代國家は、其民族の特殊文明を建設し終る迄、其存在の意義を有する。斯くの如くにして各民族が各々其國家に依りて其民族の特性を共存共榮的文明を建設する時に、これ等が合して世界的文明の内容となり、人類共存主義の大成となるのである。恰も百花爛漫として山野に咲き匂ふ所、自ら自然界の大調和を見る如く、又諸の樂器が交代錯綜する時自ら相和して美妙の大音樂となる如く、人類も亦各民族が各々其特殊の政治組織に依り、異なる其の文明を建設し、互に競爭し、練磨し、調和して行く

點に眞の世界文明に興り、人類共存の目的は遂げられるのである。而して各民族が各々其特性を基礎とする新文明を建設すためには、先づ民族が各々其生存權を確立する事が必要である。各民族が各々其生存權を確立すると云ふ事が、世界文明を組織する前提となるのであるから、國家主義と國際主義とは必ずしも矛盾するものでなく、國家主義の窮極は即ち國際主義の實現であり、國際主義の內容は即ち國家主義の完成に外ならぬのである。唯此處に一國家又は一民族ありて、恣まゝに全世界を獨占せんとし、他の國家又は他の民族の生存及び自由を蹂躙せんとする時、吾等は之を世界文明の根底を破壞するものとして又國際協同主義の敵として戰ふのであるが、如斯き國家又は民族は、眞の國家主義又は民族主義の精神にも反するのである。

(ロ)

前述の理由に依り私は國家主義を信ずるけれども、帝國主義を信ずる事は出來ない。何となれば眞の國家主義の究極は即ち人類共存主義に一致するけれども、帝國主義の極致は、即ち一國家又は一民族の世界獨占を目的とするからである。近代に於ける帝國主義の根本思想は、大體に於て之を唯物觀的及び唯心觀的の二種に區別する事が出來る。一はエドワード・ダイシー、ポール・ラインシュの如きを代表者となし、世界に於ける物質的勢力を最も利己的に發揮する事を以て生存競爭の勝利者たる道程となし、他はジョーン・クラム、ポール・ロールバッハ等を代表として一切の現象の根底を精神生活に求め、偉大なる精神を有し、高尙の文化を具備する國民は世界を征服するの資格ありと信ずるのである。然し兩者共に適者生存の原理を信じ、而して自ら其種適者たらんと努力する事に於ては即ち一である。蓋し國家の生活は個人の生活と等しく繼續的變化を意味する。進步か退步か、常に二者其一を擇ばざるべからざる地位に居るのである。進步を停止した國家は即ち既に退步を開始した國家である。より充實せる生命を追ふて奮鬪せざる國民は即ち既に滅亡に向へる國民である。帝國主義者が其生活の要求を貫徹せんとして全世界に奮鬪し、全人類を敵とするをも辭せざりし精神は實に偉大なりと云はざるを得ぬ。今日に至る迄世界文明が或程度迄、帝國主義者の不斷の奮勵努力に刺戟せられて進步發展したる事に疑なく、此點は否むべからざるものあるを覺ゆるけれども、然しそれが常に自己の生存權のみを主張し、自己の優越のみを信じて他を無視したる所に大なる過がある。何となれば世界は一國家又は一民族のために與へられたるものに非ずして、全人類のために與へられたるものであるから、一國家又は一民

族に依りて、之を獨占せんとする結果は、必ず他の國家及び民族の抵抗、反抗、復讐、戰爭を挑發せざれば止まざる事は歴史の教訓に徴して明白であるからである。是に於てか、今後に於ては啻に唯物的帝國主義者のみならず、唯心的帝國主義者と雖も、其指導理想を一擲し、新なる人類共存の倫理觀を基礎として國家の進路を改めなくてはならぬ。故に日本國民にしても、眞に世界文明に貢獻せんと欲せば、今後の外交に世界に於ける各民族及び各人種の生存及び自由を保障し、各民族及各人種をして各々其特性を基礎としたる新文明を建設するに必要なる均等の機會を得せしむる事を根本方針となすべく、則を歐米先進國の世界的帝國主義に求むることなく、新に世界的解放主義を以て全人類に臨むべきである。世界的解放主義が全人類に徹底し、總ての民族及び人種が各々其生存及び自由を保障せられ、其國土の大小強弱に拘らず、世界文明に貢獻し、世界平和を擁護すべき均等の[illegible]を有するに至らなければ、眞の國際協力主義は實現され得ないのであつて、此大なる綱領を掲げて世界に臨むのが、即ち世界文明に對する最大の貢獻である。人類の社會組織の單位は部落的生活より地方的生活に、地方的生活より封建生活に、封建生活より國家生活と云ふ順序に次第に其內容を擴大して來たのであるが、國家生活の內容が未だ充實せざるに先ち、直ちに世界生活に移る事が不可能であると同時に、世界生活を理想として進む事を知らざる國家生活は遂に其存在の眞意義に徹底する事が出來ない。

現代思潮の底流は國際協働主義

法學博士　吉野作造

(一)

右と云ふ者に對して左と稱ねる者は何時の代にもある。左を主張する者から觀れば、世の中の人は皆左といふやうに考へられ、右と云ふ者は亦世間の多數を自分の味方と考へる事が稀れでない。昨今の世界の形勢を戰前と同様、依然として列強の武力的競爭の世の中だと觀る者も案外少くないが、然し之よりも世界平和の理想・國際協働の思想があつて、強い底流をなして流れて居る事は、公平なる觀察者の等しく認める所であらう。何と云つても此數年の大戰爭で云ふに云はれぬ苦しみを嘗めた事や

あれば、如何にもして二度と斯ういふ非道い目に逢はないやうに、此世の中をもつと住み心地の好いものにしたいと熱望するのは當然であらう。從來の行懸りはある、丁度移り變りの境目に立つて居る吾々が、これからの着物は洋服に限ると固く信ずるに至つても、行懸り上少くとも當分のところ二三枚の和服を有たねばならぬやうに、古い時代の思想も全然跡を絶つたのではないが、然し是等は將來に生長する運命を持たない。之れから先きに伸びて行く思想の根幹は何であるかと云へば、何うしても國際協働思想でなければならない。其證據に今日世界各國に於て此同じ目的の方向に努力する企の如何に多いかを、吾々は今更らながら驚いて居るのである。

此處までは疑が無い。唯此思想を具體的に表現したものとして、這の所謂國際聯盟なるものを觀ると、吾々は又玆に意外な現象を見る。そは之れに對して世界各國に案外反對の考の者の多い事である。

國際平和とか國際協働とか云へば、吾々は直ちに國際聯盟を思ひ出す。民間の運動の内には此國際聯盟の趣旨を公布せんが爲めの努力もある。そこで鳥渡考へると若し今日の世界の人心がそれ程國際聯盟の主張に熱心なものであるなら、また國際聯盟に向つても多大の熱誠を傾けねばならぬだらうが、事實さうでないから妙だ。現に英米等の大陸諸國に於ては、下級の勞働者中、今日の國際聯盟の態度に對して著るしき反感を有つて居る者がある。米國などは尚ほ一歩突進んで反對の聲を大にし、爲めに未だ批准を見ざる有樣である。當初あれほど期待され歡迎された國際聯盟が今日之れ程評判の惡くなつたのは、餘りに不思議の現象と見ゆる。若し之を以て國際協働の精神其物が、其の初め實は一時の流行であつたので、今は段々衰へ掛けて居るのだと云ひ得るのなら、問題は頗る簡單だ。が實際に於ては寧ろ其反對の現象を認める。然らば國際協働の精神がます／＼盛んになるといふ事と、國際聯盟其物が日に／＼不評判になるといふ事との間とは、如何にして之を調和して考へる事が出來るか。

(二)

國際協働の精神が未だ曾て歷史上其類の無い程旺んになつて居る今日、此精神の具體的表現とも見るべき國際聯盟が、斯くまで世界の多くの人から不評判になつて居るのは何ういふ譯か。熟く考へて見ると之には實は深い仔細がある。一つは現在の國際聯盟の運用の衝に當つて居る者が皆ブールジョアジイ階級の出である事である。僅に勞働會議だとか婦人會議だとか、其他いろ／＼の機關を通して勞働者の勢力も全く顧られないのではな

い。けれども聯盟の最高幹部を組織し、世界に號令し得る樞機を握つて居る者は、悉くブールジョアジー階級の謂はゞ大臣宰相の類の人である。是等の人々によつて國際聯盟の運用さるゝといふ事が、必ずしも惡い結果を生ずるとは限らない。併し斯の如きは彼等の問題とする所ではない。彼等にブールジョアジーが表面に立つといふ事そのことに反對なのである。此見地から彼等が聯盟の精神を十分に實現するや否やに關係なく、兎に角形式上今日の國際聯盟は之を排斥せざるを得ないと云ふのである。斯ういふ考へ方の當否に就ては予輩にも大いに議論があるけれども、勞働者階級の一部の間には目下の公論として通つて居る事だから、斯ういふ根本の考に於いて勞働者階級の人々が今日の國際聯盟を目して、あれは吾々と何等の關係ないものであると罵り、又從つて甚だ冷淡な態度を採るのは怪しむに足らない。日本でも一部の社會主義者の間には、各種の國際會議の事に關心するのを詰らない事のやうに冷笑する者があるが、之は必ずしも國際會議其ものを非とするのではなからう。今日の國際會議が偶々凡てブールジョアジー出身者に運用せられて居るが故に、之を輕蔑し去るべきものと考へて居るのである。是れが一つ。次ぎにも一つは、今日の國際聯盟は實質に於て國際協働の眞精神によつて忠實に運用されて居ないといふ事實を擧げなければならない。ブールジョアジーが管理しても必ず問題を起すと限らない理窟だが、今日の國際聯盟は實に餘りにブールジョアジー式に運用されて居る。殖民の問題に對する英佛の態度にしろ、隨分自國の利益の爲めに隨分な勝手を續けて居るではないか。中にも佛蘭西の如きは獨逸に對する自國の安全といふ目的の爲めに、大いに聯盟の勢力を利用せんとするの企らみが見え透いて居るではないか。故に國際聯盟といふ名に拘泥してウッカリ之を後援すると、豈んぞ知らん之が英佛の御先き棒になつて、不當に獨逸を苦しめるに外ならないといふやうな場合もある。さうして見ると今のやうな狀態に於ける國際聯盟を後援する事が、却つて聯盟の眞精神を傷ける事にならないとも限らない。眞の聯盟精神に忠實ならんとせば、現在の國際聯盟を一旦打壞して新規蒔直しをやつた方がいいといふやうな説も立ち得る。さう云ふやうな所から、多少の不精確な言葉使ひを許すならば、國際聯盟の眞精神に燃えて居る者は、その燃えて居るだけ現在の國際聯盟に反對せざるを得ず、而して現在の國際聯盟を擔ぎ廻り之を利用せんとする者は、實は案外にも偏狹なる國家主義者に多いと云ふやうな事になる。

斯う云つて見れば國際協働の精神がます／＼旺んになる今日、現在國際聯盟の評判が至つて惡くなるといふ事が判るでも

らう。否、現在の國際聯盟に對する批難の手厳しいのが寧ろ聯盟の根本精神の強く働いて居る證據と云へるかも知れない。

（三）

今日の國際聯盟が識者の眼から見て誠實に運用されて居ないといふ事の結果は、一つには勞働者階級の聯盟反對といふ氣勢を揚げしめたが、も一つは勞働者の如く徒らに反對して折角出來上つた國際聯盟を無下に打壊すに忍びずとする一派の人をして、大いに警戒しつゝ國際聯盟に參加し、漸を以て其内面的改革を行はんとする者を生した。國際聯盟の幹部は聯盟の精神よりも各自國の利益を考へて居るから、何んな風に運用するか判らない。如何に國際聯盟の名を以て來るからとて、斯う云ふ精神で定められる決定に一々服從せねばならぬとあつては吾々甚だ迷惑だ。彼等は勿論多くの場合に於て、國際平和の爲めに貢獻するやうな善い事もやらう。此意味に於て國際聯盟は確かに存在の價値があるけれども、然し時としてそれぞれ各國の利己的動機に基く變な協定を見る事もあらうから、彼等の決定に一から十まで盲從するといふ事は甚だ危險だ。そこで善い事なら從はう、惡い事なら之を拒む、從うと從はざるとの最後の判斷は吾々自身の掌中に握つて置かう。即ち聯盟の決定なるが故に絶對に之を遵奉するといふのではなく、最後の形式的決定權は何處までも自分に之を留保して置かうといふのである。夫の所謂米國第一主義といふものの如きは、斯ういふ動機に基いて居る。自國の利益を先きにするといふのではない。何ういふ内容を有する目的の爲めに動くかは姑く別問題として、自國の利益を圖るにしろ、國際間の利益を圖るにしろ、何事によらず苟くも動く時には何處までも最後の判斷を自分に求める、即ち自發的に動き出さうといふ事に在る。斯う云ふ意味で自國に第一に決定權を認むるといふ考は、國際聯盟の缺陷に乘じて起つて來た。從つて此考は聯盟の根本精神を完全に實現しようといふ見地から國際聯盟其物の缺點を修補し、兩々相扶け合ふべき筈のものである。此意味に於て最近の所謂自國本位主義は國際聯盟の精神と相容れざるものではない。

（四）

斯く考へて來ると國際聯盟主義とか自國本位主義とかいふやうな言葉に、吾々はもつと複雑な意味を認めてやらなければならない。何となれば、從來吾々は國際協調主義と自國本位主義とを全然相反する觀念として取扱つて來た。然るに茲に自國本位主義を採つて、而かも國際協調の精神を毫末も傷けないとい

ふ現象が現はれた。此現象を正しく理解する爲めには、吾々は此等の名義を從來の通俗の意味に解する事が出來ない。

一體國際協調主義と自國第一主義とは、もと全然相反する觀念として說かれて來た。即ち前者は各國協調の利益を尊重する、少くとも自國のみの利益の爲に、[illegible]も他國の利益を侵略してはいけないといふ事に重んぜられて居つた。從て後者は之と[illegible]に自ら自國の利益を計つて、其爲めには他國を犠牲にしてもよいといふ考へであつた。即ち此二つの主義は[illegible]的の實[illegible]に[illegible]くないといふ事に着眼して立てられた區別である。

[illegible]近頃は[illegible]くなつた[illegible]の區別として、本來此二つの[illegible]考へる事も出來る。即ち指す所の實質[illegible]に拘らず凡て事に對する[illegible]で定め、一旦[illegible]うとなつた以上に於ては[illegible]件に之を[illegible]ねばならぬ[illegible]即ち國[illegible]主義で、其は[illegible]までも守らうとして十分に[illegible]く。けれども其後の[illegible]は何處までも自國に有利にして置きたいと云ふのが自國第一主義である。米國の一種の[illegible]の立場を希望するのは即ち此の爲めである。

斯くして國際協調主義と自國第一主義との對立は、之を實質的の意義と形式的の意義との二種類に考ふる事が出來る。最近國際協調の精神が盛んに興つたといふのは、之を實質的の意義に解するのであつて、又現今の國際聯盟の運用の[illegible]に乘じて自國第一主義が興つたといふのは、之を形式的に解釋したければならない。形式的意義と實質的意義とは、明か[illegible]たけれども年待りは[illegible]つたといふやうなのと同じく、全く[illegible]が違ふのだから、其間に[illegible]も[illegible]も起りやうが無い——尤も[illegible]に多少の關係はあるが——。何れにしても現代の傾向は實質的[illegible]に於ける國際主義で一貫せんとして居る。只形式的[illegible]に於ては或は自國本位主義なるものあり、又國際主義なるものもあるが、それ何れにならうと當面の實質的主傾向は之により一[illegible]も影響されずに行くのである。

吾々の理想から云へば、國際協調主義は實質的の意義にも亦形式的の意義にも徹底的に行はれるやうにあれかしと云ふ。併し乍ら今日の場合形式的意義に於ける國家主義の行はれる事は致し方が無いと思ふ。而して此間に於て若し形式的國家主義の行はれるのを見て、若しも世界は國際協調の精神から離れんとしつゝあるなどと考ふるものがあるなら、之は飛んでもない誤りだ。自國本位主義が行はるゝことは、取りも直さず國際的協定に形式上最後の權威を認めさらんとするのだから、之に乘じ強い國が我儘を押通さうとする嫌ひと恐れと無いではないが、

然し不幸にして實質的主義に於ける自國本位主義の復活するには、世の中は餘りに進み過ぎた。我國軍閥の一部を占むる侵略主義者が、西洋に於ける自國第一主義の流行を聞いて心私かに意を强うして居る者がありと聞くが、之れなどは飛んでもない錯誤である。今日の時代は誠に複雜で、殊に思想の推移は微妙を極めて居る。吾々は細心の注意を拂つて、本當の流れが何處に發して何處に趨ふかを、有りの儘に受取る事が必要だと思ふ。

國家生活と國際協同生活の一致

法學博士　林　毅陸

最近の國際關係に於て、國際聯盟の組織が最も重大なる問題である。是は古來政治家、哲學者、宗教家等の研究に上りし其理想を不完全ながら先づ實現の第一步を踏み出したものである。そして其趣旨とする所は、各國家相對立して、各自無從の軍備競爭をなし、國際の平和を亂すが如き事を防がんとするのである。又國際の紛議を平和的に解決する事と爲し、若し規約を破る者あれば、協同の力に依り之に制裁を加へ、以て一般人類の平和安寧を保障する事、其重要なる點である。更に此國際聯盟の根本の精神を云へば、國家をして或種の法の生活をなさしめんとするものである。從來國家は絕對の主權を有し、何等之を支配拘束する法なるものはない。所謂國際公法なるものありと雖も完全なる意味に於ての法に非ずして、彼の獨逸の前宰相ベートマン・ホルエヒの所謂必要の前に法なしの一句は甚だ亂暴なるに似たりと雖も、國家が絕對主權を强く主張する其結果は、國家苟も必要ありと認むる時は何事を爲すも、之を支配し、之を制限すべき何等の法なしと云ふ事になるのであつて、獨逸宰相の放言は從來の國家絕對の主權の思想より觀て實は不思議はないのである。然れども國家各自に此絕對主權を濫りに振廻し、何等の法の支配を受けずと云ふ事になれば、國際生活に於て平和を望む事が出來ない。極端に云へば所謂弱肉强食が無遠慮に行はれ得る次第であつて、力强き者は自己の欲するがまゝに、所謂絕對主權を振り廻して勝手放題の事をなし得ると云ふ事になるのである。之は平和の主義に反し、正義の趣旨に悖る事は云ふまでもない。斯くの如き偏狹なる國家觀念は斷然之を改め、國家も亦法的生活をなすべきものであり、國際の關係も亦法の支配を受くべきである事とせねばならぬ。苟も力の許す以上如何

たる事を爲すも妨支へなしと云ふが如きは、國際關係を動物の關係たらしむるのであつて、即ち何國對峙は群獸對峙と異らざるものとならざるを得ない。それで此處に何か聯盟が組織して、國際間に規範を設けて、各國家の行動の準據すべき法則を規定し、國際關係をして一定の法の支配を受けしめんとするのである。勿論今回巴里會議に於て作られた國際聯盟の規約は甚だ不完全なるものである。法の支配と云ふ、其法なるものも尚ほ不得要領の譏りたるを得ない。然しながら兎に角聯盟規約は參加國全部を支配する所の一種の超國家的憲法の如き地位に立ち、此規定の範圍内に於て、各國それぞれ行動をなすと云ふ事であるから、確に是れ各國家をして法的生活をなさしむるの端緒を實現したるものである。即此意味に於て國際聯盟の組織は世界文明の一大進步として大に祝福するに値するのである。從來國家間に於ては武力主義の競爭餘りに烈しく、各國互に軍備を擴張し、武力を擁して相對峙し、殊に最近四年半の長きに亙つて人類相食むの大慘劇を見る事となり、其結果餘りに甚だしかりし爲、斯くの如き新計畫が立てらるる事になつたのである。

然し乍ら今回の大戰の結果として、右の如く國際聯盟の組織に依り、一定の規約の下に共同一致の生活を爲し、以て一般の福祉を圖らんとする其傍らに於て、各國孰れも自國を本位としての自我的政策に汲々たりと云ふ事實も亦甚だ顯著なるを認めなければならぬ。第一に戰爭後新に國家を組織したものも少くない。世界の大勢は寧ろ世界を打つて一家となすの方向に向へるかと思はれたるに、反つて幾多の小國家新設せられ、國家と國家と對立對抗するの形勢を益々複雜とならしめたるの觀なしとせぬ。啻に對立する國家の數が增加されたと云ふばかりではない。舊來より存立せる國家の間に於ても、國家主義的思想は大戰のため新なる刺戟を受けて、彼の國際聯盟の國際主義的精神と奇なる對照をなして居る。佛蘭西の如きは此國家精神の最も強烈に新なる刺戟を受けて居る國である。之は獨逸に對する特殊の關係上、佛蘭西としては止むを得ないのである。然しそれは佛蘭西ばかりではない。英國亦然り、伊太利亦然りで、皆自國を本位として各種の經營に汲々たるの狀況である。北米合衆國の如きは最初最も熱心に國際聯盟を主張し、又今日に於ても、假令ウイルソン氏の手に依りて作られし聯盟規約の或部分に對しては強硬なる反對論がありとは云へ、猶ほ國際平和のため協同の努力を要するの趣旨は一般に認められて居る。新大領ハルディング氏の Association of Nations なるものも其精神の基礎に於ては格別變る所がないと思ふ。それ程に米國に

於ては國際的協同に依つて世界の平和を維持するの主義は一般に認められて居るにも拘はらず、他の半面に於て、米國が自國本位的の見地より種々の主張要求をなせる事は、是れ亦覆ふ事の出來ぬ事實である。或場合には、米人は米國あるを知りて他國あるを知らざるが如き觀を呈する事さへないではない。故に大戰後の今日に於ては、國際的協同主義と自國本位主義と兩々相對立して、孰れも大なる勢力を有する事は否む事が出來ない、然しながら國際生活の進化の大勢より云へば、最初に述べたるが如く、各國家をして法的生活をなさしむる事にならねばならぬ。列國の間に超國家的憲法とも稱すべきものを設け、各國をして其支配を受けしむる事となし、協同一致の力に依りて其超國家的憲法の權威を維持し、協同して以て國際問題を處理し、斯くして或一國の自我的專橫を制すると共に、國際共同生活の理想を實現し、以て一般人類の幸福を增進すると云ふ事、之が將來の文明の進むべき道であらねばならぬと思ふ。そして國家とは何ぞやと云ふその解釋に就ても、多少の變化を見るに至らねばならぬと考へる。卽ち絕對主權なるもの丶解釋に於て、多少の變更を見るに至るべきものであらうと思はれる。勿論從來と雖とも、各國の自由意志に依り、條約に依りて、自己の主權の行使の上に或る制限を設くる事は、實際に行はれて居る。而して是れ敢て獨立國家の絕對主權の主義と矛盾せざるものと解釋されて居る。で、只此解釋を少しく寬かに爲し、其範圍を更に廣くする時は、卽ちこ丶に國家をして法的生活をなさしむるの狀態に進み得るのである。勿論其場合に於ても、各國家は先づ自國を本位として種々の考慮を廻らすと云ふ事は、依然として變りは無いであらう。人間に於ても、國家に於ても、自己の生存が第一の要件なるが故に、國家をして自己を本位となす勿れと註文する事は、無理な話である。然しながら所謂此自國本位なるものは、一見する所國際協同主義と矛盾するやうであるけれども、それは實は國際生活の狀態が、猶ほ蠻風を脫せざるがためではあるまいか。國際生活が相當の進化を遂げ、國家も亦法の支配の下に有機的共同生活を營む場合に於ては、自ら自國のためと云ふ場合に於ても、亦國際協同のためと云ふ場合に於ても、其間共通一致する所のものがあらねばならぬ。從來の偏狹なる國家主義は、實は群雄對立的生活に於ての國家主義であつた。自國の利益のためには如何なる不正を行ふも差支なしと云ふ種類のものであつた。所謂 Raison d'état の命ずる所に依り何事をなすも不可なし、國家の行爲には道德なるものなし、國家の利益のために爲すのは總て善なり、と云ふが如くに思はれた。そう云ふ種類の國家主義であつた。斯くの如き見地

よりしての自由な個人主義は、斯して國家的協同主義と一致する事が出來ない。然し乍ら右の如き自由な個人主義は寧ろ國家主義とも稱すべく、更に何れかと云へば國家思想である。社會組織の幼稚且不完全なる昔の時代に於ては、右の如き國家主義を以て當を得たるものとなした事であらう。然しながら今日の文明世界に於ては、斯かる野蠻極まる個人間の國家主義は實は國家を害する所の國家主義である。即ち此思想より出づる自國本位主義は實は自國破壞主義である。今日の世界に於て、國際共同生活の大義を無視し、人類共通の正義の觀念を無視し、一般國際生活の上に及ぼす影響を顧みず、只自國のみの利害のために自國本位の行動をなすと云ふ事は、實は自國の運命を危くする所以であつて、所謂自國本位主義は實は自國本位主義でない。從て又健全なる意味に於ての自國本位、又は國家主義は、國際協同生活の思想と一致し得べき筈である。否國際協同生活の主義と一致し得るが如き新しい國家主義を執り、此基礎に於て自國の利益を圖ると云ふ事が、吾人の常に努むべき要點であると思ふ。國際協調の組織に各國家をして其の生活を爲さしむべき新時代を開き來つて居る。他國の利害と一般の禍福を眼中に置かざるが如き舊式の自我的政策は、却つて自國を誤る所以の自殺的政策である。今日眼前の現象として、一方に國際協調の示すべき[illegible]に對し、半面に於て國家主義の思想新に[illegible]せられたるものあるを見て、若し誤りに[illegible]なる舊式の自我主義に[illegible]するが如き事があつたならば、甚だ帝國の將來のために憂ふべき事であると思ふ。

大山郁夫氏の「理想主義的社會改造論の缺陷」と題する長論文は頁數超過の爲め、次號に掲載するの已むなきに到れり。此旨作者並に讀者諸彦の御諒恕を乞ふ（編者しるす）



天女の幻

大泉黒石

一

月の世界を散歩するやうな文句だが、此の邊まで來ると物語は次第々々に平凡となる。俺の話だから平凡では困るがいくら無鐵砲でも根つから無い話は書けないのが當り前だ。だから此際荒經でも向ふ脛でも構はぬから成る可く氣狂ひじみた奴に出會して喧嘩の一つもすれば話の種が出來ると考へてゐたら、俺の家へ暫く滯在してゐた吉藏と云ふ少年居候の親爺がやつて來た。この親爺は神田の骨董屋だ。骨董屋さんと云へば目尻を下げて喜ぶが、その實碌なものはない。俺が困つてゐる時代に半年ばかり此家の二階に家族を率ゐて間借りをしてゐたことがある。その時分この親爺が馬の鐙を片つぽ拾つて來て、徳川家康が初陣に佩いたものだと床の間に忝々しく飾つてゐたことがある。その外にも俺の學問位では到底解釋の出來ない道具が二間間口の店頭に五百羅漢の如く列んでゐた。俺はこの親爺に檢溫器を五錢で賣つたこともある。蟲齒に入れた金の義齒を引つ外して十二錢で買つて貰つたこともある。それに拘らず彼は俺を尊敬して旦那と呼び、俺の女房を買ひ被つて奥さんと稱へて居つた。今まで稅金の味を知らなかつた俺が、板橋の稅務監督に一年六圓は高いと云つて苦情を持ち込むやうな早變りをして以來この親爺は益々俺を旦那に奉り、彼の倅は俺を先生にして了つたのである。讀者諸君は知るであらう。神田の靑年會館の橫

手の商丈に十年も二十年も以前からあるんだと云ふ番頭がこの親爺の家だ。この親爺の悴が先日やつて來て、親爺と喧嘩して家を跳び出したが行處がないから、身の振り方がつくまで置いて呉れなければ困ると云つた。日本橋と京橋に叔父が二人ゐるけれども行けば捕まるし、意見をされるし、その上食ひ物が拙いから嫌だと云つた。先生のお宅へ置いて頂けば食料も間代も出しますと威張つた。あんまり生意氣だから家へ戻るやうに説法したが頑として動かない。仕方がないから一ヶ月ばかり置いてやると、毎日活動寫眞ばかり見るのだ。考へて見ると、この居候は主人の俺よりも懐都合がよかつたのだ。家を跳び出す時親爺の金を財布ぐるみに持ち出して他の家へ來る迄に二三軒の友達の宿を廻つて來たのださうだ。親の金を使ふことなら何時でも贊成するが、吉藏に不心得にも買ひ食ひばかりするから君のやうな馬鹿は今のうちに家へ戻らねと不良少年になるし第一徴兵檢査を前に控へて森永のキャラメルや水飴を舐つてゐるやうでは心細い。一體これから先どうする積りだと云ふと、大丈夫だよ、僕は實業家が志望だから其内高商に入らあね。と俺の煙草を喫かし乍ら泰平に構へてゐた。いゝ鹽梅に俺の家へ田舍から客が來て狹くなるから一つ出て行つて貰ふ積りで、こつそり麹町へ親爺を引張りに出掛けた。居候をして歩るく位の男だから感も早いが逃げ足も早い。俺と吉藏の親爺が家へ戻る前へ、俺の女房へこれから鹿兒島へ行くと云ひ殘して何處かへ逃げて了つてゐたから流石に敬服したことがある。其から一月あまりになるが、何處に隱れてゐるのか消息がないので、時々親爺が、まだ戻りませんが、こつちへ廻つて來やしないかと心配して尋ねに來るのだ。或時は「今まで戻らない處を見ると、本當に鹿兒島へ突つ走したのかも知れませんが、東京から鹿兒島迄五百里はありませうね」と云ふ。鹿兒島に親戚でもあるのかと云ふと、ないと云ふ返事だ。して見ると、吉藏が親爺を脅かすために、出放題を云つたのだらう。日本で一番遠い國は鹿兒島だと思つてゐるのかも知れないと云ふと、さうかしらと案じてゐた。話に由れば、吉藏を小學校きりで骨董屋に仕立てるのが厭で喧嘩をしたのださうだ。吉藏の友達は皆中學へ入つてゐるが、他人は他人、自分は自分だ。私なんかこれでも商業學校を出たんだが、今になつて見ると其時分の勉强は何の役にも立ちませんからねえと云ふ説だ。かう云ふ事情で時々俺の家へやつて來るやうになつた。これから俺が物語らうとする話は、此親爺が俺の家の床の間に安置してある鳥山禪師の阿彌陀如來を見つけて、「旦那は珍らしい品をお持ちですね。惜しいことには鼻が缺けてゐますね」と云ひ出したことから始まるのだ。親爺の名は宗三郎

と云ふのだ。宗三郎は「この佛像は何處でお求めになりましたか。玩古堂ですか。古雅堂ですか。よつ程しましたらうな」と云ふのだ。よつ程すれば有難いが、實は何品に限らず買ひ物は三圓以下と定めてある。これは貰つたんですと答へた。すると、今度は悴のことは忘れて、「私も佛像の方では苦勞をしましたが、今日までまだ解らないことがありますよ」と勝手に一人で饒舌り出した。其話が頗る面白い。こゝで斷つて置くことは、これまで俺の家へ押しかけて來て、身の上を聞かせたり小說の材料を提供する奴に限つて滿足な話を饒舌らぬことだ例へば、淺草の寄席を廻つて步るく「チン助」と云ふ講釋屋だ。「わつしの生ひ立ちや講談よりや餘つ程面白えから聞いてくんなせえ」と云ふ調子で、少年時代の貧乏物語を數時間打つ通しで滔々と辯じ立てゝ俺を惱ました。舌の先に乘ぜられて聞いてゐると、「その時テ、親に勘當食つたわつしがスゴ〳〵我家を立ち退かうとすれば後より追ひ來る母親、流す淚の袖の下から與れたのは大きな握り飯、カタヂケネエと押戴いて山越え野越え水戶の城下まで來たとき腹が空いたので、取り出したのは件の握り飯。一嚙り嚙れば何やらカチリと齒に當つた物がある。月にすかして見るテエとあゝ母親の情と、ナラズ者のわつしも暫が間淚にくれたテエなあ、飯の中へ金貨が一枚!」と來たからあつと驚いた。

チン助の奴、そんな話を桑川庄八から聞いたのだらう。こゝで直ぐやめて貰つたが、以來他人の話には臆病になつて了つた。然し骨董屋の話は面白いから俺は此長々しき自傳外史の結末につけてまた當分お別れをしやうと思ふのである。この骨董屋には二人の兄弟がある。彼を加へて三人の男は三生兒なのだ。一番先に宗一郎が娑婆の風に吹かれて、その次が宗次郎で、これからこの宗三郎と云ふから彼が末つ子だらう。母親は直ぐ死んで、父親はこの三人に骨董屋の暖簾を分けてやるまで生きて居つたらしい。宗三郎は俺にこう云つたことがある。

「旦那の前だが三人が一度に生れると云ふことからして何かの祟りだと情なく思つてゐる處へ、兄弟同志が一人前になる頃から、氣心も肌もすつかり違つて、話も合はなくなつたので、京橋日本橋神田と一區づゝ順に住んでゐるが、親の法事か骨董の市でもなけれや、顏を合せるやうなことは滅多にないのですよ。そうなると、愈足が遠くなるばかりでさ。それはあなたも御存じだ。」

俺の知る限りに於て、彼等の仲はよくない。何か掘出し物でもある度に、三人の兄弟が偶然そこで打つ突かるのだ。口論の一つも始めねば納まらぬことになる習慣だつた。平生はそれ程でもないのに、商賣にかゝると仇同志の睨み合ひで、三人が卍

巴の公で嫉んだり爭つたりするのを俺は不思議に思つてゐた。

宗「ね旦那。この位反目し合つた兄弟が世間に二組とあるでせうか」

俺「先づないでせう。呪はれてゐるのかも知れませんね」

宗「私も確かにさうだと思ひます。仲睦じくお互に扶け合つて行けばどうして冥利の妨げになるんだらうと思ひましてね」

俺「そこが呪はれてゐる悲しさでせう」

これは俺が骨董屋の二階にゐる時の會話であつた。宗三郎の話と云ふはつまりこれからだ。彼は先づこう云つた。

「今日現の石佛(せきぶつ)を拜見して、つい四五日前の出來事を思ひ出しました。これをお話すると、私達がどう云ふ風に呪はれてゐるか解ります。」

宗三郎の物語りは俺の當見たやうにぶつきらぼうではないから、何となく書辛いけれども、たまにはいゝ。三味線なら三つばかり調子が低くなつたのだと思へば差支へあるまい。

「旦那は文士だから、講談もお書きになるでせうし、或は御存じかも知れないが、昔江戸に正直太平と云はれた獨り者の貧乏俳諧師がありましたつてね。その太平が或日麻布の狸穴(まみあな)を歩いてゐると、ある浪人の家から呼び止められた。行つて見ると紙屑を詰め込んだボロ葛籠(つゞら)の拂下だ。大將葛籠(つゞら)を擔いで歸つて調べると、中から利休の茶釜が飛び出した騷ぎに膽を潰して浪人の宅へ戻しに行くと、一反人手に渡(わた)した物には緣がないのだと受取らないし、太平の方でもこんな品を貰つちや罰(ばち)が當ると云つて聞かない。ところが此浪人然る可き身分のなれの果だから人物だ。屑屋の精神に惚れ込んで娘を押しつけて夫婦にしたら今度は天が感じて浪人は再び世に出る。お蔭で屑屋は士分に取立れたと云ふ話がありますが、こんな具合で千兩二千兩の出物に出會したいと云ふのが私の心願でさ。然し昔話は今でもあります。この間の事件と云ふのが偶然の掘出し物でした。利休の茶釜ではない、一寸九分の小さい吉祥天です。丁度其日の朝私の店に舞ひ込んだ女文字の手紙があります。佛像が一つあるから見に來て呉れと認めてありました。それには、かう〳〵紅白だんだら染めの封筒に小石川區小日向臺町と云ふ綺麗な筆蹟(ふであと)の跡から推して先方は臺町に珍らしくないお邸だらうと思つたから、女房に店を預けて早速江戸川行電車に乗りました。石切橋で降りて丘を突つ切ると、そこから一帶の臺町です。私はイの一號から順に尋ねて行くと、間もなく小さい竹藪を控へた尼寺の裏に出ました。それから先は小暗い鼠坂の切り落しで、下れば音羽の大通りになります。その邊に以前私の親爺が使つ

てゐた道具屋の三井と云ふ老人が住んでゐるから、勝手はよく知つてゐます。鐵垣の前まで來た時、はてな來過ぎたかしらと惑つてゐると、丁度坂の中腹に丸太ン棒で突つかはれた一軒の平屋から一人の男がよろめき乍ら出て來ました。この男に樣子を聞いて見る積りで二三歩坂へかゝると驚きました。それが宗次郎なのです。商ひの出先で彼奴に出逢つちや幸先が惡い。邪魔でもされては困ると思つたので、籔にぴつたりと身を寄せて宗次郎が坂を下り切るまで隱れてゐました。彼奴をやり過して置いて此處から家の前に來ると、私の尋ねる番地と名前がちやんと戸口に出てゐるではありませんか。從來所引をお願ひしてゐる方が相當なお邸ばかりなもんだから、一寸意外でした。この家から宗次郎が出て來たのです。品物をたつた一つ賣るのに五六軒の道具屋を招き寄せる家がまゝありますから、こゝも其口だ。私は宗次郎に一足違ひで先鞭をつけられたのだと直ぐ悟りました。宗次郎の手廻しのいゝのに呆れるよりも、いつもかうした場合に私の特權を横領して行く宗次郎の機敏が、ことさらに私を困らせるための武器ではないかしらと考へて、空恐ろしくなつたのです。

兄が出た後へ入つて行つた處で無駄なことだと思つたから、暫く戸口に立つてゐました。私の足元には家の窓から投げ棄てる紙屑や女の髪の毛が泥にまぶれて醜く溜つてゐました。傾いてゐる禿げちよろの屋根は一層でのめりさうです。一層のこと引返さうと思つたが折角尋ね廻つて來たのだから、私は汚ない格子戸を潜ることにしました。すると

「どなた？」

と云つて二十二三の小綺麗な——でも何だか蟷螂のやうな顏の女が出て來て、私の名刺を見ると、「穢苦しい處ですが、何卒こちらへ」と取つきの部屋へ上げてくれました。家のうちは想像程荒れてゐませんでしたが、たゞ腑に落ちないのは家の中に男の道具と云ふものが一つもないことです。

「つかぬことをお尋ねしますが先刻古雅堂がこちらに來てやしませんでしたか」

彼女は當惑さうに、

「お見えになりました。」

と答へたが、何となく落つかぬ樣子です。

「どんな用で來たんでせう。私は例のお手紙にありました品物を拜見に出ましたが。」

こう切り出されるのを彼女は恐れてゐたらしいのです。

「はあ。折角お出下すつたんですが、先に見えた古雅堂さんへお讓りすることに決りましたので、直ぐ電話でお宅へお斷りし

やうと思つてゐた處でございました」

と氣の毒さうに云ひ譯し乍ら、時々蠟燭見たいな細い首を擡げて私を盜見るのです。その樣子が、無駄足踏んだ私に難題でも吹きかけられやしないかと云ふ風に見えて、彼女の心底が直ぐ讀めました。彼女は今日中に金を拵へねばならなかつたのでせう。萬一古雅堂の方が駄目だつたら、右から左へと云ふ具合に私へ話を持つて來て、其日のうちに片づける積りだつたのです。こんな事には屢々ぶつかりますから別段腹も立ちませんが、「もうお決めになつたのですか？それは殘念だつた」

と云ふ位の厭味は云つてやりますと、

「はあ。約束だけ致しました。まことに相濟みません」

「約束だけでまだ品物はこちらにあるんですか」

「ですが、今晩にも取りに見えるさうです」

「失禮ですが、一寸拜見させて下さい。折角參つたのですから見るだけでも結構です」

彼女は次の部屋——多分寢室かも知れません——から二寸足らずの佛像を持つて來て「これでございます」と袖で拭き乍ら私の手に渡してくれました。私はその隈どりの巧みな天女の立像を掌の中に乘せて眺め乍ら、

「伎藝天女ですか？帝釋天女ですか？」

「吉祥天ださうでございます。宅に昔からございますのですが少し都合があつて夫が賣るやうに申しましたので」

「失禮だが、おいくらでお約束なすつたのですか」

「十圓でないと手放してはいけないやうに申して出ましたので妾には一向解り兼ねますが、大變古い物ださうでございます。」

彼女は微笑しました。だが、その時この若々しい奥さん——多分奥さんでせう——の齒並がひどく凸凹してゐる上に、齒が一本もないのが目について、變な氣がしました。「十圓！」實は其半値でも恐縮した代物で、どこに見處をつけて宗次郎が云ひ値通り承知したか一寸解し兼ねてゐたが、そのうちに宗次郎の質の惡い微笑が目先に浮んで來ました。品物が氣に入らぬ上に高いから、買ふやうな話を殘して逃げたのだ。本氣に買はう思へば手金も打たうし、また十兩や二十兩持ち合せぬ筈はないのでした。この女は欺されてゐるのだと思ひました。それだけ折角だから半値迄値發して引取つてやらうと云ふ出來心が起りました。

「どうでせう。もし今晩迄に古雅堂が來なければ明日までお待ちになりますか」

と云ひ乍ら、疵でもあつたら突込んで負けさせる魂膽で、ひねくり廻してみると、左程結構な物だとも思はなかつた木彫りの

具合が引きつけられるやうに段々氣に入つて來たのです。見やうに由ると、瓔珞を纏いた白面から姿の襞へかけて、なだらかに塗られた漆の剝げ目に丹の色がぼんやり殘つてゐました。それを窓から流れ込む日光にあてゝ見ると天女の肌が衣を透して朦朧と浮き上つて來たのです。私の心は奈良の淨瑠璃寺に飛んで行きました。そこに千年の昔から安置されてある婉やかな吉祥天女の姿を仰いでゐました。やがて其處から戻つて來た私の心は怪しく顫へてゐる掌の平の上の立像に向つて敬禮讃歎しなければならなくなりました。ね。旦那。私の鑑賞眼は危ない瀬戸際でこの一寸九分の吉祥天女を名人定朝の作だと見破つたのです。もう手放してなるものかと思ひました。そこで、

「古雅堂は私の商賣仇です。彼奴が十圓で買ふものなら二十圓で引受けますから、私へ讓つて下さい。だが、彼奴は晩になつても來る氣遣ひありませんぜ。もし來たら、この內から、五圓を罰金にお出しなさるといゝ。實は私の家に佛樣のない買ひ立ての佛壇がありますから、これが欲しいのです」

と出鱈目を云ひ乍ら、財布から五圓札を四枚出してやると、無論彼女は面食つて返事に窮しましたが、私は急所を衝いてゐるのです。そこで佛像を引つ掠るやうにして戸外へ跳び出したがいくらか心配にもなるので、戸外に立つて樣子を見てゐましたが跡に尻を追つかけて來る模樣もありませんから、安心して神田へ歸りました。凡夫の淺ましさには、これが飛んでもない厄介を背負込む緖にならうとは知らないものだから、「オニ〇〇」なんて符號の正札をつけて家內中有頂天になつたわけでさ。「オニ〇〇」は千二百圓のことです。オニハソトフクワウチに私の店では一二三四五……の代理を勤めさせてゐます。この佛像を番高い陳列棚に据えて寢た夜は明日の骨董市で仲間から羨まれてゐる夢を見ましたが、その夢が醒めた時、陳列棚の千二百圓は煙のやうに消えてゐました。翌朝私は床の中で、今日立つ道具の市に持つて行く品々を數へてゐました。その時店先で娘のツル子と立話をしてゐた女房が「お父さん！ちよいと！」と呼びましたが、半分耳に入れずにゐると、「お父さん！大變よ！」とツル子が夜具をめくりに來ましたから、寢卷のまゝ店へ出て行くと、

「昨日お求めになつた佛像が今見ますと、失くなつてゐるんです」

と云ふ次第ではありませんか。女房はツル子と一緒になつて先刻から探してゐたのでした。成る程陳列棚の天女は昇天したやうに姿を掻き消した。私が覺束なく顫へ出した足元を血眼になつて物色し始めたのはそれからですが家の隅々は固より鼠の入

りさうな穴にもありませんな。私達はがつかりして、まだ戸も開けない店へ三すくみの形で立つてゐました。

「戸締りに別状がありませんから泥坊に入られた筈もないんですけど、これ程探して出ないところを見ますと、やつぱり盗られたのかも知れませんよ。盗られたとすれば昨夜宵の内でせう」

然しその宵に客は一人もないし、客以外の者も入つて來る氣配すらなかつたのですから流石に妙な氣がしました。佛像の置場所は店のどの地點からも手の届かぬ位置にありました。だが結局ないものは盗まれたことに決めないと、そのうちに市の時間が迫つて仕事の豫定が狂ひますから、兎に角錦町の警察へ訴へました。それから私は近所の南部倶樂部へ出掛けたのです。

そこで毎月一回市が開かれるのです。私の留守に充分注意して、もし品物が出たら直ぐ倶樂部へ使ひを寄越すやうに云ひつけて置いたが、盗難にかゝるほど不愉快なことはありませんね。氣を落ちつけやうとしても碌々落ちつきません。倶樂部を覗くと、持ち込まれた道具が可なり集まつてゐました。仲間も半數に來てゐました。その間を幹事や世話人が出品帳を抱へて往つたり來たりしてゐました。私は小川町の電車通りに面した窓際で顔が出揃ふのを待つてゐますと、硝子越しに差し込む朝日が什中に當つて身うちから汗ばむ陽氣です。私より一足遅れて來たホ
ルの上ッ張りが、

「景氣はどうだい。宗三郎」

と云ひ乍ら私の側へすたすたやつて來ました。それが宗次郎でした。

「私よりも兄さんの方はどうです？相變らずボロい儲でせう」

「ところが大損さ。買つたばかりで値段もつけない品物を昨夜盗られちやつた！」

此野郎俺の災難をもう聞きやがつた。耳の早い奴だとは思ひましたが態と白ばつくれて、

「何を盗まれたのですか？天の羽衣ですか」

「天の羽衣や馬の角が問題になるかい。盗られたのは古代佛像だ。」

その調子がドカンと落ちてゐるのです。これが宗次郎が私を嘲る時の眞面目な顔です。

「どこの出物です？」

腹の中では其手を食ふものかと飽くまでも平氣を粧ふとしました。

「それが妙な店から出たんだがね」と云ふのを冒頭に、私が吉祥天女を買つた話の顚末と寸分違はないことを言ふではありま

せんか。
「物は何ですか」
「定朝の吉祥天だつた」
「無論本物でせうね」
「當り前さ。現に定朝の物は眞贋二つ乍ら持つてゐるけれども、あれほどの巧妙な出來は俺も始めて見たと思ふ位だから、殘念でたまらん」
　惡稼ぎも此處まで來れば殺生と云ふものですよ。私はいきなり宗次郎の肩を摑んで二三遍ひどく搖ぶりました。
「兄さん！いゝ加減にお廢しなさい！人を愚弄するにも程がある！あなたは昨日私に出し拔かれたのを口惜しがつて、そんなことを云ふのでせう」
　宗次郎は何か云はうとして口を開けたまゝ度膽を拔かれたやうにぽかんとしてゐましたが、やがて私を睨みつけて、「馬鹿！」と怒鳴りました。「何を云つてるんだ！」「あなたは私の仕事を昨日見てゐたからそんなことを云ふのです」すると兄弟が喧嘩を始めたのだと思つて、仲間がぞろ〳〵止めに來たので、宗次郎は「一寸來い」と云ひ乍ら私を階下へ引張つて行きました。
「お前のすることに一々構つてゐられる俺だと思ふのか。お前はあんまり人を疑り過ぎら！そんな情ない了見だから兄弟のそりが合はないのだ」
と彼は眞つ赤になつて罵るのです。私は不意に床が落ちたやうな氣がしました。然し兄弟の不和を私の故にするから口惜しくて、
「疑り深いことを承知してゐるが今日のことは據り處のない疑ではありません！あなたは私が佛像を盜まれたから、いゝ氣味だと冷かしてゐるのだ！私が兄さんの話に出て來る佛像を昨夜盜まれたから、あなたは間接に復讐をしたやうに喜んでゐるのだ！」
　すると宗次郎は暫く呆れた樣子でしたが、
「嘘をつけ！お前が吉祥天を盜られたと云ふのか？白狀すれば昨日お前が鼠坂のボロ家に入り込んだことはちやんと知つてゐるのだ。俺の姿を見屆けるまで物陰に隱れてゐたことも知つてゐる。俺は三井の家へ寄つて直ぐ歸つたが、お前は俺が佛像を買つた後へ行つたのだらう？そして何を買つて何を盜まれたと云ふのだ。ね。人が物を失くしたら少しは氣の毒さうな顏も見せるがいゝ。」
　こんな風ですから、私達の問答はどうなるか解らないのでした。私の云ふことは全然事實だから、勢ひ宗次郎の主張を頭から否定しないわけに行きません。私は「ふゝん。勝手にするが

い〻。狂人め！」と云ふ風に逃げて了ひました。そこへ長兄の宗一郎が、仲間の二三人と、見慣れぬ洋服の紳士と、書畫專門雜誌「國風」の記者と一緒に入つて來ました。い〻鹽梅だと思ふと、執念な宗次郎が、すぐ美術記者を捕へて、露骨なことを云ふのです。

「ねえ。樋口さん。私も佛像では隨分苦勞したから大抵の事は心得てゐるが、あの定朝の吉祥天ですね。あれは確かに一體きりないものでしたつけね」

樋口は一寸狼狽氣味で、急に返答が出來ない樣子でした。それとも知らないことを出し拔けに訊かれたものだから、困つてゐるかしらと思ふと、

「さうです。定朝の吉祥天は天下にたつた一つあるんだから有名です。何でも淨瑠璃寺のやつをモデルにして、小形の吉祥天を一體彫つたつきり、死ぬまで天女には鑿をつけなかつたと灑想士も書いてますね」

と、宗次郎の自負心を煽り立てました。その位の事は私だつて商賣だから知つてまさあ。

「確かに左樣ですね。いやどうも有難う」

かうしてゐる時宗一郎は「一寸失禮」と會釋して二階へ上りました。

「それは何處にあるのでせう」

樋口の返事を聞くまでの息苦しさつたらありませんでした。

「玩古堂さんがお持ちでせう。昨日お買ひになつたさうです」

商賣人の癖に兄弟の店にあるものを知らないとは迂濶千萬だと云ふ樣子でした。さう云つて、にこ〳〵笑つたのです。私は夢中でした。

「兄が昨日手に入れたと云ふ吉祥天が眞物で、それをあなたは御覽になつたと仰有るのですか」

「え〻拜見しましたが、流石に神品でした。今まで埋もれてゐたものが突然出たのですから私は來月號の「國風」に紹介しやうと思つてゐる處です。然しね、

と云ひかけて、「大分人も揃つたやうだから一つ始めやうぢやないか」と云ひ乍ら降りて來た宗一郎を見ると、口をつぐみました。

私と宗次郎の鋭い猜疑心は一時に方向を替へて長兄に向つたのでした。

「兄さん。あなたは吉祥天をお求めになつたんですね。歸りに行きますから見せて下さい。」

すると彼は一言の下に「駄目だよ」と拒みました。宗次郎はむつとした樣子で、

「何故です。」
と云ひました。私達が佛像に近づくのを恐れてゐることがもう確かな事實だと思つた時、彼は全く悄然として「買つた晩に盗まれて了つたよ」と吐き出すやうに云ひました。やがて私達は三人共揃つて例の蟷螂見たやうな歯のない夫人から貰つた手紙を持つてゐることが解つたのでした。だからお互に盗み合つてゐるのだと云ふ風に怪しまなくていゝのに、私達は以前よりも一層憎み合ふやうになつたのです。だが、私としては佛像の賣主を疑はぬ譯ではありません。こうなつて始めて氣がついたやうですが、あの女の容子にどことなく變な處もありました。立居の際に着物の裾がめくれて、そこだけを小さな旋風がくる〱と渦を卷つて走ることや、向き合つて話をしてゐる最中に顏一面がぼうと霞んで行くことなどが目先にチラついて來ます。ことに不思議なのは、あの糸のやうな咽の奥から出て來る澄み切つた聲が、丁度天井裏でガラ〱蛇が鳴くやうに響いたことです。そんなことを思ひ出すと、足の下に踏んでゐる地面までが、ムク〱と持ち上りさうな氣持ちがします。

　三人は三人乍ら自分の手に入れた物が眞物だとばかり信じてゐたやうです。その翌日は今日入札した品物の片づけや運搬することになつてゐましたから、また明日此處で落ち合つて見ればそれまでにはつきりした様子が知れると思つたので、用が濟むと私は直ぐ店に歸りました。然し、佛像は失くなつたまゝでした。女房は私を見ると、
「ねえあなた。品物が急に出なければ、一度占つて貰ひませうか。緣起の悪いことは打つちやつて置くと、いつまで續くか解りませんし、賣つた方にもどんな魂膽があるか知れませんからねえ」
と云ふのでした。
「それも左樣だが俺は矢つ張り盗まれたんだと思ふ」
　それから俱樂部で聞いた話を繰り返しますと、女房は息を殺してゐたが、
「いづれにしても私達か先方の内情を知つた者の仕業に違ひないのですよ。掛け合ひに行けば、また何かの手掛りでも摑めるぢやありませんか。」
と云ふのでした。
「それは共筋の役目だよ。定朝の作だと斷つて買つたのではないから無暗なことをして岸和田に迷惑をかけても仕方がない。こんなケチなことは忘れて了ふ方が魔拂ひになるよ。」
とは云ふやうなものゝ、目先に浮いて來る天女の幻は拂ひ除けることが出來ませんでした。私は到頭岸和田の家へ出掛けたの

でした。その時は、例の妙な婦人はゐなくて、部屋の眞ん中に褞袍を着込んで、汗がだく〳〵流れるも知らずに貧乏德利と茶碗を抱え込んで、酒を呷つてゐる三十前後の歌舞伎役者見たいな色の蒼白い男が一人ゐました。私を見るとけゞんな顏をして何しに來たかと尋ねる始末です。

「お宅で昨日頂戴しました佛像が紛失しましたが、全體あの佛像はおいくつあつたのですか、お伺ひに來たやうな譯でした。突然どうも失禮しました。」

蒼白い男は暫くきよとんとしてゐました。

「私はあなたへ何も賣りやしませんよ。家が違ひやしませんか」

「いゝえ。あなたはお賣りにならないでも、奥さんがです。」

この位云へば大抵感づきさうなものだと思ふと、

「家内が何を賣りましたか」

「佛像です。一寸九分位の佛像です」

「佛像？」彼は一寸首を傾げて、「私の家の佛像と云へば吉祥天が一つあるきりだが」と云ひ乍ら、台處の方へ、のそ〳〵出て行つたかと思ふと、「なくなつてゐるやうだぜ。あ！い・ねえ。いけねえ。」と始めて氣がついたやうに慌てるのがお態とらしくて「何をしやるがんだらう」と腹立しくなるのでした。

「家内があの吉祥天をお宅へ賣つたと仰有るのですか？それは怪しからん」

と妙なことになつて來ました。

「はてね。奥さんの話では貴郎の云ひつけだと云ふことでしたが。」

「それは嘘です。ごらんの通りの貧乏だから、その氣なら夙の昔手放してゐますよ。家内の奴そんなことを云つたのかしら。成る程な。お恥しい話ですが、いつも生活が不如意だから、苦しまぎれに家内が持ち出したかも知れませんが、あれは私の家に代々傳つて來たたつた一つの寶なのです。まことに恐縮ですが、返して頂けませんかしら、今申し上げた通りの貧乏者ですから、お買ひになつた値段で引取ります。」

「私はそんな用件で來たのではありませんが、それほど大切な品だと仰有るのを、いけませんとは申しませんけれども、生憎昨日盗まれて了つた。それをお宅へお報せに來たやうなものです。」

私は吉祥天の紛失と此男を結びつけて、色々氣を廻して見ました。ほんたうに此男は何にも知らないのでした。だから、こう云ふと、

「盗まれたんですつて！」

と叫び出しました。それから、酔けさうにとろんとしてゐる赤い眼を据えて、「この大嘘吐きが！」と云はぬばかりに私を凝視しました。

「眞個だとは信ぜられませんね」

「それが當り前かも知れんが、私の方では商品だから、どなたに渡すのも同じですよ。賣つたら賣つた先を敎へてあげますさあ」

彼は暫く沈默してゐましたが、やがて、魂が飛び去つたやうに落膽したとか、盜まれたものなら早晩出るだらう。もし出たら直ぐ知らせてくれとか、あれを失くしちや先祖に申し譯がないから、どんな工面をしても買ひ戻しますなどと云ふのでした。眞個に盜まれたのだと思つて諦めて了つたのか、それとも矢つ張り私が嘘を吐いて隱してゐると思つてゐるのか解りませんが、兎に角ひどく沈み込んで、

「私も酒さへやらなけれや、そんなことにもならずに濟むのでした。然し私の體はもう中毒してゐるんですから、今更廢むれば却つて病氣にかゝるばかりです」

と、この若い男の口からとも思はれぬ愚痴を一人で零してゐました。岸和田の話によると、彼は以前何とか云ふ株屋の店をしてゐたことがある。けれども今は仕事がなくて遊んでゐるのださうです。遊んでゐる彼は、金龍館に勤めてゐる歌劇女優に養はれてゐるらしいのです。女優と云ふのが、例の婦人だつたのです。彼女は女優と云ふ職業の外に、一寸名前を忘れたが、日本何とかヴイクトル會社の蓄音機に歌劇小唄の吹き込みもやつてゐるのだと聞いたとき、道理で聲が並の女とは異つてゐると思ひました。彼女は怪物でも妖婦でもない人間です。私は今一度彼女に會つて事情を糺したいと云ひ殘して店へ戻ると、どうでせう。彼女の方から私を訪ねて來て、私の歸りを待つてゐたのでした。

「あ！あなたに讓つて頂いた佛像は御主人に內證だつてえぢやありませんか」

と私はいきなりこう詰りました。彼女は多分それを豫期したらしく、格別驚く樣子もありませんでしたが、流石に顏を赭らめて、

「あゝ。もう夫に知れましたかしら、實はその事が氣にかゝつたので、あなたへ口止めに參つたのでした。」

と云ふのでした。

「そんなことだつたら、あの時、一言仰有ればいゝのに嘘をつくものだから」

「でも夫に內證だと申し上げたら屹度買つて下さらないと思ひました。」

「御主人に大變御立腹でしたよ」

「妾どうしたらいゝかしら。近頃仕事がないものですから、氣を腐らせて、妾にばかり當り散らしてゐる矢先ですの。でも夫に知れました上は仕方がありません。夫は乾度妾を詰めて置いて復讐みするでせう。近頃は色々家の品物を外へ持ち出してはなくして來たり、他所様へ御迷惑を掛ける様子ですが、もし、こちらへお金でも借りに來るやうなことがありましても、何卒構ひつけないで下さいまし、この二三日ひどく氣が荒んでゐまして、妾の商賣道具まで持ち出さうとするのです。道具と云つて別に大したものはありませんけど、會社から預つてゐる吹込用の蓄音機が一つあるのです。夫はそれを狙つてゐるのです。こんなことは申し上げたくないのですが………」

と泣きたい様子でした。こんな千切れ千切れの話で岸和田夫婦の家庭の事情も幾分想像がつきました。要するにこの女優は岸和田の食ひ物になつてゐるのが馬鹿々々しいといふのでした。

私が知り度いのは佛像でしたから、

「昨日の佛像は總額で幾つお賣りになつたのですか?」

と尋ねますと、彼女は見る目もゾツとする程俄かに青褪めて、まだ言ひ度いこともあつた筈なのに、返事もしないでさつさと歸つて了ひました。泥坊の正體は解りませんが、佛像の眞偽は彼女にあることが漸く解りました。こうなると、私は此女の妖術にかゝつてゐたやうなものです。

入札品を受取りに出やうとする處へ、また岸和田がふら／＼來たのです。こんな五月蠅い人達つたらありやしませんや。岸和田は緋メリンスの風呂敷包みを提げて、酔つてることをまた隠す様子でした。

「折り入つたお願ひで早朝からお邪魔いたしました。實は申し兼ねた事ですけど、少々金が要るので、拜借さしていたゞけませんかしら。」

と風呂敷包みをほどくのですから、はあ抵當に入れる積りだなと思ふと、それが、女優に聞いた蓄音機だから驚きました。これぢや岸和田夫婦の追つ駈けつこでさ。「出先で十圓ばかり要るものですから。一つこれを質に」と云ひ乍ら質屋だと五圓にも附けぬ品物を持ち出しました。私は彼女に頼まれた一件を不圖に白狀して「さう云ふ事情もあるし、私の店ぢやお預りなんてことは一切しないのが規則だから折角でもお望みに添ひ兼ねます」と彈ねつけました。すると彼は憤然として、「彼奴が先廻りしてそんなことを吐したのですか。畜生」

怪しからん怪しからんの百萬遍を繰り返したかと思ふと、

「彼奴にいつも私の邪魔をするんだ。お宅でもないと斷へる處

がないから云ひますが、彼奴の爲にや苦勞を盡し不義理を重ねてわざわざ世間を狹めてるのです。それを百も承知で兎角私を邪魔扱ひにして自分の慾ばかり滿たさうとするのです。」と罵り乍らギラ〳〵涙を輝かせてゐたが、お了ひに「今度こそは覿面の復讐をしてやりますあね。ちや先刻のお願ひは御迷惑でせうから取消しとして、私が來て、こんなことを饒舌つたと云ふことは秘密に願ひますよ。然しこれから蔭で工面しますが、暫く店の隅へ是だけ置かして下さい」と早口に云ひ乍ら、例の蓄音器を置いて出て行きました。

「ねえ。あの夫婦はどうしたと云ふのでせう」

「あの鼻息だと早晩大喧嘩だぜ。だが、こつちまでまきぞへ食つちや大變だから、成るべく遠のくことだ」

私はあの佛像に惚れ込んだことを、つく〴〵後悔しました。

岸和田の後から私は南盟倶樂部へ品物を運びに行きました。私の入札品には私の名札が一箇づゝに貼りつけてありました。事務室で後始末をつけてゐる處へ、二人の兄もぼつぼつやつて來ましたから、私は何より先に例の佛像の成行を尋ねたわけです。すると、意外にも二人は殆んど口を揃へたやうに、

「どうも大弱りだ。こうなると佛像なんさ、どうでもいゝと云ひたくなるよ。あの岸和田夫婦が入れ替り立ち替りやつて來やがつて、色んな面倒を云ふんだよ。つい今朝もあの呑んだくれの亭主つてえのが蓄音機を持ちこみやがつて四五圓の質に一日ばかり預つて呉れと云つたつけ。それや體よく追つ拂つちやつたけど、あの位五月蠅い奴つたらありやしないぜ」

と答へるのでした。その時刻を聞き訊して見ると、彼等が私の店に坐り込んで、諸々相手の惡態を列べ合つてゐる時刻とす[illegible]の差がないのでした。例へば女優が岸和田に金を貸して呉れるなと頼んでゐる同時刻に、二人の兄の家でも、同じ女優が店に坐り込んで、岸和田へ金を貸して貰つては困ると云ふやう[illegible]話をしてゐたのださうです。私は岸和田夫婦の存在を三つあつても差し支へないと云ふやうな道理を認めることが出來ないものだから、例へば佛像と同じ理屈に、三人のうちに、どの二人かは只の影法師ではないかしらと考へました。影法師だとすると、口を利くから、またさうでもないかしらと考へます。ねえ旦那、私はあなたに探偵小説や怪談の講釋をしてゐるのでは[illegible]さいませんよ。とは云ふもの〻、呪つたの呪はれたのと云へば怪談になつて了ふが、怪談と思はれても仕方がない。何しろ私達三人の三生兒は確かに呪はれてゐるに違ひないのだ。何となく脅やかされてるやうで、しよつちゆう警戒をしてゐないと、危險なやうでした。その時私は斷乎とした覺悟と勇氣とで其呪つ

てる奴を征服し一了はなければ迚も頭が耐てないと思ひましたよ。兄達の了見は知らないが私としては、入札品を調べた上で店へ車夫を頼んで届けさせるまで、どうすれば彼女等を取り挫ぐことが出來るだらうと、そればかり考へてゐました。用が済みますと、間もなく夕方になりました。この月の市の役目は済んだし、可なりの品も手に入れたので、やれ〳〵と重荷を下ろしたやうに氣が落ちつきましたから、二人の兄と別れて店へ戻る途中で、カフェー、パウリスタへ寄りました。そこで夕飯を済ます考へだつたのです。ウエーターが註文を聞いて、夕刊を呉れました。それは廣朝報の夕刊でした。一渡り目を通すと相變らず色んな事件があるものですよ。我々とは別世界の人間が紙面の上に盛んな活動をしてゐる。迷子が一人、首つりが二處。心中が一組。轢死が一件。博奕打ちの女房殺しが一つ――その犯人と被害者の寫眞を見たとき、おや！と思ひました。さう思ふと同時に私は別世界からこの陰惨たらしい渦の中へどんと突き落されて了ひました。はつ、と思ふと、私の目の前には岸和田夫婦の顔が二つ列んでゐたのです。女房殺しの犯人の肖像は岸和田そつくりでした。而も殴り殺された女房の寫眞の直ぐ下に美人の女優娘山八重子と云ふ彼女の藝名がありました。犯人は北堀を逃亡したと云ふのです。兇行の場所が駒澤坂の「幽靈の出さうな暗い家」とありました。社會の出來事としては誠に小さい事件だから平生なら氣がつかないで済んだかも知れないのに、カフェーへ立寄つたゝめ發見した。そいつを私は彼等夫婦が招き寄せて報せたのだと考へたのです。それ程私は此

な事件を彼等のことに違ひないと思ひ込みました。私はか

共新聞を盗んで店へ持つて歸つたのです。店先で娘が犯罪者

和田の置土産になつた蓄音機をギーギー鳴してゐました。私は新聞を女房に突きつけて「どうだ！これを見ろ！彼奴は到頭復讐をした！」と叫びますと女房が新聞を引つ奪つて見てゐたが

「あゝ。案の定こんなことになつたんですね。佛像のことが原因になつたのではないでせうか」

と他人ごとでないやうに吃驚して、店の名前が一字でも出てやしないかと云ふ風に新聞へ食ひついてゐましたが、萬一人違ひなのかも知れないものを、さう考へ直すだけの餘裕がないのでした。丁度その時だ！娘が弄つてた蓄音機の音がパツタリ止つた。

「日に昇り。日は沈む。

闇は米屋を訪れぬ。」

そこで急に止つた――と思ふと、――ねえ旦那こんな時いきなり「人殺し!!!」なんて悲鳴を擧げられて御覧なさい悸然としま

すぜ。處だ、出し拔けに「助けて下さい！人殺し！人殺し！」と叫び出すと共に蓄音機の旋盤は再びギーギーと廻轉を始めたのです。「人殺し！妾の夫は妾を絞め殺すのです！」。旦那どうです。私の頭に浮ぶのはあの女優が岸和田に絞め殺される場合でしたが、落ちついて聞けば、この凄い叫び聲は、何でもない歌劇に拵へたゴリキーの「夜の宿」の筋でさ。アンナが殺される時の文句ですよ。それはいゝが私と女房が膽を潰してゐる矢先に「水を一杯！水を一杯下さい。馬鹿に咽喉が乾いちやつた！」とひよろ〳〵と倒れ込んで來た男を、ひよいと見た時、それが泥まぶれい岸和田だつたから驚くぢやありませんか。あまり出し拔けなので、どうしていゝか迷つてゐると、

「こんな姿で面目ないです！私は今から旅へ出やうと思ひます！あの、あの品物を買つて下さい！あゝ水が欲しい」

と呟き乍ら、店先へどかんと腰かけたかと思ふと、四邊を憚るやうに座敷へ這ひ込みました。それがまるで自分の兇行を忘れたと云ふ格好です。太い奴ぢやありませんか。

「御主人！私はもう家内につく〳〵愛憎がつきたから、暫く國く歸らうと思ひます。四國の松山です。然し旅費がないから惠んで下さい。實は今日の商賣も失敗つちまつたんだ」

と云ふ處は、いつになく泥醉の體でした。畜生。人の目を眩ましてやがる。女房を殺してやがつて何處を迂路つきやがつたんだか、今更高飛もいけ圖迂々しいと思つたので、きつぱり斷ると、「いけないのですか？いけないの？いけないのか！」と乾然と肩を聳やかしたかと思ふと、ぐつたり首垂れて、「困つたなあ」と嘆息するのです。

「お前さんは旅費を拵へて何處へ行く積りだか知らんが、何處へ行つたつてもう手が廻つてるから駄目だ、それより早く自首した方が身の爲だ！」

とこうなれば私も何だが一生懸命です。私は例の夕刊を彼に擴げて見せ乍ら「こゝだ！これだ！」と指してやると、「僕が、ど、どうしたと云ふんです！」と慌てゝ新聞を見てゐたました。はじめから顫へてゐる手が著しく目立つて來たときに、彼は兩手で顔を蔽ふて牛のやうな聲をあげて泣き出したのです。

「お前さんもこれを見ちや少しは良心に責められるだらう」

私は生れて此方この位氣の立つたことはありませんでした。何も彼も夢中でした。すると彼は、死人のやうな顔色をして

「私は今始めて自分のしたことに氣がつきました。さう云へは實は今朝お宅から家へ戻つて家内に酒代の無心をしますと、頭から斷られた上に蓄音機のことを持ち出して置いて、それを栖にたまらぬ程罵められましたが、飮んでゐる處へ、むしやくしや

してるものだから、つい我慢がしきれなくてね。貴樣の品行を見ろ！俺の姉僕はどうしたのだ！賣り飛ばした金を又情夫(いろおとこ)にやつたのだらう！この淫賣女優！手前の前身をよく考へて見ろ！十二階下の淫賣ぢやないか。淫賣々々と大聲で怒鳴ると、彼女は私へぶつつかつて來て、猿轡をはめやうとするのです。こん畜生、洒落臭いと反對に蹴倒した上で何囘毆りつけたか解りませんが、彼奴が呻り聲を叫くと急に怖くなつて戸外(そと)へ飛び出したのです。もう二度と家へ歸らぬ決心で兜町(かぶとちやう)の仲間の家(うち)へ驅け込みました。その邊までは、覺えてゐますが私は彼奴を殺す積りぢやないのでした。あの時死んだとは夢にも思ひませんでした。あゝ。あゝ。困つたことになつちまつた！」

と身を震はせ乍ら、どうかして與れと云はぬばかりに立つたり坐つたり、狂人じみた繰り言(ごと)をい走つてゐましたが、もう旅役の段ではなかつたのです。こう云ふ境遇に陷ると、どんな頭腦でも前後の分別に迷ふと見えて、その邊に列べてある道具類を蹴飛ばすやうな勢で表(おもて)へ跳び出しました。マントも忘れて徒足の儘です。そして二三間驅け出した時分に「あ!!!」と氣魂しく叫びましたから、私は娘を女房に預けて下駄も穿かずに、店頭へ跳び下りました。その拍子に往來から「今晩は」と云つて入つて來る人間と行き合つたのです。それが女優だから憎(にく)み上らうぢやありませんか。女優の姫山八重子が泣き腫らした顔を伏

ば袖で隱し乍ら、しよんぼり立ち止つたのでした。岸和田は彼女と行き合つたに違ひないのです。「またお邪魔に出ました」と聞えました「あなた！あなた！大丈夫ですか」と女房の聲も耳に入りました。だが、それから、幽靈でもお化けでもない人間の姫山八重子と、どう云ふ風にして向き合つてかしこまつたか更(さら)に記憶がありません。

「宅が參りはしませんでしたか？妾の蓄音機を持つて」

「來ました。來ました。」

「蓄音機はどうしましたでせう。あれは妾が吹き込んだばかりの大切なレコードが入つてゐましたが。明日會社へ渡さなければならないのです。」

品物を出してやりますと、彼女は一つ一つ調べて、有難さうに、何囘もそれを頂くやうにしました。

彼女は預かり物だと云ふ蓄音機を命よりも大切さうにかゝえ込んで、

「妾は近いうちに岸和田と別れて了ひたいと思ひますの。あの人は妾の顏さへ見れば、金の無心をするのです。それに應じなければ、妾を酷め拔くのです。御覽下さいまし、今朝も、妾はこの通り打つたり叩かれたりしました」

と云ひ乍ら、小鬢のあたりをつる〳〵と撫で下ろすと、どうでせう。今まで氣がつかないでゐたのかも知れないが、そこだけ見る見る蒼白く腫れ上つて、痛々さうに見ゆるではありませんか。またしても奇體な女だと思ひました。
「どうしてお二人の仲がそう悪いのですか」
「性が合はないのかも知れません。」
彼女はこう呟いて、それ以上自分達の秘密を覺られまいとする風が見えました。他人様のことだから、どんな事情があつて夫婦の仲が揉めるのか知らないけれども、あまり立ち入つて根掘り葉掘り聞くのも相手は若い女だし、どうかと考へて控へてゐると、直ぐ歸りさうな様子だ。どつこい。まだ他にこつちには用があつたのです。
「それはそうと、あの佛像は總體でおいくつあつたのですか。あなたは幾つお賣り拂ひになつたのでしたか。實は貴女から讓つて頂いた晩に直ぐ盗まれて了つたのですが、それは私の店ばかりではなくて、私と同じ日に貴女の手から買つたと云ふ兄の店でも…………」
と云ひかけてゐるうちに、彼女の顔はサツと蒼褪めて、まるで物の化に襲はれるやうに、ぶる〳〵と身顫ひし乍ら、例の通りさつさと逃げて歸ると云ふ譯でせう。土壺摑まへ處がないのですから、いつまで經つても譯が解りません。處が女優も岸和田もそれつきり縺の路を切つたやうに姿を見せなくなりました。それと一緒に私達兄弟もお互にぶつつりと緣を切つた形になつて以前よりも仲が悪くなりました。それやこれやを考へ合せて見ると、先刻申し上げたやうに、私達の仲を裂いて了ふために、突然こんな忌はしい事件が持ち上つたやうにしか受取れないのです。」
香菅園主人はこう云つて口を緘み乍ら、俺がこの物語に對して、どんな批評を加へるだらうと云ふ顔附で、
「おや〳〵。事件と云ふのは、それでお了ひですか？何だか、お尻があつけないぢやありませんか。僕は又これから、その夫婦がどうかするのか、されるのかと思つた」
と云ふのを待つてゐたのだ。
「事件はお了ひになつた譯ではありません。今日まで續いてゐると云へば云へるのです」
「そこで、その吉祥天の立像は一體どう片がついたのですか」
「それが、その妙なんでさ。依然として行衞不明ですよ。警察の方からも音沙汰なしで、當の女優夫婦もその後どうなつたものか、用にかまけて、訪ねて見る機會もないのですが。さりとて斷へる筋も見つからぬしね。困つたものです」

と彼は如何にも迷惑さうな表情をした。

「成る程。訴へる理屈もありませんな。」

「一體こんな馬鹿げ切つた話があるでせうか」

その時、俺はふと思ひ出したことがある。それは俺が十年も昔に讀んだ"The mystery of the auk's egg"であつた。この時俺の記憶は朦朧として俺に一つの回想を與へたのだ。そのはずみに俺の舌は自然に動き出した。

「僕は今思ひ出したんですが、それによく似た妙な物語りを知つてゐるんですよ。それは亞細亞ロシヤのゲオルギー州にあるチフリスと云ふ小さい町に起つた出來事で、その町に行けば今日でも著名な事件として知らぬ者はない位です。」

「矢張り佛像が失くなつたと云ふのですか」

「いゝえ。佛像ではない。駝鳥の卵です。その町に『チレックンチ倶樂部』と云ふ金持ちの骨董會がありましたが、或日その倶樂部員の一人の處へ白布で纒頭した男が、殆んど一抱えもありさうな駝鳥の卵の賣りに來たから珍らしいので、その人は恐ろしく値切り倒した價で買つたのです。すると其翌日倶樂部員の七八人が此邸へ招かれて無駄話に來ました。主人は勢ひ込んでゐる駝鳥の卵を取り出して、衆前で自慢をする積りだつたのが急に紛失した、と云ふよりも、いつの間にか盗まれてゐたので狼狽の餘り、實は昨日買つた卵がなくなつてゐるので、折角皆さんを招いたが、お目にかけることが出來なくて甚だ殘念だと告白すると、客は一齊に椅子を離れて、「そう仰有れば我々も白狀しますが、實はその駝鳥の卵を纒頭のペルシヤ人からお買ひになつたのは貴殿ばかりではない。我々も左樣です。而もそれが一樣に皆失くなつてゐるのです！」と叫びました。主人の驚愕は云ふまでもないことでせう。鋭い疑ひは期せずして纒頭の男の上にかゝつて、そこに居合せた人々は今にも其筋へ曲者の捕縛を願ひ出やうとした次第です。彼等は例の卵を賣りに來た男が一反卵を買主に手渡して置いて巧みに盗み返した奴を銘々に二重にも三重にも賣つて置いて金を取つたに相違ないと決め込んだのですね。するとそこへ、どうした譯か、纒頭の男がやつて來ました。今頃は町の外へ高飛びをしてゐる筈の曲者が臆面もなく洒々として現はれたので、人々は氣を呑まれて了つたが、やがて主人が卵の一件を持ち出して、この男の面の皮を剝いてやつた上で暗い處へ打ち込む意氣込みで、頭から小つぴどく詰りかゝると、纒頭の男はにや／＼笑ひ乍ら一向動ずる景色がないばかりか、それは當り前のことだと云ふ風に「あなた方が腹を立てるのも無理はないが、一度買つた品を掠めて又賣をしたと思はれては非常に恥かしい。失くなつたのは私の故ではありません

と頑張つたと思ひなさい。主人は憤然として「するとお前は此處へ何をしに來たのか、とは聞かずとも知れて居る。お前は自分の犯した惡徳が怖くなつて、樣子を見に來たのだ。俺はお前のやうな圖迂々々しい厚顏な人間は始めて見た。俺の家へ來た序にお前はこれから牢獄へ行くのだ。」と猛り立つのです。ところが曲者はこう答へました。「卵が見えなくなつたのは始めて知りました。いかにもお氣の毒だと悔みを述べたいが、實の處失くなつて幸福、あれは貴公達の見識を下げるだけです。あれは本物の駝鳥の卵に僞て拵へた支那の陶器でした。でなければあれだけの價段では家鴨の卵だつて買へますまい。然し、どちらにし、處で失くなつたのは不思議です。不思議なことならそれ以上のことをして見せるのが私の商賣だが、形のあるものを完全に消す奇蹟は私にも出來ない。多方貴公等の無用な好事心を神が嗜められたのでせう。そう云ふ私も多分神の手先に使はれたのでせう。私は魔術師のイスメノです。」僕の話と云ふのはこれです。確かにイスメノだつたと思ひますが」

と云ひ乍ら俺は念のために Dr. Brewer の「フエブル辭典」を引いて見ると、

Ismeno; a magician who could call spirits from the vasty deep and was once a Christian but became Mahometan...

と云ふやうな註釋がついて居るから間違ひはない。

「あなたのもこの手ぢやありませんか？」

「いゝえ。確かに定朝の作でした。そんな例が露西亞にあつたかも知れませんが兎に角たつた一つの品が三つある上に、三つ共雲隱しに出會ふなど、は到底私共の常識で是認の許さぬことですよ。」

と云つたが、何となくお前見たいな氣の觸れた文士なら、いざ知らず、譯もなくうん左樣かと承知出來るものかと云ふやうにも聞えたが、

「私の考へでは、岸和田夫婦が三人ゐるとすれば、そのうちの二つは影で、女房殺しの岸和田はその影の一つだと思ひますが、あゝ云ふ不思議な性質の人間が世の中は實際ゐるのだらうと思ふより外に仕方がありません。殺された影は間もなく消えるのでせう。」

とこの人にしては開け過ぎる程大膽な結論をつけて來た。

「成る程。佛像も影と云ふわけですね。」

「そうです。三つのうちの二つは蛇形影です。本物の一つが確かに私の手から盗まれたのでせうと思ひます。」

「佛像は別として、人間に就いては、あながち、そんな性質の

者がないとは云ひませんが、或は三つのうち二つは影を纏うだ一人の靈魂の作用かも知れない。それは、私も判然したことが云へないから、あなたの想像にお任せしますが、僕は影でないたつた一人の實物の人間體が同時に二人も三人も生存したと云ふ記錄を識つてゐるますから、序にお話しませう。僕の讀んだ西洋の本の中で、最も不思議な事實を紹介してゐる『聖アルバンス寺院年代記』と云ふのがあります。僕は人のやうに讀書が好きな方ではないから滅多に本を手に取つたことはないが、これだけには恐ろしい興味を惹かれたのです。これは十三世紀末に英吉利にゐた Mathew Paris と云ふ僧侶の著書です。

　それによると西暦一千二百二十八年の冬でした。アルメニアの大僧正が歐洲を巡錫してイギリスのセント、アルバンス寺院にやつて來た時寺院長以下の僧侶から懇ろな接待を受けて數日間こゝに逗留したことがあつたのです。その時大僧正が彼等の乞ひに應じて東洋諸國の宗教の有樣や習慣に就て一場の講演をしたのですが、先刻のマテオ・パリスと云ふ物好きな僧侶があつて、大僧正にこんな奇問を發したらしいのです「世間で色々取沙汰をしてゐる不死のカタフイラスと云ふ人間に就て何かお聞きになつたことはございませんか」すると大僧正は意外にもその男を知つてゐたのですね。「カタフイラスのことならば私はよく識つてゐる。私が今度の旅行を企つる前に、エルザレムの市外で互に會食したことがあります」「すると矢張り彼は基督受難の昔から今日まで生きてゐると見えますね」「さうです。基督が猶太人の手に捕はれて、ピラトの廷前へ引立てられた時、基督を取調べたピラトは彼を死刑に處するだけの理由を發見しなかつたものだから其儘猶太人の手に戻したと云ふ事實を貴僧たちは御存じでせう。この折に法廷の門番を勤めてゐた賤病者があつたのです。それがつまりカタフイラスでした。門を引出されて殺されに行く基督を捕へて無法にお背中を拳で叩き乍ら、「基督早く行け！早く行け！何を愚圖々々するのか」と怒鳴りました。可哀相に基督は眉をひそめて振り返り乍ら「吾は行く。吾は行くが汝は吾が再びこの世に復活するまで待つてゐるのだ」と仰せられた。その日から彼は今日まで死ぬことが出來ずにゐるのです。基督が刑に處せられた時このカタフイラスは三十歳でした。その後百歳に達すればまた三十歳に若返るのです。そして恐らく永遠に渡つて死ぬことが出來ないでせうが、彼の性格は百年毎に朦朧として來るらしいのです。その後彼はアルメニアその他の諸國に出沒して各所に住む僧侶を歴訪してゐます。今にこちへも廻つて來ることでせう」と云つたのです。すると例のマテオ・パリスと云ふ坊さんは彼の人物を知りたいと思つ

たのかこう尋ねたと見えます。「そのカタフイラスはどんな風貌を備へてゐるのですか」大僧正は答へて「彼は私の見たところ至つて寡言で口を開けば專ら宗教のことだけを語りました。尋ねる人があれば、その昔の基督受難やその他の事蹟を巨細に語つて聞かせます。その間彼はひどく打ち悄れて冗談を言つたり笑つたりするやうなことは微塵もありません。それは多分基督に對する自分の失態を悲しみ、神の怒りを憚かるためでせうが、その様子が、他人の目にもあり／＼と解る程でした。それも基督が再びこの世の中に現はれて最終審判の日に自分の罪を詫られるのだと確く信じてゐるからでせう。彼は他人から贈與品を受けず弊衣破帽に驚くばかりの粗食で滿足してゐる有様でした。「彼は何處の言葉を使つて諸國を巡禮してゐるのですか」「私が會つたカタフイラスは純粹なヘブライ語を用ゐて自由自在に饒舌りましたが、その外のカタフイラスはどうだか知りません」と云ふと、マテオ・パリスは目を倚て丶「その他にも、まだカタフイラスと云ふ不死の人間が今日生存してゐるのですか」と慌て丶反問したのです。大僧正は頷いてこう續けました。「いかにも、シユレスウイツクの大監督パウル・フオン・アイツツエンと先日ハンブルヒで會つた時に、その話が出ました。それはハンブルヒの日曜日に會堂に出掛けると、信者の席に、髪は長く延びて身體は骨の露はれるほど痩せ細つた跣足の老人が、熱心に說教を聞き乍ら感極まると見えて、歎聲を洩らすかと思へばトン／＼と胸を叩いてゐたから、様子を訊くと、カタフイラスだと云ふことが解つたのです。而も私がエルザレム市外で會食したカタフイラスと人相から經歴から同じなのです。そればかりではありません。パウル監督はこの他にも同じ人間とロシアでも瑞典でも出逢つたと云ふことですから、カタフイラスといふ人間は決して一人でなく、同時に二人も三人もゐると云ふことが解りました。その老人は多方獨逸語か何か使つてゐたでせう。寺院長も僧侶達もこれには少なからず驚かされたと云ふことですが、そのマテオ・パリスはこの記錄を書く時に、こんな不思議な現象を說明するのに、こう云ふことを附け加へてゐるのですよ。カタフイラスと云ふ人間は最初たつた一人居つた。それが門番であつて、彼が神の憎みを受けて死を拒まれ、百歲に達する刹那に、本來の彼は亡びて、別に同じ人間が生れて、二人三人四人となるのだ。その人達はカタフイラスの子孫だ。……どうです僕の云ふことが呑み込めますか」

すると、香苔園は

「え丶。大體のところ解りました。その後から生れた子供も親と同じやうな來歷と性質を持つて居る。つまり親が二つにも三

つにも分裂したんですね」

「そう〳〵。丁度ミミズやサナダムシ見たいにです。そうなるとどつちが元祖だつたか解らなくなる譯でさ。ね•」

「成る程。」

と彼は解けたやうな返事をした。

「こんな奇蹟は聞き流して了へば、嘘のやうですが、パリス坊さんの記錄の外にも、ずつと下つて一千六百五十八年に英吉利のベツクといふ人が同じ類の話を書いてゐますし、一千五百七十九年には西班牙大使のクリストフエル・クラウゼや、ヤコツプ・フオン・ホルスタインといふ人にもこんな話が彼等の見聞記に遺してあります。それは露西亞にもあれば、巴里にもあつた事實です。只少し違つてゐるのは、カタフイラスのやうに基督を詰めて罰を受けたといふことでないだけです。これで見ると僕は同躰の人間は二つも三つもあり得るものだと信じなければならなくなります。何なら、その女をお目にかけてもいゝですよ」

と云ひ乍ら、彼が立ちかけて、背棚の方へ手を延ばさうとすると、

「いや。私は横文字が充分讀めないから、お話だけで澤山です」

と、矢庭に遮つた。

「だが、そんな人間は日本にもゐるものでせうか」

「さあ。どうですかね。あなたに吉祥天を貰つた夫婦がさうではありませんか」

「ことによると、その手合かも知れないが、恨みもない私共兄弟の拙い仲を一層拙くして貰ふ覺えはないではありませんか。私にはそれがどうしても腑に落ちないのです」

「それは乾度こうでせう。こんな具合に一人の人間が同時に二つも三つもあれば、そのうちのいづれも精神的の不具者ださうです。何故かと云へば、私の考へでは例へば、僕等が銘々に持ち合せてゐる愛とか憎みとか嫉妬と云ふやうな感情が集まつて形造つてゐる心と云ふものを二つ三つの肉體に分配されてゐるからでさ。二つ三つ以上だと、一層その人間の心はいびつになるし、だん〳〵弱くなるものだと思ひますね。そしてこんな不具者に限つて、滿足な精神を持つてゐる人間が羨ましい、と云ふよりも嫉ましくてならないのでせう。ことに貴下方御兄弟は躰つきから心の形まで酷く似てゐると見えるから、彼等が憎みの的になつたのではありませんか。私はこんな性質の男と女とが結婚すれば、いや結婚とまで行かないでも同棲してゐれば、お互に精神の不足を一方から奪つて補ふとするので、爭ひが

起るのではないかとも思ひますが、兎に角、あなたが言ふやうに、兄弟三人が、その爭ひの渦に卷き込まれてゐるのでせう。」

「つまり呪はれてゐるのですよ」

「呪はれてゐるのです。然し解らないのは、かう云ふ風に人格がバラ／＼になつた特殊な人間の肉體が、或時は一體に合するかと思へば忽ち二つ三つに分れて隨所隨時に而も同じ時刻に同じやうな振舞ひをするものだか、どうかと云ふことです。それが解らないうちは、此話にも私の力では解釋のつけやうがありません。」

と俺は云つた。

「然しあの夫婦は自分がさう云ふ妙な生れつきの人間だと心得えてゐるのでせうか」

「さあ。そこは何とも云へませんね。然しあなたに佛像の一件を切り出されて逃げ出す樣子では、或は知つてゐるのかも知れないが、素性を探らるゝのが怖いから、心配してゐるのでせう。そうでも決めつけないと考へやうがありませんね。」

俺はこんな事件をこうした單純な推理で片づけて行くのを好まなかつた。面白い事實を片つ端から、淺墓な智識で打ち壞してゐるやうな氣がして、急に興が醒めて來たから、それつきり默つて了ふと、香苔園の主人は、口の中で「どんな因果に酬ゐられた奴等だらう」と云ふやうな呟きを二三度繰り返してゐたが、やがて、思ひ出したやうに、

「つい餘計なお饒舌をして大變長座しました。だが、こんなケチな話は早く忘れちまいたいものですよ」

と人のよさゝうな微笑とも苦笑ともつかぬ笑ひ方をして、歸つた。閾を跨ぎ乍ら、

「それはさうと、若し悴がこちらへ廻つて來るやうなことがありましたなら、何卒捕まへといて、御面倒でも、こつそり知らせて下さいな。」

と云つた。

俺は香苔園主人の說話を、彼が忙中閑に拵へた一場の虛說とは思はないけれども、どうかした拍子に東京の場末で拾ひ上げたやうな燭臺を、日本武士フオン・フランシスコ・ハセクラが羅馬法王に貰つて伊達政宗へ土產に持つて歸つたものだと云ふ風な口上をつけて高々と客に賣りつける手腕を目擊してゐるものだからその手で一口嵌められては俺の體面にかゝると思つて、彼が歸つた後で態々その鼠坂へ出掛けることにしたのである。俺が僞さるれば讀者も欺されことになる。

そこで俺は鼠坂へ出掛けた。雜司ケ谷の家から音羽の護國寺の門前へ現れると右に折れて凡そ二町半も歩けば左手に坂、

える。俺はその坂の中腹まで登らぬうちに岸和田夫婦の佗住居を發見した。それは近に香苔園主人を誑らかした人々が住みさうな醜怪な建物であつた。が、岸和田と云ふ表札はいつの間にか外されて、斜に貼られた貸家札を染めてゐる赤インキの跡を發見した時、この平凡な文句が、人間の心を惑亂したり、幸福を破壞するその昔の神秘文字 Runes のやうに怖ろしく見えた。黃色い正方形の紙は犢の皮のやうに見えた。俺は香苔園の話が嘘でないことを一見して覺つた。

實を云ふと、彼の話は、結末へ漕ぎつく迄の道中が、もつと〱七面倒に長々しかつたのを、それが餘りに怪談味を帶びてゐたゝめに、俺の手で適宜に縮めたのだ。オスカア・ワイルドは昔の文學者は空々しい嘘を眞實らしく吹聽するに巧みであり、今日の人はその逆を行くと云ふやうなことを言つたが、尤ものことだ。この話もそうである。鼠坂から慌てゝ引返した俺は、この話を纏めるつもりで机の前に坐つた。前には一丈二尺の書棚がある。そこから Mézeray や Jean d'Arras や Crofton Croker や錬金術家 Paracelsus の怪談が、所謂世界の文學誕生以前の類を揃へ乍ら、妖靈變化の本體である arcuos の名によつて俺の仕事の前途を祝福してゐたのである。（完）

自叙傳「奥附」と說苑欄引退錄

一

自叙傳もお了ひだ。中央公論の說苑を書くのもこれで以て一先づお了ひだ。從つて說苑の讀者諸君を煙に卷くのもお了ひである。諸君も飽いたであらう。私も厭になつた。この邊で見切りをつけてサッサと逃げ出した方が物の定りがいいてよからう。此階でこんな無駄話をしていゝのかどうだか從らないが、私は御存じの通り文學者として極めて初心であり山出しであり、後身であり、半ば門外漢である。講釋師の往牒で云へば、まだ前座である。小說家としても、此說苑欄の所謂隨筆家としても堂々たる駆け出しの分際に過ぎないのである。（尤も私は小說家でも隨筆家でもない積りでゐるのだが）。だから、私の他に眞打ちがゐる。此處で云へば隨筆家の眞打ちである。その眞打ちが出揃つて了へば、私の分位はどうでも埋まる。小說家としての私ではない隨筆家として私が、中央公論の說苑に前後を通じて六回も書いた。書いてゐるうちに從來殆んど說苑に文名の現はれないことのなかつた村松梢風氏や、私を最初中央公論に紹介して異れた隨筆家と

しては大家の列にある田中貢太郎氏とも自然往來するやうになつて色々厄介を掛け通しに掛けた。兎角他人の世話になつたり、他人に迷惑を掛けることの大好きな黒石氏である私は、同じ說苑欄で昔から威張つてゐた生方敏郎氏を狆のやうだと形容して、抗議を申し込まれた。生方氏の話によると、何でも大坂の宗右衞門町の何とか云ふ待合ひで、この狆と云ふ不穩當千萬な文字が恐ろしく祟つたのださうである。甚だ怪しからんと云ふので、果報はやがて私へお鉢廻りした次第である。こゝでも一遍謝罪をするから、もう大丈夫だらう。そのうちでも、中央公論の瀧田樗陰氏には隨分だだをこねて甚だ申し譯がない。こうした人々が隨筆家として先輩になり友人になつた。その他にもまだある。あるけれども左程親しく交際してゐる譯ではない。小說家の友人が出來た數ほど隨筆家の友人が出來た。どちらも私よりはスタートが一足も二足も早くて、私よりも年上で、私よりも工面がよくて、私よりも苦勞人で、私よりも專門的で、序に以て來て私よりも勉强家であつたから、有難い仕合せである。私が引つ込んだ後は、こう云ふ人々が私の分まで擔當して與れるだらう。だから安心して說苑の王國から退散することが出來るのである。よつて、これまで顏はまだ拜見する光榮に浴せないが、私と頭を列べてゐた說苑欄の先生方に一言の然るべき挨拶を殘して跡を晦らましたいが、そうすると、ことあらたになつて、挨拶だけでは納まらぬかもしれないから、默つて引込む。話によると、日本の角力は橫綱になつてから勇退するさうだが、私は宗旨が違ふから、說苑欄の前頭位で失敬するのを儀式と心得てゐると思へばいゝ。口上じみた話は以上で盡きてゐる。文壇の隅つこに泰平な胡座を搔いて、よくも出るものだと夫子自身で愛憎がつきる程好きなことを洒々と開陳し始めてこのかた小說を十四篇書いて隨筆を自叙傳の外に五つ六つ書いたが、可笑しなのは私の愛讀者が正直至極にも兩方公平な態度で讀んで與れることとである。そこで取り敢へず、私は何故隨筆を廢めるかと云ふことになつて來るが、昔の侍が祿を棄てる寸法で親の仇を討ち果しに行くやうな深い仔細がある譯ではない。早く云へば、書く物はあらかた書いて了つたからである。說苑の畑に撒いた種は偉大な果實を結んで、もう撒く種もなくなつても平氣で澄して居られる位の收獲が現はれてゐるからである。まだ半分も開拓されてゐない私の創作畑が目の前に茫々と控へてゐる。創作と云ふ文字が氣に食はぬから、成る可く小說と云ふことにするが、その小說畑と小說の大森林へ今日只今から斧と鍬をぶら下げて、ぶらぶら出掛けて行く

準備が出來上つたから、說苑畑と雜鉄山に向つて、甚だ名殘り惜しいけれども、さようならを告げる理屈が解つたであらう。尤もこれまで小說畑の方にも、片足踏み込んで味を占めてゐたから、左程の面倒はない筈であるが、面倒があれば、面倒に退いて貰つて、呑氣に構へてゐれば私の生命に別狀はないだらうと考へて、一人で樂觀してゐる。畑は耕しても森林は斬り開いても、百姓や樵夫にはならぬ。小說は書いても小說家にだけは成りたくないものである。この腹を決めたのは昨年の暮に近かつた。さう一人で決めるまでに、名殘り惜しくないやうに、說苑の讀者に日頃の好意を酬ゆる積りで、出來得るだけの時間を割いて、隨筆に屬する說話を書き納めて置いたのである。然しそれも私が中道で胃腸を犯されて、寢込んだゝめに、豫定の半分の量にも達することが出來なくて殘念に思つてゐる。平生頻りに子供のために買つてあるキヤラメルやアンコを盗んで食べる上に、朝から晩まで書棚に面すると一反坐つたら火事でもなければ滅多に動かぬ心底で本ばかり讀んで、酒ばかり飲んでゐるお蔭で、一年のうちに二三度は胃袋の氣嫌を損ふのである。

信州の淺間山が食もたれで噴火してゐる一方では、山脈の作用が惡食つて右往左往してゐる時、東京の雜司ケ谷では、その向ふを張つた勢で三百六十五日胃袋の中に流連してゐたキヤラメルとアンコと月桂冠が、恐ろしい醱熱と共に一時に外界へ逆戻りを始めたのである。信州の溫泉が丸潰れになるのは只今の處一向差し支へないが、こつちの騷ぎになると第一その胃袋の所有者である私が二週間も三週間も呻らねばならぬし、本も讀めない仕事も出來ないと云ふ慘憺たる始末になるからやり切れない。漸くそれが濟まつたので、私は豫定通り、この一文を草することを思ひ立つた、直ぐ大正十年がやつて來た。きつかけと云ふものは妙なもので、これを書かうとして、凡そ二三行運んで來た時、私の手許へ英文の雜誌が屆いた。屆いたのに不思議はないが、その中に現はれて出た私に關する記事が私に對して妙な herald の役目を勤めてくれてゐる。その英文の一節を抄いて來ればかうである。

....Mr. Kokuseki Oizumi is an amiable and promising writer. His works in his lighter vein are nonpareil in the literature of to-day. Oftentimes his writings contain some exaggeration in expression; however, his wit and humor is always exposing the secrets of the nature, and is boldly touching the realities of human beings. But the step he has taken in his literary life has

been a disadvantageous one for this young author. First of all, he was friendless in his starts, so that he could find no good adviser around him. Secondly, his livelihood was too much in straits, so that he could find no leisure to create pure artistic works. The proverb, "poverty is the mother of discovery," is now unwarrantable for him, but poverty strips him unmercifully of him valuable leisure, and as its consequences reduces his creative power to the extreme; it is about to knock him down to the abyss of hunger and death…………

何と云ふ親切な苦言であらう。私の生活にも私の仕事の上にも手先に届かねばかり肉迫してゐる turning Point をこの間から發見してゐたが、こう云ふシグナルが忽然として眼に映つたのは、今言つたやうに、五六分前の事實であつた。これまで四方八方から五月蠅く責められて弱つてゐたところであるし、弱らなくても、御當人の私が昨年のはじめから、そつちへ駈け足を始めてゐた矢先であつたから、したゝか應へたのである。浪花節なら、さし詰め改心軒如雲とか何とか名乘りを替へて木戸錢の五錢も餘分にふん奪くるのであるが、生憎私は文學者で、これまで氣隨氣儘の三分の一位を勝手に振舞つた覺えこそあるが、小説の方面は小説の方面、隨筆の方は隨筆の方で、また三分の一位の努力は正に確實に盡して來たから更めて改心の必要を認めない。その代りに、從來の私が立つてゐた足の角度を狹めて、いさゝか向きを替ゆれば申し分はないと考へるのである。だから、そうしやうと云ふのだ。誰にしたところでそうだらう、すると、不賛成はない譯だ。と私だけ吞み込んでゐる。

二

貧乏神は依然として舊態のまゝで私の家へ滯つてゐる。福の神は質屋の倉から夙の昔流れて了つた。いつ戻つて來るかまるで見當もつかねば、流れた先から音沙汰もない生活のてぶりに、貧乏神が居候に來て何年と何月になるか知らぬが、下宿屋なら遠慮なく立ち退きを食はす處だ。然し乍ら、いくらイケ好かぬ貧乏神でも馴染みになると、何となく別れたくないのが人間通り一遍の情愛と見えて、近頃はそれほど苦にならぬ。邪魔にもならぬから變なものだ。この年末に先刻申し上げたやうに病氣して一文なしと來たから、一番手近かな親戚へ、金を借りに行つて、小氣味よく斷られた。斷られた上に、俺の家でもこの暮れには藝者の祝儀だけで千圓あまり

も出さなくちやならんし、ボーナスは例年より何千圓かしら減つたのだから、一寸貸せないと景氣のいゝ附錄までおまけにつけて呉れた。そう云ふ話を聞くと、成る程親身(しんみ)な姪よりも彼には大切な藝者といふものがあつたのだ。貸さないのが本當だと思つて、ちつとも苦にならなかつたが、その時、私の代りに金借りの使者に出掛けた私の妻の見すぼらしき姿を見て「お前のことを世間では黒石氏夫人と云つてゐるんだつてね。」と伯母さんに當る細君が云つたさうだ「あんなに汚ない風をしても矢つ張り夫人なのでせうか」と脇の人に向つて心配をしたさうだ。そう云ひ乍ら妻がぷん／＼怒つて來たから妾は夫人ではありません女房ですと云へばいゝのだと嘲乍ら聞いてゐる私も久しぶりに笑へて氣持ちがよかつた。この伯父さんと云ふのは、私に向つてトルストイのやうな小説を書けと云つて聞かない人物である。東京三井物産の石炭部でもなかなかの敏腕家ださうである。これは別だが私と一緒に昔小さな長崎の漢學塾で手習いの稽古をして、お互に生きてゐるのが馬鹿々々しいやうな顔をしてゐた書生が今大連の三井物産で石炭部長をやつてゐるさうだが、今度出逢つたら、お前の姪が金を借りに來たら構はずどん／＼貸してやれと云つてやらないと、藝者に千圓祝儀を出した後だから、もうないと言ふかも知れない。貧乏が自慢の種になるから、もつと大聲叱呼してお目にかける。兎も角も私は斯樣に貧乏である。而白い程貧乏である。どうかした拍子には十二ケ月を貧乏話で打ち通すことがある。客があれば片つ端から貧乏話を持ち出して追ひ拂つてゐる。それを知らずに地方から色んな人が色んなことを言つて門弟になる氣でやつて來るが、門弟の口があるなら私の方でお願ひしたい位だ。この位氣樂な商賣もたんとあるまい。年中拜み倒して居ればいゝのだから造作がない。

そこへ持つて來て、これまで一年に五つ書いたものなら二つで我慢をしやうと云ふのだから、少々ならず窮するかも知れないが、私は始めからその氣でゐたのを、頼まれると否だとは云へないし、また自分が困れば圖迂々々しく乘り出して愚にもつかぬことを書いて來たが、今年から一切やめても食ひ詰めぬ工夫がついたから、漸く本來の面目を立て通すことが出來るだらうと思つてゐる。これまでのやうに、やゝもすれば狂人じみた慌て方をして置いて、後で悄氣る心配もなくなるからよからうと思つてゐる。

三

今日の所謂創作が安普請なら、讀者は五錢均一位のところだらう。讀ませられる方こそ災難だ。こんなことを云ふと、新參者の癖に生意氣だとか何とか、有り合せの挨拶をする人があるかも知れないが、面白くないのは嘘でもなんでもない。私の書く物が根つから下らないと思ふ故もあるだらうが、人の書く物までだらしがないやうに見える。讀んでゝ少し大きいなと思ふたら、いくらか、落ちついてゐると思ふと、始めから其作物は腰が拔けてゐたり、尻が落ちてゐたりする。やゝ小器用だと思ふ物は、煙草入れの根附見たいに、いやに縮こまつてゐる。中には隨分手に入つたものだと感心すれば、その作者は年百年十それぱかり書てゐる。まるで蘭專門の畫家のやうだ。自然主義作家でも下廻りになると、田舍の青年會で在鄕軍人が演說をしてゐるやうに臭い。私のものと來ると、恐らく支那の兵隊が月給を貰つて戰爭をしてゐるやうに見えるだらう。どこを狙つて鐵砲を打つてゐるのだか、彈丸の行先を調べて見ないと一寸隊長へ報告が出來ないやうな風に見えるだらう。私にもそう見ゆる。それでも感心なことには照準なしで、ぽん〱打つ放してゐるうちには、一人位ぶつ倒れる奴がある。私を勞働文學者にして了つた新聞もあるが勞働でも乞食でもいゝ。大臣にして貰つても不平は云はない。要するに、誰が元祖で燒き始めた大二餅だか知らないが、あんな下素つ張つた勞働文學者さへ拵へなければよからう。その勞働文學者が社會講談と命名して、頻りに談諦の蒸し返しをするから暇潰しに讀んで見ると、皆社會主義とか共產主義のプロパカンダになつてゐる上に、そのプロパカンダだけでは承知出來ないと見えて、丁寧に講義をしてあるから、社會主義講談だと云ふ振り込みにした方が、もつと有効ではないかしらと思ふこともある。それにしても危うく私まで、社會主義には何の意見も持つてゐない私まで、そこへ卷き込まれやうとしてゐたことを後で發見して、まあよかつたと思つたこともある。社會主義は結構だか、社會主義者の大部分は、することに垢拔けがしてゐないから困ると言つたこともある。

說苑をやめるのに、何もこんなことまで持ち出して、憎まれたがるには及ばぬ話だ。温順しく引込んで居れば怪我のない話だ。後足で砂を蹴るやうなことをしなくてもよさゝうな話だと思ひながら、あべこべのことをだらしなく書き續けてゐるから私もどこまで業晒らしな人間だらうと思ふ。虫のせいではなくて貧乏のせいだらう。

四

この間ある人が新らしき村から手紙を寄越して、あたたを崇拜することが同輩に知れて追ひ出されさうだと云つて來た。その人が私を崇拜するのは勝手であるやうなものだが、甚だ氣の毒だから返事を態と控へてゐる。それは多分私が平生白樺一派の文士達を、坊つちやん。坊つちやんと云つてゐることが段々耳に入つたからであらう。以前この坊つちやん達は自分等の細君の手が美しいの細いのと云ふことが大變な問題で、一頻りそんなことが小說になつてゐたが、どうして近頃は、その手の細い奧さん達が張り物までするやうになつたと云ふことが、また小說の材料になつて私達を悲しませてゐたと云ふやうな話を或小說家が、私の處へ吹聽したものだから、私もすつかり感心して、坊つちやん達の奧さんが、張り物のやうな平凡々々した仕事をなさるのですかと云つたことから、私の所謂口から偶然に出た坊つちやんが、世間に擴まつたのださうだ。だから、彼等が怒つてゐるのださうだ。尤も千萬な話ではない。それは幾分吞み込めるが、その外に、殆んど每晚のやうに私の家の門を叩いたり、蹴つたり、たまには大きな石を打つつけたりして、私の名を叫び乍ら、どや／＼と引揚げて行く早稻田の學生の多いことに驚くことである。それに大抵晚の十二時過ぎに嵐の如くに起る騷々しい出來事であるから、いつも目を醒ます。私が目を醒ます分は、また直ぐ正體もなく眠るから大した問題にもならぬが、生れたばかりの赤ん坊が驚いて泣くのには閉口せざるを得ぬ。これは、前の坊つちやんと違つて、丸つきり惡戯の理由が解らぬ。但し早稻田大學では文學部の敎師が、生徒を列べて置いて、私の罵倒をするさうだ。大泉が日本の文壇で幅を利かせてゐるやうでは駄目だと云ふさうだ。私はまだ幅を利かせた覺えがないから、駄目でもなからうと思ふが、駄目だと云へば駄目でも岡目でも貧乏だから遠慮なく頂戴するが、それにしても、深夜の亂暴には先づ何よりも第一に恐れ入るの外はない。門を開けて捕へに行けば、既に影も形も見えなくなつてゐる。漱石の猫の中に、クシャミと云ふ主人公がある。その主人公が私見たやうに惱まれもので、近所合壁から、丁度これによく似た惡戯をされることが書いてあるのを一寸見たことがある。その眞似でもあるまい。猫の眞似などはあまり感心した行動ではないだらう。この手合だか、或は別人だか正體を見屆けないうちは何とも云へないが、門に添ふた長い板塀の節の穴から、ちよい／＼通りがゝりの學生などが、覗く家の中

を覗いて行くと云ふとを向ふ側の家の人が報告してくれた。それに晝間であるから、いくら覗いても平氣だが、考へて見ると、彼等には妙な禮儀があるものだ。チベットに關する風土記を讀むと、チベット人は往來で出會すると、いきなり相手の横つ面を平手で、いやと云ふ程引つぱたくさうだ。すると、引つぱたかれた方も亦負けずに引つぱたいて返すさうである。これがチベット人同志のbonjourださうで、痛い程親交を表はすものだと書いてあつた。ところが、また私は或時アラビヤ地方を巡歴した西洋人の日記を繙いて見たら、それでは横つ面を引つぱたく代りに、相手の鼻を摘み合つて、お辭儀の代理を勤めると云ふ風なことが書いあつたことを記憶するが、いづれにしても迷惑な禮儀作法に違ひないと思つてゐると、私の親愛なる學生等には、文學者の黑石氏に對する禮儀作法として、まことに面妖な敬意を表してくれる事實を發見した次第である。横つ面を引つぱたいたり先方の鼻を摘む位の答禮なら、私にもやれぬことはないが、この學生達大勢の深厚なる禮儀に對しては、どう云ふ答禮を施せば敢て失禮にならずに濟むか。流石の私にも格好な妙案がない始末である。

五

この一篇は自叙傳の「奥附」と說苑退却の辭とを兼ねたものであることは讀者諸君も御承知になつてゐるのである。奥付と云ふ言葉が妙でなければ、「跋」でも「箱書き」でも差支へない。その奥附は、以上で大概書き述べたと思ふ。もう一つ殘つてゐるのは、第二回の自叙傳の冒頭から蕭然として色の黑い顔を出してゐる圭吉のことである。この間京都へ出掛けた時帝大青年會館の幹事をしてゐた彼を訪ねたところが、お前が俺のことを、あんな風に書くものだから、大學で無暗と噂をされて困つたが、俺のことを書くなら書くで、もう少し手加減をしてくれなければ、あれは、いくらなんでもあんまり酷過ぎると苦情を云ふた。よし／＼。今度書くやうなことがあつたら、圭吉は落第をしない色の白い、まことに溫順しい性質の金持ちの倅だと云ふことに訂正しやうと答へると、何、そう仰山に書くのも、あまり空々しいから、圭吉は感心な青年だ位のところで澤山だと云つた。その感心には私も異存がない。彼は二人の兄を流行性感冒で失つた上に、二人の嫂と小さい甥達を自分の手で、どうにかこうにか養ひ乍ら、苦學して大學を卒業した獨り者の法學士である。英雄のやうな面構へをしてゐるから、遠からず英雄位にはなるだらう。俺が英雄にならぬうちに、お前も決して死ぬなと頼もしい挨拶をし

たが、英雄になつたら多方私に金でも貸す積りだらう。書告の方はこれで片づけたが、も一つ殘つてゐるのは、第三回の自叙傳に私が何氣なく「穢多」と言葉を物語の中に無遠慮なく用ゐてゐたゝめに、中央公論の瀧田氏と私と、何の關係もない實業之世界社へ宛てゝ、猛烈な抗議書がいくつも舞ひ込んだことである。始めて私は穢多と云ふ言葉を用ゐて不都合だと云ふことを知つたから、此處で、いさゝか謝罪の意を表する次第である。

文藝復興期に於ける三都の春と情趣

高須梅溪

一　新しい文化の春と生の歡喜

北歐の學士エンゲルベルト・ケンペルの『日本歴史』は、わが國の歴史と人文とを、ヨーロッパに紹介した最初の著書であるが、それを讀むと、彼れが、元祿に於ける文藝復興期に對する讃美と渇仰との情緒を到所に流露せるのを見るのである。彼れは、將軍綱吉の人物を賞讃すると共に、國内の人々が、上下共に一致して、社會の進歩、生活の發達を實現して居たことを嘆美して止まないのである。勿論、それは、過剰に失して居るにもせよ、はち切れるやうな生氣が躍動として、社會に漲つて居た當時の光景が、客遊の人の眼にも、極めて愉快な印象を與へたであらうことを想察するに足りるのである。

ケンペルが、黄金の國、蓬萊の島のやうに思つて、憧憬れて居た日本へ來たのは、西暦一六九七年の秋で、わが國では、正に綱吉が聖堂を忍ケ岡から湯島へ移した元祿三年のことであつた。ケンペルが來た時の日本は、元和偃武以來の治平によつて、寂寥と暗黒とのうちに沈んで居た史上の『冬』は次第に去つて、恰度『春』のやうな華麗と光明との時期が開け始めて居た。それは史上の『春』であると共に、また人文の『春』であつた。此の時代こそは、近世日本史上に於ける文藝復興期で、彼の中世時代

の闇を破つて、ほの赤い黎明の光りを齎らした西歐に於ける文藝復興期と互ひに趣を同じうしたところがあつた。

文藝復興の序幕が開かれる迄は、彼れも、我も生の枯淡と沈滯とに堪え得られなかつた。彼れにあつては、何事も形式づくめで、人を縛り付けやうとした冷索な時代と弊套とを一排しようとし、我にあつては、萬事、武斷づくめで、強ゐて民衆を抑へ付けようとした桎梏を一排しようとして努力した結果、彼處に形式主義が破られて精神主義が起り、此處に武斷主義の他に人文主義が起つて、民衆のために、一筋の自由な道が開かれた。彼れも、我も、ひとしく、不自然な拘束から解放されたことによつて、文藝復興の春色に接したのであるが、唯異なるところは、彼れにあつては、知と情との解放が併行して實現されたけれども、我にあつては、民衆の文化的教養が未だ進んで居なかつた爲めに、唯情の解放にのみ終つた形があつた。情の解放！それがわが文藝復興期の全般に通じた特徴であつた。

日本の民衆は、此の文藝復興時代へ來る迄、武斷政治の壓迫と拘束との下に、ひどく抑へ付けられて、生甲斐のない、重苦しい、たよりない日を送つて居た。少し伸びようしとしては強く抑へられ、飛びあがらうとしては、烈しく、叩き付けれると云つたやうな具合で、どうにも仕様がなかつたのである。けれども重い雪の下にある春の若草が、其の重さにめげないで、自然に其の生を伸張してゆくやうに、當時の民衆も亦太平の持續によつて、少しづゝ、其の生の力を貯蓄して、充分に伸びようとする機運の近寄るのを、靜かに待つて居た。其の努力と忍耐との報酬として、春風春水が、一時に到るやうな文藝復興期が、徐ろに彼等の前に現はれたのである。其の時の民衆の歡喜は、どうであつたらう。長い長い寂寥の夜の色が不圖消えて、頭をあげると、東方に黎明の色が生々と動きつゝあるのに覺えず、喜びの眼を瞠つたやうな趣があつたであらう。而して彼等は『生甲斐のある世が來た。』と心から叫んだであらう。

左様だ、生甲斐のある世が始めて來たのだ！民衆のための歴史のページが、玆に始めて開かれたのだ！澎湃として流れてやまない時の潮は、武力中心の時代を遥か彼方に流しやつて、經濟中心の時代を一葉の舟のやうに此方へ齎らしたのだ。階級制度を楯に取つて、武力中心の夢に耽つて居た武人階級は經濟中心の幕が開けた爲めに漸く其の勢力を減殺されて、經濟中心の舞臺に踏舞するであらうところの町人階級が、暗に其の勢力を增し始めたのだ。

富は、經濟中心時代の最上目標であり、無二の權威である。町人は、長い間、幕府に抑へ付けられ、武人階級に蹂躪されて

居るうちに、爛熟になつて、富の集積に全力を傾倒して居たのだ。此の富の力は、經濟中心の時代に進つた彼等をして、自然、武人階級に對抗してゆくべき正確な土臺を築かせたのだ、どんなに抑へても、此の土臺だけは、最早押潰れなかつた。町人の生活力は、次第に旺んになつて、武斷主義の桎梏を或程度まで、打破つた時、眼の前に文藝復興期の春が、微笑して居たのである。

春だ！　春だ！　春が到來た。當時、情の解放に一身を委ねた上下の人々は、百花が一時に咲き揃うて、芳香を放つて居る久遠の樂園中に居るやうな心持で、小鳥のやうに囀り、胡蝶のやうに舞つたのだ。社會全體を擧げて、大きな春の氣分のうちに酔つたのだ。生の春、人文の春、史上の春！

二　三都の發達と黄金の春

當時の町人であつたところの平民階級が、最も著しい生の伸張と飛躍とを示したのは、日本に於ける富の中心地となつた大阪であつた。大阪が、江戸よりも早く文藝復興期の先驅となつたのは、總じて文化の發達が、民衆勢力の本質を背景としなければならぬ約束があつたからである。其の頃の江戸は、新開地であつたのみならず、幕府、武人本位で、一般の町人階級は、未だ其の頭を思ふ儘に擡げることが出來なかつた。京都は、皇居の地で、多年の文化的訓練が民衆の上に行きわたつては居たが、所司代の勢力が強かつたので、すべての町人は、其の壓迫の下に小さくなつて居て、存分に伸びることが出來なかた。ひとり、大阪は、豐臣秀吉の時代から、町人本位に發達して來て、夙に京都、奈良の文化を吸收して居た上に、瀬戸内海と淀川との利便によつて、西部日本の富を一手に握つて、一般町人の生活力が、充實して居た。其處には左程の拘束もなかつた、烈しい壓迫もなかつた。伸びようとする丈は、伸びることの出來る環境のうちにあつた。大阪が、商業都市として、文藝復興の先驅となつたのは、如上の結果によつたのである。生の春、人文の春の曙には、大阪に明るい色を添へ始めたのだ。

今日の大阪は、文學上の『冬』の光景のうちに打沈んで了つて居るけれども、文藝復興期の大阪は、正に『春』の微笑のうちに置かれてあつた。日本に於ける二大文學者であるところの近松巢林子、井原西鶴らを出した丈でも、既に大阪文化の春が酣はだつたことを示して居た。のみならず、國文學復興の先驅者だつた僧契沖、河下路長流らも亦大阪から出た。商業都市のうちから、これ等の人々を出したのは、必竟、經濟上の餘裕があつたからで、それが自然、文學上の需要を起すべき動力の一つとな

つた。需要のないところには供給がない。經濟上の餘裕のないところには、文藝が起らないのである。

大阪が、江戸よりも、京都よりも、經濟上の餘裕を充分に持つことが出來たのは、日本第一の富の集散地であつたからだ。其處には、米市が堂島と云ふところにあつて、其の取引は、日本の經濟を左右するほどの巨額に上つた。また其處には、國許の米を賣つて、金に代へるために、諸侯の藏屋敷が澤山あつた。銀行と同じやうな金融機關も、其處に設けられて、手形の流通も活潑であつた。

元來、大阪町人は、夙に商賣にかけて拔け目がなかつた。西鶴の『日本永代藏』にあるやうに『氏目よりは金目』と云ふ信仰を抱いて居た。彼等には、何等誇るべき閥歴も、家系も、祖先の武勲もなかつた。また武人階級の有する特權も與へられなかつた。そのため、久しい間、屈伏して居たが、唯一つ、彼等が武人階級に對抗してゆくべき道が開けて居た。それは、金力であつた。彼等は、此の事を強く意識して居た。で、近松が云つたやうに『死ぬ迄、金銀を神佛と尊ぶのが町人の道』と確信した。

斯うして、彼等の最上目的は、金錢を得ると云ふ上にあつた。共の得た金を利廻りよく使つて、増殖して行くと共に、一攫千金の機會を捕へることを忘れなかつた。彼等は、朝から晩迄、此の方面に於ける努力を繼續して、武人階級の有した家系や、名譽などに對抗し得べき金錢の蓄積に成功した。武力中心の時代が次第に遠のいて、經濟中心の時代が、次第に近付いて來ると、どんなに有力な大名でも、金力については、大阪町人の前に膝を屈して、其の歡心を得なければ、經濟的に自殺しなければならない程になつた。斯うして、大阪の商人は、日本に於ける諸侯の藏所を一手に左右して、法外の巨利を得たものが少くはなかつた。而して其處にも、此處にも、大成金、小成金が出來た。當時の大阪は、正に黄金の唸つて居る都であつた。

其の時分、親しく、大阪を見た北歐の學士ケンペルは、其の所感を記して『大阪は、夥しい人口を有して居る。ある日本人は、私に向つて、市民のうちから、いざと云ふ場合には、八萬の軍隊を召集することが出來るであらうと誇稱した。大阪は、日本第一の商業都市で、其の位置は、水陸共に商業を營むやうに適して居る。富商、製造家、職人らも、茲に群居するに適して居る。人口が夥しいに關らず、食料は概ね廉價で、驕奢も、遊樂も、心の儘に滿足し得るように出來て居る。』と云つた。斯うして、當時の大阪は、不景氣と云ふことを知らなかつた。三十餘萬の市民は、何れも、好景氣の春のうちにあつた。『商人生業

鑑』に記されて居るやうに、大阪の町人が、太つ腹で、金遣ひが宜くて、烈しく失敗もする代りに、一躍、富豪になるやうな運をも掴むことが出來た當時の勢は、すばらしかつたにちがひないのである。彼等は、正に黄金の春に醉つて居たのだ。其の黄金の春が、近松、西鶴を生んだのだ。

大阪の黄金の春に醉つた眼で、江戸を見ると、稍淋しかつた。けれども江戸の繁昌は、正に文藝復興期に著しく目立つて來た。江戸の發達は、大阪にくらべると、大分遲かつた。江戸が、眞に都會らしく、なつたのは、明暦の大火以後であつた。『東海道名所記』を見ると、大火のために、面目を一新した繁華な市街の有様を記して『大名町、商人の市の棚、諸職人の家々、小路々々、町々、たてよこの橋までも賑かさ。人の往來、黒土を蹴上げて、よそ見して通るものは、突き倒され、踏みころがされ、口あきて居るものは、息のつまるほど、沙埃を吹き入れらる。』と述べて居る。

勿論、政治的中心となつて居た江戸が、これ丈の繁昌をするのは、當然であるが、其の繁昌の主宰となつたのは、云ふ迄もなく、主として、江戸の町人であつた。從來、町人の多數は、武人階級の壓迫の下にあつて、充分伸びることが出來なかつたが、文藝復興期の幕が開かれる前から、次第に其の生活力を増大し始めて居た。彼等は、矢張、大阪の町人のやうに、金力を以て、武人階級の名譽や、特權に對抗して行かうとして、富の獲得に全力を傾倒した。紀伊國屋文左衛門、奈良屋茂左衛門、石川六兵衛、河村瑞賢などは、其の代表的人物であつた。必竟彼等は、其の金力を背景として、諸侯も企て得ない豪華なことをした。而して彼等に似て、少し規模の小さかつた成金が、景氣の宜い時勢の潮に乘つて、此處彼處に現はれた。『江戸眞砂』のうちに『常憲院様御治世の時代、江戸中金もふけ、俄分限多くして、町々に開き門の町人二ケ所、三ケ所づゝあり。』と記したのは、それ等の事を指示したのである。斯うして、江戸に於ても亦黄金が唸り始めて居た。五十萬の町人は、其の唸を聞いて、黄金の春が近付いたことを意識したであらう。はち切れるやうな生の喜びも、飛躍も皆其處から、湧き出たのである。

京都は、ひとり、大阪と江戸との春から、取殘された形だつた。だが、其處に住む町人のうちにも、黄金の春に憧憬れる情熱が強く燃え上つて居た。其の情熱の閃きが、やがて富籤の流行となつて現はれた。彼等は、富籤によつて、武人階級に對抗して行くべき金力と快樂とを得ようとした。富籤は、彼等の慰安であり、希望であり、光明であつた。當時の様子は『富貴筍』に記されてあるが、それによると『かの所に行つけば、我遲れ

響き渡りて、とうから〳〵とて、から〳〵となるをとの心よさ。折ふし漸うつきはじめける。此讀み上げの面白さ。面々こゝろ〳〵のいわ井の入札、さて〳〵腹を抱ゆるばかり。』と云つて居る。斯うして、富籤に當つたものの心理は、當時の狂歌にある通り『突ぬればくるる物とはしりながら、なをよろこばしく皈るさの袖』に表現されて居る。それ等の光景を想像すると、京都にも、黄金の唸りが、多少、聞えて居たのだ。享樂の春を思はせる黄金の唸りが――

三　豪華を極めた江戸の春、吉原の春

生の歡喜に狂するばかりになつて居た江戸や、大阪や、京都のうちで、一番、其の豪華を極めたのは、云ふ迄もなく、江戸の春であつた。將軍綱吉は、春にふさわしい人であつた。彼れは、平生、豪華な趣味を喜んで、能樂に、饗宴に、舞樂に、花見月見に豪奢の限りを盡して、美姫や、美少年が、綺羅星のやうに居た江戸城の大奥には、いつも、春のやうな情調が流れて居た。ひとり、綱吉ばかりではなく、綱吉の母桂昌院も、事實上の總

味の天地を熱愛して、久遠の春が、江戸を取巻いて居るやうに見えた。

俳人其角が『鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春』と誇つたのは、慥かに當時の實況を穿つた句であつた。其の花の春には、上野山内、淺草駒形邊に櫻の花を見ようとする人々が、吸ひ寄せられるやうに集つて、小袖幕の蔭に陽氣に三味線を彈くものや、舞の袖をゆるやかに翻すものや、相對して、芳醇な美酒を酌むものが、此處彼處にちらばつて居たであらう。中には、大道狹しと六方を踏んで歩く伊達者や、櫻の花の美しさをも凌ぐ風流な美少年も居たのであらう。

殊に當時の特殊な春の光景とも見るべきは、長閑な春の辻に立つて、唐服を着た男が、片手に耳搔きを持つて、人々の耳の垢を取つて居たのを始め、風呂敷包を肩にかけて『猫の蚤取りましよ。』と眠むさうな聲で呼び歩く蚤取男などの類であつた。春の風に吹かれながら、街上の人々に對して、技巧を弄した梁川勝三郎の毬の曲藝、松井源水の曲獨樂なども、江戸の春にふさわしかつた。

斯うした春の歡喜に江戸の人々は、心から醉ふたやうに見えた。彼等の間に喝采された元祖市川團十郎の芸事は、豪華な趣味を愛する江戸の人氣に投じて、延寶五年、山村座で『凱歌合曾我兄弟』を演出して、五郎に扮すると、それが春狂言の濫觴となつた。團十郎が花の春に演じたものには『古今兄弟兵曾我』や『名護屋大全』の不破伴左衛門『一張弓勢三韓退治』の百合若大臣などがあつたが、彼の有名な『勸進帳』の始めとも云ふべき『星合十二段』の辨慶に扮して、關門に於ける山伏問答に見物を唸らせたのも、元祿十五年の春が未だ淺い頃だつた。

更らに團十郎に追隨すると云はれた初世中村傳九郎が、中村座で『奴朝比奈大磯通』の朝比奈三郎に扮して、其の頭を糸鬢にして、頬には鐘馗を置き、面上に猿隈と稱する化粧をして、關東訛りの白を用ひて、一世の喝采を得たもの、矢張、元祿の花の春であつた。

それに付けて、思ひ出すのは、徹頭徹尾、春に調和したケンペルの江戸參府のロマンスである。ケンペルが、將軍綱吉に謁したのは、元祿四年の春と翌五年の春との二回であつた。ケンペルは、博學の才人で、幾分洒脫な、輕快な肌合を持つて居た。彼は、其の先輩で長崎出島のオランダ居留地の領事とも云ふべきオトナに隨從して、東海道を通つて、江戸に來て、城中へ導かれて、例年の貢物を捧げた。それについて『常憲院御實記』には『蘭人入貢す。貢物は金銀珠五顆、奇楠香一木、龍腦一斤、猩々緋一反、羅紗二種(中略)蘭人四人とも簾前に召して御覽あり。音曲を聞しめ給ふ。』と記してある。更らに翌年の參禮については『また入貢の蘭人御覽あり。貢物は、玻璃鏡一面、花鋪一匣、縞二種』云々と記してある。『元祿録』を見ると、貢物の内容が、はつきり分明るが、何れも、異國情調の豊かなものばかりである。其のうちには、ふとふ酒一壺、ちんた酒一壺、小紅ちりめん五十卷、鴫かいき三十反、花毛氈二枚、紅紋しゆす五卷と云つたやうに、爛熟した春の情味にふさわしいと思はせるものであつた。

思ふに、春の色に漲り渡つた大廣間に於て、恭しく列席した四人の外人の様子は、綱吉の眼に可笑しく、見えたにちがいなかつたらう。綱吉は、彼等を引見する最初は、嚴かな儀式の下に嚴かな威嚴を示したけれども、辭禮の交換が終ると、極めて打解けた態度で、彼等に對した。而して通辭を用ゐて、いろいろの質問を連發して、ケンペルらの返答を聞いて、輕い興味を感じたやうに見えた。其の問ひのうちには、これも亦春の日永にふさわしい人間不死の藥と長壽の法を尋ねた。それに對して、ケンペルは、ヨーロッパの醫師が、其の發見に努力せることを

告げて、最近の醱樂としては、火酒サル・ブラティーレ・オレオサム・シルギイーが一番有效だと答へたが、此の名が余り長くて、忘れ易いので、數回、繰返して、サル・ブラティーレを反覆させられた。それが漸く綱吉にわかると、今度は、其の製造法を發見した者の姓名を問はれた。ケンペルは、直ぐに、オランダのシルヰウス敎授の名を擧げた。綱吉は、喜色を浮べて『それは、お前が作ることが出來るか。』と云つたので、オトナは『出來ないと云ふが宜い。』と忠告したが、ケンペルは、明かに『出來ます。』と云つて『だが、此處では製造するわけに行きませぬ。』と巧みに附け加へたので、問答は、玆に終つて『次ぎの便船で是非、サル・ブラティーレ・オレオサム・シルギイーを船載して呉れ。』と綱吉が云つた。

次ぎに、ケンペルらは、大奧の女中たちのために、滑稽な動作を始めるよう命ぜられた。彼れは、外衣を脫げと云はれると、直ぐに外衣を脫いだ。直立せよと命ぜられると直立した。步め、止れと云はれると、步み、止つた。或は泥醉者の眞似をさせられたり、日本の片言を發音させられたり、歌つたり、踊つたりさせられた。だが、洒脫なケンペルは、それを苦痛だとは思はなかつた。悠々たる春の情調の中に自己の魂を浸して、聲高く、南方ドイツの戀歌を歌つて、大奧の女中らを驚喜させた。何と云ふ呑氣さであらう、何と云ふ滑稽染みたことであらう。春と戀歌とを結び付けた北歐の學士の胸のうちを思ふと、其處に無限の興味がある。春だ、春だ。大きい酒落味のある江戸の春だ。

江戸の春が斯うして、何處にも、溢れて居る間にあつて、一層適切に『春』の意味を象徵し、印象する上に絕大の力があつたのは、土手節に於て『かゝる山谷の草深けれど、君がすみかと思へばよしや、玉の臺も愚かで御座る、餘所の見る目も厭はぬ我ちやに、お笑ひやるな名の立つに。』と歌はれた吉原の繁昌であつた。

蓋し當時の民衆は、明徹な智識の背景を持たないで、唯奔放な感情の解放を得たのみであつたから、其行動も亦感情の左右するところとなるのを免れなかつた。彼等には、宗敎もなかつた、道德もなかつた。唯燃ゆるやうた戀と情慾とのみがあつた。其の戀と情慾とを滿足させる場所は、遊里の外になかつた。で、彼等は、夢中になつて、遊里へ足を踏み入れた。けれども彼等の遊里生活は、今日のやうに實利一方の、殺風景なものではなかつた。寛濶で、豪放で、ロマンチックであつた。太平の世ではあつたが、武人のうちに尙ほ勇健な氣風が殘つて居ると共に、町人階級も亦武人の感化を受けて、何處となく、壯快な男性的意氣を抱いて居たところから、其の遊び方も、低調に墮し

なかつたのである。紀文や、奈良茂のやうな豪華趣味を代表した人物が町人のうちから出たのも、それが爲めであつた。

彼等の眼に映つた吉原は、季節の推移を超越して、永劫の春を領した自由な、のびのびした偉大な安樂園であつた。金力さへあれば、町人でも、大名を凌ぐやうな遊びも出來た。苦い現實から離れて、美しい夢幻的な陶醉のうちに、日を送ることが出來た。階級制度の桎梏を脱して、大きな欠伸をして、手足をのばすことが出來た。

『諸艶大平記』によると、當時、吉原には二千人に近い遊女が居た。而して揚屋の數が十四軒、茶屋が五十二軒あつた。春の日が、朧ろに沈む夜に、花やかな燈光を浴びてゆく太夫の道中姿は、錦絵のやうに美しかつたであらう。戀路の夢にあこがれて、駕籠にゆられて行く客、白馬に跨つて行く旗本の息子、伽羅下駄を穿ちて、花街をさまよう貴紳、[illegible]に從つてゆく若者、雪駄ひきずつて、はな唄を歌ひゆく剽輕な男。左樣した人々が、春月の光りを浴びて、土堤から大門の間を縫ふた賑かさは、何人の魂をも、浮かれさせたであらう。

當時、相應な地位に居た遊女は、今日の遊女とちがつて、其の品格に於て、教養に於て、精神に於て、趣味に於て、水際立つて優れて居たものが、少くなかつた。歴代の高尾は勿論、玉菊、薄雲、小紫、雲井、錦木などの遊女が、美の女王のやうに輝いて居た。彼の女らの通有性とも見るべきは、凛とした意氣地と張りとを持つて、金錢や、位階の前に低頭しないで、人情に厚いことであつた。『助六』の狂言で、太夫の揚卷が『そりや何じや、椿三昧をして、其の椿の端が、わしが身へ一寸でもさはるが最後、五丁目は闇暗じやぞ。』と云つたやうな意氣と張とが、彼の女らの心のうちにあつた。

高尾が、女王中の女王のやうな高い權威を維持したことは『傍つれ〲』に出て居るが、其の他、文藝の造詣があつて『秋の枝折』や『里の樂譜』を著はした雲井、自分の氣に入らない貴族の身請をはね付けて殺された薄雲、白刃を閃めかして爭ふ男伊達の間へ飛び入つて、双方を無事に收めた錦木、など、何れも、高尾に劣らない美しい精神を持つて居た。

斯うした女王を中心として、二千の遊女が居た吉原は、上下の區別なく、あらゆる男性を其の周圍に引き付けて、江戸に於ける永劫の春を象徴した。『江戸雀』の著者が『今は泰平の世なるまゝに、人の奢り日々にまして、人々も美女に乏からす。値の佛を以て、あひ見ることの嬉さは何に譬へん。』と嘆賞し。『我衣』の筆者は『晝は極樂の如く、夜は龍宮界の如しと云へり。諸國の珍味、此地を最上と撰び、異香匂ひ家々に滿つ。』と讃嘆し

たのも、左程、誇張したものではなかつた。少くとも、當時の民衆の眼には、『極楽』とも、『龍宮城』とも、映つたにちがひない。

それで、茲に遊ぶものは、他人が百金を費すと、自分は、千金を抛つことを惜まないと云つたやうな勢で、巨額の金を一夜のうちに費消しつくすことを以て快とした。斯うした豪興を恣ままにしたものは『若し金を少しでも惜むやうな人は、此へ一歩も足を踏み入れぬが宜い。』と放語して憚らなかつた。江戸ッ見が、宵越の金を持たぬと云ふ事は、既に此の頃から行はれて、遊里へ來るものは、誰も彼も、身分相應に綺羅に金を使つたのである。

斯うした氣風を代表して、豪華な遊び方を鮮明に示したものゝ中には、隨分、思ひ切つたことをした。ある者は、三度も、吉原の惣仕舞をさせて、茶屋、揚屋、大門際、山谷の舟までも買ひあげて、他の遊客の呆れた顔を見て、手を拍つて喜んだ。ある者は、追儺の夜にある揚屋で、撒豆の代りに小粒金を霰の降るやうに、間斷なく、撒きちらして、人々が爭つて、それを拾ふのを見て、滿顔に微笑を浮べた。ある者は、三浦屋の高尾の愛を得んがために、金襴と云ふ小袖を着せて、中の町を歩く時に、さらりさらりと鳴る仕掛をして、得意の色を示した。此の金襴と云ふのは、縮緬の模様物の上へ、薄き金をのべて、皆のやうにかけつらねたものであつた。斯うした傳説は、可なりに澤山に殘つて居る。それ等の傳説は、何れも、永劫の春を領する吉原に調和したものである。

四　新興の大阪文化の春と新町の春

文藝復興期に於ける大坂の春は、江戸の豪華な趣はなかつたけれども、文化の花が一時に開いて、絢爛の美を極めた趣があつた。大坂は、商業の都であると共に水の都である。此の地に於ける春の音づれは、梅の名所、櫻の名所にも、著しかつたであらうけれども、一層、著しく鮮かに感得されたのは、水の上に於ける春であつた。

大坂には、大小の橋が、無數にあつた。近松の『名ごりの橋づくし』で、梅田橋、緑橋、櫻橋、蜆橋、大江橋、浪華小橋、舟入橋、天滿橋、京橋などを數へて居るのを見ても、其の頃の樣子が察せられるのである。それ等の橋畔には、大抵、青々した柳が糸垂れて居て、關東のやうな荒い風ではなくて、かすかに頰を撫でるやうな柔かい風が、柳を吹いて、先づ春のおとづれを示した。而して大小の川の水がぬるんで、水の上を悠々とすべり行く船の櫓の音の長閑かさにも、春の氣分が靜かに流れて

居た。

大坂の町人は、江戸の町人のやうに、武人階級に頭を抑へられることがなかつたので、平生から、自由に遊蕩の巷に入つて、いつも春の人のやうに、浮かれて居た。それが、殊に春の季節に逢ふと、一層、浮いた風船球のやうな心持になつて、誰もが、微醉うたほどの樣子をして居たであらう。而して彼等の足は、自然に新町や、曾根崎や、道頓堀に向つたであらう。

道頓堀の春は、水都の春を遺憾なく、象徴して居た。近松の『卯月の紅葉』のうちには『道頓堀の糸竹や、太鼓の聲にひかされて、心も足もあしやな〳〵、しやなら。一寸立見に手毬の曲は、ひいふうみい。よういつむな八よころ〳〵。とんとはづむも可愛らし。』とあるのを見ても、當時の道頓堀の繁華な光景を想像することが出來よう。斯うした繁華な水畔の街上に春が來たとすれば、其處に花やかな情調が、自然に渦卷くわけである。

道頓堀には、滿都の人氣を集めて居た操座などがあつた。其の芝居から洩れる賑かな太鼓の音や、三味の音は、春の晴粉粧をした男女の心を頻りに浮立たせた。芝居を見物しようと思つて、瀟洒な屋形船に乘つてくる客は青い道頓堀の水を見ながら、河岸に着いて、遙かに聳立する芝居の櫓を望んで、吸ひ寄せられるやうに劇座の中へ這入つた。

操座では、始終、近松巣林子の手になつた名曲を上演して居た。其の座元竹本義太夫の美聲と巧妙な語り口々は、巣林子の作品と相俟つて、人形淨瑠璃の流行を來たした。異國情調の香氣が高かつた『國性爺合戰』が上演された時は、非常な喝采を得て、歌舞伎狂言にも仕組まれて、大坂の三座が、同時に演じた程であつた。殊に近松が得意とした心中物の最初の作品『曾根崎心中』が上演されたのは、恰度、元祿十六年の晩春で『此世の名殘、夜も名殘、死に行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ。あれ數ふれば曉の、七つの鐘が六つ鳴りて殘る一つが今生の、鐘の響の聞納め。』の道行の名文句は、聽者に強い感動を與へたのである。嗚呼悲曲に葬れゆく落花の春！

『曾根崎心中』が、見物を魅して以來、桃櫻と菜の花とに彩られた艶麗な春に、度々心中物が上演されて、其の都度、青春の男女に紅涙を流させた。其の心中物には『重井筒』『二枚繪草紙』『卯月の紅葉』『萬年草』などがあつた。春の雨が靜かに戀人の私語のやうに道頓堀の上に降りそゝぐ日に、道行の文句を記した、竹の紋の附いた本を手にして、劇場の中で、ぢつと美しい死を讚嘆した悲曲に耳を傾けて居た人々の春愁は、どんなであつたらうか。

大坂の春は、斯うして、道頓堀に溢れて居たが、それにも増して、春の氣分を鮮かに象徴して居たのは、曾根崎や、新町の廓であつた。近松の『曾根崎心中』『天の網島』『冥途の飛脚』『淀鯉出世瀧徳』などを始め、西鶴の『一代男』『二代男』『置土産』などには、其のローカル・カラーが描かれて居る。

新町は、大坂の廓を代表する地位に居た。『難波鑑』『諸艶太平記』などを見てもわかることであるが、當時の遊客は、皆一樣に『長崎の衣裳共で、京の上﨟に江戸の張りをもたせ、大坂の新町にて遊びたい。』と理想して居たほどで、九軒町は、新町の一部であつたから、誰も、新町の廓に憧憬の情を寄せたのである。殊に新町には『夕霧阿波鳴渡』のうちに描かれた名妓夕霧の居たことがある吉田屋と云ふ揚屋もあつたのだ。夕霧は、扇屋に抱へられ居た女で、以前、京の島原に於ける名妓として一般に知られて居たが、延寶六年正月、病死した時、其のロマンスが、人々の間に喧しく傳へられた。當時の名優坂田藤十郎は、それを狂言に仕組んで、彼れ自身、伊左衛門に扮して、一世の喝采を得て、前後四回、演出を繰返したほどであつたから、夕霧のロマンスと共に、扇屋、吉田屋の名は、一般に知られて、新町の一名物となつた趣があつた。

それで、大坂の町人階級が、久遠の春を領する極樂園と見たのは、主として、新町であつた。彼等は、精神的な快樂よりも、寧ろ本能的な快樂に熱中した自然児で、而も新興の勢に乗つて、成金となつたものが多かつたから、夢中になつて、新町に通つた。彼等の間には、情緒の節制がなかつた。一度、美的享樂に溺れ始めると、何處までも、それを續けてゆかねば止まないと云つたやうな風があつた。

それに新町でも、曾根崎でも、阿波座でも、すべての遊女が濃情な傾きを持つて居て『いかなる野暮に出合ふても、頭から溺れてかゝる故、原中の夕立だ。』と『諸艶太平記』で嘲笑した程であつたから、其の濃情に魅せられて、次第に深味にはまるものが少くなかつた。近松が描いた小春や、梅川は、餘程、理想化された傾きがあつて、愛の純眞に徹したものとして見られるけども、濃情と云ふ一點に於ては、調子が低かつた他の遊女と少しも變らないのである。

斯うして、濃情な女と戀に執着する男の多かつた大坂の廓に心中が續出したのも、自然の成行と云はねばならなかつた。『心中大鑑』を見ると、男女の心中が數十件あるうちに、其の大半は、遊客と妓女との心中である。近松が、實際の出來事を潤飾して描いた十篇の心中物のうちで、五篇までは、遊女を中心として起つた悲劇であつた。其の代表的な人物は小春と治兵衛で

あつた。此の悲劇は、享保五年十月十四日に起つて、十二月六日には『天の網島』として、上演されたのである。

心中の流行は、近松の作品を生み、近松の作品は、更らに心中を激生した趣があつた。理性の力がなくて、情感の力のみあつた彼等は、戀の前に一切を捧げつくすことを冀んだ。未來に於ける永劫の戀！　それを頼みにして、死國に赴いた。情の解放のみあつて、知の解放が伴はなかつた元祿の文藝復興期に於ける濃厚な陰影は、左様した數多い心中悲劇に以て、さながらに、如實に表明されたのである。而して近松の詩眼は、それを純化し、美化して、放たれた生の歡喜を音樂を透ほして人々に傳へたのである。其處には、悲みよりも、寧ろ快い死の讃美、戀の讃美のメロディを聞くことが出來て、詩の國に於ける久遠の春を象徴して居るのである。私は、藝術の春に現はれた大坂を愛したい。

五　古典的な京都情調と島原の春

文藝復興期に於ける京都の春は、何處までもクラシックの匂ひが附き纏つて居た。大坂よりも、遙かに古く、江戸よりも、非常に古い京都は、大坂のやうな潑剌とした生氣もなければ、江戸のやうな豪華な趣味もなかつたけれども、流石に長い間、王城のある土地だけに、典雅な、優麗な情味が、しつとりと流れて居た。

東山に紫の霞が斜めに引いて、磧の上をゆるく流れる鴨川の水がぬるむと、京の男女は春の光りを仰いで、遊樂と行裝とのことを競し合つた。花の嵐山、祇園の夜櫻は、京の春を象徴して、其處に多くの見物を吸ひ寄せた。だが、所詮、京の春は、寺の春、女の春で、沈靜な古寺を訪うて、久遠の藝術に日永を忘れる時、婉美な京の女を見て、其の綺の中から抜け出たやうな風姿に共鳴する時、江戸にも、大阪にもないクラシックの趣味が、誰の胸にも流れ入つて、恍惚とした心境に人を引き入れる力があつたらう。

京の春に調和したロマンスは、當時の富商難波屋十右衛門の妻が、江戸の富豪石川六兵衛の妻と衣裳くらべをしたと云ふことである。其の際、十右衛門の妻は、緋綸子の地衣裳總體に洛中の名所を、すつかり金糸銀糸で刺繍した小袖を着て、京の人々を驚かした。ところが、六兵衛の妻は、それに對抗するために、黒羽二重の地に南天の立木を染め出して、其の南天の實には、一粒數金に價した珊瑚珠を數百となく縫ひ付けた小袖を着て、更らに十右衛門の妻以上に、着倒れを誇る京洛の男女を驚殺したと傳へられて居る。

それについて連想するのは、西鶴の『五人女』のうちで、京の

少女の春裝を描寫して居る一節である。それには『女いまだ十三か四か、髮すき流し、先をすこし折もどし、紅の絹たゝみて結び、前髮若衆のすなる樣にわけさせ、金元結にて結はせ、五分櫛のきよらかなるさし櫛、まづは美しさ。一つ〳〵いふ迄もなし。白繻子に墨形の肌着、上は玉虫色の繻子に、孔雀の切付見へすくやうに、其うへに唐糸の網を掛け、さてもたくみし小袖に十二色のたゝみ帶。』と記してある。春が深くなつて、暖かい空氣が、人々を包んで、だるいやうな、甘いやうな感じを喚起させる四條河原の夕暮に、斯うした鮮かな風姿をした少女を見ると京の春の味が、ひしと胸に迫るのを覺えぬものはあるまい。

京の春、女の春、寺の春と共に、また芝居の春であつた。お國歌舞伎芝居能の昔から、傳統的に發達して來た京の劇壇は、元祿の文藝復興期に入つて、名優坂田藤十郎。山下京右衛門、澤村長十郎らと共に、劇評家の先驅江島屋其磧を有した。藤屋伊左衛門に扮して成功した坂田藤十郎は、春のやうな氣分を持つて居た豪奢好きの男であつた。其の半生を記した八文字屋自笑の『寬濶役者氣質』には、藤十郎の豪奢振について『藤十郎まだ末熟なる立役の時分、一年給金僅かに三十兩取りしに、其の時は節季仕舞も心易く、五七兩の金を延ばして快き春を迎へしに、給金一年まさりに八百兩まで取上げ、高給になるに隨ひ、次第に内證不勝手になる事、不斷の榮耀過分なる故と或所人異見しければ、藤十郎打笑ひ、我れ今千兩に近き給金を取る事は此の不始末なる心からなり。世に名を知られ、三が津の芝居にて名人とも言はるゝ者は、大氣にして細かなる事を聞きも見もせぬものぞかし。是れ大丈夫の役者氣と云ふものと、愈朝夕無理榮耀、身には洗濯の小袖を着ず、夜、蠟燭の光よりほか油火と云ふもの居間に點さず、不斷の料理に魚鳥なくては飯を食はず食後に濃茶の一服づゝ定まつて飲み、伽羅を燃やして、酒の燗をするなど、向上なる穿鑿なり。』と述べて居る。藤十郎が、傾城買ひの大盡、伊左衛門に扮して成功したのは、豪奢好きの役れ自らに、左樣した寬濶な氣品を具へて居たからである。彼れは、何處から見ても、元祿期にふさわしい俳優であつた。京都の藝苑は、彼れによつて、一段の春色を加へた。

坂田藤十郎と共に、京の劇壇に春色を添へたものは、劇評に獨自の創造を示した江島屋其磧であつた。其磧は俳優の動作科目について、精緻な批評を試みて成功した先驅者で、彼れの『役者口三味線』『役者目利講』『役者返魂香』『役者掛物揃』などは、劇の進歩を促がす上に相應の力があつた。而して京の觀衆は、春の日永に、俳優の品等を上下して、彼れは『三が津無雙』であるとか、これは『無類』であるとか『極上上吉』だとか云つ

て、悠々たる太平を樂んだのであつた。

斯うして、京の春は、何處にも、溢れて居たが、眞に其の極致を示したのは、島原の廓であつた。島原は、江戸、大阪の廓にくらべて、遙かに上品で、落着いて居た。總じて、クラシツクの匂ひが、全體に溢れて居た。其の光景は『本町に入つて見れば、隔子のうちには、金屏風はしらかし、眞若盆に眞刻、匂ひたばこなんど、金銀の煙管取り添へ、池田炭を富士灰に埋み、時々伽羅梅花侍從なんど、おぼろにくゆらかし、打しめりたる所に、三味線の音折々引て、さすがにかしましからず。』と『東海道名所記』にあるのを見ても、優雅な古典的な廓の情趣を想像し得るであらう。

斯うした光景のうちに、赤前垂をかけて、手拭を腰にはさんだ遣手や、戀の手紙を持つて往來する禿や、青暖簾をかけた家のうちに物思はし氣に座つて居る傾城や、大門の外へ走り出て、馴染の男に囁く若い女などの姿が、何れも、春の情趣にふさわしいところがあつた。

島原の太夫の風情については、西鶴の『一代男』に詳叙されて居るが、それに依ると、當時、全盛を極めて居た太夫は『内輪子の袷に狩野の雪信に秋の野を畫かせ、之によそへての本歌公家衆八人の銘々書き、世間の慰物にも稀なり。』と嘆美の聲をあげて居る。西鶴は、また遊女の滋味ある風情について『眉剃りて置墨濃く、小枕無しの大島田、一筋懸の隱結ひ、細疊の平元結、後れは假にも嫌ひて拔き揃へ、二尺五寸袖の當世仕立、腰に綿入れず、裾廣がりに尻付大きに平たく見ゆるを好み、しんなしの大幅帯しどけなくつい結びて、三布なる下紐常の女より高く結びて、三襲の衣裝着こなし。』と記して居る。

春の夜、古雅な室で、銀燭の下に、優婉な島原の太夫を前にして、夜光の杯を擧げる心持は、四邊の靜かさと共に、しんみりした快さを、當時の人々に與へたであらう。西鶴の『一代女』『一代男』に描かれた島原通ひの大盡や、通客は、左樣した沈靜な雰氣のうちにあることを喜んで、取卷きの者に歌の話や、能の評判などをして、落着いた風雅の味を忘れなかつたのである。島原の春は、どうしても、古典的だつた。

私は、斯うして、文藝復興期に於ける三都の春と情趣とを略叙した。私は、進んで、近松が見た春、西鶴が見た春、徂徠や、仁齋や、一蝶などが見た春のことを記したいのであるが、もう紙數がないので、それを後日に期するよりほかはない。

唯私は、近松の暖かい眼、西鶴の冷たい眼、徂徠の鋭い眼、仁齋の柔かな眼、一蝶の光つた眼に映つた文藝復興期の春と世相とが、可なりに有意義な、興味あることだと云ふことを思ふのである。

私の『花柳病男子拒婚同盟』觀

「生殖衛生」の社會的見地から

醫學博士 文學博士　富士川游

性慾の衛生には個人的の方面と、社會的の方面とがある、個人的の方面は措て論ぜず、社會的の方面のことに就ては、近時ヘガール、プレッツ、コスマン等諸家が人種學的人種研究の結果によりて得たる成績に基づきて、新に「生殖衛生」と名づくる專門の一科を成すまでに進歩した。「生殖衛生」といふのは人種生物學の一部門として、人種の變質と遺傳性原因とを主要の問題とし、生殖衛生によりてこれを改善し、又はこれを撲滅せむことを圖るのである。それ故に、「生殖衛生」の中心問題は戀愛の選擇である。戀愛の選擇は性慾上の淘汰である。しかしながら實際にありて、性慾上の淘汰は甚だ困難のことで、正當の男が正當の女を發見し、正當の女が正當の男を發見するといふことは殆ど全く不可能のことで、大抵の場合は關係的の調和を得ること、以て滿足せねばならぬ。

エリス氏の研究に據れば、人種的標徴及び個性的標徴の同等なること、二次性徴の不同等なることが、戀愛の選擇の上に、都合が善いものである。又ダルウイン氏の説に據ると、性慾上の淘汰の原則として、男女の兩性が、その身體及び精神が下位にあり、又低格のものである場合には、結婚を抑制すべきである。古代の人民の或者が病的又は虚弱の小兒を殺したのも、又近代にありて、たとへば米國の一二の州にて精神病者、結核及び梅毒病者の結婚を禁制するの法律を制定せるが如きも、全くこの思想に基づくものである。

兎も角も、「生殖衛生」にありて最も重要の事項とする所のものは、ただ健康の身體及び精神を有するもののみが結婚すべきことである。少なくとも、一定の異常又は疾病を有するものにて、しかもその異常又は疾病がその子孫の身體及び精神を傳

せぬものに限りて結婚を許すべきである。それ故に、社會的方面から見て、花柳病（徽毒、淋疾、軟性下疳）に罹れるものの結婚を禁制すべきことは、生殖衛生の要項とせねばならぬ。

徽毒と淋疾とは、實に人種の變質を起す所の主要なる原因として、酒毒及び結核に併せて、生殖衛生の上に最も深く注意せねばならぬものである。しかしながら結婚の禁制といふことはただ生殖衛生の一部であつて、結婚以外、尙ほ共通に花柳病の害毒を蔓延すべき方法が存在して居る。すなはち賣笑婦との性慾的交際が、結婚と同じやうに常に多數の人々の間に行はれて居る以上は、たとひ結婚の上に嚴重の制限を加へるにしても、花柳病の害毒は賣笑婦の方面よりして、益々その勢力を逞くすることは疑のない事實である。

それ故に、性慾衛生の社會的方面は、個人的の方面の如くにこれを簡單に解決することの出來ないものである。新婦人協會の諸氏が、花柳病に罹れる男子に對して結婚を拒絶すべき同盟をつくるといふことが、社會的方面より見て性慾の衛生にどれほどの効果があるかといふことに就ては、余は甚だこれを疑はざるを得ぬのである。ただ自覺せる新婦人が、性慾衛生の必要を宣傳するといふ意味に於て、余は此の如き運動を成立せしめたいと思ふ。しかしながら、社會的方面より見て、此の如き生殖衛生的の運動を起して、徹底的にこれを實施せんとならば、先づ賣笑婦を撲滅することを第一につとめねばならぬ。第二に性慾教育を十分にして、母たるものの性慾に關する知識を進めることをつとめねばならぬ。第三に性慾倫理の舊思想を改めて、生殖衛生の本旨に適するやうにせねばならぬ。新婦人協會諸氏の運動は果してこの點にまで及ぶのであるか、どうだか。

チヨツト面白いと云ふ位のもの

堺利彦

事柄は何んでも構はない。女が團結して男を排斥するとか、男に對抗するとかいふ其の意氣は大いに面白い。

然し、花柳病の問題はよく考へて見ると、大ぶん變な所がある。第一、花柳病は男にばかりあるものとは極まつてゐない。本人が無いと云つてゐても、必ず無いとは限らない。從つて此の問題で男にブツつからうとする女は、先づ自ら醫師の診斷を受ける必要がある。

次に、醫師の云ふ所を聞くと、大抵の男は花柳病に罹つてゐ

る。そこで花柳病の男に對して結婚を拒絶するとなれば、つまり結婚をしない覺悟をする事が必要になる。それが多くの女に、生理上からも經濟上からも、出來る事かどうか。

結婚の場合に仲人口といふ事がある。仲人が好い加減な嘘をついて巧みに双方の話を纒めるのが通例になつてゐる。これは誠に不都合な事だと云ふ議論がある。然し其の不都合な事が盛んに行はれてゐるのには、矢張りそこに理由がある。若し仲人が本統の事ばかり云つてゐたら、話の纒まる氣遣ひは先づ無いと云つてもいゝ。例へば、若い男の事だから、どうせ花柳病の少々くらゐやつて居るでせうとか、あの娘は處女の筈だけれども、いよいよの所は請合が出來ないとか、云ふ樣な事を仲人が云つたとしたらどうだらう。然しそれは大抵の場合、事實である。只だ其の事實の上に好い加減な嘘をかけて、それで双方の氣を安める事が實際上に必要である。斯ういふ世態の下に於いて、根ほり葉ほりの詮議立は無用である。清淨無垢の男女、日本一の花婿花嫁が滅多にあるものではない。然るに『清淨無垢』と自信する少數の女が集まつて、そんな潔癖な事を云つて見た所で、社會的に何程の效果を生ずるものではない。

それから此の問題について、根本に一つの間違があると思ふ。それはアノ婦人達が、花柳病といふものに特に不道徳な性質がある樣に考へてゐる事である。男が娼婦に戯れたりするから、それで花柳病に罹るのである。そんな不都合な事をしさへしなければよいのだといふ議論らしい。一應御尤もの議論ではあるが、此の問題はそんなに簡單に片づけるわけに行かない。多數の男が生活に困つて、結婚の機會が段々少なくなり、或は晩くなるといふ現狀の下に於いて、道徳論ばかりで男の性慾を抑へつける事は不可能である。男ばかりではない、女の方でも獨身者や晩婚者が次第に多くなる結果として、種々面倒な事や不愉快な事が續出してゐるのは、アノ婦人達もよく知つて居られる筈である。そこで此の問題は、モツト根本的な社會全體の改革まで進んで行かなければ解決はつかないわけである。

そこで要するに、拒婚同盟など丶云ふ事は、新らしい女の茶氣として、チヨツト面白いと云ふ位のもので、本氣に批評するには足りない事柄である。禁酒運動とか、廢娼運動とかいふ、空虚な淺見な道徳運動と同列に目すべきものである。

男も亦女に對して拒婚の權利あり

高島米峯

一 男も無げなる振舞

過去長い間、男子のために、虐げられて居た女子の中から、覺醒し自覺した若干の女子を産み出した結果、それ等の人々の主張に基き、男子中心主義は、議論としては、最早、根柢から覆されて仕舞つたと言つてもよいばかりでなく、その反動は、反動に伴ふ當然の特色であるところの、極めて誇張的な傾向を取つて、生じて來たゝめに、時に或は、女子中心主義であるまいかとさへ、疑はれる程の、論議の發展を、見ることもないではない。彼の、新婦人協會の、『花柳病男子拒婚同盟』の如き、即ちその一である。僕等は、女子を敬愛することに於て、敢て人後に墜ちるものだとは思はないが、しかし、あまり圖に乘つて男も無げなる振舞をされると、ツイ、孔夫子のやうに、『これを近づくれば不遜』といふやうなことも、言つて見たくなる。

男子中心主義の誤れること、假令男子と雖も、既にこれを承認せざるを得ざることを知つて居る。されど、男子中心主義を誤れりと知りたればとて、女子中心主義を以て、取つてこれに代らしめやうなどゝは、毛頭考へ及ばないのである。正直なところ、今の日本の女子は、眞に、極めて少數の例外を除いて、その大多數は、覺醒どころか自覺どころか、依然として、無力、無能、徒に男子の世界に寄寓し、男子の力に依頼し、甚だしきに至つては、男子に虐げらるゝことをさへ、女子當然の境遇として、それに滿足しつゝある如きものも、少くないのであつて、その實力は、到底、男子と、互角の太刀打を爲し得る程度のものではない。勿論、それは、女子自身のみの罪でないことも、又、將來、いつまでも、そんな狀態が持續するものとも思はないが、現在の事實は、依然として、男子中心主義の惰力が頗る強大であつて、折角、女子側から主張せらるゝ、女子中心主義的論議も、實際的勢力を得ることは、頗る困難であると、觀測せられて居るのである。

二 男子を征服せむとするか

されど、若し、男子中心にもあらず、女子中心にもあらず、男女對等の立場に立つての女子の要求、例へば、治警第五條撤廢の如き、女子參政權獲得の如きに至つては、それこそ、眞に

極めて少數頑迷固陋の徒を除き、何人と雖も、これに賛成せざるを得ないところであらう。たゞ、制度の更改が、國家として多少の手數を要するところからして、急速に實行せられるかどうかは疑問であるが、要するに、殘された問題は、時間の一點であつて、近き將來に於て、必ず實現せらるべきものであることを確信する。これに比し來る時、女子側から主張せらるゝ、『花柳病男子拒婚同盟』の如きは、その出發の動機が、男子に對抗し、男子と戰ひ、男子を征服せむとするに在るのであつて、その意氣の盛なるは嘉すべきも、その女子中心主義に膠着して、この世界を、女子の世界に改造しやうといふやうなところに、幾多の矛盾と破綻との存在することを、看過する譯にはゆかない。何故に、女子は、男子と協力提携して、相共に、この惡疾を、男子の世界からも、女子の世界からも、即ち人間の世界から、驅逐して仕舞はうとはしないのであるか。恰も、花柳病は、男子のみの特發病なるかの如く見做し、又、男子は、全くこの惡疾驅除に、些子兒も意を勞して居ないものなるかの如く見做して、女子のみの力によつて、しかも、それが、男子に對する挑戰的態度を執つて、發表せられたといふことは、惡疾驅除の志は諒とすべきも、その手段の淺墓にして、如何にも、日本女子のやりそうなことのやうに思へて、新婦人協會の如き、日本女子の先覺者の集團の名譽のために、衷心から、氣の毒の感に堪へないのである。

三　女子に對して男子も拒婚

花柳病驅逐、何等の好事業ぞ。これを以て、僕等不敏の徒と雖も、久しき以前より、花柳病傳播の機關たる、公娼及び私娼の撲滅廢止のために、幾多の力を傾倒し來り、今尙、その運動を繼續しつゝあるのである。勿論、公娼私娼の廢止撲滅の運動は、單に、花柳病驅除のみの目的のために、爲されるものではなく、道德上宗敎上、更に重大なる意義を有するものではあるが、花柳病驅除といふことも、實にその目的の一を爲して居るのである。新婦人協會の主張する『花柳病男子拒婚同盟』の如き、もとより、幾何か、花柳病を減殺する效果はあるでもあらうが、その手段が、恰も、臭いものには蓋をして置けといふが如き、消極的のものであつて、花柳病の根本的勦絕といふ、積極的の手段でないことが、僕等の最も遺憾とするところである。

花柳病が、若し、男子のみに特發する惡疾ならば、女子側に、拒婚同盟の成立することを至當とせざるを得ないのであるが、旣に男女共通の惡疾であるばかりでなく、傳染病であると同時に、遺傳病でもあるのであつて、男女の數が、略々同等である

日本に於ては、花柳病患者も、男女殆ど同數であるなどゝ、速斷することは出來まいが、縱令、女子の花柳病患者が、男子に比して、極めて少數であるとしても、既に女子にも亦花柳病患者これある以上、女子側から男子側に對して、拒婚同盟を爲すと同時に、男子側からも、女子側に對して、拒婚同盟を爲す必要があるのである。それは、女子側に、花柳病患者でないものゝあるが如く、男子側にも、花柳病患者でないものがあるからである。かやうに考へ來る時、新婦人協會の『花柳病男子拒婚同盟』は、『男子』の二字を削除して、單に『花柳病者拒婚同盟』と改稱し、男女協同提契の運動と、なされなければならないことになる。

四　身心兩面の大廓淸大改造

單に花柳病ばかりでない、結核病、精神病、その他一切の傳染病遺傳病患者に對して、男女の別なく、拒婚するといふことは、國民保健上の重要問題である。從つて、こゝに『惡疾者拒婚同盟』といふを組織して、男女共通の大運動を起し、花柳病患者に對する拒婚の如きも、その內に攝して仕舞ふといふことも、一の方法である。しかし、僕一個の愚見によれば、そうした消極的手段も、勿論必要である、しかし、それは恰も、腫物に對して、膏藥を貼り、一時應急の所置をつけて置くのと同じであつて、甚だ不徹底たるを免れない。その他に、更に、病毒勦滅の根本的大手術を施すといふ、積極的方法が講ぜられて、內外相應じて、こゝに始めて、十全なる效果を收め得らるゝことゝ信ずるのである。積極的方法とは何であるか、曰はく、各人の宗敎的信仰と、道德的自覺とに基いた、身心兩面の大廓淸大改造である。

饑餓も戀愛も、止むに止まれない本能である。しかし、この本能は、種族の保存と、その向上と、繁榮といふことに依つて、始めて意義づけられ、淨化せられて、飲食も性慾も、そこに偉大なる尊嚴を認めさせられ、苟もこれを猥りにすべきものでないといふことを、痛感せしめられるのである。飲食のために飲食するのでもなく、性慾のために性慾を遂げるのでもない、たゞ種族の保存と向上と繁榮とのためにのみ、飲食を爲し性慾を遂げるのである。從つて、この大目的を到達するがための積極的方法に基づいて、時に或は、却つて、飲食を減ぜしめ、性慾を禁ずるといふ、積極的手段を執らねばならぬこともあらう。『惡疾者拒婚同盟』の如き、實に、こゝに立脚地を有しなければならないのである。人苟も、種族の保存と向上と繁榮といふ、大目的を有する以上、自らその道德的自覺に依つて、その行爲

を純潔にし、この目的の到達を妨げるやうな、悪疾の傳染を受けないやうに、努力しなければならないし、又、既に、父母より悪遺傳を受けたるが如き不幸なる子孫は、その宗教的信念に依つて、克己制慾、他をして、亦、不幸の子孫たらしめないといふだけの、用意がなければならない。

五　女子は同性のために働け

かく言へばとて、新婦人協會の『花柳病男子拒婚同盟』が、無用だといふのでもなく、又、無效だといふのでもない。それには、確に、道徳的意義もあるし、優生學上の根據もある。たゞ女子側から、男子側に對する、宣戰の布告であるといふことが、少からず、男子側の反感をそゝるものであることに想到して、更に、その組織を變更し、範圍を擴張し、男女協力して、一切の悪疾患者とは、結婚しないといふ運動に改造し、その實行方法の如き、全然、男子の手に委ねるが如きも、却つて甚だ皮肉にして、從來、兎角横暴なりし男子側に對する、女子側の報復として、頗る巧妙を極めた手段ではあるまいか。そして、新婦人協會の諸君は、男女對等の立場から、徹底的普通選擧論を掲げて、女子の參政權を獲得すること、及び、諸君の同性が、動物の如く取扱はれて、風教上からも、保健上からも、一日と雖も、忽にして置けない夫の悪むべき、公娼の廢止のためなどに、全力を傾倒し來らんことを、切望に堪へないところである。（大正十年一月十九日）

男の立場として

本間久雄

Ａ兄、新婦人協會が、第四十四議會へ「花柳病者に對する結婚制限並びに離婚請求の請願書」を提出しようとしてゐることについては私は第二義的な意味では多少の賛成を表しますが、第一義的の意義では寧ろは不賛成を唱へたいと思ひます。

先づ便宜上その請願の如何なるものであるかを調べて見ますと、それは次の通りであります。

請願事項

一、花柳病者に對し、左の第一條より第十條までの意味の條項を含む花柳病者結婚制限法を單獨法として制定すること。

一、民法親族篇第三章婚姻第四節離婚の規定中の適當なる個所へ左の第十一條及第十二條の意味の條項を追加する事。

右謹んで請願いたします。

第一條　婚姻をなさんとする男子は婚姻許可證の交付を住所地の市町村長に申請すべし。事實上の夫婦關係を結ばんとする場

合亦同じ。

第二條　市町村長は有資格醫師が一週間内に作成せる傳染性花柳病(淋疾、黴毒、軟性下疳を含む)患者にあらざる旨の診斷書を提出せる男子に對し婚姻許可證を交付すべし。

第三條　市町村長は貧困者に對してはその請求により市町村長の指定せる醫師をして無料にて診察し且つ診斷書を附與せしむべし。

第四條　婚姻許可證を持たざる男子は婚姻を爲し、又は事實上の夫婦關係を結ぶことを得ず。

第五條　女子は婚姻許可證を持たざる男子と結婚を爲し、又は事實上の夫婦關係を結ぶことを得ず。

第六條　第四條に違反せる男子は三百圓以下の罰金に處す。第五條に違反せる女子亦同じ。

第七條　虚僞の診斷書を提出して交付せられたる婚姻許可證によつて婚姻を爲し、又は事實上の夫婦關係を結べる男子は五百圓以下の罰金に處す。

第八條　本法の規定に違反して爲したる婚姻は之を取消すことを得。

第九條　婚姻を爲さんとする女子は其相手方たる男子より傳染性花柳病患者にあらざる旨の有資格醫師の診斷書の提示を請求せられたる場合はこれを拒むことを得ず。

第十條　當該吏員の請求あるとき婚姻當事者又は事實上の夫婦關係を結べる者は婚姻許可證を提示すべし。

第十一條　結婚後當事者の一方が花柳病に罹れる場合には他の一方は全治に至る迄の別居又は離婚を請求することを得。

第十二條　當事者の一方が他の一方に花柳病々毒を感染せしめたる場合には離婚の後被害者は加害者に對し全治までの治療費と相當の慰藉料とを請求する事を得。但し勞働不能に陷れる場合には生活費をも請求する事を得。

花柳病の蔓延が、戰慄すべき毒害を個人と社會と種族との上に齎らしつゝあることの、國家衞生の立場から、種族衞生の立場から呪ふべきものであることは改めて云ふまでもありません。この立場から、新婦人協會が、以上の法律制定を要求したのは、或る意味で寧ろ當然過ぎるほど當然な時代的要求であるとも云へませう。

この請願が先頃の第四十三議會へ提出されたとき不採擇に終つたことは、人の記憶にまだ新たなことゝ存じます。これについて醫學博士大澤謙二氏の意見が、同じ「女性同盟」の十二月號に出てゐます。それによると、博士は、右の請願不採擇の理由として下の五つを數へて居られます。その五つとは(一)性交以外にも傳染する場合がある。(二)男子に限つて制裁を加ふるは不公平であり、且つ花柳病豫防の目的にも協はぬ。(三)個人主義であり、且つ女尊男卑の歐米に於ては可なるべきも、男尊女卑であり、且つ家族主義であるところの我邦には行ふべからず。(四)離婚の數を激増する。(五)慢性花柳病の有無は確實に診斷する事が出來ぬ。といふ五ケ條です。この五ケ條で右の請

願は不採擇に終つたといふことです。そして博士はこの五ケ條の不合理であることを説いて居られます。

この五ケ條は、その第二ケ條である男子に限つて制裁を加ふるは不公平であるといふ一條を除いては、全く一笑にだも値しない薄弱な反對理由です。殊に第三ケ條などは、さういふことを考へてゐる人間の頭のいかに保守的で、時代錯誤的であるかを赤裸々に示したものでなくて何でせうか。或ひはかういふ保守的な考へを抱いてゐる男があるからこそ、右のやうな請願が實際必要になつて來るのかも知れません、

私は、第二義的な意味に於ては右の請願に多少の賛成を表すると申しました。さうです。確かに第二義的の意味に於てです。といふのは、私は、性的關係の一切は、第一義的の意味においては、法律を超越した、より自由のものとして考へらるべきであると思つてゐるからであります。而も第二義的な、方便的な意味に於ても私は多少の賛成を表するだけです。全部の賛成を表することが出來ません。

この請願は、請願理由の説明書きにも明かである通り、主として婦人の立場から考へられて居ります。即ち、この請願では男子は必ず、患者でないといふ醫師の診斷書を得て、婚姻許可證を市町村長に申請し、それを得なければならないことになつてゐますが、女子にはさういふ強制的な法制が規定してありません。たゞ、女子は其相手たる男子より患者でないといふ醫師の診斷書の提示を請求された場合に拒むことが出來ないといふ極めて消極的な意味になつて居ります。そして、女子が男子と同樣な取締りを要しない理由として、當事者は(イ)花柳病男子の數が該病女子のそれより遥かに多いこと(ロ)未婚女子に對してかゝる身體檢査を行ふ事は事實に於ては習慣上可なりの困難や、又それに伴ふ危險が豫想されること(ハ)或る地方又は或る社會に於ける未婚女子にたとへ該病患者が多いとしても、かゝる局部的現象を以て全體を律し得ないこと(ニ)男子の性的生活は女子のこれに比して遥かに放縱に流れ易く、又事實放縱であること(ホ)これによつて、婦人を通じてなし得る男子の放縱なる性的生活に對する一種の制裁としたいこと、といふ五つの理由を擧げてゐます。

婦人本位に考へれば、無論その通りでせう。この法律が制定されたなら、たしかに男子の放縱に對する一種の制裁ともなりませう。そしてそれだけの意味でも、この法律は或ひは價値あるものであるかも知れません。しかし私が、如上の請願に、双手を擧げて賛成しがたいのは、それが餘りに婦人本位であるからであります。

成程現在に於て花柳病にかゝつてゐる男子は、婦人のそれよりも數に於て非常に多いでせう。又、男子が放縱に流れ易いことも、事實又流れてゐることも確かにその通りでせう。しかし又、男子の中には可なり謹嚴に、道德的に已れを守つてゐるものも決して少なくないと信じます。さういふ道德的な男が、花柳病であるか否かの診斷を醫者に乞ふ時の心持ちを考へて御覽なさい。男女が皆一樣に、除外例なくさういふ身體檢査を行ふのであればとに角、偶に不道德な男子があるからといふ理由で、道德堅固に已れを持した男子までが他の不道德な男子と同樣の取締りを受けなければならないといふことは、道德堅固であればあるほどその男子に取つて不愉快至極のことではないでせうか。恐らくその不愉快は、貞潔な未婚女子がその檢査を受けるときの不愉快さと何等ことなるところがないであらうと私は考へます。

尤も當事者は、さういふ道德的な男子は、極めて少ないから、さういふ局部的現象で全體を論ずることが出來ないといふかも知れません。しかしこれは、男子を數的又は量的に又は物質的に考へて、その質的方面、精神的方面を考へないものゝいふことであつて、餘りに男子個々人の感情と氣分とを無視した物の見方であります。

から云つたならば、論者は或ひは、男子が除外例なく身體檢査を受けるのは、例へば徵兵檢査のやうなもので、始めはとに角、永い間にはその氣分の上でも何等不思議を感ずることがなくなるであらうといふかも知れません。しかしそれは全然問題が違ひます、結婚乃至一切の性的關係は男女相互の協同關係であつて、男子だけが與る徵兵問題の如きとは全然その性質を異にするものであります。

種族衞生の立場から、結婚に於て男子が身體檢査を受けるのは最も望ましいことです。しかしこのことは女子に向つても同時に望ましいことです。結婚から生ずる幸福も不幸も、その當事者である男女二人に關係してゐる以上、身體の健全であるといふことを證するためには、双分ともそれだけのことをするのは寧ろ餘りに當然なことではないでせうか。ですから、私はこの請願には男女を對等に取扱つて貰ひたいと思ひます。

しかし更に進んで私は、この結婚許可證なるものゝ內容を擴充して、單に花柳病ばかりでなく、男女相互の身體の狀態の果して結婚に適するか否か、果して結婚から善い結果が生れるやうな狀態にあるか否かといふ、ひろい意味にした方がよくはないかと思ひます。花柳病以外に、種族衞生の立場から見て、結婚不可能に、或ひは結婚を悲慘ならしめるやうなさま〱の疾

病を持つてゐる男女には、結婚許可證を與へない方がよいかと思ひます。つまり私は、結婚許可證の內容をかういふ風に擴充して、それを、もし法律にしなければならないならば、したいと思ひます。もし又、强ひて花柳病の有無を以て結婚許可證の條件とするといふならば、前にも述べたやうにこれを男ばかりに求めるといふことをしないで、女にも同樣にこれを要求したいと思ひます。これを、「新婦人協會」の請願のやうに、男にのみ要求するのは、丁度一國の政治が男女相互に密接な利害關係を持つてゐるにかゝはらず、在來のやうに女に參政權を與へないことゝの不合理であるやうなものではないでせうか。

しかし、かう云つたからと云つて、私が以上の請願に全然不贊成だと云ふのでないことは改めて說明するまでもありません。たゞ、男女相互に身體檢査を行はせるといふ條件づきで贊成するのであります。で、右の十ケ條の請願事項は、私の上の立場からは第四條の「婚姻許可證を持たざる男子は」は男女はとなり、從つて第五條と第九條とが抹殺されるわけであります。

しかし又、他方から考へると、以上の請願が假りに採擇されて、法文に、制定されたと假定されたとしても、實際上にどれだけ效果があるか餘程疑はしいやうにも思はれます。たしかにそれは男女性的道德上、殊に男の性的道德上の一つの刺戟にはなりませう。しかし、男女が、今日よりもずつと性道德上の自覺が深められないうちは、百の法令千の法令も格別效果を齎らさないではないかと疑ひます。請願書にも「婚姻許可證を持たざる男子は婚姻を爲し、又は事實上の夫婦關係を結ぶことを得ず」とありますが、この、「事實上の夫婦關係」といふのが甚だ問題です。前に引用した大澤博士も、この請願の不採擇の五ケ條(前に擧げました)の不合理であることを述べられた後に、しかしこの請願を殆んど無效ならしめるものは、この外にある。それは所謂內緣の妻といふ夫婦關係である。いかに立派な媒介を有する結婚であつても、「婚姻は戶籍吏に屆け出づることによつて、成立する」のであるから、內緣關係は法律上の行爲でなく從つて健康診斷を要しない。もし內緣者の一方が花柳病にかゝつてゐたならば、正式の屆出の時には早く既にこれに感染してゐるわけである。賣淫は禁ずる事が出來ても、內緣は和姦であるから法律を以て左右することは出來ないと云つて、請願當事者の反省を求めて居られますが、實際この內緣關係又は事實上の夫婦關係といふものは、法律的に解決するには困難であらうと考へられます。ですから、法律上の婚姻の場合はとに角事實上の夫婦關係の場合には、花柳病問題に關しては、全く男女相互の道德意識、男女相互の衞生思想に訴へるより外はないかと思

はれます。

私は前にも申しました通り、第一義的には、性的關係は法律を超越すべきものだと考へてゐます。社會主義者のバックスは、將來の男女關係を述べて、「女も又男と同じく彼女の性慾を滿足させ、彼女の幸福を求める同樣の機會を持つであらう。彼女は肉體的にも經濟的にも、男によりかゝるといふことがなくなり、すべての點で、彼女自分の運命の開拓者となるであらう。結婚は、何等法律的干渉を經ざる私的契約となるであらう。性的刺戟の滿足は、男に取つても女に取つても自由に委せらるべき一私事となるであらう。あたかも他の感情又は食慾のやうに。」と云つてゐますが、これは非常に味ふべき言葉であると信じます。結婚の最も進んだ狀態は、恐らく、それが法律的干渉を經ない私的契約であるといふところにあるかと考へられます。

しかし、かくの如きにいふまでもなく容易に達しがたい、前途遼遠な理想です。私は現在においてこの理想を實現しようなどとは少しも思ひません。しかし性的關係は成るべく、出來るだけ、法律上の問題ではなく感情上の問題、道徳上の問題としたいと思つてゐます。早い話しが、戀愛問題です。戀愛は實際微妙な感情ですから、花柳病問題とは無關係にこれの勃發することはいくらも有り得ることです。言葉を換へて云へば、花柳病にかゝつてゐないといふ證明があつて始めて戀愛がおこるものでもなく、又たとへ相手の男女が該病にかゝつてゐると知つた場合に戀愛感情が消えて了ふといふものでもありません。從つて、戀愛が結婚の中の最も重要な要素となつてゐる以上――又なるべきものである以上――花柳病有無の法律的條文だけでは決して結婚問題は解決されるものではありません。戀愛問題結婚問題は、寧ろさういふ法律を無視した、一層力強いものであらうと私は考へます。これはほんの一例ですが、そんな理由で、とに角私は、一切の性的關係は、第一義的意味においては勿論現在の社會においても、成るべくは法的問題とすることを避けて男女各自の眞實な意識、社會意識、道徳意識に訴へたいと思ひます。そしてそこにいかなる法律上の制定があるにしても、それを空文に終らせるほど、男女各自の眞實意識、社會意識、道徳意識が發達したものでありたいと望んでゐます。私が、始め第一義の意味において上記結婚制限の法律に不贊成であると云つた意義はこゝにあります。

しかし誤解のないために繰りかへしますが、私は決して性道徳の問題について、少くも現在の社會狀態の下において、法律を蔑みしたり、又は不必要としたりするのでは無論ありません。

いや、それどころか、性道徳進化の階段上、充分に法律の必要と權威とを認めてゐます。從つて「新婦人協會」提出の上記の請願についても十分の同感は持つてゐます。たゞ上來述べたやうな理由で、その請願そのものに徹底的に贊成しかねるのを甚だ遺憾に感ずるのであります。

最後に男の立場として一言したいことは、花柳病問題の如きは、男は男自身で解決すべきものだと私は考へてゐるといふことであります。女よりも男の方に該病患者の多いのは如何なる原因によるか。男が女よりも性的道德上放縱であるのは何によるか。そこには何等かの生理的原因がないだらうか。或ひは又そこには何等かの經濟的事情、結婚難、生活難等の實生活上の事情がないだらうか。或ひは又、そこには國家公認の公娼、又は半公認の私娼藝者等の存在するといふ社會狀態が原因となることがないだらうか。言葉を換へて云へば、社會が公々然と或ひは半公然と、男子の道德的放縱を是認してゐることが、男子をして放縱ならしめる大なる原因ではないだらうか。――花柳病問題の如きも、私はまづさういふさまざまの源因に遡つて考へたいと思ひます。そして男が次第に覺醒して、男が現に構成してゐるこれらもろもろの惡しき社會狀態なり、社會制度なりを改革して、それによつて、花柳病問題を、男自身が積極的に解決すべきであると考へます。といふのは、この問題について女が、わづかに消極的に責を負ふてゐるに比して男は積極的に責を負ふてゐるからであります。そして又さうするのが、男が男自身を尊敬する所以であり、又男が女を尊敬する所以であるからであります。尤もその解決の上において、男が女の力を借りなければならないのはいふまでもありません。

これは一個の空想かも知れません。しかしこれは私の直截な僞らない感情であります。

拒婚同盟の是非

江口渙

最近、新婦人協會の主唱で未婚の婦人達の間に、拒婚同盟と云ふものが成立したとか或は成立しつゝあるとか云ふ話だ。そして新婦人協會の中心人物とも云ふ可き平塚らいてう氏は、雜誌「改造」の二月に於いて、それに關する自身の意見を發表してゐる。あの一文の中で、らいてう氏は拒婚同盟については餘白がないと稱してあまり多くを語つてゐないが、その提唱にかゝる花柳病男子の結婚取締りについては、可なりに長い說明を試みてゐる。私は先づそれに對する私自身の意見を述べて、更に拒

娼同盟の是非に及びたい。

私は平塚氏等の提唱にかかる花柳病男子の結婚取締りに對する根本の態度に關して、大きな疑ひを抱いてゐる一人である事をここに言明したい。否、實は疑ひと云ふやうな生温い程度のものではなく、むしろ絶對に反對の意見を把持してゐる一人であると云つても好い。然かもこの一事は更に進んで同氏等の主唱してゐる婦人參政權運動に對する私自身の反對意見にも相連係してゐるのである。そして、これ等の問題に對する私自身の立場が如何なるものであるかと云ふ事を、私はここに出來る限り委しく說明したい。何となればこれ等に對する答ば、同時に私が最近強く把持する事の出來た新しい立場を宣明する事にもなるからである。

昨年一月だか二月だか、平塚らいてう氏等が花柳病男子の結婚取締りに關する請願書を提出した時、私も、それに署名捺印した一人である。その上、方々の新聞社雜誌社から婦人參政權運動の可否に就いて問合せを受けた時、私は何時も贊成の答を與へて來た。然るに最近に於いて私は私自身の新しい立脚點を把持する事が出來るやうになつたとともに、それ等の問題に對する私の態度は、以前のそれとは全く異つたものとなつた。そして、所謂世間の風潮とでも云ふ可きものに動かされて、唯漫然と贊成してゐた以前の私を、現在の私は心から恥ぢてゐる。然らば最近に於いて把持する事の出來た私の新しい立脚點とは何であるか。以下、少しくそれに對する私の考を述べたい。

私は思ふ。人間生活に關する凡ての問題、それが個人的の問題でも、社會的の問題でも、最初の出發點は必ず各々の個人の各々の自己の上に、自己の人格の上に必ず確實に置かなければならない。何となれば如何なる場合に於いても、自己は自己の人格は、自己の全生命の本源だからだ。(ここに云ふ人格とは單なる道德上の人格ではなく、哲學上の人格を意味する)そして、人間が自己の生命を完き値に於いて生きんがためには、その生命の本源であるところの自己の人格を飽くまで完全なものにしなければならないのは云ふまでもない。否。人格を完きものにする事が、卽ち自己を生命を完き値に於いて生きる事だ。そしてこれを內面的に云へば、その充實を最高度に於いて計る事であり、又、これを外面的に云へばその獨立性を絶對なものたらしむる事である。然かも此の場合に於ける充實と獨立性とは、ほんとうに云へば決して內面、外面の二つに分ける事の出來るものではなく、何時も絶對不離の關係にあるのだ。そして、自己の人格の完全なる充實と絶對なる獨立と云ふ事は、究極に於

いて自己が自己の統制となり、自己が自己の主權者となり、その統制の裡に、主權の裡に、自己が自己の生命を完全た形に於いて生かす事だ。かくしてこそ始めて人間が人間として生きる事が出來るのである。

然かも現實當面の生活に於いて、人間が自己の生命を完全な形に於いて生かさうとする事に對して、自己の人格に完全なる充實と絕對なる獨立性とを與へやうとする事に對して、人間は二つの對象から外部的に不斷の障害を受けてゐる。その一つは經濟上に於ける資本主義である。もう一つは、政治上に於ける權力主義である。そして、この二つのものが、人格の完全なる充實と絕對なる獨立とにとつて、不斷の障害である以上、人間は自己の人格のために、その障害を飽くまでも突破しなければならないのは、無論、今更云ふまでもなからう。そして、人間にとつて、現實生活に於ける最高の價値は、自己の人格のために有ゆる障害と脅威とを突破しつゝ進むところから生まれて來るのだ。否。その突破の焦點から、焦點に於ける極度の緊張から生まれて來るのだ。

これを以つて理想に依つて現實を突き崩すと云ふ事も出來る。又、ベルグソンの言葉に從へば、主觀に依つて客觀を突破すると云ふ事にもなるのだ。この點に於いて、カントの價値の哲學とベルグソンの直觀の哲學との關係を論じ、更にその究極に於ける兩者の合致を一應說明すべきであるが、今はこの一文の本來の主體とあまりに遠くなる惧があるから、止めて置く。然かも、以上の說明だけで、私の立場は十分明かになつた事と思ふ。

然るに婦人參政權運動の究極の目的は、男子に依つて不合理に奪はれたる婦人それ自身の權利を奪還し、その虐げられたる生活を正しきものに置き換へると云ふ事にあるにしても、現在の社會に於ける議會主義の政治、權力主義の政治にその基礎を置く以上、現在の男子と男子との間に於けると同樣、最後に於いて結局、婦人と婦人との間に、新しく、支配階級と被支配階級、權力階級と無權力階級とを造る事に終るだけだ。かくの如くして、婦人參政權運動が首尾好く成就したところで、結局、それが何になるのだ。成程、政權に參與する事が出來て新たに支配階級となり得た少數の婦人にとつては、他人を支配し得た滿足、又は將來に於いても支配し得る滿足を十分感じる事が出來るかも知れない。これに反して、かかる少數の婦人を支配階級に送り込んだ多數の婦人は即ち被支配階級に屬する多數の婦人は、如何に權利が伸長されたところにしろ、現在の被支配階級に屬

する男子と略同程度のものしか與へられないのは明かな事だ。

現在の社會狀態に於ける男子と男子の間、男子と女子との間に、支配階級と被支配階級とのある事に依つて、人間の個々の人格の完全な充實と絕對な獨立とが如何に絕えず妨げられつゝあるかを痛感してゐる者にとつては、婦人の間に新たに支配階級と被支配階級を造る事も亦、男子の場合に於けると同樣、不合理の事として排けられるのは當然な事だ。男子と男子との間、男子と婦人との間には不合理だが、婦人と婦人との間でならば不合理でないと云ふやうな、そんな莫迦げた事は、無論、斷じてあり得ない。

パンクハースト夫人等の英國に於ける婦人參政權運動が如何に猛烈であり、勇敢であるかに就いては、倫敦のトラフアルガー・スクエアでそれを遇然見た事のある石川三四郎氏から、かつてその目擊談を聽いた事がある。彼等が示威運動の行列を喰ひ止める騎馬巡査の馬の腹をくぐつて勇敢に突進する處や、群り寄せる巡査を蹴つたり撲つたり嚙みついたりする處などには、その思ひつめた熱心さに一寸感心させられるものがないでもない。然し、彼等はそれだけの熱狂、それだけの勇氣、それだけの力を、何故もつと正しい方向へラデイカルな階級戰の方向へむけやうとしないのだらうか。それだけの立派なものを、單なる婦人と婦人との間に支配階級と被支配階級とを造るやうな運動に費さないで、自己の人格の完成と獨立とのために、資本主義と權力主義とを地上から一掃するために、それを用ゐやうとはしないのだらうか。そして、この二つのものを一掃しやうとするその過程の中に、人間としてのほんとうの生活を見出さうとはしないのだらうか。

全く婦人參政權運動は、特權階級、乃至は中産階級の婦人達が、同じ階級に屬する男子と同樣に、無產者階級の婦人達を支配しやうとするための運動、かく支配する事に依つて自己の野心を滿足させやうとするための運動と云はれても、どうにも辯護の出來ないところがある。

さて、個人の人格の完全なる充實、並に絕對の獨立に人間の生命の根柢を置かうとする者にとつては、平塚らいてう氏等の提出にかかる「花柳病男子との結婚取締に關する請願」なるものも、矢張、その根本の態度に對して絕對に反對せざるを得ないのである。

何となればかかる請願を議會に提出し、更めて法律の條文とする事に依つてその效果を生起せしめやうとする事は、それが直ちに提出者である婦人達自身の、人格の獨立性を傷ける事に

なるからである。

その理由は簡單だ。凡そ結婚とは男子にとつてもさうであるが如く、婦人にとつても、その生活の一つの大きな擴充であり、又、一種の更新である。そして、かくの如き生活の大きな擴充乃至更新は、婦人自身の人格の上に十分なる基礎を置いた統制に依つて、當然支配されなければならない。否。婦人自身の統制に依つて結婚を支配してこそ始めて婦人の人格の獨立があるのだ。然るに、これを法律の成文にする事に依つて統制の目的を達しやうとする事は　疑ひもなく婦人自ら自己の生活の擴充に對して、自己の人格的統制を擲つ事になるではないか。結婚に關する自己の人格的統制を擧げて、少くともその一部を擧げて、これを權力主義の支配下に委ねる事になるではないか。かくの如くにして、果して何處に個人の人格の獨立があるのだ。婦人の人格の獨立があるのだ。

自己の生活の擴充乃至更新を、權力主義の支配下に置かうとする事は、婦人の人格の獨立を主張し力說してゐる人々にとつて、結局、許され難い矛盾である。撞着である。否。更に進んで、忍ぶ可からざる自己侮蔑であり、自殺である。私はこの事を必ずしも男子の人格的自立に對する侮辱、乃至は蹂躪として擯斥するのではない。凡ての見方、考方を婦人それ自身の立場の上に置いてゐるのだ。然かも、かくの如き見方をすればするほど　婦人の人格の獨立を主張する人々にとつて、見るに堪へない自己侮蔑であり、自己蹂躪である事を、益々明かにする事が出來るのだ。

繰り返して云ふ。婦人が自己の生活に對する自己の人格的統制を、權力主義の支配下に置く事は、婦人自身、自己の人格的獨立に對する明確な放棄だ。婦人が自己に對する自己の主權を捨てる事だ。

「醒めた馬」の主人公は云ふ。

「自分は他人の奴隷にはなりたくない。又、他人を自分の奴隷にもしたくない。それなら自分は何を望んでゐるのだ。自分は自分自身の主人になる事を願つてゐる。」

婦人よ。希くは男子が、凡ての男子がさうある可き筈であるが如くに、凡ての婦人も同じく自分自身の主人にたれ。如何なる時でも自己を他人の奴隷にするな。單に或る一個人の奴隷にしないばかりでなく、權力階級の權力主義の奴隷にするな。若く一度自ら進んで自己を權力主義の奴隷にしたら、もう再び解放される見込はない。そして、權力主義は何時までも、婦人自身のほんとうの人格的獨立を奪ふであらう。

平塚らいてう氏は山田わか子刀自と同じやうに、母性保護と云ふ事を云つてゐる。然し私は母性の尊重なら何時如何なる場合でも承認出來るが、母性の保護とは何事だと云ひたくなる。何となれば母性の保護とは疑ひもなく、母性自ら進んで自身に對する他人の支配を承認する事になるからである。

一體、母性とは自己の生存に對する他人の支配を保護と云ふやうな受動的な形式に於いて、承認しかつ要求しなければならないやうな、そんな弱いもの、獨立の可能性の乏しいものであるのだらうか。

母性とは人間の種の保存を果す可き大切な職分を遂行する點に於いて、男子から十分な尊重をそれ自身購ひ得る權利がある。無論、精神的にも、又、物質的にも。然し、如何にその職分が大切であるからと云つて、他人から保護されやうなどと考へるのは、甚だ卑屈な考であり、結局、自分の手で自分を賤しめる結果になると云ふ事を考へないのか。

繰り返して云ふ。保護を求めると云ふ事は結局母性自身に對する他人の支配を、自ら進んで、承認し、要求する事だ。一度、膝を屈して他の支配を認めれば、もはや再びもとに返す事に容易ならざる難事である。殊更自分を賤しめる態度に出て、殊更、自身を救い難き境地に陷れやうとするよりも、何故、最初から敢然として、母性に對する尊重だけを、精神的にも、亦、物資的にも、徹底的な尊重だけを要求しないのか。

苟且も、女性の人格の獨立と尊重とを徹底的に主張し、要求してゐる、らいてう氏やわか子刀自が、自ら女性の人格的獨立を傷けるやうな、「保護」と云ふやうな自屈的な事を、何故求するのであるか。私はその眞意のあるところを解するに苦しむ。

成程、在來の母性は保護される事を敢て辭しないほどに、それほどに自己の値打の大いさを知らずに居たかもしれない。然し、苟且も一度心からそれを知つた母性にありては、要求すべきものは保護ではなく、尊重である。精神上、並びに物質上に於ける徹底的な尊重である。さうしてこそ、始めて婦人の人格の獨立をも完きものにする事が出來るのである。

「弱き者よ！汝の名は女なり」などと云はれたのは、もう既に過去の事だ。今後の女性は強い筈だ。強い筈の女性なら、「保護」などと云ふ卑屈な事は全然要求出來ない筈だらう。これは單なる言葉の上の爭ではない。元來「保護」と「尊重」とはその內容に於いて根本的に性質を異にしてゐるからだ。母性の人格の徹底的な獨立に關して、この一點に就いて私はもう一度、らいてう氏、並にわか子媼の十分なる再考を求めたい。

私の議論は今のところ、まだ脫線には少々間があるやうだが、どうやらいささか横路へ入りかけた。ここいらで、一應又もとへ戾し、私は再び花柳病の事に歸る。

らいてう氏は男子の花柳病は大部分その不品行の結果だと云ふ。然し、ここに遺傳性梅毒なるものの存在するのを氏は何と思つてゐるのであらうか。然かも、遺傳性梅毒は本人の不品行に全然その原因を持つてゐない。この種の患者は、氏と云へども人格的非難を加へて排斥する事は出來ないであらう。

ところが、遺傳性梅毒は相手に傳染する可能性は薄いとしても、子供に遺傳する事だけはたしかな事實だ。そして、これは男子にあるばかりでなく、女子に同樣の數に於いてあるとともに、兩者を合した數は、文明國の人口の三分の一を越えてゐる事も亦事實だ。氏等はこれ等罪なき人々に對しても、矢張、花柳病患者であるが故に結婚を禁じやうとするのだらうか。

然かも、遺傳性梅毒は今日の醫術では殆ど不治なものとされてゐる。さうするとこれ等の多數の人々は、不治であるがために、自身に責任のない病氣に依つて、一生結婚を許されざる悲慘な境涯に追込められる事になる。或はさう云ふ人達はさう云ふ人達同志結婚すれば好いと云ふかも知れない。さうすれば事實に於いてらいてう氏等の作らうとする法律は即座に破れる。

その上、これ等の人々は親か誰かが知らない限り、自身病氣のある事を知らずにゐる。そして、醫者にもその遺傳のあまり烈しいものでない場合は、手易く發見され難いと云ふ話だ。若しさう云ふ人々が知らずに結婚した後に發見された時にも、尙かつ多額の罰金を課さうとするのであらうか。これ等の不合理に對して、氏等は果して如何なる態度を取らうとするのか。これについても、明確な答が欲しい。

私は最後に拒婚同盟の是非に言及して、成る可く早くこの一文の結末をつけたい。

拒婚同盟とは新婦人協會の中に現はれたところの、花柳病患者の男子とは斷じて結婚しないと云ふ未婚婦人の同盟であるらしい。

然しこの程度の申し合せなら、何もこれに拒婚同盟などと云ふ大袈裟な名を冠して、今更世間に聲明するほどの値打ちもない位、當然な、否、當然すぎるほどに當然な申し合せではないだらうか。

そもそも、相手に花柳病がある事が明らかな場合には敢てそれと結婚又は同棲しやうなどと云ふやうな、そんな物好きな婦人は、今までのところだつて、さうさう澤山はなかつた筈だ。

少くとも、多少の教育のある上に、生活上にも多少の餘裕のある婦人達の中から、そんな物好きが出た事を、私は今まで聞いた事がない。又、多少の教育を受けた上に、多少生活の餘裕のある親達の中に、花柳病ある事のたしかな男に、知つて見す見す娘を嫁がせたと云ふやうな人達のあつたと云ふ事も、亦、無論私はまだ聞いた事がない。

從つて現在新婦人協會に屬してるやうな婦人達、婦人解放の運動のために新年宴會位は開く事の出來るやうな、多少の教育ある上に多少生活上の餘裕をもつてゐる婦人達が、今更さう云ふ申合せをし、さう云ふ同盟をしたからと云つて、その人達のために、何等の名譽にもならないが、又、何等の不名譽にもならない。唯、至極あたり前の事についての申し合せをしたとでも云ふまでの事である。否。今まだ多くの婦人達が不言實行でしてゐた事を、こんど大聲叱呼して實行しやうと云ふまでの事なのだらう。

然し、こんな平凡な事の申し合せに、拒婚同盟などと云ふ大袈裟な名を冠して大聲叱呼すると、拒婚同盟以前の婦人達、今までの婦人達は、何となく花柳病の患者と知りながら見す見す結婚したやうな、物好きばかりであつたやうな感じがしないでもない。然し、無論、そんな物好きは今までだつて、あまりなかつた筈だ。又、將來も怖らく一人もないであらう。

とにかくこの同盟は、格別、論じ立てるほどの價値もないが又、默殺する程に無價値なものでもない。謂はゞ虚禮を廢止する申し合せとか、乃至は、贅澤をしないと云ふ決議などと、結局、その價値に於いてあまり大した相違はない。唯「至極結構な同盟です。出來るだけおやりなさい」と云ふまでの事にすぎない。然かも、拒婚同盟と云ふ言葉そのものが何となく男を片端からぴしぴしとはねつけるための同盟とでも感違ひされさうなところがあつて、甚だ景氣が好いではないか。從つてこの同盟に入つた婦人達は、男などと云ふものと、さうさう手易くは結婚しないとでも云ふ風な態度を示した事にもなるから、隨分一人で好い氣持になる事も出來るであらう。他人に害を與へず、自分にも害を與へず、一人で好い氣持になれる事なら、何人と云へどもそれに對して苦情を持ち込む事もあるまい。これ、又至極結構な事である。

その上、賣れ損ひの資本家階級的乃至は知識階級的の婦人達が、賣れ損ひの悲劇から自分自身をかくすために拒婚同盟へ續々として入會するやうな事になれば、これ又、至極妙である。「私今まで隨分婚約をいたしましたが、調べて見ますと相手がみんな花柳病患者だつたものですから、とうとう今まで……」な

どと云つて、三十五面や、四十面を薄赤くするやうな事にでもなれば、人生はいよ〳〵面白くなるではないか。かかる賣れ損ひの婦人達にとつて、拒婚同盟はたしか随一の、然かも飽くまで正々堂々たる保護色だ。この一點に於いてだけでも、この同盟の功德は非常なものがあるであらう。

唯、私は最後に於て拒婚同盟の諸氏に對して、心から切言したい一事がある。それは他でもない、かかる事に於いて結婚を拒絶し得るのは、今のところ結局、生活に餘裕のある婦人達に限られてゐる。然し、この世の中に於ける婦人の全部が必ずしもかかる餘裕を持つてゐるとは定つてゐない。否。廣い世の中には、その經濟生活の窮迫のために、相手の男に花柳病がある事を知りながらも、見す見す自分の體を渡さなければならないやうな、氣の毒な婦人達が、隨分澤山あると云ふ大切な一事を忘れてはいけない。無論、それ等の婦人達も、花柳病の如何に怖る可きものである事は、十分に好く知つてゐるだらう。然かも、自分と自分の家族との飢と虐げとを救ふために、見す見す體を渡すとは何と云ふ悲しむ可き事だらう。實際、彼等はそれを知りながらも、尚かつ拒み通すほどの餘裕と力とは全くないのだ。

拒婚同盟の婦人達は、自分自身結婚を拒絶し得る丈の生活上の餘裕があるなら、その餘裕をもつて、何故かかる悲慘な境涯にゐる多數の婦人達を、その飢と虐げと蹂躙とから解放するために、渾身の力を振はうとはしないのだらうか。そして、それ等の婦人達と互に手を取り合つて、凡の不合理を地上から一掃するための新しき階級戰の戰線に敢然として立たうとはしないのだらうか。この點に於いて、改造二月號に於ける伊藤野枝氏の議論に、私は贊成である。

實際、議會などと云ふものに出たり入つたりする事や、代議士と稱するヘッポコ人種と往來して、請願文書の交附をしたりする事に、人間のほんとうの生活は斷じてない。否。新しき階級戰の中に於いてこそ、眞の生活は見出されるのだ。この點に於いて、議會などを相手にして能事終れりとなしてゐるかの如き拒婚同盟の諸氏達よ、十分に猛省するところがあつて然る可きだ。(完)

拒婚同盟は男女兩性に幸す

安部磯雄

（一）

婦人は結婚と云ふ一つの束縛から脱れる事が必要である。勿論結婚と云ふ事は極めて幸福な事であつて、獨身生活が必しも理想でないのは明であるが、我國のやうに男と女とが習慣的に結婚するものと定めて居のは、反つて結婚の爲に個人々々の不幸を來す場合が多いと思ふ。婦人も結婚の習慣に束縛されて居る間は恰も鎖に繋がれて自由を奪はれて居るやうなものであつて、其爲にいくら婦人問題が叫ばれても永久に解決される時が來ないと思ふ。

日本では婦人が年頃になつて結婚しないのを恥辱と考へるやうな風がある。つまり何か身に缺點があるのではないか、身體に異常があるのではないかと疑はれる。從つて自ら年頃になつて結婚すると云ふ事が世間一般の婦人にとつて必要な條件となつて居る。第一に多數の婦人は結婚する事を一つの義務と考へて居る。男にとつてはさうではないが、一般に婦人は兒を産むと云ふ義務があると考へられて居るので、婦人が獨身で居ると云ふ事は一種の罪惡であると云ふ風に世間は非難する。併し是は大に誤つた考へで、結婚は時に人を幸福にするが、また時に人を不幸に陷入れる場合も少くないのであつて、他から是非義務があるからと云つて之を強ふべき性質のものではない。斯う云ふ考へ方の起るのは畢竟日本人に自覺の足らない所から來るのであつて、未だ未だ日本に於ては個人主義を主張する必要があると思ふ。それが利己的になるのは不可ないが、兎に角個人の幸福が一番先に立たねばならぬと云ふ思想は何時も誤らぬのである。家族、國家の團體に對して誰も皆一定の義務を果す責任があると云ふ事は認める。乍併さう云ふ團體でも全然個人の幸福を犠牲にすると云ふ事は非常の場合を除いては要求出來ぬのである。換言すれば人は個人の幸福に差支無き限りに於て社會に對して義務を盡さねばならぬ責任がある。即ち個人の幸福と社會の幸福とが一致した場合に於てのみ人は社會に盡す義務があると云ふのが本當であると思ふ。此立場から云へば、婦人が兒を産むと云ふ事は社會に對する一つの大きな義務には相違ないけれども、結婚が明かに婦人にとつて不幸である事が分つて居る時に、其婦人に結婚を強ふるのは個人も爲し得ぬ所であると

同時に社會と雖も之を爲し得ぬのである。若し婦人が婦人自身にとつて結婚が明かに不幸であると考へた場合には、婦人は何時でも獨身生活を爲し得る權利があると云ふ自覺を持つやうになる事が必要である、少しく極端な例ではあるが公娼制度に就いて考へて見よう。私は多年公娼制度廢止を唱へて居るが、世人は此制度に對して兎角誤れる考へを抱いて居る者が多い。私は公娼制度は人道上、風紀上、又衛生上から見て決して許す事の出來ぬものと考へて居るが、併し日本では未だ政府當局者が公娼制度を必要と認めて居るのである。而して公娼制度支持說の主要なる點は公衆衛生のためと云ふ事であつて、公娼制度を置かなければ黴毒の蔓延を防げぬ、それが爲には日本全國に七八萬の公娼を置き、絕えず身體檢査を行へば或程度迄黴毒の蔓延を防げると考へる。是は私には驚くべき思想と思はれる。何故ならば黴毒の蔓延を防ぐ事は社會のために必要には相違ないけれども、そして當局者の考へる如くそれで黴毒の蔓延が防げるものなら宜いけれども、併し單にその宜い事の爲に七八萬の婦人を公娼制度の下に於て人道に反ける仕事に從はしめると云ふ事は餘りに不合理であるからである。勿論政府は公娼制度の下に於ても娼妓の自由は認めて居るのであるが、實際の事實を見れば娼妓の多數は自由意志に依つて仕事をして居るのでない事は明である。此事實に丁度昔話にあるやうに、一村落の安全のために年々村の中で一人の娘を氏神の人身御供にしたと云ふのに似て居る。斯くの如く假令それが社會の幸福と云ふ理由の下にでも、全然個人の幸福を犧牲にして顧みないと云ふ事は今日の倫理思想から云つても許されぬ事であつて、此點から見ても假令婦人に兒を産む義務があるとしても、それが爲に總ての婦人が結婚しなければならぬと云ふ思想は倫理上許されぬ思想である。婦人は皆それ〴〵人間としての幸福を求めなければならないのであるから、結婚が明かに婦人にとつて不利である場合にはそれを拒絕する權利があると思ふ。

（二）

婦人問題は勞働問題と種々の點に於て似て居る。資本家と勞働者の對立の有樣が、男子と婦人との對立の狀態に似て居る。一方が强者であり、他方が弱者であると云ふ二つの對立の關係に於て婦人問題と勞働問題には共通點がある。勞働問題に於て勞働者がストライキを行ふと云ふ事に就いては世人は一般に惡い感じを持つて居らぬ。我國に於ては勞働者のストライキに對して兎や角云ふ人があるけれども、歐米に於てはストライキは勞働者の權利と視られて居り、法律も亦之を認めて居るから當

も反對する事は出來ぬ。今婦人が結婚を拒絕する事は勞働者のストライキと似て居る。然るに婦人の拒婚と云ふ事が勞働者のストライキ以上に我國に於ては惡い事であると考へられ、或は男子に對して許すべからざる叛逆であるとさへ思はれて居るのは可笑しな事ではないか。私は婦人が結婚と云ふ束縛から逃れる事は、婦人問題を解決する第一步と考へて居る。若し今日の婦人の頭に、未だ婦人は必ず結婚せねばならぬものと云ふ因襲的觀念が存在して居る間は婦人問題の解決は到底期せられぬ。換言すれば婦人は何時迄も男子に對して奴隷的狀態から脫し切る事が出來ないものと見なければならない。此意味から云つても婦人が自己の正常な位地を擁護する必要上、男子に對して結婚を拒絕するの態度に出づるのは當然の權利であつて少しも怪むに足らないのである。今婦人の拒婚と云ふ事が勞働者のストライキと似て居ると云つたが、更に勞働問題と婦人問題の本質的な共通點に着眼して兩者の關係及び其他の問題を考察して見よう。今勞働者は勞働力を賣らなければならぬ立場に在る者である。そして勞働者の勞働力を買ふ者は資本家であり、勞働者と資本家とが賣買をする時に勞働者が常に不利益い地位に立つと云ふのは、勞働力を假りに品物とすれば、魚とか野菜とか云ふ腐敗し易いものであつて、之を急いで賣らねばならぬ必要に迫られて居るからである。勞働力は魚や野菜の如く腐敗し易いと云つたが、寧ろ魚や野菜よりも都合が惡い場合があるのであつて、魚や野菜は今日賣らなくても明日賣る事が出來るが、勞働力は今日賣らなければ一日の收入を全然失ふのであるから、勞働者は勞働力を賣る事を焦り、資本家に足下をつけ込まれると云ふ不利な位地に陷入るのである。今婦人の立場を見るに此腐敗し易い魚や野菜と似たものがある。婦人は年齡と云ふ事が結婚に對して重大な意味を持つて居るので、年齡と云ふ腐敗し易い魚や野菜を賣急ぐ必要に迫られる。男子の場合に於ては年齡の爲に今日是非結婚せねばならぬと云ふ必要がないのであるから、此點に於ては婦人と反對の位置に立つて居るものと見られるが、婦人の場合に於ては結婚は一日延びれば延びる丈不安を意味するのであつて、殊に結婚が賣買關係となり、婦人は常に不利の位地に立たざるを得なくなるのである。以上の兩者の立場に對して勞働問題と婦人問題の立場から解決を求めると、此場合勞働者であらならば、資本家に對抗するために勞働組合を作つて、其團結力に依つて勞働を安く賣らないやうにするとか、他の方法としては勞働者が產見制限を行ふと云ふやうな事も出來る。これは勞働者の人口が多いと云ふ事は勞働者にとつて不利であるから、產見制限を行ふて勞働者の人口を增さぬや

うにするのであつて、此方法は實行に相當の年月を要するが勞働者の位地を擁護する上に於て確に有效であると思ふ。然るに婦人の場合に於ては團結して拒婚同盟を作ると云ふやうな事は出來るが、人口の制限を行ふと云ふ事は結局男女兩方の人口を減少せしむるに至るのであつて、最初の目的とは一致しない事になるから、此方法に依つて婦人の位地を高めると云ふ事は困難になるのである。要するに今日の日本に於ける婦人問題としての婦人の社會的位地の改善に對する方法は種々あるであらうが、先づ第一に婦人全體が自覺して、結婚に對する態度を根本的に改める事が必要であつて、私は婦人の自覺に依る獨身生活者の多くなると云ふ事は、婦人全體の社會的位地の向上のために利益があると信ずる者であつて、此意味に於て拒婚同盟は意義のある企であると思ふ。

（三）

私は次に日本の婦人の社會的位地の不利な事を實際的事實に就いて述べて見ようと思ふ。歐米の婦人は婦人自身の自覺に依る獨身生活を營む者が多いから、從て婦人の位地は日本と比較にならぬ程進んで居るが、東洋諸國でも、印度朝鮮は兎に角、支那の婦人は或意味に於て日本の婦人よりも餘程有利な位地に在るものと思ふ。支那の習慣に依れば、妻を貰ふには多額の金を要する。收入少なき勞働者でさへ、妻を貰ふとなると五百圓、內乃千圓位の支度料を出さねばならぬと云ふ風で、男が妻を貰ふのに大に苦心を要すると云ふ有樣であるから、從つて婦人の位地も比較的に高い。然るに日本に於ては之れと反對に、男の方から支度料を出すと云ふやうな例は少なく、婦人の方から其家の財産に應じて支度をする。金持の場合であるならば五萬、拾萬の金を支度に掛け、甚しきに至つては多額の持參金をさへ要すると云ふ有樣であつて、此點に於て日本の女の位地は男に對して全然權衡がとれて居ない。尤も日本でも女が獨立の仕事が出來るやうに教育されて居る所では、男の方から女に對して支度料を出さねばならぬやうな場合もある。例へば群馬縣などに於ては女は養蠶の仕事をやるものとして、男は支度料を出して妻を貰ふ。普通の家でも五百圓や三百圓位の支度料は出す。然るに一般に表面上男の方から女に對して支度料を出すのは先方を侮辱する事に當り、普通結納なども百圓を越える事は少ない。これは日本に於ては概して婦人の獨立生活が不可能であると云ふ點から、男には常に女を食はせてやると云ふ考があり、女の方にも亦男に生活を保障して貰ふと云ふ考へがある處から、女の方から相當な支度をして嫁に行かなければならぬと云ふ不利

な位地に立つに至るのである。一般の婦人が斯くの如き位地に立つて居るから、年頃の娘を持つ親は娘の嫁入仕度に苦心し、其爲に娘に音樂や茶の湯などの修養までさせるが、つまりこれは商店に品物を飾つて客を待つと同じ意味に於てゞあつて、賣物には化粧しろと云ふ諺が露骨に此事實を語つて居る。娘が賣物であるならば客の要求通りにならなければならないから、親も亦商人が客の要求に依つて品物を作るやうに、娘を男の要求に依つて作り上げやうとするやうになる。例へば女子教育に就いても、男の方から女學校出身と云ふ事を妻を貰ふ場合の條件として注文するから、親も其注文に應じて娘を女學校に入れて教育する。從つて男子の方で女學校出身と云ふ事丈で滿足しないやうになれば、世間の親は女子大學とか、男子の大學が開放さるればそれに入れるとか、更に何娘に必ず女學校以上の教育を受けさせる事に努めるであらうが、然しそれは皆親に娘の教育に對する眞の自覺があつてするのか何うかは頗る疑はしいものであると思ふ。男の方の要求の極端なるものになるとそれが婦人の身體の上に迄自己の趣味を要求し、啻に強健と云ふ事丈では滿足せず、容姿の如何と云ふ事が妻を貰ふ場合の必須條件とされるので、親も娘の教育には自信を持たないが娘の容貌には心配し、娘も亦それを氣にかける。或種の婦人が藝妓などの容姿を眞似るのも怪むに足らぬのであつて、之も皆男の方からそれを理想として望むからである。斯くの如く日本の婦人の位地が墮落して居ると云ふ事實は、婦人自身の結婚に對する無自覺、無反省から來て居るのであつて、私が度々繰り返して云ふ如く、一般の婦人が未だ女は必ず結婚しなければならぬと云ふ誤れる思想に囚はれて居る爲に外ならぬのである。以上述べ來つた我國の婦人の狀態に對して一方に婦人問題に自覺せる少數の婦人が現れ、拒婚同盟などを唱へるに至つたのも亦偶然ではないのである。

（四）

日本の婦人が社會的に甚だしく不利益の地位に立つて居る事は前述の如くであるが、啻にこればかりではなく、日本に於ける一般の婦人の生活は或種の事實に依つて脅威せられ、常に不安の狀態に在るのである。これは結婚前不品行な男子が、黴毒の手當も完全にしないで婦人と結婚するために多くの婦人が病毒に感染せしめられて苦しんで居る事實であつて、この種の例は實際世間に多く見る所である。斯う云ふ實例がある。或男子が結婚前不品行にして、結婚後妻に激烈な病毒を感染させ、妻に厭氣がさして來てから或藝妓と關係をつけ、果ては藝妓と共

母親を家に引入れて三人は二階に住み、妻を階下に押籠めて置いて虐待したので遂に訴訟沙汰になつた。斯かる不幸な事件は世間に屢々聞く所であつて、一般の婦人は此種の事實の絶えぬ間は常に不安を免れぬ譯である。玆に於てか自覺せる婦人が奮起して不品行の男子に反抗し、彼等に一撃を與へるために拒婚同盟を作るに至つたのも當然であつて、我國の婦人が今日の婦人自身の現狀に對して何時迄も無自覺の眠を貪つて居るならば、婦人問題の解決がいくら叫ばれても畢竟それは徒勞に終らざるを得ない。或は今日婦人が男子の不品行を責めるのは矛盾であつて、婦人自身に果して處女の誇を有する者ありや、婦人も亦屢々男子に對して黴毒を感染せしめて居る事實があるではないかと云ふ者がある。私は未婚の婦人の間に果してさう云ふ非難に價する者があるか何うかはよく知らぬが、藝娼妓を營む者の間にはさう云ふ者の多いのは疑ふ事が出來ぬ。併し私が斯う云ふのは結局婦人丈を庇ふのではなく、婦人にも黴毒患者あれば婦人に對しても拒婚同盟を行ふてさう云ふ婦人を排斥するのが當然だと云ふ意味に外ならぬのである。婦人の間に拒婚同盟起れば、男子の間にも拒婚同盟が起らなければならぬと云ふのが此點に關する私の主張の存する所である。黴毒患者は男女共に排斥すべきものであつて、此事は人種改良の上から云つても重大な意味を持つて居る事は勿論であるが、私は更に進んで此見地に依る黴毒の問題は男女の別なく刑法の問題となすべきであると考へる。此點に於て彼の小さな諾威は世界に模範を示すものであつて、此國に於ては黴毒はコレラやペストなどの傳染病と同一の取扱ひを受けて居る。諾威の刑法には黴毒傳染に對する刑罰があるが、之れは男女に拘らず自分が黴毒患者なるを知り乍ら、他に傳染せしめたる場合、又、第三者にして(女郎屋の主人の如き)或女が黴毒に感染せるを知り乍ら、他の人間に傳染せしめて居るのを默認して居る時は、二年以下の禁錮に處せられる。又男女が結婚して後、一方が黴毒患者として發見せられたる場合、他の一方が裁判所に訴へると、訴へられた方は二年以下の禁錮に處せられる。其他保姆や看護婦にして黴毒に罹れる者が他の家に出入して小兒其他の者に黴毒を感染せしめたる場合には六ケ月以下の禁錮、其周旋人も亦同じ刑罰に處せらると規定してある。此刑法は今日では諾威ばかりではなく、丁抹でも採用せられて居るのであつて、黴毒を掃滅するために效果を奏して居るのである。私は何故に我國に於ても法令に依つて此恐るべき黴毒をコレラやペストと同じく取扱はぬのであるかと怪しむ者であるが、それは法律を作る者が男子であつて、男子に都合が惡いために黴毒のみを普通の傳染病に對し

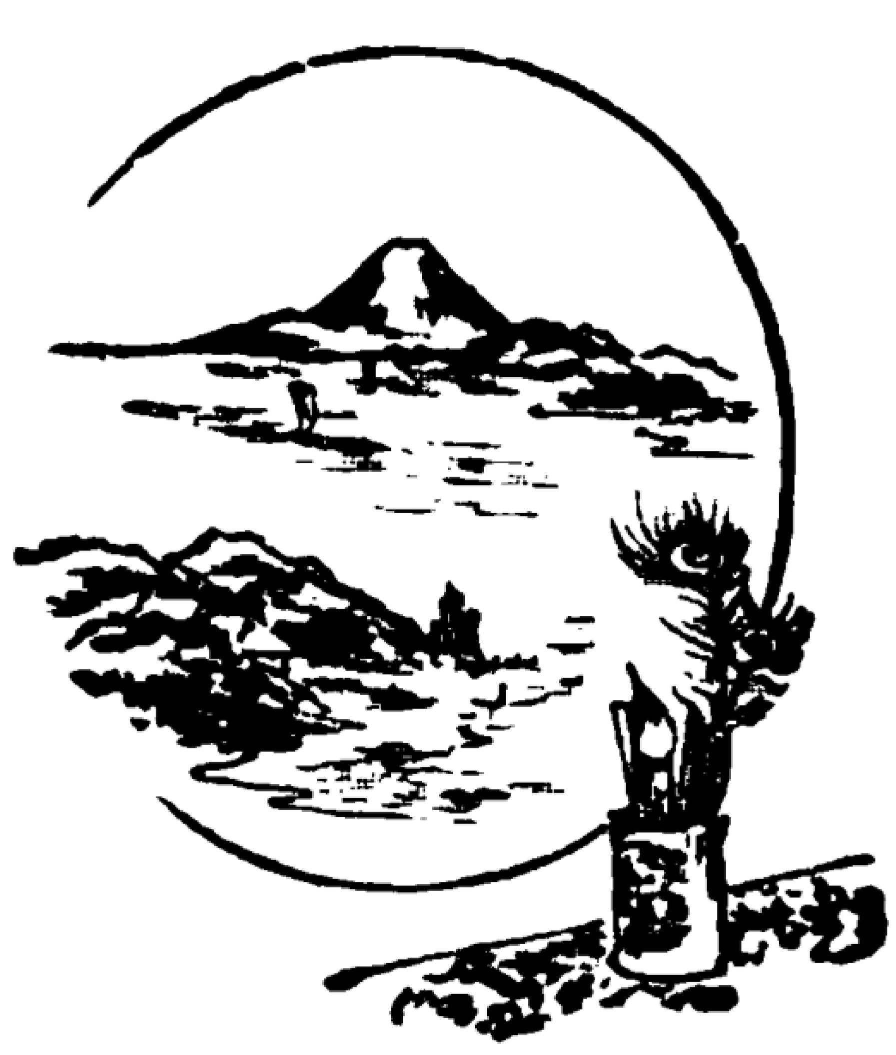
て例外として取扱つて居るのである。で、私は更に進んで日本の婦人が將來參政權を得て、男子の作つた法律を改正し、同時に拒婚同盟を作つて黴毒患者とは結婚せぬと云ふ態度を示さなければ、今日の婦人全般の不安な狀態は永久に消え去らぬと思ふ。私は今日分丈の考を云へば、將來拒婚同盟の宣言は單に黴毒患者に對するのみに止めず、更に進んで酒を飲む男子に對してもされなければならぬと思ふ。これは極端のやうであるが、酒の害毒が如何に其子孫に對して恐るべき結果を與へるかと云ふ事に考へ及ぶ時は、世人は此問題をも輕視する事は出來ぬのである。

(五)

最後に私は拒婚同盟の價値に就いて一言して見ようと思ふ。今日拒婚同盟が作られたからとて、日本の婦人が之に加入する者が多いか何うかは頗ろ疑問であつて、寧ろ實際は少ないのではないかと推想される。これ所か或は折角拒婚同盟が成立しても將來此介が立消えになるかも知れないと云ふ恐れさへあるのである。併しそれにも拘らず、私は拒婚同盟が成立すると云ふ事が、それ丈でも價値があると信ずる者である。何故なれば今日の日本の婦人は黴毒に對して大に不安を感じて居る際であるから、拒婚同盟の宣言を徹底せしめる事に依つて彼等の反省を促し、同時に眞に結婚の意義に關して自覺するに至らしめるからである。今拒婚同盟は實際に於て婦人の位地を擁護すると同時に、又一面に於ては男子に對して反抗を企てるのであるから、男子の側からは不愉快の感情を以て迎へられるかも知れないが、併しそれは結局に於てまた男子にも利益を齎すものであると思ふ。勞働問題の場合に於て、勞働者のストライキは資本家から喜ばれないが、併し結局ストライキに依つて資本家が反省するに至り、勞働者に對する待遇と壓迫を改め、眞にデモクラシーの思想に依つて勞働者も資本家も人間として平等なりと云ふ考を持つやうになれば、資本家を人間的に偉くならしめるのであつて、此意味に於て資本家は道德的に利益されるのであるが、拒婚同盟の場合に於ても同じ意味に於て男子に利益があるのである。

一體日本に於ては男が結婚をするのが樂すぎるやうに見える。男はかなりな年齡になつても、何時でも好き條件に於て妻を貰ふ事が出來るやうになつて居る。之に反して歐米に於ては男子は婦人を貰ふ事が仲々困難で、日本のやうに仲立があればすぐ貰へるのとは大に違つて居る。男子が婦人を自分のものにするには先づ先方の婦人を惹き着けなければならぬ。それは或

意味に於て戰ひであつて、男が婦人を得やうとするためには殆ど城を陷入れるやうな苦心をする。或は人格に依つて、學問及び藝術に依つて婦人の心を獲得しやうと努力する。然るに日本の男子は妻を貰ふのに恰も親の財產を貰ふが如く、仲立人の力に依つて安々と貰ふ事が出來る。然も富も自分の力で得た方が好いやうに、婦人も天降り式に貰つたのよりも、本當に自分の力で獲た方が幸福であるが、然るに日本の婦人は男子から觀て甚だ張合のない狀態にあるので苦心して貰ふ價値がないやうに思はれて居る。下等動物の場合に於ては男が女を牽き着けやうとし、鷄は雌よりも雄の方が美であるが、日本に於ては人間が反對で、女が男を牽き着けるために苦心する。男の方から眞に女を牽きつけるために努力するやうになれば、男は其體格に於ても、學問に於ても、品性に於ても、もつと進歩する事は疑ない。只此場合理想として單に男が女を、女が男を牽き着ける丈に止まらず、男と女とが同時に兩方から牽き着け合ふやうにならなければならぬのであつて、斯くて兩者の努力の中に男女兩性の進化があるのである。此理想のためには、男も女も只結婚しなければならぬものと云ふ誤つた考を棄てゝ、先づ好きものを獲るために選擇し、努力しなければならぬと云ふ根本の思想を立てゝかゝらなければならぬ。拒婚同盟の思想は終極に於て此理想の實現を目差すものであつて、此點に於て此同盟は男女兩方にとつて意義があり、價値があると思ふ。



時論

朝鮮問題に關し當局に望む

法學博士　吉野作造

朝鮮問題については從來屢々いろ〳〵の點を擧げて、新聞雜誌上に論評する事を禁ぜられて居つた。吾々は其禁令に抵觸せざる範圍に於て讀者と共に、此重要なる問題を或は報道し、或は論評する事を憚らなかつたが、其言說自ら隔靴掻痒の感ありしは已むを得ない。それにも拘らず、予輩は殆ど其度び毎に其筋の手と認めらるべき方面から、非公式にもつと謹愼な態度を採れと注意をされたのであつた。予輩の從來發表した朝鮮論が不謹愼なものであつたか何うかは、讀者の判斷に委かせよう。日本側の非を高調して國民の反省を促すに急なる所より、排日內應者などいふ汚名を付したものがあつたから、一部の偏狹なる僞愛國者の氣に入らなかつた事は疑ない。けれども之を默視するは、差當り帝國の健全なる發展に障げあるは勿論、大和民族の道德的生命の發達の上に由々敷大事だと信ずる所から、世の非難や當局の警告に拘らず、沈默を守る事が出來なかつたのである。併し予一人の聲では甚だ微弱である。朝鮮問題について吾々と憂を同じうするものは、必ずや他に幾人もあるに相違ないが、何分萬一の危險を恐れて公然と之を論評しない。そこで我國の評論界に於ては、朝鮮の問題は殆ど顧みられないやうな有樣であるが、併し之では少くとも世界に對する日本の道德的責任が濟まされない。何となれば今や朝鮮問題は、一つの正義人道の問題として、將に世界的に取扱はれんとして居るからである。

日本でも有數に外字新聞は時々朝鮮問題を取扱つて居る。東洋に居住する外人間には、宣敎師たると實業家たるとを問はず、亦日本に好意を有する者と然らざる者とを問はず、等しく此事が重大な問題となつて居る。蓋し彼等の眼から見れば、東洋に於ける平和の根本的確立は主として日本が對朝鮮政策を如何に改むべきかに繫つて居るからである。更に一步退いて之を日本のみの問題として見るに、日本の運命は彼か朝鮮の統治に、成

功するや否やに懸ると云つても差支へない。日本を主たる着眼點とする見地よりしても、亦東洋全體を主たる着眼點とする見地よりしても、朝鮮の問題は頗る大きい。それ丈け此問題は昨今大いに注意せられて居る。此頃外國の新聞記者などが可也頻繁に日本の國情視察に來るが、彼等の最も熱心に知らんとする所に、純良なる多數の國民は如何に朝鮮の事を考へて居るかの點である。然るに日本に來て見ると、朝鮮の問題は更に民間の論議に上つて居ない。新聞雜誌にも書いてない。書いてあつても極めて淺薄な御座なりに過ぎぬ。誰かに會つて話しても、第一外人間に普通に知られて居る事實其物さへ知らない。此處に於て外人は呆然として爲す所を知らない。唯呆然とする丈けならいゝ、中には知つて居ながら辨明を避くる白々しさを罵るに至る者もある。斯くの如きは決して好ましい現象ではない。

尤も吾々は、外國人が騷ぐから吾々は默つては居れないと云ふのではない。之も一つの理由には相違ないが、之よりも大事なのは日本民族の良心の爲めに默視する事が出來ないのである。事實について是等の點を詳しく述ぶると、當局の忌諱に觸れる恐れもあるから今は差控へるが、唯簡單に吾人の意を徹する丈けの事を云ふなら、例へば先般來問題になつて居る間島の基督教徒虐殺事件の如き、人によつては其範圍に於て又其程度に於て、先年の水原事件以上と云はれて居る。新聞にも斷片的に一部の事實は出た。けれども吾々は外字新聞によつて初めて事態の大樣を知つたのである。外字新聞の記事は全部正しくないかも知れない、可也誇張も多からう。併し之等の事實を知つて居る必要は、外人よりも吾々に在るのに、國民は殆ど其十が一をも知らされて居ない。新聞に載つて居る所は當局の辨明である。之れも他を罵るに急にして自ら省る跡は薄い。然し吾々は當局の辨明を其儘之を信じよう。それにしても相手が惡いから吾々が之を擲り飛ばしてもいゝといふ理窟はない。賣言葉に買言葉は、對等の間柄でも褒めた態度ではないが、況して先進國を以て居り指導者を以て任ずる者が、自己の暴行を辯護するに相手方の不法を以てせんとするは、甚だ淺間しい次第ではないか。間島事件や水原事件に關する外人側の非難攻擊に對して當局が相當の辨明を發するのはいゝ、併し乍ら之と同時に吾々は亦省みて吾々の失態を悔ひ、過失を責むる所無ければならない。自ら悔ひ自ら責むる所無き辨解は、何の道德的權威も無い。吾々國民は全く事實を知らされて居ないからとて、殆ど自ら責むる所以を識らずして、恬として恥ぢざるは吾々の甚だ心外とする所である。偶々外人が吾々を非難すれば、之を怪しから

んと云ふ。外人の非難も或意味に於ては餘計な事かも知れないが、之に不快を感じて徒らに亢奮するの餘り、遂に自ら省るの機會を失つては大變である。此點からしても吾々は先以つて吾々同胞に、朝鮮に於ける事實を有りの儘に知らしむる事が必要だと考へて居る。外人にして吾々を非難する者があるなら、何よりも先きに國民は彼等の云ふ所に耳を傾けなければならない。にも拘らず極端な制限を以つて國民の耳目を掩ふに當局の熱中するのは、吾々殆ど其意を酌むに苦しむのである。

尤も日本人自ら朝鮮に於ける日本の失態を公然と論じたなら、さらでも排日の氣勢に昂奮して居る朝鮮人は、得たり賢こしとつけ上るであらうと云ふ者もある。然し斯く云ふ人は日本國民の多數が朝鮮の事情を知らずして、當局の過失を默過すれば、それで朝鮮は治まるゝと考へて居るのであらうか。熟く考へて見ると、かゝる秘密政策を取る事によつて多少でも益する者ありとすれば、そは只過りを犯した當局のみである。而かも其得る所たるや、一時他の非難を免がれ得たといふ瞬間の氣休めに過ぎない。之れ丈けの結果に對して拂ふ所の國家的損害は、比較にならぬ程大きい。何故なれば、爲めに國民は自ら反省して改むるの好機會を失ふのみならず、朝鮮人をして日本人中には事物を正視する者一人も莫しと做して、大いに失望せしむるからである。現に朝鮮人は殆ど例外無く、文字通りに、日本人中には語るに足る者一人も莫しと考へて居るのである。之れ皆當局が世上の口を箝して朝鮮に關する事物の報道を極端に抑止して居る結果である。

今や朝鮮問題は人道上の一大問題として、世界の耳目を聳動せんとして居る。中にも英米の識者の一部の間には、之を餘所事とは思はず、心配して居る者もあるやうだ。之に對して一部の政治家は無味乾燥の國際法理を楯に取つて、我國の內政に外間の干渉を許さずと云ふ。所謂非干渉の原則が守られて居つた舊時代に於ても、人道上の大問題といふ事になると餘所事と思はず、世界の識者は口を揃へて論じ合つたものだ。芬蘭土虐待の問題について、歐洲諸國の學者が袂を連ねて露西亞皇帝の忠告に出掛けた事もあると聞いて居る。況んや戰後國際的精神の勃興と共に、非干渉の原則は戰前程重んぜられなくなつたに於てをや。吾々は外國が矢釜しく云ふから朝鮮問題を論じようと云ふのではない。けれども世界的問題として議論の鋒先が向いて來た時、吾々に適當な答辯を與ふる丈けの準備ありやを、今から考へて置く必要があらう。

昨今政治家の間に我國が國際上段々孤立の形勢に立たんとして居る事を氣付く者が多くなつたやうだ。彼等に亦孤立の原因が支那朝鮮に對する從來の政策である事にも氣付いたやうだ。就中朝鮮の問題が最も多く外人の批評を促す種子であつた事を氣付いたやうだ。此際に於て捨てゝ置く譯には行かぬと云つて、それぞれ手段方法を講ぜんとして居るとの事であるが、然し彼等は何を以つて此問題に對せんとするのであるか。新聞の報ずる所に據り、彼等が此爲めに催せる會合の席上に於ての議論の樣子を觀ると、日本の不評判は專ら東洋に於ける外人の報道に歸し、彼等に代つて吾々が自ら通信機關を設くべしと云ふやうな事を云つて居る。それでは少しも問題の解決にはならないではないか。外人の非難を問題とした所まではいゝ、之が國民に自ら反省するといふ點に更に氣の付いて居ないのに、吾々の甚だ遺憾とする點である。單に外人間の不評判を一掃するといふ必要から觀ても、吾々は先づ自分の非を自ら非とするの態度を示さなければならない。自ら悔いて大いに改むるの誠意を示したら、朝鮮人と雖も結局其排日態度を緩和せずには居るまい。是等の點から縱令反對の方面に進んだとしても、吾々にもつと吾々と朝鮮人との關係を道德的に反省するを大いに必要とする。此爲には先づ事實を有りの儘に知るの必要がある。而して從來の當局の態度は此點に於て吾々の向上發展を其第一門に於いて抑止するものであつた。吾々は吾々自身の爲めに、又東洋平和の爲めに、附け加へては又日本の國際的信用を恢復するが爲めに、當局が一日も早く其過去の態度を一變せん事を切望して止まない。

過激派の排日的宣傳の說について

我國の官憲並に其の他に屬する一部の者の間に、露國過激派政府を次のやうに觀て居る者がある。彼等は其主義を各國に宣傳し、斯くして各國を其支配の下に置かんと企てゝ居ると考へて居る者もある。更に又之を朝鮮人の排日運動の背後にあるものゝ如くに[illegible]。一時當局が[illegible]此誤解に基いたと云ふ者があるが、所謂の程度は知らない。更に亦當局は一部に日本を敵とするからとて、朝鮮の排日思想は皆過激派に基くなどゝ云つたり、甚では日本に反對の運動をする者を無差別に過激派と稱ぶ者あるに至つては、

滑稽の沙汰である。現に角過激派政府は其主義宣傳の運動の一つとして、日本を敵として居る。吾々は自衛上過激派を敵として戰はねばならぬと信じて居る者が相當に多い。

過激派が其主義の宣傳によつて全世界を征服せんと企てゝ居ると云ふ事は、或意味に於ては事實に相違ない。社會問題乃至勞働問題について、所謂過激派が獨特の意見を有つて居る事は、之までも屢々說いた。そして此獨特の意見に基いて彼等は現代の社會を根本的に改造せんとして居るのであるが、其改造は自國のみに出來上つた丈けでは十分でない。隣りの國が依然として舊い形式を採つて居ると自國の改造が維持され難い。一つの譯り易い例を云ふなら自分の國で八時間勞働制を施いても、隣りの國が十時間も十二時間も働かして安い賃銀で物を安く造るのでは、少くとも差當り競爭が出來ない。故に八時間勞働制度によつて受くる利益を十分に受けようとするなら、此制度を凡ての場所凡ての國に行はしめなければならない。從つて勞働運動に關する諸々の要求は、國境を超越し、普く世界的に行はれねばならぬ性質のものである。勞働運動の世界的性質と稱ぶのは即ち之を意味するのであるが、過激派の主張とても固より此例に洩ない。否、彼の如き突飛な改造論こそ最も痛切に世界的性質を主張するものと視なければならない。此點から觀て彼が其主義を世界に宣傳し、萬國を共思想の下に統一せんと熱中するのは當然である。過激派の仕事は露西亞のみに終るのではない。遍く全世界に社會改革を興さずんば止まずといふのは此爲めである。

露西亞の勞農政府が露國其物の改造といふ仕事の外に、今述べたやうな世界的使命を感じて居るといふ明白な證據は、莫斯科に設けられた所謂第三インタアナショナアルである。第二インタアナショナアルに慊らずして此處に新しい旗幟を飜したといふ所に、過激派の特に著るしく世界的に動きつゝある點が現はれて居る。

勞働運動は前にも述べたやうに、もと〳〵世界的性質を有するものではあるが、實際には先づ各國別々に組織的運動を起す必要があるので、發達の歷史から云へば、先づ國民的運動として起つた。マルクスは單純な理論から一擧に世界的勞働運動を起さんとして、一八六四年萬國勞働者同盟を作つたけれど永續はしなかつた。勞働運動は結局世界的に協働すべきものであるとしても、物の發達には順序がある。マルクスの計劃が數年にして消滅に歸したのは、其處にいろ〳〵の事情はあるが、然らずとするも結局の運命はさうであつたのであらう。斯くして最近ま

での各國の勞働運動は、皆國民の運動として起つたのが初まりである。マルクスの作つた萬國同盟の支部として起つたものもあるが、英吉利のやうに夙くから獨特の組合運動として發達したものもあり、獨逸のラッサアル式の運動の如く、全然國家的立場を採つたものもある。斯くして其初め各國別々に起つたが爲めに段々着實の發達を見たのであるが、それが相當に發達して來ると、やがて又本來の性質に立返らねばならない事になる。卽ちこれ〱の國家の內部に根柢を作つた上で初めて國際的活動に移るといふ事になる。斯くして一八八九年佛蘭西革命百年紀念祭を期として、萬國同盟は巴里に於て復興された。之れが卽ち第二インタアナショナルである。然し之は見様によつては國家的發達から完全な國際的發達に到る途中の段階である所から、未だ十分に世界的性質を發揮する事が出來ない。之を他の例に譬へるなら、數多き小邦に分れて居つた獨逸民族が、完全な國家的統一を見るまでの中間の時期に於て國際的聯合關係に在つたやうなものである。故に第二インタアナショナルは單に地方分權的で、聯邦的で、各國の勞働團體は殆ど中央の命を奉じない。便宜上聯絡を取るといふ位の極めて弱い聯合に過ぎなかつた。之れでは本當の世界的聯合運動といふ事は出來ない。然らば若し勞働運動が、いよ〱其世界的性質を完全に發揮せねばならぬといふ段取りになれば、更に別種の世界的同盟を造らねばならぬは當然ではないか。

第三インタアナショナルは斯う云ふ點からのみ異を樹てるのではない。社會改造の原理並に方針について、從來の第二インタアナショナルと全然觀る所を異にするからであらう。併し勞働運動の世界的性質を十分に徹底せんとするの要求は、亦自ら同盟の根本組織についても、全く新しい立場を取らざるを得ざらしめた。卽ち中央集權的な劃一的な、何れかと云へば專制的な制度を取り、卽ち莫斯科を中心として世界に號令せんとするの態度を執る所以である。

予輩は露西亞の勞農政府は同時に全く違つた二つの仕事をして居るものと觀て居る。一つは彼得堡を中心とする活動で如何に露西亞を治むべきかを主たる仕事として居るが、他は莫斯科を中心として如何に世界全體を改造すべきかを主たる問題として居る。彼得堡は露西亞の政府であるが、莫斯科は卽ち世界の政府と思つてゐる。故に彼等が世界宣傳部を設けて多額の金を費ひ、各國に內亂を起さしめて思想的征服の功を揚げんと苦心するのは怪しむに足らない。故に曰ふ、勞農政府が世界を征服せんとするの企圖ありとするは事實に相違ない。

併し乍ら若し彼等の世界的征服の意義を政治的に考へるならば、之れ大いなる誤である。此征服の意義を政治的に考へて、レーニンをナポレオンと同一視する者少くないのは、吾々の常に不思議に思つて居る所である。吾々は先づレーニン一派が世界に號令せんと欲するの根本動機をナポレオンなどの政治的野心と同一視するの誤謬に陥つてはならない。レーニンの思想によつて征服さるゝ事が好ましいか好ましくないかは全く別問題として、兎に角彼等の所謂征服の動機は全く之を思想的に考へなければならない。從つて彼等の征服の手段を從來の國家競爭の場合のやうに、武力的に考へては大いなる謬である。彼等は本來政治的征服をやらうといふのではない。征服といふ文字に拘泥して斯かる謬見を抱く者我國に案外に多いのは注意すべき事柄である。

尤も過激派が世界征服の手段として全然武力を用ひないではない。思想的宣傳の前途に横はる障害物を排除するが爲めに各國に内亂を起させるなどは、随分險呑な遣り方だが、内亂を起させたからとて、其後に彼等が來つて自國の政令を布き吾々を壓迫しようといふのではない。と云つたからとて吾々は、彼等の宣傳を恐るるに足らずといふのではない。恐るべきや否やは暫く別問題として、若し吾々が之に對抗して何等かの方法を取らうといふなら、其方法が從來の遣り方とは全く趣を異にするものでなければならないと主張するのである。

現に我國では過激派の世界的征服の風說に驚き、其征服の意義を政治的に誤解して、之に反抗して國家の安全を計るべく恐るべき多數の兵力を使つて居るではないか。西伯利出兵は現に政府の揚言する所の如くんば、右の目的以外に出でないではないか。

要するに過激派の世界的征服の意義を政治的に考へて居る者は、當局者のみならず民間にも今日頗る多い。過激思想の流行は是非共之を抑へなければならないとした所が、今のやうな方法では全然無效だ。啻に效が無いばかりでなく、之が爲めに國力を徒費するの損害も測るべからざるものがある。お前は餘り學問に熱中して中毒を起し懸けて居ると云つた者がある時、中毒を文字通りの意味に取つて、頻りに滋養物を取つたり運動したりして中毒症狀の起るを防がんとする者があつたら、人誰か其愚を嗤はざるものがあらうか。而して此愚を西伯利出兵による過激派對陣に於て日本政府は將に演じて居る。出兵其物の利害得失も大きい問題だが、吾々は亦別に過激派の企圖に對してもつと立入つた方策を研究したいと思ふ。

政界に於ける心理考察の缺如

封建時代には上の意圖は下必ず之に聽從したから、當時の政治家は何を爲すべきかを考へさへすればいゝので、如何にして經綸を行ふべきかを考ふる必要は無かつた。現代の政治家の內にも斯ういふ封建的の頭を有つて居る者が頗る多い。

斯ういふ頭で鍛えられて居る政治家は、人民は必ず自分の定めた計畫通りに動くものと豫定し、自分としては唯所謂細目の經綸を案出するを以て能事終はれりとする。

併し乍ら政界の實情は何と云つても封建時代のやうに動かない。人民もオイソレと上の思ふ通りに動くとは限らなく、少くともプリンシプルとしては人民と相談して政治をするといふ時代になつた。そこで單に經綸を案出するといふ事ばかりでなく、此經綸を如何にして天下萬民の輿論の內容とするかといふ事が、政治家に取つての重大の仕事になつた。經綸の案出も難しい仕事には相違ない。併し是等は政治思想の普及と言論の自由とのお蔭で、專門家の細かい研究を待つまでもなく、大抵は見當がつく。否、最も發達した國に於ては最早國民の常識となつて居ると云つて可い。唯斯くも開發したる民心を自家の主張に統一して手足の如く働かす事が難しいのである。從つて政治家としての最も重要なる仕事、即ち彼の最も手腕を振ふべき點は昔と今と變つた。それを今尙ほ氣付かないものが多いのは憐むべき現象である。

今の政治家は、彼は斯く〱の計劃を立てた、人民が好く之を受入れて與れさへすれば着々效果を奏する筈であつたのに、事情も知らずして兎や角騷ぐものだから畢に目的が達せられないと。即ち彼は人民の聽從を求むるに急にして、如何にして自己の思想を民心に打込むべきかを考へない。此點に原因して我國の政界にはいろ〱の失態が續出して來るのである。

政治家として相當の經綸を有せざるべからざるは云ふまでもない。而して更に此中に舊式政治家と近代政治家と別るゝ所以は、民衆との關係についてゞある。昔の政治家は民衆を以て單に自己に聽從すべきものと觀て居つたが、今の政治家は民衆を民衆とし、其了解の上に自己の立脚地を置かんとする、即ち如何にして自家の經綸を民衆的勢力と結び付けんかに苦心する。此方面の心掛けは甚だ日本の政治家に缺けて居る。多少之に類似する者ありとすれば、自己の經綸を民衆の思想の內容とするといふ方面で無くして、甲の元老乙の官僚の思想を動かさんと

するに暗中飛躍を試むる輩に過ぎない。所謂政界の策士なる者が今尚ほ幅を利かして居るのは、我國の政治の如何に後れて居るかを語るものである。

封建的の頭を以つて政局に立つ者の必ず陷る過りは、自分の經綸が思ふ通りに行はれぬと、其罪を人民に歸する事である。自分の考の正否は棚に上げて、云ふ事を聽かない者が惡いとする。斯くして彼等の動もすれば取らんとする手段は腕力を以つてする壓迫であるが、之が遣り切れなくなると、いろ〳〵不正な手段を以つて操縱を試みる。兩者を通じて民間の物議を釀すのは事面倒だからと云つて秘密政策に立て籠る。之れ恰も現今我國の政治家の慣用手段ではないか。時代は既に立憲政治の世の中だと云ふ。けれども何處に一人でも眞の民衆政治家は在るか。

それでも有繋に時勢は段々進んで、政治家の專恣橫行を許さなくなる、義理にも何とか經綸を天下に發表せねばならない羽目になると、彼等は御座なりを云つて一時を胡魔化さうとする。昨今の政黨の宣言の如きは皆之れではないか。彼等は何と云へば一時を胡魔化して通れるかは可也綿密に考へたらう。けれども何うすれば心から人心を納得させる事が出來るといふ點に思ひ巡らした事があるか疑はしい。而かも現代の民心は日に日に進歩して居る。好加減な事ではなか〳〵承知しない。此近代の心理を無視して政界を押切らうとする所に今日大いなるボロが露はれた。日進月歩の當世に政治家が獨り大に取殘されて居る形になつて居るのは、主たる原因を恐らく此點に有するのだらうと思ふ。

獨り政治家ばかりでなく、周圍の狀況と他人の心理とを全然無視して獨り呑込みの樣な世界を妄想するものは我國に案外に多い。能く僕等の所へ思想統一の會だとか日支親善の會だとかを計劃して賛成を求めに來る者が、斯く〳〵の主意で誠心誠意を以つてやれば立地に支那人も悅服して來るの、混沌たる思想界は一擧にして整理がつくのと云ふ。斯う斯ういふ事情で計劃通りにならなかつたら何うすると云へば、それは此趣意に頭を下げて來ない奴が惡いのである。誠意誠心を以つて說けば何事も出來ると。物事が單純に運ぶものなら、吾輩だつて三井岩崎の財産を無代で貰ふ工風は勿論の事、全世界統一の計劃位でも一晩の中にやつて見せる、唯之を現實のものにするには何うすればいいか。之れには周到なる注意を以つて綿密に周圍の事情を研究せねばならぬ。殊に相手方の微妙な心理狀態を思ひやる所が無ければならない。之を缺いて天下に事を爲すといふ事は、今日は許されない。封建時代なら出來たかも知れない。何故な

れば、黒いものを白いと云つても一旦は通り、偶々通さぬ者があれば、之をどん／＼打殺しても横車を押通せたからである。

今日の世の中で周圍の事情も他人の心理も一向頓着なく、盲滅法に我意を押通せる世界がありとすれば、そは軍隊のみだ。軍隊でも昨今はなか／＼從來のやうではなくなつたと聞いて居るが、それでも本來の立て前は、上長の命令に對する絶對服從で貫かれて居る。又軍隊としては左うでなければならぬのかも知れない。が併し若し軍人が軍隊内に許されて居る其遣り方を延いて他にも應用しようとするなら、それこそ飛んでも無い時代錯誤だ。而して此飛んでも無い時代錯誤が最も無遠慮に行はれて日本帝國に驚くべき迷惑を蒙らせて居るものは、彼等の干渉によつて大いに動かされて居る支那西伯利方面の外交である。

支那や西伯利に於ける我國の對外交渉が具體的に何ういふ失敗をして居るかは、今更ら之を擧ぐるに忍びない。而して此方面の外交の鍵を握つて居る者の軍人である事は云ふまでもない。少くとも多くの失敗は軍人の干渉せる限りに於て爲された事も、掩ふべからざる事實である。而して彼等の干渉が失敗の源となつたのは、主として周圍の狀況と相手方の心理とを全然無視して、勝手放題な獨斷的政策を押通さうとした所に在る。

古人は敵を知り己を知るを兵法の第一と敎へたが、彼等が專門の戰爭以外の問題になると、必ず何時でも敵情偵察の必要を忘却する。丁度人情の機微を顧慮せず、手足の如く部下を動かす時の氣分を其儘外交上の駆引に應用する。右向けと云へば是非も無く部下を右に向かした其筆法で、外國の民心を右に向けようとする。外國人は部下のやうには動かない。動かなければ何うするか。弱い者は虐める。多少骨のある奴には他の脅しからさし方法で操縦する。西伯利は第一の手段でさん／＼遣り損じた。第二の手段で日本は一時支那政界の頭株を味方とし得たけれども、是等の連中と日本が接近すればする程、支那民心の全體は日本を離れて行く。斯くして日本の此方面に於ける外交は散々のボロを出した。

人は生き物だ。機械のやうにボタンを一つ捺して車が廻つたり、ゼンマイを捲いて車が運轉するのとは違ふ。相手方を生き物だとして取扱はないのが封建時代の對民の態度であつたが、此衙式の態度を外國人との交渉に應用するといふのだから驚く。世人は一概に軍人外交の弊を説くが、弊根は軍人が外交に干渉するといふ點に在るのではなくして、相手方の心理を無視するといふ點に在る。相手方の心理を無視するといふ點は、特に軍人に太だしいけれども、さりとて軍人のみの缺點でもない。故

に此點に關する根本の考へが變らない以上は、外交的折衝の權を軍人から奪つても、其結果は五十歩百歩かも知れない。而して此同じ根本的缺陷に基く失態は、内政上殊に思想取締にも表はれて居れば、又最も甚だしく朝鮮統治などにも表はれて居る。總じて吾々は殊に政治家は今尚ほ封建的遺風に囚へられて居るものと云ふべきであらう。吾々は先づ切に此點に覺醒の鉾先を向けなければならない。

奧議長政友會脫黨の說

奧衆議院議長は年來議場の喧燥亂雜なるを遺憾とし、各派の諒解を求めて靜粛を計らんとする所から、他黨の頭目を訪問した際、加藤憲政會總裁が英國の例を引き、議長は須らく黨外に超然たらざるべからずとの忠告に感激し、自らも潔く政友會を脫黨せんとの意向を二三の知人に洩した所、黨友は以ての外の心得違と大に憤慨する者があつたので、沙汰止みになつたと云ふ風說がある。此風說は何れ丈本當の事實を含んで居るかは知らない。假令事實としても加藤憲政會總裁が、奧氏に英國の下院議長の公明なる態度を期待し得べしと信じたか、或は今日の政界に英國議院の這般の慣行が行はれ得べしと信じたりしやは大に疑なきを得ぬ。けれども此際假令二三政客の間の事とは云へ、英國の議長に倣ふべしと云ふ說が、兎も角も問題となつたと云ふ事は注目すべき現象である。抑々議場の亂雜は、主として議員各自の不眞面目不節制から來るのであるけれども、議長の態度も亦大に關係する。議長が議場の整理に就き公平の態度を持するに、極度の潔癖を示すに非んば、少し計りの誤解が往々にして大きな騷動になる事がある。現に我國に於ける從來の歷史に觀ても、議場亂雜の一半の責は議長の偏頗なる態度に歸せなければならない。何とかして議場を靜粛にしたいと云ふ所から、議長が自ら其態度を反省するに至つたのは喜ぶべき現象と云はなければならない。然るにも拘らず之が多數の俗論に蹴飛されて、有耶無耶の中に終らんとするのは、吾々國民の甚だ心外とする所である。由來我國では議長は多數黨が之を占めて、多數黨の便宜を計る役目を務めしめやうとして居る。斯くては議長は衆議院議員の議長でなくして、政黨の議長である。況して國民の信任を一身に集める議長ではない。政友會と云ひ、憲政會と云ひ、將た國民黨と云ひ、議場に火花を散らして爭ふのは一向差支へなきのみならず、多數黨が其多數を恃んで橫暴を

振舞ふのも、場合に依つては看過し得る。けれども其非を出来る丈公明正大ならしむるためには、議長丈は公平無私でなければならない。加藤憲政會總裁の指摘せる如く、英國は此點に於て模範的だ。議長は飽く迄公平でなければならないと云ふ所から、選擇の標準は一に其人の公平如何の點に在つて、黨派の關係は殆ど之を顧みない。又議長に擧げられた人は其任を受くると同時に、黨籍を脱して形式的にも自分の境遇を清潔にする。であるから議會に於ける政黨の多數關係が變更しても、議長を代へる必要を見ない。屢再選が繰り返されて、引退する時には貴族に列せらるゝを常とする。だから自由黨が多數を占むる時に、現在の議長は保守黨出身であつたと云ふやうな場合も稀ではない。政府提出議案を何う云ふ風に日程に上すかと云ふやうな事は、専ら議長の決する所であるが、之に就いて日本に屢〻行はれるやうに、政府と馴れ合つて勝手放題の事をすると云ふやうな事は全然ない。政府が一時の便宜のために、少しでも無理な事をしやうとすると、議長は斷乎として之を斥ける。斯かる議長の處分に對しては、敵も味方も一言の文句を發しない。それ丈の權威は何處から出て來るか。即ち彼が公平無私を以て一貫する道德的品格から來る。從て英國で下院議長に選ばれたと云ふ事は、取りも直さず、勝れた道德的品格の人だと云ふ事を意味する。議長は即ち公平其物の化身であり、國王も彼に依るに平民の第一人者の待遇を以てし、時にキングに對立せしめて居る。英國議會政治の特長は之に限るのでは素よりないが、之などは其最も稱讚すべき一つと云つて好い。加藤憲政會總裁が此點に現議長の注意を惹いたのは、些か時に小刺を示すものないではないが、奥議長が之に大に憤激したと云ふ事が事實とすれば、之亦甚だ殊勝な事と云はなければならない。而て議會の有象無象が、奥議長の野黨の質問なるものに對して、其の外の不心得と憤慨したと云ふ時は、理智の如何はとく問ふとして、現代政黨者流の眼中黨利あつて公人なきの、我々は根性を發揮して最も可憐なるものである。

小題小言三則

(●)三大政黨の宣言　いよ〳〵政治季節に入り、一月廿日前後三大政黨は各々大會を開いて宣言を發表して居る。之れを大觀するに、憲政會の上に國民黨のとは、各々更新一年を經いて居るが、在野黨としては固より當然の話である。中にも憲政會は最も政弊の攻撃に力を入れて居る。國民黨のは更に普通選擧

の要求と軍國主義排斥等を說いて、政局當面の改革の要求に觸れてゐるが、概して之を言ふと、之等の宣言は未だ十分に突き詰めた處まで突込んでゐない。若し夫れ政友會の宣言に至つては、政府として辯護の地位に立つだけ甚だ生彩を缺くが、產業貿易の發達によつて國富を充實し、輕佻浮薄の流風を排して、民心を穩健質實の域に匡導するを當面の要務だなどゝ言ふに至つては、餘りに上は滑りの憾みなきを得ない。宣言に伴ふ各總裁の演說に至つては、加藤子のそれが最も詳密を極め大體に於て要領を得て居る。原氏のは議會に於ける答辯と同じやうに殆ど何物も言はないと同樣である。然し總裁の演說や宣言の綱領は、彼等の現に爲す處と必ずしも一致しない。國民も亦此點に於て言行一致を求むるに熱心でないから、吾々は更に議會に於ける彼等の實際の行動によつて、彼等が現に何を考へて居るかを判斷するの外はない。此點に於て今期の議會は彼等を試驗すべき問題の不足に苦まないやうだ。

◉**政治家の責任**　第一日の議會で所謂軍備縮少協定が問題となり、之に關する林駐英大使の談話が引合に出され、首相の之に對する見解が問題となつた。之に對して原首相は此問題は未だ國際間の具體的問題となつて居ないから、別段考慮を費して居ないと答へた。又林大使の言は一個人の資格で述べたものであるから、之を問題とする必要がないと云ふやうな事も述べられた。然し乍ら政治の懸引は法律の解釋とは違ふ。權利義務の關係を形式的に明かにするのではなくして、國民の現實の利害休戚に關係する。之を具體的の實際問題になつて居ないから考へなくとも可いと濟まして居れるだらうか。憚る所なく予輩の信ずる處を述ぶるならば、軍備縮少問題のやうな事に就いて、今英米の間に問題たらんとして居るやうな意味に於て流理想の代表的政治家原首相には何等の理解も無いだらう。何うせこんな問題は具體的問題となる氣遣ひは無いから、別段考慮する丈けの値打ちが無いと考へて居られるだらう。然し吾々は斯ういふ見識の政治家を頂いて安心して居れるか何うか。政治家として責任を重ずべきものなら、義理にも研究中だとか考慮中だとか言つて貰ひたかつた。まるで考へて居ないと言ふのは、之れ原氏の僞はらざる告白かも知れないが、之を咎めない議院も亦暢氣千萬に過ぐる嫌ひはないか。而かも此問題に就いては林大使の可也立入つた言明がある。吾々は之を一個人の放言だと言つても居れるが、世界は林大使其人に重きを置いて、其資格の公私を問はない。男子の一言に對して後から公私の資格を分つて其責任を逃がるゝやうな事は、少くとも今日の外交界に

は許されたい。のみならず、大使の一言は今や歐米の人心に何等かの印象を刻して居る。首相の云々によつて之を削り去る事は出來ない。議會が折角之を問題としながら、首相の形式的答辯に滿足して更に追求しなかつたのは、吾々の甚だ物足らず思ふ所である。要するに此問題は問題それ自身も大きいが、それの取扱ひ方が餘りに形式的なる所に、日本政界の傳來的通弊が露はれてゐるのを甚だ遺憾に思ふのである。

◎饑饉救濟基金の監督に對する日本の不參加

支那に於ける饑饉救濟の基金の使途監督の爲めに委員が設けられた。其中に日本が加はつて居ないといふ事實に憤慨して、一には外人の傍若無人を罵り、又一には北京駐在使臣の怠慢を憤る者がある。小幡公使のもう一層の努力があつたなら果して日本の參加を見得たであらう何うかは問題であるが、特殊權を有する外人が、可也關係の深い日本を除外したのは、決して穩當の處置でない。然し之が穩當に非ずとする理窟の根據を、昨今の新聞雜誌に現はるゝやうな處に置くならば、それは全然見當違ひの話だ。彼等は言ふ日本と支那とは特に關係が深いと。又言ふ、日本は基金の四分の一を負擔して居ると。若し問題が各國の利害に直接關係するものなら、關係の密接利害の多少によつて代表者の數を定めると云ふ理窟もある。然し今度のは問題は全く別だ。窮民を救濟するといふ慈善的目的を最も完全に達し了る方法を樹てねばならぬのだから、外の着眼點から無用の頭數を揃へるといふ必要は無い。故に日本として是非共參加しようといふなら、金の出し高などを持出さないで、日本の參加が救濟の目的を達するに、必要な所以を主張しなければならない。けれども日本は果して此根據に立つて要求を貫徹する丈けの自信があるか何うか。一體基金募集の話が持上つた時、予は如何にして此の金を有效に使ふべきかをいろ〳〵に考へた結果、在支外國宣教師に全部無條件で托するの他に方法が無いといふ結論に達した。從つて予輩は此點に日本人の參加を全然必要と考へて居ない。參加し得たとして、誰が行くか。研究も調査も無く、從つて手を拱いて他人の爲す所を傍觀するやうな事なら、初めから參加しない方が悧巧だ。予は淺薄なる體面論で參加權を要求するよりも、なまなか參加して馬鹿にされない方が餘程悧巧だと考へた。若し監督委員の選定に文句を言はうとするなら、選任その宜しさを得たかに着眼すべきである。今度の問題は救濟の目的を出來る丈け完全に達するに在り、金を出したから俺も監督者の一人にならうなどと下らない理窟で步調を紊すのは見つともない事夥しい。

登録商標 OVALTINE

精神的の活力と明快なる頭腦とは最大の資本ならずや

日々奮闘生活を營み精神を勞する人々、敏活なる事務家諸氏にとりて精神的の活力と明快なる頭腦とは最大の資本なり。是は健康に依りて得らるべく、健康は腦髓を養ひ、神經を强壯にし、筋肉細胞を養ひ、精神的勢力を昂め、疾患に對する抵抗力と免疫性を亢進せしむるオバルチンの服用に依りて得らる朝食に一杯のオバルチンを用ゆれば、其の日一日の仕事に對し最も力强きスタートを與へ又食間に之を用ゆれば、更に其精力を増進せしむるを得べし

瑞西製

オバルチン

完全營養料



大罐五百グラム入 金四圓 送料拾八錢

小罐二百九十グラム入 金貳圓貳拾錢 送料拾貳錢

家族の營養料として

オバルチンは小兒、婦人、大人に對する營養品なり、之れ本品は牛乳及鷄卵より蛋白質と脂肪を適量に採り、含水炭素を牛乳及大麥マルツに求め合理的に三要素を配合し、生育に必要欠ぐべからざる活力素ウイタミンを含有する完全營養品なるが故なり、發育盛りの小兒の飲料、特に營養を要する妊娠、授乳中の婦人、肺病の如き消耗性疾患者、營養障碍を起せる者及快復期患者に適す、

使用法 オバルチンの一茶匙を白湯又は牛乳に混ずれば直にコ、アの如き芳香美味なる飲料となる

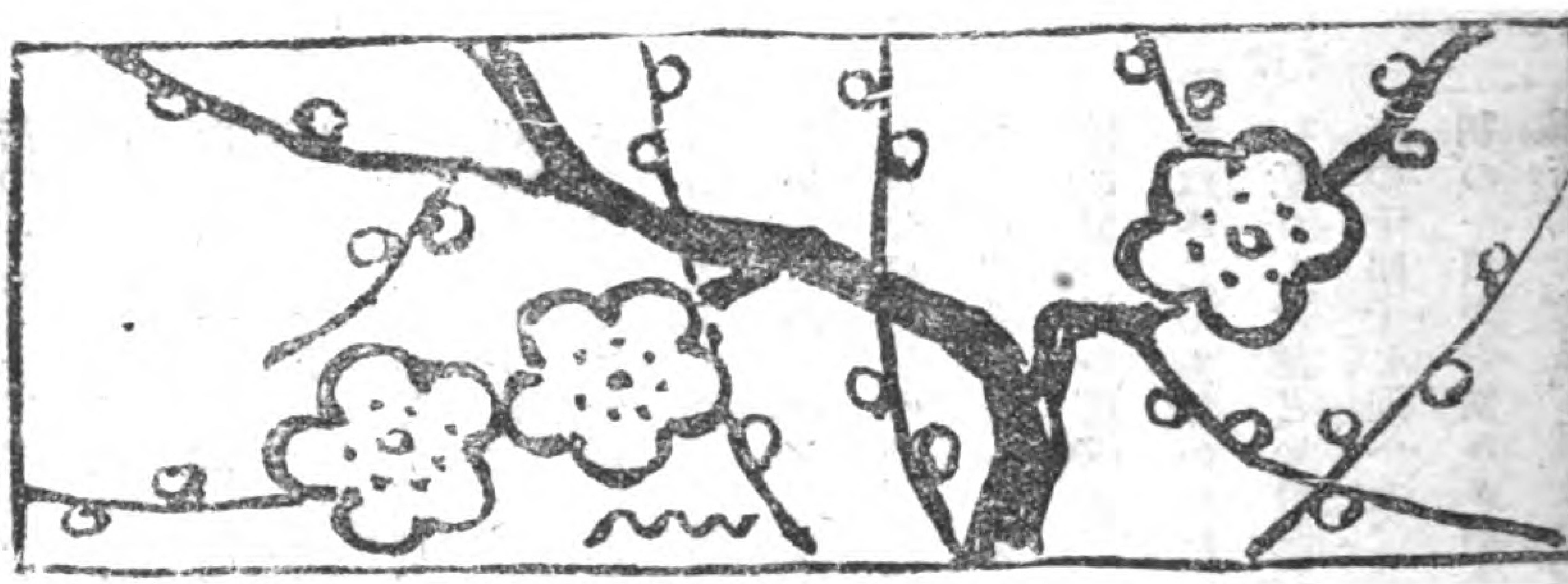
オバルチンは有名藥店食料品店に販賣す、詳細なる說明書見本進呈す。

製造元 アー、ワンダー製藥株式會社 瑞西ベルン市

發賣元 合資會社 マルホ商店 大阪市東區平野町三

電話本局 三六八六 四六七八

振替貯金口座大阪 一三一八〇



血に繋がる人々

——「異端者の手記」第一篇——

（亡き母さだ子の靈に捧ぐ）

塚原健二郎

異端者の手記を出す迄

完結まで四卷に亘る此長篇手記は、自分が初めて千鶴子を知つた一九一八年の夏に筆を起し、放浪時代、信濃時代、日向時代、東京時代の四期……約三ケ年に亘る内分の悩み多かりし日の魂の記錄である。靈に饑えたるもの丶求めて止まない心の記錄である。自分は自分の生涯に於て、第二の母とも云ふ可き二人の恩人の名を數へることが能きる。其一人は昨夏新しき村を去つた中村亮平兄、他の一人は私の傍に在る妻の千鶴子である。而して二人の恩人は實に奇蹟的に、時を同じうして私の生活圏内に現はれた。一九一八年の秋、自分は信濃のMといふ田舍街に某地方新聞の記者として特派された。此當時の自分の生活は倦怠と、遊蕩との絶頂であつた。自分は此懶墮な生

活の頂點に於て武者小路實篤氏を知り、續いて中村亮平を知つた。そして自分は彼の周圍に漲つてゐる志士的氣魄に打たれた。自分の靈魂に明らかに蘇つた。深く心の底に眠つてゐた藝術慾と、靈の渇仰とは、焰の如に燃え上つた。私は一切を捨てた。骨肉の愛も、それから來る有形、無形の餘惠も、あらゆる過去の情實も……。一方殆ど絶望に近かつた千鶴子との戀愛が、其頃になつて漸う、微かながらも、光明に向ひつゝあるといふ希望を胸に疊んで、一九一九年四月十二日、私は畏友亮平の一家と共に日向に旅立つた。途中京都で武者小路實篤氏や、千家氏外拾名近い兄弟と手を握り、自分は四月十六日、日向國、兒湯郡、木城村、字石河内に永遠の生活の根を下ろした。(其時はさう思つた) 一握の土にも無限の感激を覺えずにはゐられない……日向に住んだ日の日記の最初の頁にかう記してある。大地に立つて先づ最初の鍬を振るつた。半年は過ぎた。私は其處で人生はばらの花を撒き散らした通路ではないと云ふロマン、ローラン、言葉を字義通り經驗した。と、同時に戀愛以上の心情をも合せ味つた。

自分は自分の周圍の何人をも一樣に愛することは能きない。能きないばかりではなく時として、呪ひや、憎みさへ送る。私は果して愛の村を建設する最初の住民としての資格を有つてゐるだらうか、私は此處に移り住む時、純粹に愛の村の建設者としての使命を感じてゐたのであらうか、他に野心、衒氣、一時的な昂奮といふやうなまじり氣はみじんも無かつたであらうか、

徹した鋭どい自己凝視と、それに伴ふ自責とに苦しめられた、自分は苦悶と、懊惱とに充ちた心の狀態に於て妻の千鶴子を迎へた。初めて近づいて見た女性……其一切は神秘であり、謎であつた。而して自分の結婚生活は最初の一頁から惱み多いものであつた。自分は燒くやうな嫉妬と、愛の影にある悔とを合せ味つた。自分の苦悶は三重苦悶である。彼女は病を得た。武者小路氏の愛に依つて自分は彼女と共に日向の南端青島の海岸の漁夫の家に轉

地した。再び村に歸つた自分は、彼女との三ヶ月の同棲生活に於て、現在の生活が何の位彼女を苦しめてゐるかを知つた。都會を去る時、衣類や、指輪の類まで他人に與へて、「村」に行けば何も要らない、と公言した程の彼女のけなげな決心を生かすべく、彼女の肉體は餘りに弱く、彼女の精神は餘りに脆いものであつた。愛の村を建てやうとする自分が、頼り切り、愛し切つてゐる妻を苦しめ、不幸にしてゐる、此まゝで行くと、彼女の精神も肉體も殺し切つて了ふだらう。何んといふ不合理、萬人の間に愛の村を建てやうと欲するなら先づ自分の近くから踏み出さなくてはならない。

やがてかう云ふ考へが私の胸に來た。かくて大正九年十月十七日自分等夫妻は日向の新しき村を出た。自分は五人の兄弟と妻驛前の旅舍大坂屋の二階で沈默勝ちな最后の一夜を送つて翌日東京に向けて立つた。妻驛頭で兄弟初め五人の兄弟との悲痛にして嚴肅な別離の瞬間の記憶こそ、自分の生涯に於ける最も痛ましき心の記錄である。別離は罪惡である。自分はしみ〴〵と此言葉を思ひ味つた。上京してから一子亮一の出生まで、貧しい都市居住者の悲みと、悲痛なる結婚生活及び、父としての初めての經驗とを、自分は烈しい物質の缺乏と鬪ひながら書いた。稿を起して既に三年、絕望は間歇的に私を襲つた。稿を燒くこと數回の多きに達した、自分は苛立つた。第一卷血に繋がる人々を脫稿したのは大正八年の十二月二日である。此作に對して有島武郎氏は、君の作はある憧憬と、煩悶とを持つ一青年の手記として見る時、中々に捨て難いよい經驗と、表現とのあるのを感じた。君には恐ろしく殉情的な稚氣と、ある素朴な端的な觀察とがある。前者の影が無くなつて、後者が更に切實な生活經驗によつて深刻にされたなら、君は其處から藝術の一新領地を開き得るのではないだらうか……。と言はれた。自分は深く考へさせられた。

第一卷血に繋がる人々は、此長篇手記の序文とも云ふべきもので、自分の書かうとした最大なる目的は寧ろ第二第三、第四卷にある。自分は新しき村に住んだ當時の記憶を辿り其處で經驗した悲愴なる心の痕と、多くの美しい友情とに筆が及ぶ時、自分は感激し泪ぐんだ。自分は此手記を書くために、自分の全生活を捧げた。自分の愛するものの現世的な幸福の一切を犠牲にさせた。自分の熱情の全部をも注いだ。とは言へ、自分はまだ力も足りない。藝術家としても、人としても自分の完成される日は遙かに遠いことを今にして明らかに思ふ。然し、然し、自分が此手記に注いだ熱情と、本氣さとは眞心を持つよき讀者の魂を揺り動かさずには置かないだらう。

――一九二二、一、九日黎明氷の割れる音を聽きながら記るす。――

一

諸君が今日までに、數限りなく經驗されたであらう處の多くの事件と同じいやうに、實際其結果から見れば私が今筆を續けやうとする此の長い物語の中に現はれて來る一切の事件は、それが唯、一つのものの、完成の爲のプロッセスであり極めて巧妙なる道具立であり、併もその連續が殆ど偶然とは信じ得られないほど必然的に、まるで何物かの意志による超自然的な暗合と約束とが複雑なる此多くの事件の上に働いたかの如く思はれる、が此事件の發展を、而して其結果としての一つのものの完成を、あるものの意志の現はれであり、其或物を指して神と名付くることの妥當であるか、ど

うかを私は知らない。

とにかく……其二階を、私に取つて親戚と云ふのでもなければ、知己と云ふのでもなく、と言つて別段私の内生活に深い交渉のあると云ふのでもないS氏が僅かに私が文學志望の青年であるといふやうな漠然とした資格に依つて足を止めさせ、パンを與へ、多少の學資をさへ給與して呉れてゐる其二階を動き出さうと云ふ考へを持つやうになつたのは大正七年の初夏の頃であつた。其二階……私が二年近い月日を送り迎へた其二階……と云ふのは、S氏の經營してゐるある新聞取次店の二階の一室であつた。勿論、S氏の自分に對して持つてゐる厚意が、一二三といふ數の觀念を超越したほどの純粹なものであるとは其最初から思ひ設けないことであつたし、又それほどの厚意を他人から受ける資格も理由も少しも自分からは見出せないのであつた。がそれにも係らず此S氏の下心ある厚意が……自分の店から……苦學生養成の名を賣物にして經營してゐるやうな此店から……社會的に著名な文學者を生んだといふことの誇りと、名譽心とを滿足させたい爲めの薄ぺらな厚意が、自分には堪らなく不快なものに思はれ出したのであつた。別けても自分の仕事にまるで自信を失ひかけてゐた其頃の自分はさうしたS氏の厚意に對する責任感から來る苦しい壓迫と、毎年晩春から初夏へかけて定つて襲はれる憂鬱とが、結びついて私の氣持を一さう耐へ難いものにした、一瞬の間でも机の前に落ちついて讀書を續けることすら不可能のやうな、いら／＼した少しの平靜をも得られない心の狀態が夜となく晝となく續いた。

私は其頃今まで考へても見なかつたパンと云ふ問題を切實に思ひ惱むやうになつた。それと同時に夜街の行きづりに見受ける線の美しい女の白い顏や、色彩の強い友禪の袖やに際立つて心を牽かれるやうになつた。其癖私は自分の一生を如何に贔負目に想像して見ても美しい女や、甘い遊蕩的な氣分に浸るには、性格的に遠いばかりでなく、又物質的に

も遠いものであることを思はずには居られなかつた。それ處か此まゝで進んで行くと、撒水夫か、立ちん坊のやうなどん底の生活に陷ちて行くより道がないとさへ思つた。私は時として此まゝ不具者か何かになつて、一生パンの爲の專門家にはなりたくないと思つたことも屢々である。

俺には專門の職業といふものがない。と私はいつも考へた。と言つて金庫の傍に終日坐つて金の番人をするために生きてゐるやうな人や、○○といふ空ろな美名の下に身動きも能きないやうな檻の中に詰め込まれて、まるで墓場のやうな生活を續けてゐる種類の人達よりは不幸だと思たことはなかつたが、とにかく、全生存の價値を否定して、藝術によつてのみ生きることの意義を見出さうとしてゐるやうな私が、藝術に自信を失つた今、一日でも漫然徒食して行くことの能きないやうな都會の生活に實際不可能であることを思はせられた、私が人生の問題例へば、戀や、愛や、社會狀態の不合理やに對していかに熱烈な苦悶を抱き、眞の人間の道を追究しようとしたとてそれが決して私に生活の保證を與へては呉れなかつたし、又上京してから始めて漸くリーダーの四位より進んでゐない語學が金といふ形を借りて私の生活を潤ほすやうになるといふ事はとうてい期し得られないほど遠いものであつた。私はもう机の前に端坐して單語の一句一句辭書を繰る氣にもなれなければ、又其處へらに散らかつてゐる月刊雜誌の創作など手にして見ても、それがまるで生活に喘ぐものゝ苦しい呼吸を聽くやうに感ぜられた。私は其當時の日記にこんな事を記した。

皆なパンの爲に書いてゐるのだ。誰一人だつて眞の使命の爲に書いてゐる作家なんかあり得ない。みんな群集と黃金との前に跪いてゐるのだ。自分がもし僥倖にして大家の名を贏ち得た所で、矢張り凡俗な群集の前に跪く彼等の轍を踏まなければならないのだ。そんなら一層手つ取り早く物質へ走つた方がよいではないか、所が不徹底な自分にはそれが能きないのだ。何んだか自分のプライドを傷けられるやうに思はれてな……。

間歇的に來る煩悶がまたやつて來た。徒勞、此の頃の俺の目の前には此の二字がピタリと釘付けにされたやうにこびり付いて離れない。ほんとうに俺の仕てゐることは徒勞に終るのではないだらうか、一人の天才を産む爲に百人の犠牲者が要るならば喜んで犠牲者の一人として甘んじよう、かつて日記に記した此んな文字が實際自分の上に賦與された運命であつたら堪らない、此頃國の姉の手紙にそなたも最早子供には之なく、とあつた。俺はこれを讀んでゴツンとげんのうで頭のてつぺんを一ツぶんなぐられたやうに感じた。さうだ俺は時間的に數へる時廿四ケ年間生存を續けて來た故に今年は廿四だといふ。そして何等の用意もなく永久に少年の如くあれと願ふて生きてゐる俺にも、群集は大人といふ名を確實に被せ、生活といふ荷を負はせようとしてゐるのだ、然し生活樣式などはどうでも可い。彼等群集から孤立して生きて行つたならそれで濟むかも知らない。が内部にのたうち廻つてゐる本能欲…さうだ此の恐ろしい情熱の焰はどうすれば可いといふのだ。少年時代のかなりの秀才も所謂廿歳過ぎればたゞの人の類に終るのに裏面に此の問題があるのではないか、未來も、希望も、一切を本能の前に捧げて生活の重荷に喘ぐ人々をよく見受ける、此の頃の俺にはかうした人達の歩いた道がハツキリと判るやうな氣がする、かういふやうな俺の心の狀態は果して墮落だらうか、或は墮落とも言ひ得るだらうが、不自然だと何人が言ひ得よう（此日記は自分の一九一八年一月某日の日記を其まゝ少しの改竄をも加へずに拔萃したものである。）

深く其の底なるものに眼を向けると、矢張り時といふ觀念に煩はされずに生きて行かうとするような私の煩悶も、といふ桎梏から脱れることが能きなかつた。

オイ、アイドル、おまへはもう廿四ぢやないか、といふやうな意地悪い眼が絶へず私を睨めてゐるのだ、と辯解めいた辭が……

へヘン、S先生を見ろ、三十五で處女作を發表して、一躍して文壇の第一人者だ……

比較的潜伏期の長かつた作家の名を數へ立てるが、是等の作家は社會的に認められたのが遲ければ、遲いほど其作品には不滅の力と光りとが潜んでゐた。私の景慕してゐるベートーヴエンは廿五の年に、「吾へ廿五、それが今自分の到達した年だ……此年に於てこそ自分は自分の十全を現はさねばならぬ……」と、其友人に書き送つてゐる……何んといふ素晴らしい自信であらう……。それだのに自分は……此慘めな自分は……私の懊惱は時として狂暴にさへ導かれて行つた。

とにかく俺は此二階を動き出さう……先刻からまるで死んだものゝやうに、あほ向けに打倒れて、凝つと天井の一點を凝視してゐた私は、恁う獨言つて、體を起した。ゴタ／＼と六七人雜居してゐる隣りの配達人の部屋も、丁度夕刊の配達に出た後で、ひつそりかんと靜り返てゐた。初めのうちはさうでも無かつたが、此頃……別けても莫大な賞金を賭したO新聞の懸賞小説に私の長篇作が落選してからは、實際S氏の態度に今まで見られなかつた、ある冷淡さを見出すやうになつた。例へば配達人の出た後……彼等が新聞紙を折疊んだ跡に取り散らされた紙屑や荒繩を形付けてさつと一掃き掃き出して置いてくれといふやうなことを私に要求したり、紙取人が本社から受け取て來た紙數が、どうかしたはづみで五十枚位不足だつたりすると、S氏は當惑さうな顏をして

「Tさん、氣の毒だが、本社まで行つて來て與れんか……」

私はこんなことを言はれると全くハタと行き詰らずには居られないのであつた。其山の手の方のS氏の店から京橋に在る本社まで行くには、幾度もの乘り換をして、可成長い間電車に揺られて行かなければならなかつたから……電車の中で如何な知人に逢ふかも知れない……それに本社に行くには其店の定めとして必らず大きく新聞名を染め拔いた印袢

天を着けて行かなければならなかつたから……印絆天を着た自分の姿をもし、知り合ひの若い娘にでも見られたら、かう思うと實際其後に來るS氏の不機嫌を知りながらも、今日は一寸人に會ふ約束がありますから……恁うした見え透いた口實の下に逃げを張るのだつた。

俺といふ人間は何んといふ憐れな意氣地なしだ、まるで捨てられた小犬のやうだ、蹴られても、踏まれてもくん〳〵と鼻を鳴らしてS氏の後に從いて行かうとする……

私は毎日顏を合はせてゐる配達人のSや、Tや、Mといふやうな青年が、例へ修めやうとする學科は、中學、工手學校、商業學校……といふやうな幼稚な種類のものであつても、朝夕の幾時間かの貸い勞働の報酬に依つて、一歩、一歩堅實に自活の道を立てゝ行く狀を見ては全くS氏の前に娼婦のやうに媚びてまで、肉體の勞働を廻避して生きて行かうとする自分の不徹底と意氣地なさとに、堪えがたい自嘲を覺えるのであつた。いや然し、自分が彼等と同じように自から進んでS氏の前に肉體の勞力を提供して勇敢に理想に向つて行くことに對する躊躇は、單に不徹底といふばかりではない、私は性來の病弱で、別けても夏期から初秋へかけては、質の惡い濕性の脚氣の爲めに惱されるのが、毎年の例であつたから……。

其年の四月以來パツタリと神田の方の英語の學校へも顏を出さなくなつたやうな私は、と云つて今までのように焦せつて多くの文學書を獵らうとするでもないやうな私は、全く先づ其一日を過ごすことに倦怠を感ずるやうになつた。日中はよく出歩るいた。戸山ケ原、池袋、雜司ケ谷……時としては武藏野……代々木から駒澤……世田ケ谷の田舍の方へ分け行つた。何んの目的もなく、又何處といふ宛どもなく自分自身をさへ持て餘し勝ちな一日を過ごす可く、コツ〳〵と野から野へ歩き廻つた。

あゝ金が欲しい……そして女が……私はかう心に呟いて自分の周圍を見廻した。其處には……ずつと前、十五六の頃自分と一緒に歩み出さうとしたやうな商人風の友のKがブヨ〳〵と、太た其油ぎつた顔に皮肉な如何にも小馬鹿にしたやうな微笑を浮かせて、併も美しく着飾つた女に兩手を取らせて私の貧し氣な姿を見詰めてゐる。

畜生……K……貴樣は俺を侮辱してゐるな、よし、今に見ろ……かう力味返る後から……おゝ是は又何んと云ふ寂しさ……愛するもの無しに生きるということは……愛されたい……たとひ一瞬の間でも……いや……自分を愛して呉れなくても、自分の愛を柔順に受け入れて呉れる女が一人でもあつたら……。こんな時、漸う此頃になつて薄らいだやうな二年前の失戀の傷痕が、まざ〳〵と胸の裡に蘇つてくるのであつた。おゝ彼女……V子……自分が旅へ出たことも、作家としての志望を起すやうになつた動因も、其一切はお前故だ……がV子……今は何も彼もが駄目になつたのだ……いや、僕の凡てが、一切の事業が空しく終つたとしても、お前が唯、一度僕の接吻を柔順に、受けることを許してくれたなら……。私は自分も嘗つて住んだことのある、彼女の住む火山の麓の傾斜街を想像し、彼女が通ふ琴の師匠に自分の心情の一切を告白し、彼女に會見する機會を作つて貰はう……たとへ其結果が自分に取つて二重の悲劇を作ることになつても……私はかうしたドラマチックな光景を心に描いて、實際さうした瞬間に死んで行く自分を限りなく幸福なものゝやうにさへ思ふのであつた。

何時も、大勢の配達の中で、眞先きに飛び歸つてくるのは、W大學の政治科に籍を置くKだつた……Kは東北の方から出て來た朴訥な青年で、年齢も自分と均しい處からよく親しい會話なども交ひ、夜街の散歩なども一緒にした。トン〳〵と段梯子を上つて來てぐつたりと机の前に坐つたらしいKの氣勢がした、と續いて、

「T君……」

から次の室に居る私の方へ呼びかけた。其時まで机の上に肘枕をして種々な妄想を描いてゐた私はKにから呼びかけられて、むつくりと頭を擡げ、

「何あに……。」と氣のない返事をした。

「畜生……畜生……馬鹿らしんだ……アハッハッハッ……T君外へ行かう……實に面白い……いやうまくやられた」

私が次の室へ這入つて行つてみると、Kは悲しんでゐるのか、怒つてゐるのか……それとも笑つてゐるのか判らないやうな、表情をして、妙に昂奮して喋り立てゝゐる。そしてとにかく面白い話があるから外へ行かうと云ふのだ……。

私はKに促されて一緒に街路へ出た。店の前から急に坂になつて……其坂と向ふの坂と落ち込だやうな處にU區から、Y區へ通ずる廣い、街路がある。恰度其晩は縁日だつたので其通りは非常に雜閙してゐた。露店商人の群は兩側に列を成して客を曳いてゐる。そして其雜閙の中を、流れるやうに行き交ふ水々しい若い女の浴衣姿が際立つて美しく私たちの目に映つた。

「T君……」Kは油氣のない其長い髮を掻き上げるやうにして……さつきの燥いだKとは別人と思はれるほどしんみりとした調子で私に話しかけた。

「僕もいよ〳〵來年は卒業だ……併し君學校を出る……それが何を意味してゐるだらう……考へて見ると馬鹿々々しいことだ……僕は一層今のうちに止めて、少し遠くへ行かうかと思うんだ……。」

「遠くへ……。」私は訊き咎めた。

「あゝ遠くへ……」恁う答へたKは突然私の顔を覗くやうにして、

「T君……君は女に愛されたことがありますか……。」

恰度其時、二人は何時も寄る氷店の前に來たので、一寸寄らう、二人は目で首肯き合つて其涼しさうな氷やの暖簾を潜つた、其處へらに散らかつてゐるガラスの器具に青い瓦斯の灯が砕けて目にチカ〳〵と泌みる。氷やの主人の氷を削る音が一定のリズムを作つて氣持よく流れてくる、少時して二人の註文した氷が運ばれた、二人は貪るやうにそれを啜つた……。二人は蘇つたやうな氣持になつて其處を出た。

「君、五月蝿いから此處を抜けてM原へ行かう」私はKを促した。

咽せ返るやうな其人いきれから脱れた二人は狭い菜地に添つた裏道を歩いてゐた。

「T君……人を愛するといふことは悪いことでせうか……。」突然Kが妙に改まつた調子で言つた

「さう……愛すると云うことは悪いことではないでせう……。ただ單に愛すると云ふことだけならね……然し君は純粋に自分は求めないで、相手の人に愛を送ることだけに悦びを見出して行くことが能きますか……。」

「…………」

「僕には能きない……相手に愛を強ひることなしに愛することは……」私にKが私の言葉に何も答へないので、自分で自分の言葉に答へた。

「實に、僕もそれで苦しんでゐるんです」

「君に戀をしてゐるんですか……」私は率直に訊いた。

「いやそれが凡て駄目になつちやつたんです」

と云ふのは

「實はあのF子です」

「F子……」私は其瞬間氣が遠くなるやうな驚きに打たれた。

二人は何時の間にか、裏道を拔けて、M原の草の上に腰を卸してゐた。そこへは電車の響きと、夏の夜まちのどよみとが聞えて來るだけだつた。月は無かつたけれど、空には初夏の夜に特有の妙に明るい色があつた。空氣はムシ〳〵と生暖かく、地上の一切のものが醱酵して行くかのやうに思はれた。

「F子……いぢらしい少女……」私は心の裡に其名を呼んで見た……、

「僕ゝ、實はF子に就いて恐るべき一つの事實を發見したんです」

Kはいくらか昂奮してゐるらしい。

「君はF子が國へ歸つたとお思ひですか……いや國へ歸つたことは事實です……然し彼女は恐らく近くきつと上京するでせう」

私は一週間ほど前にS氏の家から悄然と父親に連れられて、埼玉の方の實家へ歸つて行つたF子の姿を胸の裡に描いた。

「それはどうしてですか」

「S氏がどうも疑なのです、今ですから何も彼も言へますが、僕は全くF子を愛してゐました。F子も確に僕を愛してゐてくれました。それは實際已惚れでも何んでもありません。F子は僕と恰度今夜のやうに、此草原でよく語りました、ある晩……細君は留守だつたさうです。按摩をさせてゐたS氏が、突然F子の手を取つて、きつとC子を實家に歸へすから……から云つて彼女の體を自分の傍へ引きよせたさうです……F子は驚いて店の方に飛び出したと云ひました……

いやこれは全くF子が泣いて話したのです……。併し確に其頃からF子の私に對する態度は變つて來ました。F子の持物が……洋傘や、帶やいろんなものが急に增したのも其頃からです……あゝ、あゝ、僕は馬鹿だつたのでせうか……今にして思へば全くいくらも機會は有つたのです、然し、どうして、あのまだ十六の少女の純潔を犯すことが能きたでせう。併もT君、F子が家に歸るときはもうたゞの體ではなかつたのです。あゝ僕が是を知つた時、併も實に女といふものは不思議なものです、少しの愛もない男の暴力に踏みにじられて、最后には其男に淚を見せるようになるといふことは何といふ不思議な事實でせう、實はね、さつき僕は階下の帳場の下でS氏宛の手紙を拾ひました、表には名がありません、消印を見ると明らかに、埼玉です、彼女です、F子です、第一あの幼稚な書き振りは……。其手紙に依ると、近く上京してS氏に何處かへ家を持たせて貰うらしいのです」

「止して呉れ……K君……いや信じられない……どうしてそんな恐ろしいことが……」

私はKの話を此處まで訊いて、手を上げて、其話を遮ぎらうとした。

「K君……僕は白狀する、いや彼女に關連したさうした話を、僕も苦痛なしで訊くことの能きない一人なんだ……」

「それは」……Kが驚異の目を瞠つた。

「いや、それだけなんだ……ハッハッ……」私は高く笑つた。が其笑が妙に自分の耳にうつろに響いた。もし此時Kが私の顏を正面に見ることが能きたら……彼は私の顏に殆ど泣き出しさうな表情のあるのを見逃さなかつたであらう。

二人は立ち上つて原の中央の方へ步いて行つた。此時突然Kが恐ろしく高い聲を張り上げて意味の取れない獨唱を始めた。それは、Kの寂しい時にやる癖であつた。私には相手が騷げば、騷ぐほど默り込んで了ふ癖があつたので煮えくり返るやうな心の動亂をじつと、胸に疊んで、Kの先きに立つてうつむき勝ちに步いた。私たちが家に這入つた時、連

中の中にはまだ目を醒してゐるのもあつた。彼等は僅かに八疊の一室にごた〳〵と七八人も頭を並べて、もう眞夏に入らうとする此頃でも蚊帳も釣らずに、まるで芋虫のやうに寝てゐるのだ……。併も布團と云つては……彼等が主任のS氏から一枚一ケ月三十五錢で貸し與へられてゐる其布團は、薄い、腸のボロ〳〵にはみ出たもので……彼等は一枚の布團を二つに折つて、其中に潜つて、柏餅といふ一種特別な寝方をするのだ。夏になつて、彼等が最初のうち苦しめられたのは、蚤と蚊だけであつたが、此頃では、丁度一ケ月ほど前から來てゐる朝鮮學生の張さんといふ青年が、何處かの安下宿から持つて來た南京虫が、家中に廣がつて、彼等の安眠を防げることが實に夥しい。机や柱の割目に潜んでゐる此の小さな闖入者は、夜になるとチク〳〵と彼等の腕や、首のあたりを螫して歩くのであつた。と其跡が赤く腫れて、恐ろしく痒い。で或者は、是を防ぐ爲めに、布團を物干臺に敷いて、毎夜のやうに戸外に眠る。或者は、机と机を並べて寝臺を作り一段高い處に寝る。或者は布團を出した後の空になつた押入れの中を占領するのもある。中には私の室へ押し掛けて來て、蚊帳の中に這ひ込んで布團も敷かずに朝まで眠つて行くやうな連中もある。だが併し、眠るといつても一二時頃まで寝付かずにゐたとしたら否く、彼等が安眠する時間は幾何もなくなるのだ……。なぜなら……紙取人が朝刊の車を挽いて、黎明の街を息せききつて歸つてくるのは三時から四時の間であつたから……。

私はKを促して自分の蚊帳の中に床を敷かせ、疲かれた魂を休ませやうとした。そして其夜日記にこんなことを記した。

F子……いぢらしい少女……私のあくがれの花……幸福であつてくれ……お前に對する私のあくがれが、單にあくがれとして終つたことに私は限りなき喜びと、滿足とを覺える者だ。私の心があくがれといふ一階段を越えて、もう一歩深くお前に迫つて行つたとしたら、どうして去つて行つたお前の幸福を祈ることが能きよう。いや私はお

前に呪をさへ送つたかも知れない。私は今こそ自分の心を少しも亂さずに、お前を……幻の中のお前をいつくしまう、終生あくがれの花として……。

とは言へ、其頃から私のS氏に對する尊敬の念は自然と影の薄いものになつて行つた。配達人に對するS氏の態度にも物足らない點を多く見出すやうになり、私は露骨に彼等に同情を見せて、小さな資本家對、勞働者の間の不合理を並べたてたりした。

私は或夜……丁度其夜S氏夫婦が芝居か何かを見に行つたのを見計つて、皆を自分の室に集めた。そして私はこんな意味の事を言つた。

僕は君達の味方だ……先づ第一君たちは自分が此S氏の店にとつてどういふ位置にあるかを考へたことがあるか、もし此店で最も尊いそして最も大きな力を持つてゐるものは誰か。と云つたら僕は立ち處に……君たち配達人だと云ふことに少しも躊躇しない。君たちは利用されてゐる、君たちが苦學生だといふことをS氏……S氏ばかりではない……あらゆる工場主、新聞店、牛乳屋……は賣物にし多くの世の同情を集め、そして私腹を肥し贅澤をし、美味しいものを食つてゐる。この間違ひは何處から來てゐるか、君たちが自分の價値を氣つかない處にあるのだ……君たちは先づ何より先き自分の價値を自覺しなくては不可ない。君たちが學校へ行く……さういふことの爲に凡てを忍從する。それが不可ない。實際……學校へ行く、ただ行くといふ其事に意味があるのではない。學校は一つの基礎に過ぎない。……君たちの仕事は遙かに遠い……先づ大きな仕事を仕樣と思ふなら第一精力を養はなくてはならない……それには、第一勞力を少くすること、滋養物を多く取ることだ……過激な勞働は、精力の浪費だ……幸ひにして君たちが學校を出た處で半病人のやうに、體が焦悴し、疲勞しきつてゐて、どうして大きな仕事が出來よう、一

時きの安きに惑はされては不可ない。君たちは朝夕八時間近くも勞力を提供してゐるのだ……現在得てゐる報酬の倍額を要求し、一人で朝夕の何づれかを分擔し勞力を半減しなくては駄目だ、いや實際此店の利益の七分は當然君たちの受け取る可きものだ……。

私は口から出まかせに喋り立てゝゐるうちにひどく昂奮して來た。皆は口を噤んで私の言葉に訊き入つた……ひどく感動の色をさへ見せたものがあつた。

第一……私は言ひつゞけた……君たちは實際僕の目から見ると一つの陷穽に落ち込んでゐるのだ。此陷穽へ……實に巧妙に、實に自然に、君たちの虛榮心といふ弱點を利用して導くやうに出來てゐる此陷穽へ……落ち込んで來た、憐むべき小鳥なのだ……。中身のない社會的美名……例へば君たちの郷里から一人の社會的成功者(餌)を產む……其一人を產むために百人……否千人の人が下積になつてゐることを知らない……高い處から見て、一つの餌に過ぎない其成功者……といふ美名につられて、君たちは郷里を、溫かい自然の搖籃を捨てる……上京する……其處には……營利本位の私立學校……狡猾な新聞店主……工場主……等は、新聞紙や其他あらゆる機關を利用して巧に網を張つてゐる……全く此世の中には陷穽が多い……。私は秩序もなく、喋り立てた……。

其夜私の喋つたことは、配達の中の何人かの裏切りによつて、直にS氏の耳に入つたことを、翌る日、麴町のO圖書館に調べ物があつて行く爲めに家を出た私は、其途中で一緒になつた神田まで行くといふKから訊かされた……。飼犬に手を噛まれた……S氏はかう云つてひどく私に腹を立てゝゐるといふことをもKは附け加へた……然し私にとつて其事は別段困惑を與へるほどの問題ではなかつた。實際其二階を動き出さうと思つてゐるやうな私にとつて、寧ろ運命が與へた此上もない好い機會だと思つた……二年近く凝つと押し殺して來た自分の氣持をS氏に知つて貰ふためにも……。

私は其日初めて〇圖書館の九段に面した青葉の窓近い机に倚つてMといふ先輩の書いた、新しき生活に入る道と云ふ對話を讀んだのであつた、曾つては其先輩が貴族階級の出であるといふことだけに、理由なしの輕い反感をさへ抱いてゐたやうな幼稚な自分ではあつたが……此日、此先輩の對話の一節を讀んで、どんなに異常な感激に打たれ、此先輩と同時代に生を享けたことの力强さに涙ぐんだことであらう。M氏……何んといふ素晴らしい人の名だ。俺は生きてゐる、生きたい、さうだ彼處にこそ此世の中に絶望しきつた俺を待ち迎へ、いたはり、憩はせ、勇氣づけ、眞の生き甲斐を感じさせ永遠なるものゝ前に手をつなぎ合つて、喜びの歌を奏しつゝ上り行く多くの兄弟の心臓が燃え上る一團の焔となつて今や、全宇宙に照り輝やかうとしてゐるのだ。廿四の今日まで俺の探し求めたものは是だ。自分の幸福の前に他の人の幸福を踏み躪さないのみか、一人の幸福を多くの兄弟が頒ち喜ぶことの能きる生活、私は永い年月の間どれほどさうした世界の實現を待ち望んでゐたことであらう、成る程自分は時として、溺れるやうな未知の世界に憧れるやうなことはある、それだからとて何人が、現社會の不合理を高調し、個人の自由と解放とを力説するやうな自分の一面を單なる氣紛れとして葬り去ることが能きよう……私は心良い昂奮に浸りながら机を離れて窓の近くに立つた。

空にはみるく色の雲が一杯に張り詰めて日光を遮ぎつてゐる、潤のない新緑に被はれた鈍銀色の甍の上に招魂社の鳥居と本殿の屋根とが高く突き出してゐる、風が無いやうでもう〱と向ふの湯屋の煙筒から吐き出す黒煙の亂れ散るのを見るとやはり風があるのだと思ふ。午后の圖書館の中には中學の編入試驗の參考書を前にしてゐぎたなく居眠つてゐる苦學生や、拾年も圖書館通ひを續けて、まだ辯護士試驗の通らないやうな老學生やが一杯に詰め込まれてゐる。其の多くは、廿歳の青年ではあつたが、青春の血潮の迸るやうな閃きは其何處からも見出すことは能きなかつた。

皆、疲かれてゐるのだ、と私は思つた。

五ケ年に亘る西の國の戰爭は、遠く東洋の殆ど孤立してゐるやうに見える此の國の思想界に、又經濟界に、下流に、上流に、實にあらゆる階級を通じて劇烈なる動搖を惹き起させた。そして或る特殊なる階級を除いては皆疲かれた。悉くの人は終日の勞力をたゞ生きることのみに捧げ盡しても尚且つ愛する妻と子とを饑と、寒氣とに慄へさせねばならなかつた。此の時私の胸に再びM氏の對話の一節が生々しく蘇つて來た。

今の世の中では大概の勞働、大概の金をとることは食ふ爲だ。そして金持をより金持にさせるに過ぎない。其の金の多くは酒と女とに費される、或はばくち、相場、又は人類の恥になる贅澤につかはれる、それは確に同胞の勞働と、時間と、健康とを浪費するものだ。そして此不正な、不合理の餌食になりたがつてゐるものが多い。何故なら餌食になれない者はそれ以上更に不幸だから、勞働と言ふ美徳であるべきものが賤められ、勞働し、健康を得べき筈のものが、健康を害ね、金のある怠けものがより自由と幸福とを樂しむことができる。此錯誤は何處から來てゐるか、金が吾々の生命を支配してゐる、其の不當な位置から金を追ひ出し人間の義務が此の位置を占めさへすれば、それで此の世はひつくり返る。自力と、他力との全き調和が得られ、個人的本能と、社會的本能とが調和され、自愛が他愛と合致し、愛が花咲き正義は人々を支配する、公平と平等と自由とを大きな浦をし讃美することができる、人間の爲に働くものは讃美され、働き甲斐と、喜びとを感じ、勞働者は同時に紳士で、紳士は同時に勞働者で、平民は同時に貴族で、貴族は同時に勞働者だ。皆な義務を果した安心を持つて、自己の天職に安心して進み、そしてあらゆる自己の才能を活かしきり、此世を美しく樂しく過ごす希望と、努力を持ちうる生活……。

何んと言ふ力強い宣言であらう、其時、氣違ひじみた昂奮が私を驅つた。私はお丶疲れたる人々よと心の裡に叫ばず

には居られないのであつた。

君達よほんとうに安心するが可い。

目を開いて見ろ、そして今、君達の前に君臨しようとしてゐる神の使はし人の聲を聽け、今こそ全人類が解放される時なのだ。たとへ吹き鳴らすラッパの音は小さくとも、俗物の聲は雑然としたまやかしい俗の聲に打ち消さるゝものではない。君達よ。その聲を聞き洩らすな、其の聲を聞き過るな、自分の内なる凡ての不純なるものを捨てゝたゞ正しき者の聲を聽く事にのみ備へよ、さうしてもし、君たちが僕と均しく永遠を通じて只一つ眞實なる澄んだラッパの音を聽く事が出來たら、どんなに悦びと、希望と、力強さとに打たるゝことであらう。私は先覺者の抱く特殊なる優越感にも似た感情の躍動をさへ感じた。

とは言へ、一時間後あの外堀の土手に添つて高臺の自分の二階に向つて歸りつゝある私の憂鬱なる表情を見て、何人か一時間前の勇氣と、希望とに充ちた私と同一人であると確證することが出來よう。實際現實は此瘋癲な熱病やみの有頂點な昂奮を維持させるには餘りに冷酷であつた。

それから私は、一歩一歩重い足取りで歩み移しながら自分の歸りつくあの二階の壓さるゝような物憂い空氣や、雑然とした机の上、それは自分の心の現はれであつた――を想像し、又無智な對境、狭隘なライフ、さうしたものを想つて深い泥濘の中に踏み込んで、もがけばもがくほど、身はより深い泥濘の中に居る自分であることを今更のやうに發見した。

M氏の新しき生活に入る道は確に自分の生涯に鮮明なる一つポイントを與へたことを私は否定しないであらう、然しさうした世界の實現を、私の實生活にまで結びつけて考へる事は餘りに遠いものであつた。一年、二年、五年、十年或は私の生前にさうした世界の實現を期待することに不可能なものであるかも知れない。M氏の言つてゐることは、形よ

り心だ……たとへさうした世界の實現は未知數なものであつても、此優れた一つの心臟は幾千、幾萬の若人の胸に、時と空間とを絶して無限に響き傳はるであらう。

「とにかく自分はあの二階を動き出さなくては……それに今となつては……一日でも彼處に止まる譯には行かない……。」

私は次の瞬間に長い間憧れてゐてまだ踏んで見ない千葉の田舍の光景に對して燒きつくやうな憧れに囚はるゝのであつた。

起伏のなだらかな丘陵、柔く温かい大地、新綠の野、明るい平明な感じのする千葉の曠野……其處には廿年近くも逢はない叔母の家と、自分が十四五の頃嫁いで行つた姉の住む一家とがあつた。自分は故鄕に一人の理解者も持たないと同時に……時として故鄕の自然……別けても彼のジヤパンアルプスの崇嚴な姿を想起する時、振るひ上りたいほどの靈感に打たれることはあつても……其處に何等の愛着をも見出すことは能きないのであつた。從つて私は、傷ついた魂と肉體の安息の地として何時も故鄕以外の地を心に描くのであつた。

さ　だ……俺は千葉へ行かう、そしてあの温かい自然の懷に抱かれて、もう一度、失はれた生命の力を取り戻さなくてはならない……私は此一つの考へに打ち突かると俄に輝かしい悦びに身を震はした。

私は家に歸ると直ちに荷物を纏め始めた。要らないものは隣りの連中の中で比較的世話になつたSやYに分ち與へた。それから大概の書籍は別な風呂敷に包んだ。包んで見るとかなりな重量になつた。其頃の私は書籍の賣買に對して正確な目測を附することの能きるほど古本の取り引きに馴れてゐた。今包んだ書籍は、愛讀の書の中でも最後まで殘して來たほど愛着の深いものだつたし、他に所有物としては數點の衣類を除けば殆ど何も殘らないほど貧しかつた其頃の自分

に取つて全く寶玉のやうにいとしいのであつた。三圓？　私は心の裡に思つた。そしてそれは丁度千葉の叔母の家までの旅費に相當する金高であつた。其頃私の行李の底に秘めてある一冊の貯金通帳があつた。それは遠い國の兄が送金して呉れたものを殘らず貯金したものであつた。自分の仕事に自信を失つて、徒勞といふやうなことを絶へず考へてゐるやうな自分にとつて、それが深い理解に依つてではなく、たゞ兄であるが故にといふやうな義務觀念から自分の汗の結晶を惠んで呉れる……それがまるで銀行に預金でもして置くやうに或時が來れば金は幾倍かになつて返て來るかのやうに期待してゐる。全くさうした金を使ふことは堪らないことゝであつた。其後S氏からそれと同意味の惠みを受けてゐることを自覺してゐながら……それで自分は送金毎に殘らず貯金して置いた。私はその時あの通帳のことを思つた。引き出しさへすれば本を賣らずに濟むと思つた。

「引き出さうか……。」

「不可ない……。」頑くなな私の一つの心が否定した。私は雑誌の包みを提げて戸外へ出た。

寺と、寺との間……背く風吹くカラタチの生垣、さうした小路を抜けると、T原へ通ずる廣い通りに出る。平坦な街路を一丁ほど歩くと綺にが　居があつて、　は其處からだら〳〵坂　なる、其坂の中途に二階建になつてゐる書店があつた。店主は何時ものやうに笑顔を以つて私を迎へた。そして私が風呂敷から取り出して數冊の雑誌を一冊づゝ手に取つて定價や、表紙の汚れ具合を仔細に調べ始めた。店主は調べ終ると同時に私の方に其氣のなさうな顏を向けた。

「何の位ゐつてお見込ですか……どうも澤山は出せません……」

「さあ何の位ゐつて。僕の方でも……」私はかう言つて相手の顏を覗くやうにした。

彼は相手につけ入られまいとする要心深さと、一方相手の腹を探からうとする狡猾さを以つて物を言つてゐる。

私は取り引きの時、相手の腹の底を探らうとする賤しい商人のやうな表情の自分の顔に泛んだのを意識して耐へられない自己嫌惡に囚はれた。で

「端錢でも可い。旅行前で金が要るんだから、損をしないやうに取つて呉れるさ。」

私はもう金高など何うでも可いと思つて急き込んだように言つた。

主人は一度調べた書籍を、もう一度手に取つて、

「二圓八十六錢なら頂いて置きませう」

と答へた。私は承諾の旨を答へて金を受け取つて街路へ出た。私はそのまゝS氏の店に歸り、自分の二階に上つて……丁度S氏が留守だつたので……机に向つて田舍に行く旨の置き手紙を書いた。書いてゐるうちに、瞬間前までS氏に對して抱いてゐた不快や、反感は霧のやうに消散して、長い間……まるで旅人のやうな自分に生活の保證を與へ……有形無形に同情を注いで呉れたS氏、それにも關らず自分は何一つS氏に報ゆる處もないばかりでなく、反つて彼に、反感をさへ露骨に示して此二階を出て行かうとする自分の頑な行爲が堪らなく濟まないものに思ひ返へされるのであつた。が、私はともすれば鈍らうとする自分の心を、ひつぱたき、追ひ立てるやうにして、書き終つた手紙をKに托し、其夜のうちに共高森の二階を引き拂つた。

二

親いK、S、Tといふやうな連中は荷を持つて電車の停留場まで送つて呉れた。そして私は麹町の清水谷公園に近い友の客舍で東京に於ける最後の夜（其時はさう思つた）を過した。

階下で女將さんと何か話し合つてゐる友の聲を私は寢床の中で夢現の境に心を浮遊させながら聞いた。天井から釣した電燈の蒼白く爛れた心は黎明の光の中に微かに顫えた。

窓の外には蒼碧に底もなく澄んだ空が覗いて、柔い太陽の光りは明い大氣の中に微笑んでゐた。私はぐつと腕を伸し一寢返りを一つ打つた。意識がやゝはつきりとして來た。

此前にゐた法學書生時代から貼り換へずにある煤色の壁に、貼りつけた「愛ある所に神あり」といふ友の坐右銘を釘付けにされたやうに凝視してゐると、それと竝び合つて貼つてある美人の彩色畫が目に映つた。私は妙に擽つたいやうた氣分に咬られて、うゝんと鼻で笑つた。

昨夜、おそく牛込の二階を引き拂つて、疲れ切つた體を轉がし込むようにして、友の敷いて呉れた褥の中にもぐり込んだ當時の落ち着かない心の狀態に比べると私の心は、碧い空、明るい光り、爽かな風、かうした外界の明るい風物の中に和ごやかに溶け込んで、何かしらづば拔けた幸福の豫覺にほゝ笑まずにはゐられなかつた。

新しい生活、新秋の野、さう思つただけでも私の心は躍つた。褥の中に靜止としてゐられない衝動をさへ感じた。

私は寢床を蹴つて階下へ降りた。友は朝餐の仕度に忙しがつてゐた。不器用な手で汁の實を刻んだりしてゐた。炭火がカン〳〵と熾つてゐるコンロの上に掛けた土鍋の飯は、フツ〳〵と煮え立ち、香ぐはしい、柔かい湯氣は、もうもうと光りの通はない隅の方へまで亂れ散つた。

「君の新生への首途を祝んだぜ。」

友は私の顏を見るなり快活にかう言つて、コンロの傍の新聞紙の上に乘せてあつた鯛の死骸を指した。

「どうも有難ふ、ほんとうに祝つて呉れ給へ、僕隨分嬉しいんだから」

其時顏を洗ひ終つた私は、友の手を取らんばかりにして言つた。

お互に別々な方面ではあるが、今伸びようとする生命の芽に思ふ存分日光を吸ひ込まうとするやうな若い二人の友は、初陣を悦び合ふ親子が祝杯を上げやうとする時のやうな、輝かしい心の狀態に於て、朝餐の膳に向つた。

「僕ももう一息だ、試驗さへ受かつたら仕事の方も專心にやれる」

友は私の自由な、放肆な生活を羨むように言つた。東北の方のSと云ふ溫泉地に生れて十二三の頃から養家の姓を繼いだやうな友は、山水の美しい其鄕土の自然から既に少年期に於て繪筆に親むことを敎へられた。とは言へ、古い家の習慣は彼にそれをも擲たせずには置かなかつた。彼は家傳來の藥業に關係ある學術の試驗を受けなければならないやうな境遇にゐた。

「年齡といふやうなことは此仕事の前には問題ではない、多く畫かなくつたつて可い、善いものを一生に一枚畫いたらそれでいゝ、燥せることはないさ」

私は幾度か友に向つて言つたやうな言葉を又此處へも引き出さずにはゐられなかつた。

私は其日の正午頃兩國驛から發する房總線下り列車の中に身を投じてゐた。

梅雨晴れの空に白い綿のやうな雲が流れつゝあつた。明るい陽の光は窓の外に溢れた。綿糸町を出ると沼地が續いて鯉を飼ふらしい小さな感じの良い家が其處にも、此處にも建つてゐる。鳶が中空に大きな輪を描いて餌を猟つてゐるのが眺められた。汽車は綠の平野をひた走りに走つた。私の心は明るく躍つた。誰にも話しかけたい衝動をさへ感じた。兩國驛で買ひ込んで來た餅菓子を寂しくなると喰つた。隣りに腰を卸してゐた十二三の小僧を捕へて食へと言つて包の

ま丶傍に押しやつたけれど、驚いたやうな、キヨトンとした目を私に向けた切り食べようとはしなかつた。

窓外には房總の野が濃く展げられた。

丘のやうな松山の彼方に青い海が覗いたり隠れたりした。帆船の滑べるのが、山國に生れて海に餘り親まなかつた私の目に物珍しく映つた。

午後二時幾分かにかねて名を訊いてゐた町驛に下車した。葉櫻が涼しい影を作つてゐる驛前の茶亭には氷水のフラフが風に翻つてゐた。中を覗くと瓶サイダーやラムネの瓶が雜然と並べられて、傍のグラスの蓋に砂ほこりの厚くたまつた箱には駄菓子が並んでゐた。私は其處へ這入つて行つた。子供を抱いた女將さんが茶を汲んで干菓子を剝げた盆に盛つて出した。私は茶を呑みながら此町に坂本と云ふ家が在るかどうかといふことを訊いた。

「はあ、坂本さんのお客さまか、坂本さまは此向ふの床やの角を曲つて三軒目でさ、あすこでも去年の秋の暴風で家が壞れて、今物置の方にゐなさる」

女將さんは私を上から下まで見下して、お氣の毒なと云ふやうな表情をした。

私は旅の第一日目に於て既に叔母の家の落魄の模樣を聽かせられた。それが、何かしら私の躍進しようとする新生への爪先を挫かれたかのやうに、若しくは之れから拓けようとする自分の運命の惡い前兆でもあるかの如に感じられた。

私は其處を出て叔母の家に向つて歩いた。小料理屋があつた。白い繭をひろげて置くやうな繭の買入所があつた。床やがあつた。私はさういふ通りを歩いて、或る家の前（叔母の家かしらと言ふ豫覺はあつた）で止つて、傍の畑に働いてゐた岩丈な六十位の女を捕へて、「坂本といふ家は此邊ですか、」と訊いた。

彼女は私の問にかなりた驚異を覺えたらしく、又奇異なる此闖入者の何人であるかを見定めようとするかの如に、非常

な、纖細な注意を持つて見た。そして、

「お前さんは離れだつけなあ、」とまるで私の問とは無關係な問を、非常な親しいものゝ間に於てのみ、取り交はされる無雜作さを持つて言つた。

「僕、茂樹です、Mの、」

私は彼女の顏を正面に見詰めて眞直ぐに答へた。そして彼女の表情の變化、其の神經の末梢にまで纖細な注意を拂つた。

「まあ、茂樹さんか、大きくなつて、珍らしい、珍らしい。」

彼女は何も彼も呑みこんだといふやうに言つて、踵を返してスタ〳〵と先に立つて母家の方へ歩き出した。私は驚いた。坂本の者だとは思つた。然し、それが自分とどういふ關係のものであるか、少しも解らなかつた。

畑を前にして小さな庭のある家、古い柱、汚れた天井、傾きかけた壁、光線の通はない家の中に設つらはれた神棚、何んといふみすぼらしく、陰慘な感じのする住家だらう。

おゝ茲に是れが私の叔母の住む家であつたのだ。叔母はどんなに絶大なる喜びを持つて私を迎へて呉れたことだらう

彼女はもう小さくなつてゐた。「しわの寄つた顏、ショボ〳〵した目、粗い油氣のない髮の毛、綺麗に拔けた齒、汚れた土の塊のやうな此八十餘の老婆は此地上に於ける自分に取つて唯一の叔母なのだ。父親の血に繋がる唯一の人なのだ。

私はかう思つて、眼の前に小さく蹲つてゐる彼女を泌みじみと眺めずにはゐられなかつた。

彼女は嬉しさの餘り泣いてゐるのだ。

「うん、茂樹か、此んなに大きくなつて、有難いものだ、長生きのおかげで貴樣にも逢へた。」親し氣に叔母はかう言つ

て、私の顔を慣れるやうに見詰めた。

「叔母さん、ほんとうに僕お逢ひしたく思つてゐたんです、こんなにお元氣なお顏を見てどんなに嬉しいか、」

私もいつの間にか涙ぐんだ。

「去年の風でな、家は潰れる、やつと落ちついたと思つた吉次は神戸で死ぬ、長く生きてゐると種々なものを見る、でも俺だけはこんなに達者で草捲りもやれば、お茶も作る」

叔母は述懐とも愚痴ともつかない調子で言ふ。先刻、私を家に導いて呉れたのが私の從姉でお豊さんといふ叔母の長女であつたと言ふことを私は彼女たちの間に取り交された會話によつて始めて知つた。祖母のやうな從姉、私は奇異な氣がした、今まではまるで違つた世界が假に自分の周圍に開けつゝあるかの如に思つた。私が東京から持つて行つた菓子の袋を叔母は嬉し氣に押し戴いて佛壇の前に備へた。從姉は茶を運んで來た。彼女は其茶が叔母の手になつたものであることを說明した。話は故鄕のMの方へ移つて行つた。

「お雪も、もう二人になつたてな、子供だ子供だと思つてゐれば直きにお母さんになる、克己から便りがあるかな、彼奴も習志野にゐた時來て呉れた、彼時は馬に乘つてな立派な兵隊さんだつた。嫁貰つたつて、良い嫁すら彼方でも大變善いつてな、手紙をやりたくつても横文字の上書きが書けないで……。」

彼女は、血緣……さう言ふのみで殆ど記憶にないやうな故鄕の誰れ彼れの名を頻りと、宛ら死兒を思ひ出す母親の熱心さを持つてくどくど訊いた。

「家でもな、吉次が死んでからは女手だけで母家の方も潰れたまゝになつてゐる。俺もどうせ長い生命でもないで克己へ手紙をやつて、死んだ時、香奠は要らねいで達者なうちに幾何か都合して貰いたいと思つてゐる。此んな都合のいゝこ

とはねい、お前長い手紙で頼んでやつてくれろよ」

私は其日の夕方長い間の沈默を破つて、遠い國の兄へ宛てて手紙を書いた。

「これが生辱に取つて、此地上に於ける唯一の叔母が其晩年に於ける光明と、希望の全部なる如く考へられ候へば」

私は此手紙を書き終つて、之れと同じい意味の手紙をかつて故鄕の血に繋がる何人かの口からも代筆すべく依賴されたことを思つた。

長い冬の積雪の下から芽吹いて、漸う土深く根をはり、空中に枝を擴げようとする若い樹木、それにさへ、もう多くの寄生虫は宿借らうとしてゐるのだ。執拗な蔦かづらは旣に幾重にも絡みつからうとしてゐるのだ、私は家長に生れた兄の位置の容易でないことを思つた。

私は書き終つた手紙を投函する爲に家を出た。敎へられたやうに停車場通りの狹い通りを突切つて、砂深い道を西の方へ進んで行つた。

切手を賣る家は其町の南の端れにあつた。

私は五錢切手を二枚貼用し、投函して茶畑の間の小徑を引つ返した。そして私は氣が付いた時、何時の間にか、深い谷合の方へ降りて行く細い小徑に立つてゐる自分自身を發見した。松の樹立の間から私は碧い夕空を仰いだ。野は靜かだつた、私を追はうとする何物も其處からは見出すことが能きなかつた。陽の光りは薄く黃色く野の上に流れた、此時故鄕にある古い大きな屋敷の光景がはつきりと私の眼前に泛んで來た。大きな風呂敷包みを背負つた幾人かの人が其家を出て、家の前の坂道を下つて行つた。門口まで送つ一出た人達は言ひ合せたやうに沈默のうちに見送つてゐた、四ツ谷の叔母さん、それが其人の名であつた。家の周圍の果實、葡萄や、柿や、林檎や、さうしたものを獵ることの好きな叔

母さん。稻子を捕へることの好きな叔母さん。其叔母さんの一家は遠い國へ移つて行つた。少年の私の胸は淡い悲みに顫えた。それから幾年か經つた。もう此の世から消え失せたかのやうに思はれた叔母は、廿年近い年月の間、艱難と貧困とのうちに生きて來た。おゝそれだのに彼時見送つてゐた私の家の人達は……、父の死、母の死、兄の渡米、家の離散……。

私の心は暗く沈んだ。

旅馴れない夜を私は叔母と從姉と共に過ごすべく薄い蒲團の中にもぐつた。勝手の方で猫の子の泣く聲が五月蠅く聞えた。

「明日は皆、捻り潰してやらにあ、五月蠅くて。」

老婆は忌々しさうに言つた。

「何んてひどいことを言ふずらお母さんは、他家の年寄りはお念佛でも唱へるつてのに、猫の仔をヒネリ潰すなんて」

從姉はたしなめるやうに言つた。

叔母はゼイ〳〵と咳き入つた。

私はクス〳〵笑ひ出した。蚤の襲來に輾轉と夜更けるまで私は床の上に反側した。

三

翌る朝目を醒ますと、煙雨が遠く野をかすめて、霧のやうな雨は家の中にまで滲つた、冷やかな空氣を送つて來た。

叔母はもう床を離れてゐた。

「まあ見ろよ、此蚕を、みんな薬に酔つてゐるぞよ、面白いこと〳〵」

彼女は椽近く薄い汚れた蒲團を擴げて、黄色く振り撒いた粉の間に、死んだやうて體を縮めてゐる蚕をまるで掻き集めるやうな手付をした。

そして其小さな闖入者を年寄の意地惡さを持つて一つ一つ椽の上でぶつ〳〵と爪で潰ぶすのだつた。

それが彼女には如何にも氣持よさうに、其度び毎に滿足な表情が浮ぶのだ。

質素な朝飯を終へると、私は踏み切り邊まで送つて呉れるといふ從姉と共に此處から三里、山深くへ入つた姉の家へ向けて出發した。

「小降りの雨だから、」と私がことはるのも肯かずに叔母は古い骨のバラ〳〵に壞れかけた洋傘をさしかけて呉れた。

「雨が歇んだら途中で放つて行つても可いでな」

叔母は追ひかけるやうに私に言つた。

雨に濕つた砂深い道を私は從姉と話しながら歩いた。

道は霧の深く罩めた野に續いてゐる。

淡綠に煙る落葉松の林の中に二條のレールは鈍銀色の腹を見せて一直線に走つてゐた。

私は從姉と踏切近くで別れた。別れる時彼女は山の郷までの道をくど〳〵し說明した。

私は一人になるとひどく寂しさに囚はれた。叔母や、從姉や、今、訪ねて行かうとする姉の一家のことを思つた。血緣といふやうなことから續いて母親の再婚といふことを思つた。

再婚は二重の罪惡である、此呪はしい斷定を私は今最愛なる母親の上に下さなければならない。母親の死後に自分逹兄弟の交情の上に見出した此の悲む可き溝渠をどうすれば可い、實兒に對する自分の尊敬と、信頼、彼の自分に對する愛……それが果して一髮の間隙を見出すことの不可能であるほど眞實なるものであらうか、甲に取つて最も親愛なる者が、乙に取つて最も憎むべきものであつたら、彼等の意識裡から母、繼母に、關する一切の記憶の消滅せざる限りは、眞の融合、眞の愛情の育くまることは恐らく不可能であらう。此の時私の腦裡にあの故郷にある屋敷の光景が再び描き出された。私が姉と遊びから歸つて見ると、奥の六疊に親戚の人たちが大勢稠坐して、其中には今は世を去つて私の記憶にないやうな老人も交つてゐた。母が隅の方で啜り上げながら何か饒舌つてゐた。向ひ合つて坐つた姉たちが、各自に母の方を睨んだり、罵つたりしてゐた。それがどう云ふ場面であつたか、私の幼ない頭には極めて朧氣に印象されてゐるに過ぎないのだけれど何んでも母が皆から一人責められてゐるのだと云ふ事だけは直覺した。私は其時のことに就いて幾度か母に尋ねたが、母は遂に口をつぐんで語らなかつた。然し私が朧氣な記憶や、人から聞き知つたことを綜合してみると、

「茂樹に家の跡を繼がせやうとしてゐる」

是が母に對する姉逹の反感の原因であつたやうに思はれる。とは言へ其晩年の兒である私の眼に映つた母は、新派芝居でやるお家騒動の女主人公として働くにしては餘りに善良であつた。私がお正月の餅のあられを切つてゐる姉たちの前で鉋丁を振り上げて、

「母さまの敵だ」

と言つて暴れ廻つたといふ話は其頃私の守をしてゐたおみねさんといふ近所の娘から物心づく頃になつて幾度か聞か

されたものだつた。

私は永らく觸れないでゐた、不快なものに打ちつかつたやうな氣がした、自分の腦裡からさうした忌しい光景を拔き取つて了はない限りは永久に彼等の前に柔順な弟として跪くことは能きないと思つた。

黄熟した麥畑の盡きた所で道は三方に岐れた。一日二日と云ふ觸れ込みで行くにしては余りに大きな、私に取つて全財産である袋を肩にして來たので、細い袋の紐は痩せた肩の肉に喰ひ入るやうな痛みを與へた。霧のやうな雨が歇んで乳色の雲の裂け目から直射する白ちやけた陽光に私の全身はシツトリと汗ばんでゐた。

左の方は松林に續いて怪鳥の時折氣魂しく啼く聲が聞え、右は雜木林に續き前方は急坂になつて、小徑を下り切つた谿谷の小流れには朽ちかけた丸木橋が架せられ、それから又、向ふの急坂に道が續いてゐた。私は此處まで來た時ひどく間誤付いた。あれほどくどく說明された道順も、こんがらがつた糸くずの如に私の頭腦を徒らに搔き亂すに過ぎなかつた。私の前方に續いてゐる松山の彼方、物の五里と隔たらない處に、青い波の澎湃する九十九里の海が展げられてゐるといふことも、又僅か一里近く迫つた所に、拾年近くも逢はない骨肉の姉の住む家の存在してゐるといふことも今は全く信じられないほど遠いものに思はれた。人里離れた幾百里の山深く行き暮れた旅人のやうな、妙に寂しい泣き出したいやうな心持になつて、私は其處に荷を卸して蹲つた。

道は私の前に三方に、否無數に續いてゐる、然し私の選び歩んで行く道はたゞ一筋であり、一歩の差は私の全生涯の分岐點であらねばならなかつた。私はかうした危機を曾つて過去に於て幾度か心の裡に經驗した事を思つた。かうした時の私は全身の竦むのを覺えた。一歩の歩み、それにすら本能的な恐怖を覺える程、私は自分の運命に對して怯懦であつ

た。

私は其時、自分から數歩向ふの雜木林の中に何か白い物の隱見するのを認めた。續いて草を踏みしだく物音を聽いた

私は救はれたやうな心持ちになつて、再び重い袋を肩にして近よつたのであつた。其處には一頭の白い牝牛が草を食んでゐた。牝牛は私の姿を認めると、モーと一つ呻るやうに鳴き立てた。

私は馬鹿にされたやうな腹立しさを覺えたが、きつと牛飼ひが近くにゐるに違ひないと思つた、で私は、

「山之鄕は何方へ行きますか」

と極めて丁寧な句調で訊ねて見た。然し私は其處から何物の反響をも聞く事が能きないと知つた時、妙に白けたやうな心持ちになつた。が次の瞬間に幾度か呼びかけてゐるうちに牛がものを言ひ出して私を不思議な世界に導いて行く、其處には此地上におけるあらゆる寶玉や、眞珠を眩ゆいばかり鏤めた天女の群が、百花の咲き亂れた花園を囁きながら飛び歩いてゐる、そして意外な此闖入者を物珍しげに取り捲いて、交る〲スイートな接吻を與へては笑ひさゞめく、私は西洋のお伽噺の中の主人公のやうな氣紛れな空想に醉つて、暫時恍惚としてゐたのであつた、が二度目のフザケたやうな牛の鳴き聲に依つて忽ち現實へ引き戻された。そして私はそれと全く反對の松林の中に、絹の如に降り注ぐ陽光を浴びた黑い人影を發見した。

私に救はれたやうな喜びに飛び上つた。

私は松林の方へ引き寄せられるやうに歩んだ。日影の洩れない小徑は土が黑く濕つて懷しい土の匂ひが鼻を衝いた。其處には秣を刈つてゐた二人の少年が鎌の手を休めて私を怪げに見上げてゐた。私はそれに一層親みを覺えて、

「山の鄕へ行くには、」

と肩の荷を引き上げるやうにして訊いた。

「山の郷は此處だい」と年上の少年は顔を赭くして卒直に答へた。

「木暮つて蠶を澤山飼ふ家を知つてゐるかね」

「木暮……あゝ邦さんとこだんべい、向ふの櫟山の家だい。」

少年は相手の少年と顔を見合せて、向ふの丘の上の家を指した。

松林が盡きると麥畑が大傾斜をなして續いてゐる、其の傾斜地を迂つてゐる白い一筋の道の盡きる處に、櫟の矮林に圍まれた一棟の藁屋が指點された。屋根の上に突出してゐる蠶室に特有の二個の氣拔きが私に木暮の家であることを確信させるに充分であつた。

少年に指示されたやうに私は傾斜地を突つ切つた。道は櫟林の中へ通じて、林を出た處で一方は左の松山へ、一方右に折れると、山の郷の木村へ通ずる。木暮の家は其角にあつた。

家へ……一筋の道……兩側に桑畑が續いて强烈な陽の直射の中に光澤のよい桑葉は一枚々々躍てゐる。突き當つた所に戸の傾いた厩があつて、其處を左に折れると正面に母家があつた。斜に傾いた大戸が〆めかけになつて、其間から薄暗い家の中へ流れ込む光りの波が、汚れた家内の狀をくつきりと描き出してゐる。戸口には鳥糞が固くこびりついてゐた。座敷の方の灰色に褪せた雨戸は悉く立て切つてあり、凡ては眠つてゐるやうな靜けさのうちに、たゞ物憂げな石臼の音がゴロ〳〵と遠雷のやうに聞えて來る。大戸に手を掛けた私は、家の中を覗くやうにして、

「ご免なさい」と續けて二度ばかり呼んで見た。其時、汚れた板の間に打ちのめされたやうに倒れてゐた黑い人が默々と軀を起して、土垢に黑く汚れた額を節くれ立つた岩丈な掌で撫でるやうにして戸口の方を見返つた。

其頃、前額部の毛の生へ際から右の肩にかけて深く印せられたノ字形の刀痕……それがもし、初見のもので此の人の過去に對して何等の豫備知識を持たないならば、誰れしも其形相の恐ろしさに振るひ戰かずにはゐられないであらう。が、此の人の、といふよりは此家の歴史に對して、余りに明らかな知識を持つてゐる私には、此の黒人種のやうな男が、自分が最後の一節の糸として縋るために訪ねて來た、義兄であることを其瞬間に直覺することが能きた。全く其頃のない刀痕によつて義兄であることは明らかに證據立てられてゐるとは言へ、私の想像の中にあつた其傷の持ち主は、もつと立派な若者であらねばならなかつた。

男は戸口の所まで來て、ガタピシと大戸を引いた。私は一歩家の中へ踏み込んで、

「私、Mの茂樹です」義兄の顏を正面に見詰めながら言つた。

義兄は一寸の間、非常に緊張した、こんがらがつたやうな表情をしたが、次の瞬間に吾に返つたと云ふやうに、目の邊りに好人物らしい微笑を浮かべて、

「うん、茂樹さか、こりや珍らしい」

と言つて、振り返りさま、おい／＼と向ふの闇に石臼を廻して居た黒いものを呼びかけた。

黒い物は膝に附いた粉をポン／＼と拂つて立ち上つた。一寸見には子供のやうにも見えたが、大體に於て人間と言ふ感じは薄かつた。上から下まで黒い、汚れた物を着てゐた。股引の下は藁で縛つてあつた。男とも女とも判然しなかつたが、 の毛のぐる／＼卷いてあることに依つて、女であることが確められた。よく子供の時見た狐忠信の芝居の中へ出て來る子役の扮する狐の姿が何んの連絡もなく腦裡に閃いた。下等な動物といふ感じがした。

「Mの茂樹さんだ、おい」

「マア、茂樹さんかい、大きくなつて、よくまお來たいな、此んな山の中へ」

おゝ其聲の美しく、朗らかに、併も親しみ深き事よ、そして又、其獸のやうな姿態に比して何と云ふ不調和……。

彼女は非常な光り強いものゝ前に立つたやうに、モヂ〳〵と嬉しさを押し隠すかのやうにして近よつて來た。其顏は姿とは反對に青白くそして美しかつた。目から頬へかけて心持ち肉の落ちてゐるのが私の哀愁を強く誘つたとはいへ、その愛くるしい形のいゝ鼻と、黒く黝く瞳は紛れもなく姉の幼な顏其まゝであつた。私は理由もなく悲くなつた。眼の中が熱くなつて泪が一杯に溢れて來るのを覺えた。

「お照、早く水を汲んで上げねいか、足を洗つて仕度を取らにあ、皆汚れて了ふ、砂場だからな」

義兄の言葉に姉は甲斐々々しく軒の車井戸から水を汲み上げて、水垢の溜つてゐる手洗の中へあけた。

「上等の下駄はすぐ汚れて了ふから之を穿いておくんな、」

彼女はかう言つて、荒縄の緒をすげた、手作りの高齒とも、駒下駄とも付かない下駄を手洗の傍に置いた。私は上り框の板の上に袋を卸して、促がさるゝまゝに足を洗つた、私の足を洗ひ終るのを見ると、其處へらを探し物をして居た姉は忙しく自分の腰から……恐らく彼女が畑に出る際に頭髪を包む唯一の物であらう、白い手拭を拔き取つて私に渡した。私は足を拭ひ終ると、招ぜらるゝまゝに上に上つた。其處に板の間續きになつて煤けたネコが敷いてあつた。火鉢の前に敷いて呉れた、鹽に潰つたやうな坐布團の上に私が坐を占めた時、奥の方から障子を開けて人の出て來る氣勢がした。續いて、

「何に、茂さが來たとい」

かう言つて次の間から顏を出したのは、私の從姉といつても四十近くも違ふ、又、姉に取つては姑に當る婦人であつ

た。そして義兄と同しく其前額の大きな刀痕は、油氣のない白髪と、きかない性質を思はせる鋭い眼光とにシツクリ調れ合つて、彼女の形相を一際凄いものにした。私は此人を見た瞬間、何かしら或本能的恐怖に顫え上らずには居られなかつた。

「何處にゐたいお前は、此の息子はいらい尻空きだつて言ふが」

彼女は偉大な句調で言つて、私と竝んで火鉢の前に坐り、太い竹筒を輪切りにして作つた煙草容器の中に無雜作に手をつつこんで眞鍮の煙管に刻莨を詰め始めた。

私は其鋭い眼光を避けるやうにして、

「東京に居たんですが、少し脚氣の氣味なんです、ぜひ田舎の土を踏みたいと思つて、少しお百姓を手傳はせて戴きませう。」

二三日遊んで、もし此生活から自分の傷ついた肉體と、靈魂とを醫やすべき何物かを見出し得るならば、暫時、否永久に此の山の上の土に埋もれようとまで心に誓つて來た私では有つたが、此場合私の心のうちに恁う言はせずには置かない何物かがあつた。

「東京に遊んでゐりや、躰の弱くなるのは當り前だ、野菜を喰はねいで人間が達者でゐるもんけ」

義兄に怒つたやうに言つて、ハツハツと、吐き出すやうに笑つた、

「茂樹さは一體子供の時から余り達者でなかつたから」

姉は私を辯護するかのやうに、まるで暴君に對する隷屬のやうなおど／＼しさで言つた。

漸乎つと瞳をすゑて見ると、光りの通はない土間の奥には据風呂、其横に竈が三つ、大きな鍋、大きな釜、一ばん西

の端の縁には眞黒な煤の縄が下がつて、其處に釣した鐵瓶の下へ姉が柴を頻りと折りくべてゐる、其の傍に、裏口へ通ずる三尺戸がついて、其開けかけになつた所から忍び込んで來る鷄の群が、土間から板の間へ絶へず横行してゐる。從姉が煙管を振いて追ふ度にパッと跳び下りるが次の瞬間には、老鷄のづうづうしさを以つて再び板の間に上つて來る、勝手とも茶の間とも、寢室ともつかない此の一間は、實に此地方の農家に取つて最も重要な場所で、殆ど屋内生活の全部は此處に於て營まれると言つても可い。自分は此時、板の間の奧の積み重ねられた綱の間に、何物か動く物を見出した。私は眼を瞠つた。そして其處に相抱き合ふやうにして倒れてゐる二人の少年を見た。年上の方は七八歲位で他は三つ違位の少年で、何れも汚れた着物を着てゐた。で私は丁度其時茶を煎れて皆の前に運んで來た姉に向つて、

「家の子供ですか」と訊いた。

「あゝあの上にまだ十一になる女の子があるだのに」

姉は心持羞恥の色を含んだ目を私に向けて笑つた。そして焚火の上に掛けてあつたホウロクの中の落花生を掻き廻しつゞけた。

從姉は姉の方へ流眄を與れて、

「貧乏人の子供の多いのは、眞平だ、茂さとこでも余り子供が多かつたで身上を惡くしたづら」

恁う言つて、恐ろしく光る眼を私に移した。

義兄は當惑さうな顏を子供の方へ向けて、

「おい邦夫、辰夫、起きろよ、Mの叔父さまのお土産をやるぞよ」

義兄の聲に子供達は刎ね起きるようにして、義兄の傍まで來たが、見馴れない來客の姿を認めると言ひ合せたやうに

立ち止つた。

二人とも、どつちかと言へば父親似の愛くるしい顔立てだつた。円らな四つの目は何處に其視線を落ちつけたら善いかを迷ふかのやうに祖母から父親へ、そして私へ走つた。

「サア、此方へ來てごらん、お歳は幾つ、もう學校へ行くの」

私は優しくから問ひかけて、近倚つて少年の手を取らうとした。少年たちはモヂ〳〵してゐたが、年下の少年は、幼年の親み易さを以つて直に私の腕に抱かれた。

「邦夫、伯父さんお出でなさいやれ」

突然、義兄の怒つたやうな聲が私の耳近くで起つた。と、少年は、それがまるで旅藝人の使ふ小猿のやうな柔順さを以つてキチンと坐つて、

「伯父さんお出でなさい」と聞き取れないほど微かな聲で言つて赭くなつた。

義兄は誇らし氣に私の方を見て、

「此奴はどうも物覺えが惡くつて、先生に教つて來た事を直き忘れて不可ねい。」

然う言つてヘッヘッと笑つた。續いて、

「辰夫もやれ」

と私の膝の上にゐた少年を睨めつけるやうにして命令した。少年は一寸の間、はにかんで紅くなつた。が自分に注がれてゐる父親の鋭い視線に出會すと、おづ〳〵として私の膝からゐざり下りて、兩手をついて頭を下げた。義兄は愉快さうに高笑つた。從姉は私の土産の菱落雁をつまんで少年達に分ち與へた。

姉は栗色に焦げた落花生を笊の中にあけて其處へ持ち出した。皆は落花生の皮を剝きながら語つた。故郷のMの方の人の噂や、故人の追懐や、遠い國の人の事などが話題に上つた。

「茂樹さに嫁の心配もしてやらねいで、全體克己さんの了簡が解らねい、金を蓄めたり佳い着物を着たりして、人間が偉くなつたと思つてゐる、みんな間違ひだ。」

義兄は昂奮し、目を光らして私を見た。見たと云ふよりは睨んだと言ふ方が適切であつたかも知れない。「とにかく一と風變つてゐるから逢つて見ろ」此人に就いて曾つて東京の方の親戚の何人かから言はれたことを思つた。

「面白い確に變つてゐる」と私は思つた。

「孟子様が言つてゐるやうに、仁義忠信、善を樂み倦まざれば是れ天爵なりで、人間は天爵の方が先きで無くちや不可ない今の世の中はそれと反對だ」

義兄は言へ續けた。

「三井さ何んか、其處へ行くと確に偉い、俺達のやうな小作人にあ丁寧で親切だが、上野の旦那（地主）なんぞに逢つたつて言葉もかけねい。」

三井？ 私は其名を訊き咎めずにはゐられなかつた。で、どういふ人なんですかと訊ねて見た。

「××主義者で、もう此山の中へ入つて三年にもなる、そら此向ふの屋根の新しい家、彼處に此春まで居た人でさあ、本村の金持の息子で十二年も外國へ行つて來た人だ、歸つた翌朝家の人が表に出て見ると、家の周圍に七八人の角袖が立つて居たつて程の人物だ、それから此處へ家を建つて書き物をしたり、本を讀んだりして遊んでゐたが、面白いのは看守の巡査だ。三井さが畑に出れば畑、井を打てば井、何んでも一緒だ。」

「駄目だツ。」

　此時、従姉が突しぬけに、義兄の言葉を遮ぎるやうにして叫んだ。

「三井が、廿年經つて見ろ、自分の世にして見せるなんて威張るやうなら、何故あんな茶屋女と一緒になんかなる」

「そりや無理だ」と其時私は此會話に口を挾みたい衝動を感じた。が理性はそれを許さなかつた。

　此んなやうにして私の山の上の生活の第一日は始つたのだ。とにかく皆が私の慕ひ訪ねて來たことを喜んで呉れたやうに見えた。

　私は姉の出して呉れた仕事着に着換へて義兄の後に踵いて外へ出た。

　強い午後の陽の中に凡ての物象は靜坐してゐた。廢屋と言ひたいほど軒や、屋根の崩れかけた蠶室が三方に建つてゐる。義兄はそれが旺んな養蠶時代の名殘りであることを語り聽かせた。

「蠶室は十一號まで建てたし、人も八十人まで使つて見た。いや蠶は面白い。此道樂ばかりはどうしても止められない。――」

　義兄はかう言つて、過ぎ去つた旺んな時代を再び目の前に描くかの如な輝かしい目をした、

　義兄は私を廢屋と、桑畑との間のだら〳〵坂の小徑から、濶く緩やかな傾斜をなしてゐる畑地の方へ導いた。

　其處は義兄の父親の三十年近い長い年月の勞苦の結晶だつた。故郷のMまちの方で、其頃盛んになつた製糸熱の渦中に投じて、家產の凡てをそれに濫費したやうな義兄の父親は、義兄の十一の秋同業者某の憎怨を買つて、（主として従姉の口癖に原因してゐた）其唯一の所有物たる製絲工場に放火された。

　火勢は黎明の强風に煽られて倍加した猛烈さを以つて、殆ど全町を嘗め盡した。従姉と、義兄との刀痕は、某が憎惡

のとばつちりだつた。某は二人を傷つけた刄で直に肚を裂いて死んだ。此の騒動の最中に行衛不明になつた、義兄の祖母は翌朝になつて灰燼の中から白骨となつて現れた。

古い傳說と、歷史との上に立てられたやうな其城下街の住民は、古い家と、傳來の寶物とを烏有に歸したことをひどく悲み、歎いた。

そして其火元である義兄の家に對する怨恨と、憎惡とは絕頂に達した。

悲哀と、慘苦と、窮困とは同時に義兄の家に迫つた。義兄の父親はさうした窮迫の底から死に物狂ひになつて一方活路を見出したのだつた。彼の青年の日遊んだことのある千葉の田舍、不毛の曠野、開墾、其處にこそ彼の爲に備へられた無限の領土がある。

妻や子供を私の家に預けた彼は十一になる義兄を携へて、山深い此曠野に分け入つた。

おゝ自然はどんなに溫かく、廣い胸を擴げて彼を待ち迎へたことであらう。

其處には何等の不安も、怨恨も、不平も、鬪爭もなかつた。字義通りの平靜、字義通りの平和、字義通りの淸淨のみがあつた。彼は生れて四十年來嘗つて接したことのない慈愛と、溫和とに充ちた世界を其處に見出だした、ほんとうの安息、ほんとうの平安……其處からこそ彼の新なる生命の泉は湧き、希望と、光明とは振へ上りたいほどの靈魂の躍動を彼に覺えさせた。

晝は林間の淸澄な空氣の中に、彼の打ち下ろす斧の音が心地よく響き、夜は、櫟林に圍まれた踏み潰ぶされたやうな掘立小屋の中に榾の火が赤く燃えた。

義兄は父親から四書や球算を夜毎に敎へられるのだつた。狐や怪鳥の啼く聲が後の雜木林で聞えた。こんな時終日の

烈しい勞働に困憊した義兄の父親は定つて居眠りを始めるのだつた。

「父さん淋しよう、起きてよう。」

義兄はかう言つて父親の膝を揺する、居眠りから醒めた父親は、トロンとした目を少年に向けて、

「お父さんも一寸眠つた、さあご本を形付けて寢よう」

薄い蒲團の中に親と子とは相抱いて寢た、恁うした夜と晝とが早々として寂しい親子の周圍を流れ去り、流れ來つた。

「何處の食ひ詰め者だんべい」

親子に對する恁うした嘲笑はやがて、

「偉らかまけるこつちや、身上を作るぞい。」

本村の人達はかう言つて噂しあふのだつた。

三年經つた。

彼の家の周圍の雜木林は悉く切り倒された。新しい土は掘り返され、麥は青く芽を吹いた。暖かな陽は其の上に流れた。

そして此新開地に多くの人が移り住んだ。延野の人の呼び名は皆出身地が代名詞に使はれた。

ヘワイ、中野、武州、信州……

信州、それが義兄の家の代名詞だつた。

義兄の家では故郷のMの方から十文字、ロソーなど幾種類かの桑苗を取り寄せて自分も栽培し、親しい移住民達にも分ち奨めた。

養蠶……それこそ小作人の悲慘な、窮困共ものゝやうな生活を覆へす唯一の道だと義兄の父親は信じたのだつた。

六年經ち、八年經ち、拾年經つた。

義兄の家では三丁歩の畑を耕作した。

掘立小屋はとつくに倒されて、櫟林の跡の丘の上には幾棟かの蠶室と、住宅兼、蠶室の素晴らしく大きな藁屋とが新たに建てられた。それと同時に彼の家族は幾層倍かに增加した。義兄の母親、姉、妹、そして、許婚になつてゐた私の姉、かうした人たちは前後して此丘の家に姿を現はした。

坂本の叔母の家が鬱田の驛に移り住んだのも其頃だつた。

「一と蠶に五千圓宛も金が入るさうだ……」

故鄕の方まで流れ傳はるかうした噂に續いて、顏を顰めずには居られないやうな從姉の豪酒……酒亂……の時は、姉の苦い忍從の風評と共に鄕人の耳朶を打つた。そして其の間に姉は三人の子供の母と成つた。

米國の禁輸は糸價の暴落となり、製絲家の不振となつた、彼の家の養蠶の失敗は五年續いた。養蠶が唯一の光明であるやうな此一家は再び窮困のどん底に突き落された。かうした中に義兄の父親が死んで行つた。

それでも自然は決して彼を裏切らうとはしなかつた。いつも慈愛深く、そして謙讓だつた。麥の芽は青く白日の中に光り、桑葉はスイ／＼と天心に向つて芽を吹いた。

働け、土に親しめ、そこからこそ新しい生命の芽は萌え出すだらう……自然は絶へずかう彼に囁いた。彼は脆弱な妻を勵して黎明に床を蹴つて野に出た。星影は彼の振り下す鍬の齒先きに閃いた。紺青から藍碧に移り行く蒼穹を仰いで、よく働くものゝみが味ふ事の出來る快感と、幸福とに、彼は幾度泪ぐんだことだらう。

夕ぐれ、彼等が其最後の鍬を打ち下す頃、野は既に深い夕霧の中に眠つてゐるのだつた。

日中の暑熱に反して日の暮きかける頃から、餓に海の方から押し寄せて來る冷めたい大氣は、起伏のなだらかな野から野へ這ふ。

「もう上らずに」

「あゝ」

若い夫婦は相前後してとぼ／＼と野道を辿る、新開地に散ばつてゐる移住民の家の爐の火が其處にも此處にも赤く闇を染める。

終日の勞苦を終へて夫婦が家に辿りつく頃、彼の家の勝手の薄暗いランプの下では、毎夜のやうに定つて從姉が晩酌の膳に向つてゐるのだつた。板の間の光りの通はない隅の方にまるで犬の仔のやうに、子供たちが這ひつくばつて眠つてゐる。

姉は薄暗い勝手の方で夕飯の仕度に急ぐ。

夜、もしそれが月あかき夜であつたら、[illegible]を秘めたやうに靜り返つてゐる向ふの森から遠く野の果てに、白い霧の帶が一杯に流れて、青白い燐のやうな月光は柔く溶け込み、雲影に騒く小作小屋の番犬が物凄く吼える。

こんな時、森沈と耽け行く夜の寂莫を破つて、土を掘り起す彼の鍬の音は村人の耳を聳たゝせずには置かなかつた。

「兵太さの夜仕事」村の人はから言つて讃めちぎつた。

「桑のちゞれをとう／＼是れだけにした、理窟でなく實際に研究して見ようと思つて毎晩夜仕事を十二時まで仕たでさ」

恰度、北桑畑の前まで來た時。義兄は高く笑つて、光澤の佳い桑葉を私に指し示した。

私は、血まみれになつた人の子が、赤裸裸のまゝで大地の懐に飛び込んで贏ち得た汗の結晶を其處に見た。其處には嚴肅と、崇嚴とのみがあつた。私は衝動的に義兄を見上げた。

其瞬間、私は勤勞其ものゝやうな此巨人の前に跪きたい奇異な力に打たれずにはゐられなかつた。泪ぐみたい感激が私の胸に來た。

巨人……もし、さうした名を現實の人の上に冠する事が可能であるならば、私は、私の義兄の上に此名を敢て呈することを許して貰はう。

「自分が死んだら此處に石碑を建てゝ貰ふ」たとへ其言葉は、兒戲に類した幼稚なものであつても、私は義兄の口から此死後の希望を聞く時、其處に或嚴肅さを見出さずにはゐられないのであつた。

若し、村の中に貧困、或は病苦に苛いなまれてゐるものがあつたら、翌朝其勝手口に垢染みた袋に溢るゝほど詰め込まれた白米の幾升かを必らず其處に見出すであらう。

村の道路……此處は義兄の家からは餘程遠い……が崩壊した、かうした噂がもし義兄の耳に入るやうな事があつたら……其一時間後には其處に鶴嘴を振るつてゐる義兄の姿を必ず見出すであらう。

「ハワイさの家の牛が逃げた時なんか、まるで氣違ひのやうに山を飛び歩いて、ほんとうに家の兵太は他人のことになると木のやうになる。」とは從姉の誇りとも、愚痴とも付かない述懐だつた。實際又、義兄の眼には土地の境界に自他なく、人との交りに少の私情をも容さなかつた。正しき者のみが義兄の味方だつた。利己……さうした文字は義兄の世界には死語のやうにさへ見えた。

深夜、義兄は例のやうに畑に居た。其の時恰度通り掛つた旦那（地主）が、義兄の姿を認めるや否や、

「よう、兵太さ偉らご精が出るのう、ご苦勞、ご苦勞」

彼は自分の土地の肥える事に滿足を感じて小作人に對する尊大さを以つて言つた。

「天下の地所だ、荒らして置いちや申しわけない」

義兄は見向かうともせずに鍬を振つた。

天下の地所、地主は此言葉にひどく不機嫌を感じた。

「お汝にロシヤ人のやうな事を言ふ。」

地主は怒つたやうに言つて其處を立ち去つた。

「作つた物は困るものに分けてやる、其メククリは俺が一人で背負つて地主の前に此體を投げ出す迄でだ。働いても、働いても足らない、旦那に見て貰ふより道はねいのだ。」

義兄はいつもかう言つてゐる。

私は義兄に導かれて、だら〳〵坂を下り切つて再び傾斜を上つた。傾斜面はかなり廣かつた。

其處には四五寸位に勢よく伸びた陸稻が、嫩葉を風に踊らせて、畦目正しく、際涯もなく續いてゐる。義兄は畑の中に一步踏み入つて其處に蹲まつた。そして陸稻の根に芽を吹いてゐる雜草を毟り取るべく私に命じた。

私は草履を脫いで素足のまゝ義兄と隣り合つた畦に立つた。

土……長い間憧れてゐた土だ。おゝ母なる大地、私は今こそ、お前の上に立つてゐるのだ。確實に……。恁う思つた瞬間、長い航海に倦み切つた船乘が陸土に辿りついた刹那のやうな異常な感激が私の胸を充たした。

僅か數日前に、燦とした物質の光りに眩惑されようとした自分は何處へ行つた。あの神樂坂の夜の行きづりにあでやかな舞妓の姿に憧れたやうな氣紛ぐれな分子は自分の靈魂の何處からも見出すことは能きなかつた。物質、さうしたものに幾分なりとも心を惹かれた過去の自分を想像することにすら、不快な自己嫌惡と、それに伴ふ焦燥とを感じた。

俺は書きたい、さうだ書かう……永遠の爲に……。

藝術に對する燃えるやうな慾求は此時、私の胸を耐へ難いいらだゝしさに導いた。

「人は人を小にし、自然は人を大にす」

武藏野の詩人の歌つた詩の一節が私の胸に非常な權威を以つて蘇つて來た。

義兄は私の存在に絶へず零細な注意を拂ふかのやうに、ともすれば後れ勝ちな私の畦の雜草を挘り取り、「馴れないと腰が痛いで」と劬はるやうに私に言ひ言ひした。實際其時私はもうひどく腰が痛かつた。時折立ち上つて背伸をし、腰の邊りを握りコブシでトン〱と續け打ちに打つた。雜草の莖を挘り取る毎に軟い指の肉は薄く擦れて赤く血がにじんだ。

非常な努力を要する同じいやうな狀態が約二時間續いた、私はもうすつかり疲れてゐた。

夕靄が濃く野を籠めた。

恰度其時十位になる少女が私とかなり遠い距離にゐた義兄の傍に來て何事かを囁いてゐるのだつた。義兄は少女に二度程、首肯いて見せて、そして私の方を見た。

「さあ茂樹さ、お風呂が沸いたで上つておくんな」

それで私は其少女が姉の總領の女の子だと思つた。小女は私の視線が自分に注がれてゐるのだと知ると、笑んでニッ

コリと笑つた。そして周章てたやうに頭を下げて　トツトと傾斜道を驅け下りた。

私は龍兒より一足先に家に歸つた。家の横まで來た時辰夫が私の膝に飛びついて來た。

私は少年の汚れた小さな手に頰づりし、其儘抱きかゝへるやうにして、勝手口まで來た。

灯のともらない黑煙の充滿した勝手の隅に風呂の火が眞紅な焔を吐いて、其前に姉が腰をかゞめてゐた。

「お風呂を貰つても可いんですか」

私が言葉をかけると彼女は驚いたやうに振り返つて、

「お疲れでせうに、一寸まだ微温いかも知れないけれど這入つてゐるうちに沸くべいから」

かう言つて、私の手に引かれてゐた少年を見ると、

「まあ、辰夫、叔父さんに、可いことな」

彼女は心から喜ぶものゝ如く言つた。そして

「良人で余り叱るもので他家の人に甘き馴染んで三井さんが來ると家の子供はこりや喜ぶんですの」

彼女は訴へるやうに言ひ續けた。

私は仕事着を脫いで横に轉がしてある臼の上に置いた。そして煙の中を突切つて風呂場に行つた。

盥の中央に板が渡してあつた。私は其上で體を洗つて風呂の中に飛び込んだ。

風呂はひどく汚なかつた。周圍の板に體を摺りつけることすら薄氣味惡く思はれた。眞黑の天井からは煤が落ちて來さうに思へた。

私は薄暗い風呂の中に少時、凝乎と體を埋めてゐた。全身の疲勞はすつかり脫けて細胞の一つ一つが溶解して行くや

うに思へた。

「少し流さずに」

姉はかう言つて、煙いので目をショボつかせながら風呂の前に立つた。

「ではざつとで可いんです」

私が湯氣に包まれた體を姉の前に現すと、彼女は憐れるやうに私の體を眺めて、

「まあ痩せて、骨組がお父さんによく似てゐること、」

かう言つて懐し氣に私の背を流し始めた。

「叔母さん（私は従姉をかう呼んでゐた）はどうしたんですか、」

と、私は姉に訊いて見た。

「今坂まで燒酎を買ひに行きやした。さつき雛子が死んだで、今夜は茂樹さにごちさうをするんだつて、」

二人の此會話の終らないうちにガラスの一升壜を提げた従姉の姿が裏の三尺戸に現れた。

「茂樹さ、疲れたんべいや、今夜は雛をごちさうするでな、攻つ、」

従姉は後に踵いて來た小女を呼びかけた。

「兵太にも今日は早く上るやうに言つてきな」

彼女は板の間に上つて、マツチを摺つてランプをつけた。群り充ちた風呂の煙の渦巻く中に、汚れた室内の光景が朦朧と描き出された。彼女はランプの下に膳を据えて、獨酌で燒酎を啜り始めた。前額部の刀痕が不氣味に光つた。

私は風呂から上つて、姉の取り出して來た死んだ父親のものだといふ半纏に着換へた。

そして火鉢の前に坐つて、從姉の酒を呑む光景を恐ろしい物でゝも眺むるやうに見た、強烈な燒酎……彼女はそれが壜から直に茶碗大の盃に移して全るで貪るように啜るのだつた。

「茂樹さ、お汝一ツ呑みな、」

突然彼女はかう言つて盃を私の前につきつけた。

「僕はまるで駄目なんです」

私は困惑を露骨に現して拂ひ退けるやうにして言つた。

「お汝のお父さんも酒呑みだんべいや、」

彼女はかう言つて光る瞳で私を睨んだ。

私は父が生前此自分と年齢の違はない姪と酒の上でよく言ひ爭つたことを思つた。

「お照は茂樹さの姉だけんど、あれは天保錢でおまけに脊丈が矮さくつて踏み臺にもならねい、」

從姉は既にアルコールの全身に廻つたかのやうに、呑めば呑むほど、青黑く凄味を持つ其顏を夕飯の仕度をしてゐる姉に向けて毒々しく罵り始めた。續けて私の父の馬鹿だつたといふことや、母の生活のフシダラだつたといふことを、私の知らないやうな場面を抽出して一々指摘した。

「お汝のお袋は毎朝枕元へ煙草盆を取り寄せて寐煙草を吸つては起きたものだ……」

彼女はこんなことを言つた。

私は晩年の母親から續いて、若い時代に長い間都會生活を續けた最後に、六人もの繼子のある私の家に嫁いで來たやうな母親の生涯を顧みながら想像することが能きるやうに思つた。

義兄が畑から上つて來た頃は、戸外はすつかり暮れ切つてゐた、子供達も皆遊びから歸つて來て、ランプの下に集つた。

「先きお風呂を戴きました。」

勝手口に義兄の聲を聽いた時私は聲をかけた。

「さあ、さあどうぞ、馴れないと草取りは一ばん疲れる」

義兄は機嫌よく言つて、臼の上に着物を脫いだ、「辰夫、邦夫、來いよ、」

二人の少年を呼びかけて風呂に行つた。

少年達は爭つて着物を脫ぎ捨てた。

皆が風呂から上つて來た頃は姉の方の仕度も調つた。ランプの下には種々なものが取り出された。大根のおろし、さゝぎのよごし、芋の煮物、私の膳の上には、碌に骨も叩いてないやうな雞の肉を丸めたものが附けられた。

落花生の味噌汁……さういふものをも此處で私は始めて食つた。

夕飯後、從姉の實家の坂本家と、義兄の家との家柄のことから親子は恐ろしく喧嘩を始めた。

義兄は正しさの前には何人をも容さないと言ふやうな謹嚴さを以つて、理窟を竝べ立てゝゐる、從姉は時折、野卑な例へば、貴樣の父さんは間男の子だ、といふやうな辯舌を交へて罵り立てるのだつた。

姉は其度び怯々と、私の方を盜み見た。それが救ひを求むるかのやうにも、又許しを乞はうとするかのやうにも思ひた。

私は傷ましさに顔を背けずにはゐられなかつた。それと同時に、姉に對する哀憐の情は一層切實に胸に迫つた。廿年近く、罵られ、毒付かれて殆ど毎夜のやうにかうした光景を見、現世的の快樂、例へば美衣とか、美食とか、さうした物の存在することすら忘れたやうに、默々として續いて來た長い、長い忍從のライフ……おゝ何と云ふ尊い人生の記錄!! 私はそれを思つただけでも涙ぐましい感激に打たれずには居られなかつた。

私は堪らなくなつて、戸外に出、庭に立つて空を仰いた。上弦の月が幾層にも群り涌く雲の間から覗いてゐる。青白い月光の底に描き出された幽玄と、神秘との世界、砂丘の彼方の森で鳴く梟の聲と、足下の雜草の底から流れて來る虫の音の外、其處には何物の雜音も、何等の錯擾もなかつた。

私は此時人の運命の不可思議を思つた。

盲目的に他人の意志に從つて、此山深い田舍で送つた姉の、字義通りの悲慘その物のやうな生涯……それが如何に他目には無意味なものに見えようとも、艱難の花は、美しく咲き、忍從の美徳は永遠に生きて輝くであらう。私は此の時自分に近よつて來る人の氣勢を聽いた。振り返つて見た時そこに、姉の蹲まつてゐる姿を認めた。

「何方、姉さんですか、」

私は一歩後ずさつた、そして仔細に彼女を見た。彼女は泣いてゐるのだつた。

「姉さん、何も彼も解つてゐるんです、どうぞね、もう暫時忍んで下さい。子供が可愛想ですからね、」

私は彼女の背を撫でるやうにして言つた。

「どんなに國の人に遇ひたく思つてゐたか、此處へ伴れられて來た時から、歸らう、歸らうと思つてゐるうちに、子供は生れる、やり切れないぞよ、あのお母さんだからな、それも一緒にゐる人でも優しなけば可いけれど。」

「解つてゐるんです、よく解つてゐるんです」

私は同じ言葉を繰返した。

「辰夫、一人だけでも連れて國へ歸らうと時折考へるけれど」

彼女は言ひつゞける。

私は何う解決して可いか判らないやうな混沌とした心の狀態に居た。

忍從の美德……さうした美名の許に彼女を慰めるべく余りに場面が切實だつた。

他人の運命を自分の意志のまゝに動かして其結果を顧みようとしない奴は呪はるゝが可い。私はかう思つて其當時私の家の全權を握つてゐたやうな義兄の一人を想起して耐へがたい憎惡をさへ感じた。私は此不幸な姉を伴れ、上京して勞働を賣つても、苦しい境遇から救ひ出さう、と、それは瞬間的にではあつたが私はヒロイックな昂奮に驅られながら思つた。

私は其夜、奥の間で從姉と共に蚊張の中に寢かされた。眠りに陷るまで私は恐ろしく不快な妄想に苛いなまれた。

四

翌朝、家の周圍の樹木を揺する恐ろしい風の音を聽いて目醒めた。茶の間から妙なアクセントを付けて音讀する義兄の聲が聞えて來る。私は從姉より先きに褥を離れて、蚊張を脱けて茶の間に出た。そして火鉢の前にあぐらを搔いて孔子聖訓を讀んでゐる義兄の姿を見出した。

「お早う」

私は輕く挨拶をして其處に突つ立つた。

「お早う、さあお茶をお呑みなさい」

義兄は莫迦に改つた調子で云つて茶を汲んで私に奬めた。

「エヽ有り難う」

私は答へて土間に下りた。そして飯の仕度をしてゐた姉に手拭を借りて、井戸端へ行つた。

朝の陽の第一線は先づ隣屋の屋根に流れた。

庭には白い花をつけたさゝぎの細い莖がなよ〳〵と強い風の中に搖れて唐黍と、うどの若芽がそれを圍んでゐる。畑は野の近くにまで籠めた。

私は義兄と共に茶を啜つた。從姉も其處へ顏を出した。子供達も揃つた。

皆朝飼の膳に向つた。

「頂戴をしろ」

「ごちさうさんをやれ」

義兄は子供達のかうした箸の上げ下げにまで些細な注意を拂ふのだつた。

子供たちは揃つて學校へ出て行つた。

拾時頃になると畑の土は烈日に燒け爛れたやうに熱くなる。姉が坂の店から私の爲に買ひ求めて來た四人の用ゐるやうな大きな編笠を被つて、私は姉と共に畑の草を摘つた。

地の肌を見えない迄に張り詰めた莖草を擦り取る度に草の音は、微妙な線香花火のやうな音を立てゝ彈ける。

姉の述懷は又始まる。

此山の中へ入つてから一度佐倉へ參詣に行つた外、一度もあの山を越したことがないといふことや、母の危篤の時行けなかつた事の憾みや、舅の死んだ時、實家からの香奠が他の親戚に比して少なかつたので氣が引けたと云ふことや、養蠶の全盛期には從姉の呑む酒が四斗樽で擔ぎ込まれたといふことや、を彼女は長い間、鬱積してゐた述懷の糸を吐き出す可き唯一の口を見出したかのやうにくど〳〵と並べ立てた。

私は其日の午后、親しい二三の友に此山の上に來たことを報知するはがきを出さうと思つた。はがきを賣る家は半里ほど離れた本村にあつた。私は良夫の手を引き、近所の二三の子供を伴れて砂道を踏んで行つた。

××主義者の住んだといふ家は、固く戸を閉されて、庭に南瓜の蔓が匐つて居た。燒かれるやうな烈しい思想を抱いて、人煙の稀薄な田舍に隱れ住んで、無知な茶屋女を相手に暮して行くといふやうな、其人の心情を思ふと、私は黯然として暗い氣持に引き入られずにはゐられなかつた。

其邊りの畑には麥が黄色く結實し、ハート形の甘藷の芽が青く伸びてゐた。

多くの農夫は一齊に勞作に携つた。

畑に働いてゐるものは鍬の手を休め、通りすがりの者は振り返つて、生白い此闖入者の顏に、好奇と、不安との相錯交した瞳を向けた。其度私は、強い自責と、愧とを覺えずにはゐられないやうな、自分の過ぎ去つた生活が堪らなく濟まないものに思ひ返された。

古い農家は大方竹林に圍まれてゐた。づは拔けて太い、まだ衣を脫いだばかりの今年竹が其處にも此處にも見えた。

此邊から野の景色は廣く、明るく擴げられた。少年たちはひどくはしやいだ。唱歌を歌つたり、近道をして私を驚かしたりした。はがきを賣る家は本村の中程にあつた。私は其處で友へ宛てたはがきを書いて直に其家の表に備へ付けられたポストに投函した。

家に歸つた時、私は庭に二頭の馬の繋いであるのを見出した。馬は二頭とも丈の高い、素晴らしく良い栗毛の乘馬だつた。私は馬具や、鞍覆に依つて、それが陸軍の乘馬であることを知つた。そして私は近づいた時、其馬が繋いであるのではなく、二頭のはづなが一人の兵卒の手に依つて持たれてゐるのを見た。兵卒には稀れな、美しい血色をした青年だつた。一方の手にはづなを握り、湯呑茶椀を他の一方の手にして、チユツ、チユツと口を鳴して絶へず馬の動靜に注意を拂ひつゝある。

私は其兵卒に輕く會釋して、不快なものを見たやうな、そぐはない心持ちで家の中に這入つた。其處の薄暗い土間にカーキ色の軍服に綠色の肩章をつけた青年將校が快活に茶を呑みながら煙草を燻ゆらしてゐるのを見た。義兄と、從姉とが敬意を露骨に見せて、何か下らない御饒舌を續けてゐた。

青年將校は老驕さうに時折大きな笑聲を上げた。私は皆に默禮して其まゝ引返して座敷の中に入り、積み重ねられた蒲團に身を埋めた。物の腐敗するやうな、不快な臭氣が何處からともなく流れて來た。

私は其處で種々なことを思ひ耽つた。

もし吾々の友人のうちに、其父母から健全なる體軀を與へられて來た者があつたとしたら、其人は既に壯年期に於て不當なる死を宣せられるか、若しくは不具者となるか、又は野蠻にして惑はされ易き、戰爭の美名の下に其敵人を殺戮

し、若くは傷つけ、併して其恐るべき、宥るされ難き、罪惡をさへ正當なるもの〻やうに考へるやうになる、併も是等の人に取つて指揮者の命令は神の律法より尊く權威あるもの如く思惟されてゐる。そうして此錯誤は何處から來てゐるか、萬人の最高なる良心が戰爭を認めてゐるのでないことは判り切つてゐる。盲目にして、無知なる、靈魂の狂顚せる或種類の人を除いては、其の戰爭を指揮する人も、指揮せられるものも、其悲慘にして、不合理なることを痛感してゐる點では殆ど同じと言つても可い。それだのに彼等の何れもがまるで其事に氣がつかぬかのやうな顏をしてゐる。而して富めるものは富を、位置あるものは位置を利用して、徴兵を忌避する、貧しきものは健全なる双眼を不完全なるものとし、若くは工場の齒車に愛する肉體の一部、手足の小指をさへ切斷して廻避しようとする。……私は思ひ續けてゐるうちに頭がぐら〳〵として眩暈がひどくして來た、で冷めたい水に頭を冷さうと思つて外へ出た。其時本村の方へゆつたりと、馬を進めて行くさつきの軍人の姿が桑畑の向ふに見えた。

「お上の仕事をする人には敬意を以つて勞を犒はなくては可けねい。」

義兄は私を見るとこんなことを言つた。そして茂原へ行つた時通り縋りの警官に、

「ご苦勞さんです」と言葉をかけると、警官は暫時義兄の刀痕のある一寸目には凄い顏を瞶めてゐたが、

「一寸署まで同行を願ひたい」かう言つて義兄の先に立つて歩き出した。義兄は此話をして例の高笑ひをした。

五

朝の間、輝かな陽が野の上に流れたかと思ふと、午后の空は定つて驟雨作るのだつた。

風、冷めたい風がヒヤリと肌を刺す。初秋を思はせるやうな風だ、やがて雨が來る、此邊の雨は來たかと思ふと歇み、

歇んだかと思ふと來る、雨の後の野の色は佳い。黑い土、稔りの稻、黃熟した麥、凡ては新鮮で、濟火な感じを與へる。氣紛れな太陽は再び雲の間から覗く、農夫の姿は俄に野の上に散ばる、陽が落ちると野は凉しくなる、野に人影の少なくなつて行く頃、かはたれ時の心地よさ、麥の穗を燒く火が其處にも此處にも夕闇を染め拔く。萬象……野も里も只鉛紫の一色に暮れて行く、西の空に怪しい雲が湧いて、電光が頻りと閃く。此んな時私はよく畑の小徑を歩いてゐる。そして思ひ續けるのだつた。

正しく生きようとする點では、義兄は恐らく人後に落ちないであらう、たとへトルストイの信條の一頁を繙いたことはなくとも、自己犧牲の精神は義兄の生活の全部と言つても可い、比類なき無言の實踐者……それだの、義兄の生活は其愛する妻子を少しも幸福にしないばかりでなく、絕へず淋しがらせ苦しめ、厭世的にさへしてゐる、そして傍にゐる私にさへ時として不快な壓迫をさへ與へる。何んといふ不合理……さうだ義兄は吾々の生活に論理以外の何物かのあることを知らない、思想の硬化、精神の硬化……一ばん不可ないのはそれだ、理窟だけで生きようとする義兄の肉體の何處を突いても、迸るやうな鮮血を見ることは能きないであらう。人間味の拔けた人の生活は墓場の石のやうなものだ。吾々の生活は理窟ではない。理窟を超越した神と人との融合の世界……其處にこそ永遠の樂土は拓け安住の地は見出さるゝであらう。

從姉……彼女も寂しいのだ……と私は思ひ續けた。製糸場……故鄕の方にさういふものがまだ建たなかつた頃、彼女の町にKと云ふ先覺者がゐた。彼は時代に魁けて其鄕里から六人の子女を選み隣縣のT町にあつた製糸場に送つたTへ行けば血を吸はれる……かう言つて後込むような町の子女の中にあつて、彼女は率先して其行に加つた。僅か三年後、鄕里の製糸熱は殆ど狂熱的だつた。彼女は新歸朝者の意氣を持つて歸鄕したのだつた。彼女は教婦として各地の製

糸場に招聘された。そして最後に自ら良人と共に製糸場を經營したのだつた。かうした彼女が山深く埋れ終ると云ふ事は、大地の底に秘められた溶岩のやうなものだつた。絕へず柔かい土を破つて噴出しようとする、が周圍の事情と、年齡とは既に之れを許さない。桎梏は彼女の上に幾重にもかゝる。そして烈しい彼女の性質は年と共にひねくれた、意地惡いものに變つて行く、かうした彼女に取つて强烈なる燒酎の幾合かは、現實の苦悶を忘却する唯一の仙藥であり、柔順なる其家人は鬱積せる不滿の捨場のやうに見える。そして又、私の姉は……。

六

毎朝深い霧が野を包んだ。

終日自然と鬪つてゐると、體の關節は嚙まれるやうに痛んだ。夜はよく疲かれて眠つた。それで私が床を離れる頃は、枕元の障子には明るい陽が一杯に流れてゐるのだつた。

子供たちともすつかり仲よしになつた。麥刈り、葱や甘藷苗の移植、草搔り、私は種々な仕事を義兄に從つてやつた。義兄の居ない時は克く姉と共に畑に出た、姉は私と共に住む日の長い事を祈るやうにも又、胸の裡に疊み込まれた不平や、追懐やを、語つても語つても語り盡くせないと云ふやうに見えた。此んな時もし義兄の姿を認めるやうな事があつたら彼女はオド／＼と直に話頭を換へるのだつた。

夕飯の馳走に姉は能く珍らしいものを作つて食はせて吳れた。唐黍の團子、柏餅、田舍臭ひ大きなお萩、私は此の丘の家に移つて五日目にお萩を喰べ過して恐ろしく下痢を始めた。それで私は三日ほど床に就かなければならなかつた。

大きな赤い玉の藥りなどを姉は呑ませて呉れた。

雨の日は勝手の方から姉の粉をひく石臼の音が枕に響いて來る。義兄は古い漢文の本や、中京の方の親戚から郵送して來るよろづ朝報の論說やを枕元で音讀して聞かせる。時として、古い行李の中に溢れるほど詰つた養蠶日誌……精細な溫度表や收繭高や、人夫や、純益高や……其盛んな時代から晩年までの此家の盛衰の歷史を舒べ擴げ、感慨に耐へないといふやうに、義兄は讀み聞かせるのだつた。そして義兄は頻りと私に歸農を奬める。私の枕頭に書きかけになつて居た感想の草稿を取り上げて、

「うん是れだけ能きてゐれば百姓をしても大丈夫だ。」など言ふ。

私は此山の上に移つて半月經たないうちにすつかり憂鬱に陷ちて行つた。とは言へ、其憂鬱はかつて都會にゐた頃經驗した、深淵の縁に立つたやうな、重苦しい憂鬱ではなかつた。索莫と、單調との對境を踏み破つて、もう一度煮え返るやうな思想の渦に飛び込み、藝術の領土に突き進まうとする勇敢なる戰士の抱く焦燥と、それに伴ふ憂鬱とだつた。私は畑にゐてもともすれば沈默に引き入れられた。私は姉や、義兄から話かけられても、碌々返事をしない事さへ珍らしくなかつた。義兄たちはひどく氣を使かつた。そして私を勇氣付ける爲に秋の收穫期の愉快さなどを語り訊かせた。私は機械のやうに畑に出て、機械のやうに寢た。皆が茶を呑んでゐるやうな時でも、私は是等の人の群を離れて、一人靜かな場所を選んで何かしら思ひ續けるのだつた。

七

夏期に於ける此邊の農家の習慣として、晝飯後の二三時間は必らず午睡に費すことにしてゐる。板の間、青葉の蔭、物置小屋の隅、皆、思ひ思ひの場所に安眠の地を見出す、此日、私は午睡の一二時間を過ごす爲に座敷の廊下に莚を敷いて其上に仰臥した。日に一度正午頃此村を訪れる郵便脚夫を除いては殆ど外界との交渉を斷つてゐるやうな此山の上の生活は、長い間繁雜と喧囂との中に生きて來た自分に取つては、時として全く耐へがたいほど無聊なものに思はれるのだつた。長い間都會を離れて一人絶海の孤島に漂泊ふ旅人のやうな、やるせなさが、燃えるやうな藝術的欲求と、それに伴ふ讀書慾とに結びついた。こんな時、私はよく自分が都會から提げて來た吾妻袋を持ち出して貪るやうに其中を探き廻すのだつた。そして其處から自分の愛讀する書籍の何物をも見出す事が能きないと知る時、私はひどく寂しさに囚はれずには居られなかつた。愛讀の書を三圓足らずの金に換へた自分の馬鹿さ加減に限りなく腹立しさを感じた。かうした場合の自分に取つて、僅かに都會にゐた頃毎日のやうに書き留めた日記の頁を繰ることが唯一つ殘された慰安であり、靈魂の潤ひであつた。

莚の上に仰臥したまゝ、少時强ひて眠りに陷ちようとするかのやうに目を瞑つて、野から來る軟い風に體を嬲ぶらせてゐた私は、其時、自分の考へが或一つの物に打ち突かると彈ぢかれたやうに飛び上つた。そして私は何時ものやうに袋を取り出して、その中から幾枚かの單衣を取り出した。私は浮華と、遊蕩との生活の名殘りを其處に見るかのやうに耐へがたい嫌惡を持つてその一枚、一枚を手に取つた。それから私は姉の許へ行つて鋏を借りて來、再び單衣を取り上げて、凡そ自分の膝と思はれる邊から悉く斷ち切つた。怜度俗の世を脫離して淨界に入らうとする女性が、其綠の頭髮を惜氣もなく斷ち切る時のやうな決意が私の胸に來た。

淺薄なる熱情家……私の行爲をさう言つて嗤ひたいものは笑ふが可い。今こそ、自ら敵陣に驀進しようとする勇士の

意氣を以つて、再び東京の土を踏まう、俺は尠くとも一度土の洗禮を受け、尊い姉の受難の生涯を眼の當りに見、新なる生命の力を取り戾した俺だ。たとへ全都會が燦爛たる百億萬燭の電燈の光りに飾られようとも、靈地を辿る巡禮の目には聖像の前に灯る白蠟の灯のそれにも均しく、狂燥と、浮華との影は消えて、其處には永遠に朽ちることなき藝術の殿堂だけが屹立するだらう。

恰度其時だつた。私は庭の土を踏む小さな足音を聽いた。振り返つて見た時四角な封筒を持つた辰夫が私の方へ走つて來るのだつた。

私は少年の手からそれを受け取つて分厚な封筒を怪みながら開封した。東京にゐるKからの通信だつた。私は急いで讀み下した。讀んでゐるうちに私は泪ぐんだ。友の手紙には寂しいと云ふ文字が處々に使つてあつた。

藝術を捨てる。さう言つて旅へ出たやうな君ではあるが、捨てんと欲つして捨て得ないのは本能に出發する慾求の一切である。千葉へ行く……君はBにさう云つたさうだ。併し幾日經つても手紙が來ない、昨夜は滿月でBと一緒にM原を逍遙した。そして老孃の悲哀を語りながら行く女醫學校の生徒の會話を聽いた、君と共にあの原を步いた事を思ひ出す、君は此月を何處で見てゐる、あの考へ深い瞳は泪に宿つてはゐないだらうか、自分は寂しい、寂しいからこそ低級なn舘の歌劇のスターに牽かられて行くのた。嗤ふなら笑つて與れ。此手紙は餘ほど前に書いたのだ、併し切手を買ふ金がないので、幾日も机の抽出しに入れて置いた。君は本で讀んだことゝ思ふが、此頃の新聞の仁丹の廣告に北歐の作家の手になつた黑い湖と云ふ可憐な物語の梗概が出てゐた。自分は主人公アルネの心持が堪らなく可憐なので切拔いて每日讀んでゐる。書き拔いて入れて置いた。暇な時讀んでくれ……。F子の消息はあれ切り聞かない。

私は此幼稚な思想を盛つた友の感傷的な手紙を讀んで、不思議な燒きつくやうな思慕をKの上に持つたことを白狀し

なければならない異境の港で懐しい邦人に廻り會つた刹那のやうな高い情熱的な嬉しさが私の胸に湧き返つて來た。おゝK、寂しいK……さうだ彼に、今自分の胸に燃え立つてゐる此新しい思想を打ち明けよう。そして若し恐ろしい危機に打ちつかつてゐるやうな心の狀態にある友を少しでも明るみへ導く事が能きたなら……斯う思ふと私は矢も楯も堪らなくなつて義兄の處へ走つて行つた。そして直に東京に歸らなければならないことを說明した。義兄たちはひどく驚いて別離を惜んだ。ぜひもう暫時といふのを私は振り切るやうにして其日のうちに丘の家を發つた。

發つ時私は秋の收穫期に再び此家を訪れることを誓ひ、そして姉に袋の中の好きな衣類を取つて置けと言つて袋を其處に持ち出した。併し姉はいい着物を着る機會がないから要らないと少しの執着もなく答へた。そして彼女は白い紙に包んだ幾何かの金を私の袂に忍ばせた。櫟林の盡きる處まで皆は送つて呉れた。從姉、義兄、姉は私の前後を取卷き、三人の子供は交る〲私の手に取り縋つた。

「ご氣嫌よく、」

「ご氣嫌よく、」

私と丘の家の人たちとの距離は次第に遠のいて行つた。三度目に振り返つた時、義兄達の姿も、丘の家も、櫟林も、みな山蔭に隱れた。

明るい廣濶な野は私の前途に際涯もなく續いた。

（一九一九、一二、二擱筆）



死刑囚の寫眞

小川未明

私の好きな早春がめぐつて來ました。梅の梢は珊瑚樹のやうにうす紅く色づいて、空は酒に醉うてゐるやうに、ほんのりと匂やかに色めいてゐます。

小さな窓を開けて、黑ずんだ中にも蘇生へる力のうごめいてゐるやうな、外の繁みを眺めてゐた時、町の方から起つて、空の中をはね返へつて聞えて來る、さま〴〵な小さな音に心を捕へられてゐました。今までにも、こんなやうな音は聞えて來たのであらうけれど、其等の音が一つ、一つ笑つたり、飛び上つたり、嬉しさうにして、黃昏の空を氣ままに何處へか驅けて行くのを聞いたことがなかつた。人間ばかりでない、物の音までに、やはり春の來たのが嬉しいと見えるやうな穩かな日暮方でありました。

ぼんやりとして、考へ込んでゐた私は、急にそわ〳〵として、かうして眠としてはゐられないやうな氣持がしたのであります。もう一度、春のやうに若やいだ氣持になつて、見落して來た幸福を引返して拾つて見やう。それには、まだそんなに年をとつ

てしまつたといふ程でない。まだ私にとつて人生の日は頭の上に高く、日が暮れるのに間がある筈だ。其れだのに、何をくよ／＼してゐたのだらう。誰もやつて來て、自分の肩を叩いて、無理に引き立て喜びと悲しみの巷に突き出すやうな者はない。自分で出なければならないのだ。

「この世の中を愉快に暮らすのも、さうでないのも氣の持ちよう一つである」と、私は、思ひました。

ヒヤシンスの花の咲く頃です。私は、あの香氣の强い、分けて紫色のこの花を見るのが大好きです。町へ出て、其の花を一鉢買つて來やうと思ひました。そして、室の裡に置いて、新しい氣持でこれからの仕事にとりかからうと思ひました。

室を見まわした時に、あまりに其の室は荒れてゐます。何を見ても、いたましい生活の汚みがついてゐます。この室の中に新しい、みづ／＼した感情の芽ぐむには、あまり冷た過ぎる氣がしました。其の中でも、固いテーブルに、壞れかけた椅子の二つは、何うしても、氣持を愉快にすることが出來ない。其れには、死んだ二人の子供の爪の跡が、いくつも付いてゐるからであります。

たとへ未來に華かな空想を描くとしても、過去の記憶は、破壞するでありませう。私はこのテーブルと椅子だけは、子供の紀念として永久に、傍から離さないと考へたことがあります。ある時、子供は其の上に乘つてゐた。ある時、子供は其れを臺にして遊んでゐた。而して、無數の指紋と爪の跡とが其の上についてゐる。子供等はゐなくなつてしまつても、其れだけは殘つてゐるからと思つたのです。

けれど、考へ直して見るのに、其れが畢竟何になるでありませう。みんなからして足跡を一度はこの地の上に殘して行つたのです。けれど、月日の經つに從つて、誰も其れを見分けるものがない。

河の中へ流してしまふ氣で、この二つを人生の波の中へ投げてしまはふ。さうすれば、この二つのものは行衛が分らなくなつても、また何處かで人々に使はれて、人はこのテーブルに向ひ、また、子供はこの椅子によぢ上るであらうと思ひました。

ヒヤシンスの花を買つて來て、この古いテーブルに置くには、あまりにこのテーブルの過去の思ひ出は、いたまし過ぎたのであります。私は、思ひ立つたままに、直に道具屋を呼んで來て、この二つの品物を賣拂はうと思ひました。

そして、明日から、此處に新しい卓の上に紫色の香の高い花が載せられてある光景を想像しました。死んだ子供等と自分との間にあつた、つながりはついに斷たれてしまつて、だん〳〵に遠く、遙かに距つてしまふやうな淋しさが心に感じられましたけれど、極めて小さいことながら、兎に胸の中に起る革命に私の心は躍りました。而して、其のことは自分の氣分を何か新しい方へ誘ふであらうと考へると、明日からの生活に、樂しみが持たれたのであります。刻々に變つて行く、そして、其れに新しい生活の興味がある、これが人生であると、私は考へました。

早速、近所の道具屋へ使ひをやりました。其の間に、テーブルの上のものを片附けて置きました。

道具屋の來るのを待つ間、私は、ぼんやりとして坐つてゐました。そして、ぢつとテーブルと椅子の二つの影が、鼠色の夕暮方の光線の中に浮き出てゐるのを見詰て、永久に別れなければならぬ名殘を惜しんでゐました。

思ひ出したやうに私は立ち上つた。そして其の椅子に腰をかけて、テーブルに向つて見ました。すると、其れは私自身でない。死だ男の子が、かうしてこの椅子に腰をかけてテーブルに向つてゐた姿があり〳〵と浮んで來ました。もとより子供の兩足は疊の上に付かずに五六寸も高い處に浮いてゐます。其れは熱い夏の日のことで、窓の外には、いろ〳〵た木の葉が繁り合つて、つや〳〵と日の光りが葉の面を流れて輝いてゐました。空の色は赤つぽかつたのです。そ

して、子供は單衣の目地絣の着物を被てゐました。後ろに結んだ三尺の端がだらりと垂れてゐたのも眼に殘つてゐる。

すべての思ひ出は、すべて、ある日のある時刻に、一たびは現在となつてこの地球の上に起つた事柄であります。さう考へると、私の心は、戰慄を感じた。

たとへば、其の時分に活々として、これがいつ凋落するなどゝは思ひも寄らぬ勢であつた程の澤山な木の葉が、いつの間にか姿も亡びてしまつたやうに、私は、窓から枝ばかりとなつた木立に眼を移しながら、自然の推移を何うすることも出來ないと感じたのであります。

其時、使ひが歸つて來て、あとから直に道具屋がやつて來ました。外では遊んでゐる子供等の聲などが聞えて來て、穩かな晩方でありましたが、まだ季節だけに空氣は殊に暮近くなると冷えきつてゐました。西の方の雜木林の間を紅く染めて、今日も日は沈んでしまつた。空には、殘光が漂つてゐます。

室に入つて來た男は、顏の色の黑い、眼光の尖つた眼の窪んだ小柄な人間でした。その眼光は、寒い風に當つて來たので際立つて光つて見えた。男は兩方の手をさすりながら頭を低く下げた。

「このテーブルと椅子なんだがね」と、私は、早速言ひました。

「あ、左樣ですか」と、男は眼で笑つて、私の傍にあつた火鉢に、彼も腰をおろして當りながら煙草を喫ひはぢめました。

「俺が、道具屋をはじめましてから、今年で三年になりますが、この頃のやうな不景氣なことはありません、其の前までは、北海道で魚の方を商つてゐましたが、其の前は、栃木縣で鳥屋をしてゐましたが、何をしても、金といふものは、あまり儲からんものです」と、男は自分から聞かぬことまで話をしながら、時々眼を二つの品物の方に向けてゐました。

「其のうちで、どの商賣が一番好かつたね」と、私は、好奇心から、つい話をしかけた。

「さあ、どれがようございましたか、人によつてみんな異ひませうが、俺には、鳥屋をしてゐた時が一番金が儲かりました」と、彼は、答へてまた太い煙管でたばこを喫ひ付けてゐました。

「なんで、其の商賣をしてゐなかつたんだね」と、私は、つい金の儲かる商賣であつたなら其れをつづけてゐて、よささうなものをと考へたので聞きました。

男は、また眼の縁に小皺を寄せて笑ひながら、

「殺生は氣持のいいもんでございません。牛や馬などになりますと、物をいはないといふばかりで、なんでもよく分つてゐます。其れさへ殺して食べるんですから、雞などはなんでもないやうなもんですけれど、やはり殺されることはよく知つてゐます。鳥屋の手に渡つて、籠の中へ入れられると、目方を殖すために餌を澤山やつても、ぐん／＼と目方が減るばかりでもがりますさかへ、殺生をすることは罪になるもんです」と、男は、言つて、過ぎ去つた日のことを追懐してゐました。

この男の語つたのは、これだけであつたけれど、籠の中へ入れられて餌をやつても目方がぐん／＼と減る、鳥屋の手に渡つた時から鳥はもう死を知つてゐると言つたのが、私には少なからず感動を與へたのです。

其れは、私は、毎日のように町の中を散歩します。自働電話のある往來の四つ角に一軒の鳥屋がある。其の家の前を通るたびに、其の店頭の低地には、雨降りの後などはよく水が溜つてゐる、其の中を田を掻き廻すやうに家鴨が歩いてゐる。傍には、いくつも竹籠が並んでゐて、其の中に雞が入つてゐるのを見ました。すぐ籠の上には、此家の雇人達が厚い板の上で雞を裂いてゐるのです。血は、其の板を眞赤に染めてゐます。庖丁の光りが血の色に曇つて氣味惡く、空

氣の裡に閃きます。そして、肉は細かに刻まれて一處にかためられ、骨は何か物の殼のやうに隙間だらけになつて室の片隅に小山の如く積み重ねられてゐます。

其れを見るたびに、私は、いつも籠の中の雞がどんな氣持でゐるだらうと考へるのです。つい朝まで、いつしよに餌を拾つて食べてゐた仲間が、こんな姿になつてゐるのを見ても何とも思はないのだらうか？　私は、鳥の心理はいかなるものかといろ〳〵に考へました。其れとも造化は、鳥には自省といふ意識を與へなかつたのだらうか。そして、はじめから、かうした不幸なものとして存在するやうに運命づけるために、都合よくなされたのだらうかとさま〴〵に考へたのである。

ちやうど、私は、胸毛の白い、全體の毛色の褐色がゝつた牝雞が下を向いては餌をつゝいて、其れを飲み込む時に、仰向いて、出來るだけ頸を伸しながら、眼をしばたたいてゐるのを通りかゝりに眺めたからであります。

そして、この牝雞に、臺の上の有様が籠の荒い編み目を通して見えたい筈がたいからでありました。

長い間の私の疑ひは、道具屋の言つたことで解けたのであります。やはり雞には、よく分つてゐる。其れでいくら餌を澤山やつても目方は減つて行くのだ。其れは、雞が心で死を怖れるからだ。

何にも言はない彼等に、こんな恐怖心があるといふことを誰が同情をして、常に見るでありませう。默々のうちに、悲しみ、痛み、怖れる、このいぢらしい有様を平常、誰が思ひやり深く見守るでありませう。私は、雞が默つて、ああして籠の中にはいつてゐる事實そのことが既に怖しくなりました。

男は、まだいろ〳〵屠牛場の話や、自身が子供の時分に見た記憶などについて語りましたが、私は、もう雞のこと一つで、胸の中が一杯になつてゐて、其れを考へるだけでも、他のことに耳を傾ける餘裕がなかつたのであります。

そのうちに、男は、テーブルを担ぎ、椅子を抱へて出て行きました。私は、其の二つの行衛を見送つてゐました。

自分よりも強い力を持つてゐる者に對して、これに抵抗することが出來ずに、默つて其の運命に甘んずるといふことは、なんといふいぢらしいことでありませう。

もう外の木立の影は、ぼんやりとよく分らなくなりました。冷たな青黒い空の色が次第に鮮かになつて、燈火の光りが灰色の路につづいて、何か寂しいことを思ひ出させるやうに輝いてゐました。

ふと、私は一枚の寫眞をしまつて置いたことに思ひついたのです。すぐに立つて、私は書棚の前に行きました。そして抽斗を探つて新聞の切抜きや、紙などの間にはさまつてゐる繪を引出して、またもとの机の前に坐つて燈火の下で其の寫眞を見ました

其れをぢつと見詰めてゐるうちに、私の體に震へるのを感じました。どうして、こんな怖しい光景を寫眞に撮つたであらう。どうしてこんな怖しい光景を人前に曝らすことが出來るだらうか。そして、これは正しいことなのであらうかといふやうな疑惑が、一時に頭の中に起つて來た。

この一葉の寫眞版は、ある雜誌の口繪となつてゐた、外國の某監獄で行はれた死刑執行の刹那の光景であつたのです。しかも其の囚人は、二名の婦人であつて罪名は嬰兒殺戮といふのである。彼等がどんな風にして、子供を殺したかはちよつと想像に浮んで來なかつたが、いま、まだそんなに年寄りでもない、生先きのある女が、病氣でも何でもないのに、一思ひで命をとられやうとしてゐる有樣は空想でない現實であつた。

正面には、長方形の扉が開いてゐます。其の内側はそんなに廣いとは思はれない。しかも二尺落込んでゐて、其の中に立つてゐる囚人の足先きは、扉の閉る下の石段に隠れて見えなかつた。そして、もとより其の中は扉が閉つてしま

へば全くの暗黒であつて、何處からも光線の射込む處がないので、一つの窓もついてゐなかつた。ただ囚人の立つてゐる頭の上の天井から一筋の繩が下つてゐる。其の天井も外からは、あまり高いので扉の開いてゐる口からは見えなかつた。其の繩は布を被された女の頭についてゐた。女はあちらを向いて立つてゐるので、見えるのは、女のうしろばかりであつた。うしろに廻はされた兩手は、手頸の處で二つ堅く結られてゐる。これは、死刑になる瞬間であつて、女は、いまか、いまかと、自分の命をとられる時刻を胸の裡ではかつてゐるやうに、俯向き加減になつてゐる。どんな顔をしてゐるか、其れは布を頭から被されてゐるので、たとへ前にまわつて見ても分る筈がない。けれど一枚の布の下で懊惱と絶望のために苦しんでゐる怖しい形相を想像することが出來る。そして、同時に肩から背を傳はり、腰にかけて、足の方へ流れてゐる服の下には軟かな女特有の肉附きがあることを思はせる。曲線のみが、こんな怖しい場合にあつても、事件と無關係に自然の美を示してゐる。

「人間に、人間を殺す權利があらうか？」と、これを見たら誰でも疑ひ、思ふにちがひない。

長方形の扉の開いた外側には、壁の處に一つのいぼが出てゐた。其のいぼに手をかけて背の高い、あご髭の長い帽子を被つた、年をとつた獄吏が立つてゐる。獄吏は、指頭に全身の神經を集めてゐる。其のいぼを押せば、時を經たずに、室の中に立つてゐる女は死ぬのである。電氣で死刑を執行するのである。

これを見るだけで、私には充分でありましたのに、なほ、一人の女囚が、外に立つて自分の番の來るのを待つてゐます。

恐らく、數分間前に、其處で二人の女は、說教を聞いたのでありませう。そして、生の終りで、死によつて救はれる未來のために祈りを捧げたのでありませう。膝掛の上に一冊の聖書は、ある頁を開いたまま伏せて置かれてあつて、傍

に宣教師が見まじき光景を見なければならぬやうに顔を顰めて心の苦痛を堪へながら、片手を下顎に當て俯向いて立つてゐます。

偶然に、一人が、一人よりも先に殺されるのです。ほんたうに、其のことは偶然であつたにちがひなからう。そして、二人は、ついに二たび生きながらいつしよに並んで立つことがない。後にたつた女は、やはり頭から布を被されてゐました。兩手はうしろに廻されて、結ばれてゐました。そして、兩方の足もまたしつかりと結ばれてゐました。二つの靴の先きが觸れ合ふやうになつてゐます。しかし、かうして一處に立つてゐることは出來ても一歩も歩むことは出來なかつたでありませう。だから、一人の女が殺されたら、そして、其の女の番になつたら、尚ほ、其場に二三人立ち合せてゐる帽子を被つた獄吏等が、この女を抱へて扉の開いてゐる入口から室の内へ移すにちがひない。ちやうど荷物か何かを運ぶやうにして……。そして、前の女のしたやうに、同じ場處に立たせられて、やはり天井から下つてゐる縄を頸に結び付けられるのであります。

夜のことであるらしい。晝間のことかとも思つたが、大きなランプが、外側の天井につる下つてゐるのを見ると、夜中のことであるらしい。そして、考へて見るのに、こんなことがどうして白日行はれ得るであらうか

こゝにも、私は、弱い者が默々として死んで行かなければならぬ事實を見るのです。彼等は惡いことをしたにちがひない、けれど、かうして人間が、人間を殺す權利をどこから得たであらうか。やはりこのことも、また惡いことであるにちがひない。もし、この女等が殺されなかつたなら、なほ幾年か彼等は、世間の人々といつしよに何等異なるところがなく笑ひ、悲しみ、そして働いて生活をすることが出來るであらう。その間に、なんで彼等は他人のために泣かないといふことが出來やう。また美しいものに對して、正しいものに對して感激しないといふことが出來やう。

私は、この世の中に、初めから罪人と名づけられるものは一人もない。かうしてみんな生きてゐる不思議な人間なのだと思ひました。其れを殺して活動を止めることを考へると言ひ知れぬ怖しいやうなことに感じたのです。ついぼんやりとして、寫眞を見詰たまゝに、いつまでもぢつとしてゐました。

ヒヤシンスの花を思ひ出しました。寫眞を机の抽斗の中にしまつて、窓を開けて外の氣はひを覗ひますと、夜の空には、星の光りがうるんでゐました。やがて雨になりさうな模様もあつたのであります。かうして、降る一雨毎に暖かに向つて、土はゆるみ、其の底からいろ／＼の草の芽がのびるのであらうと思はれました。私は、いよ／＼出かけようとまご／＼してゐました時に、誰か、人がたづねて來たやうであります。

しばらく顔を見なかつたKが、こちらまでついでがあつたから立寄つたといふのです。Kと私とは専門の仕事が異つてゐましたが、もう數年前からの親しみでありました。彼は先刻まで、テーブルと椅子の置いてあつた場處に坐りました。

「其後、變つたこともありませんか」と、二人は、互に言ひ合つて笑ひました。

「穏かな、暖かな晩ですね。もう、あまり寒いこともないでせう」と、私は言つた。

「さうです、散歩にお出かけになつて、おるすではないかと思つて來ましたが」と、Kは言ひました。

二人は、そんなやうなことから、いろ／＼な話をした。私は、かうして話をしてゐるうちに、死刑囚の寫眞がありありと眼の中に浮んで來たので、机の抽斗を開けて、其の寫眞を取り出しました。そして、Kに示して、

「さつき、この寫眞を見て、いろ／＼なことが考へられてならなかつたのです」と、私は、言ひながら、彼が、この寫眞に對して、どんな感想を抱くであらうかと、知りたかつたのであります。

Kは、しばらく寫眞の上に眼を落してゐた。やがて、眼を上げると、

「死刑囚について思ひ出すことがあります。其れは、私が支那を放浪してゐる時分に、出遇つたことなんです。まだ、あなたにもお話しないと思ひますが……誰にも語つたことがないのだから、忘れ難い記憶があるのです」と、Kは言つた。

彼は、もはや私の示した寫眞の上には、心をとられてゐなかつた。そして、遠い記憶をありありと見詰めるやうに、瞳を凝らして、燈火の下で私の顔の方を眺めて、語つてゐました。

「まだ、聞いたことがありません」と、私は、彼に其の話を促したのであります。

Kは、今から數年前までは、支那の方に行つてゐました。彼地で、どういふことをしてゐたか、もとより其等についての委しいことは、彼自身より他に知るものはないが、私は其れを聞かうともしなかつたのです。彼との交際も其れ以後のことで、全くふとした機會からであつたから。

「もう八年ばかりも前になりますか」と、Kは語りはじめた。

「君は、眼を見て其の人間を見分けることが出來ますか。苦勞を經驗して來た人は、自づとものを見る眼付に共通なところがあります。其れは敬虔な信念の閃きに近いもので、なつかしい感じを與へるものです。少なくも、さうした經驗のある人々なら、よく其の眼付きを理解するものです。考へて見ても分ることで、多年暗黑な牢獄の裡に坐つてゐたならばどんなに僅かな隙間から洩れて來る光線でも有がたいでせう。そして、其の光線にぢつと見入る心持は、どんなに敬虔な澄みきつたものでありませう。獨り、自然に對してばかりでなく、さうした人々は、やはりお互に對してもこの

やさしみの籠つた眼をぢつと向けるものです。

さうです。もう冬に近い、秋の寒い日のことでありました。私は、山海關の停車場へ行く道を何事か考へながら、下を向いて歩いてゐました。たま〳〵私の前を行く者があります。顔を上げると古くなつた洋服を被た老人が、黒い帽子を眼深に被つて、汚れた靴を引摺るやうにして同じ方向に歩いてゐるのです。私は、其の人の後について行くと、老人は後方を振り向きました。其時、私の眼と其の老人の眼とぴたりと互に覗き込むやうに合ひました。其の眼は單にやさしみがあるといふばかりでは言ひ表はせなかつた。人生に對して、ある理解を有するものゝみに限つて有するやうな澄んだ眼でありました。私は、其の老人が何人であるかを知りませんが、過去の經驗についてほゞ會得することが出來るやうな氣持がしました。それで、思はず私も微笑むと、老人は決して相手の感情には釣込まれないで、少しも最初の印象を變へずに穏かにうなづいてゞもゐるやうに、灰色になつた長い顎髭は搖いでゐるのでした。

二人は物も言はず、たゞ顔を見合つたといふだけであります。そして、私は、老人を追越して停車場に行きました。

汽車は南に向つて走つてゐました。窓の外には、荒寥とした田畑が見られた。擾亂と民心の不安とで、其のあたりは荒れ果てゝゐます。何を見るにつけても、この老大國の運命は占はれるのでした。

空は雪でも降りさうに曇つて、凍つた雲が低く遠く野原の上に漂つてゐて、車室の中はうす暗かつた。まだ燈火がつかないので、私は、窓際に、ポケットから取り出した地圖を翳すやうにして、いまゝで通過して來た土地や、これから行かなければならない土地の所在などを眼分量で其の距離などをはかつてゐました。

其時、不意に私の肩を叩いたものがあります。驚いて振向くと、先刻、停車場へ來る途中で見た老人でありました。

「ちよつと地圖をお見せ下さいませんか」と、老人は、調子の整つた日本語で言ひました。

「さあ、どうぞ」と、私は、手に持つてゐる地圖を老人に渡しました。

老人は、熱心に地圖の面に見入つてゐました。其の澄んだ瞳は、肉の削げた頬から下に向つて飛出すやうに輝いてゐました。

私は、心に思ひ當ることがあつたから、

「あなたは上海へおゐでになるのでせう。私は天津に降りるのですから、其の地圖をお持ちなさつても構ひません」と、私は、なんでもないやうに言つた。

「いや、もう分りました。有がたうございます」と、老人は答へて、地圖を私に返しました。車室の内に燈火がつく時分に、老人は何處へ行つたか見えなくなりました。

私は、あの老人が最近まで牢獄生活をしてゐたといふことは、其時、彼が手を差しのべた時にちらりと見えた、手錠の痕がついてゐるので分りました。

いまだに、あの時のことを考へると、何ともいへない氣持がするのです。私は、獨りでこの時のことを思ひ出しては考へるので、誰にも話す氣になれませんでした。

Kの話は、これだけであつた。

ヒヤシンスの花を買ひに出ようなどと思つてゐたが、Kを送り出した時には、もう、この黒水晶のやうな早春の夜は、大分更けてゐました。

―一九二一、一作―



入れ札

菊池寛

上州岩鼻の代官を斬り殺した國定忠次一家の者は、赤城山へ立て籠つて、八州の捕方を避けて居たが、其處も防ぎ切れなくなると、忠次を初、十四五人の乾兒は、辛く一方の血路を、斫り開いて、信州路へ落ちて行つた。

夜中に利根川を渡つた。澁川の橋は、捕方が固めて居たので、一里ばかり下流を渡つた。水勢が烈しいため、兩岸に綱を引いて渡つたが、それでも乾兒の一人は、つひ手を離したゝめ流されてしまつた。

澁川から、伊香保街道に添ふて、道もない裏山を、榛名にかゝつた。一日、一晩で、やつと榛名を越えた。が、榛名を越えてしまふと、直ぐ其處に大戸の御番所があつた。

信州へ出るのには、この御番所が、第一の難關であつた。此の關所をさへ越してしまへば、向ふは信濃境まで、山又山が續いて居る丈であつた。

忠次達が、關所へかゝつたのは、夜の引き明けだつた。わづか、五六人しか居ない

役人達は、忠次達の勢に怖れたものか、彼等の通行を一言も咎めなかつた。

關所を過ぎると、遉に皆は、ほつと安心した。本街道を避けて、裏山へかゝつて來るに連れて、夜がしらじらと明けて來た。丁度、上州一圓に、春蠶が孵化ろうとする春の終の頃であつた。山上から見下すと、街道に添ふた村々には、青い桑畑が、朝霧の裡に、何處までも續いて居た。

關東縞の袷に、鮫鞘の長脇差を佩して、脚絆草鞋で、厳重な足ごしらへをした忠次は、菅のふき下しの笠を冠つて、先頭に立つて、威勢よく歩いて居た。小鬢の所に、疵痕のある淺黒い顔が、一月に近い辛苦で、少し窶れが見えたゝめ、一層凄味を見せて居た。乾兒も、大抵同じやうな風體をして居た。が、忠次の外は、誰も菅笠を冠つては居なかつた。中には、片袖の半分斷れかけて居る者や、脚絆の一方ない者や、白つぽい縞の着物に、所々血を滲ませて居るものなども居た。

街道を避けながら、而も街道を見失はないやうに、彼等は山から山へと辿つた。大戸の關から、二里ばかりも來たと思ふ頃、雜木の茂つた小高い山の中腹に出て居た。ふと振り顧ると、今まで見えなかつた赤城が、山と山の間に、ほのかに浮び出て居た。

「赤城山も見收めだな。おい、此所いらで一服しようか」

さう云ひながら、忠次は足下に大きい切り株を見付けて、どつかりと、腰を降した。彼の眼は、暫らくの間、四十年見なれた懷しい山の姿に囚はれて居た。赤城山が利根川の谿谷へと、緩い勾配を作つて居る一帶の高原には、彼の故鄕の國定村も、彼が賣出しの當時、島村伊三郎を斬つた境の町も、彼が一月前に代官を斬つた岩鼻の町もあつた。

關越をしようとする忠次の心には、さすがに淡い哀愁が、感ぜられて居た。が、それよりも、現在一番彼の心を苦し

めて居ることは、乾兒の仕末だつた。赤城へ籠つた當座は、五十人に近かつた乾兒が、日數が經つに連れ、二人三人潛かに、山を降つて逃げた。捕方の總攻めを喰つたときは、廿七人しか殘つて居なかつた。それが、五六人は召捕られ、七八人は何處ともなく落ち延びて、今殘つて居る十一人は、忠次のためには、水火をも辭さない金鐵の人々だつた。國を賣つて、知らぬ他國へ走しる以上、此先あまり、いゝ芽も出さうでない忠次のために、一緒に關所を破つて、命を投げ出して呉れた人々だつた。が、代官を斬つた上に、關所を破つた忠次として、十人餘の乾兒を連れて、他國を橫行することは出來なかつた。人目に觸れない裡に、乾兒の仕末を付けてしまひたかつた。が、みんなと別れて、一人限になつてしまふことも、いろ／＼な點で不便だつた。自分の目算通に、信州追分の今井小藤太の家に、ころがり込むにした所が、國定村の忠次とゝ云はれた貸元が、乾兒の一人も連れずに、顏を出すことは、沽券にかゝはることだつた。手頃の乾兒を二三人連れて行くとしたら、一體誰を連れて行かう。さう思ふと、彼の心の裡では、直ぐその顏觸が定つた。平生の忠次だつたら、

「おい！淺に、喜藏に、嘉助とが、俺と一所に來るんだ！外の野郎達は、銘々思ひ通に落ちて呉れ！路用の金は、別けてやるからな！」

と、何の拘泥もなく云へる筈だつた。が、忠次は赤城に籠つて以來、自分に對する乾兒達の忠誠を、しみじみ感じて居た。鰹節や生米を嚙ぢつて露命を繫ぎ、岩角や樹の下で、雨露を凌いで居た幾日と云ふ長い間、彼等は一言も不平を洩さなかつた。忠次の身體が、赤城山中の地藏山で、危險に瀕したとき、みんなは命を捨てゝ働いて呉れた。平生はぐれて、物の役には立つまいと思はれて居た闇雲の忍松までが、見事な働きをした。

さうした乾兒達の健氣な働きと、自分に對する心持とを見た忠次は、その中の二三人を引き止めて、他の多くに暇を

やることが、何うしても氣がすゝまなかつた。皆一様に、自分のために、一命を捨てゝかゝつて居る人々の間に、自分が甲乙を付けることは、何うしても出來なかつた。剛愎な忠次も、打ち續く艱難で、少しは氣が弱くなつて居る故もあつたのだらう。別れるのなら、いつそ皆と同じやうに、別れようと思つた。

彼は、さう決心すると、

「おい！　みんな！」と、周圍に散かつて居る乾兒達を呼んだ。烈しい叱り付けるやうな聲だつた。喧嘩の時などにも、叱咤する忠次の聲丈には、狂奔して居る乾兒達の耳にもよく徹した。

草の上に、蹲まつたり、寢ころんだり、銘々思ひ〳〵の休息を取つて居た乾兒達は、忠次の一喝で、みんな起き直つた。數日來の烈しい疲勞で、とろ〳〵眠りかけて居るものさへあつた。

「おい！　みんな」

忠次は、改めて呼び直した。「盤皿見透し」と、若い時仇名を付けられて居た、忠次の大きい眼がギロリと動いた。

「みんな！　一寸耳を貸して貰ひてえのだが、俺これから、信州へ一人で、落ちて行かうと思ふのだ。お前達を、連れて行きてえのは山々だが、お役人をたゝき斬つて、天下のお關所を破つた俺達が、お天道様の下を、十人二十人つながつて歩くことは、許されねえ。もつとも、二三人は、一緒に行つて貰ひてえとも思ふのだが、今日が日まで、同じ辛苦をしたお前達みんなの中から、汝に行け汝は來るなと云ふ區別は付けたくねえのだ。連れて行くからなら、一人殘らず、みんな一緒に連れて行きてえのだ。別れるからなら、恨みつこいのないやうに、みんな一様に別れてしまひてえのだ。さあ、茲に使ひ殘りの金が、百五十兩ばかりあらあ。みんなに、十二兩宛、呉れてやつて、殘つたのは俺が貰つて行くんだ。銘々に、志を立てゝ落ちて呉れ！　隨分、身體に氣を付けろ！　忠次が、何處かで捕まつて、江戸送りにでもなつたと聞いたら、

線香の一本でも上げて呉れ！」

忠次は、元氣にさう云ふと、胴卷の中から、五十兩包みを、三つ取り出して、熊笹の上に、づしりと投げ出した。が、誰もその五十兩包みに、手を出すものはなかつた。みんなは、忠次の突然な申出に、何う答ていゝか迷つて居るらしかつた。一番に、乾兒達の沈默を破つたのは、大間々の淺太郎だつた。

「そりや、親方惡い了簡だらうぜ。一體俺達が、妻子眷族を見捨てゝ、此處までお前さんに、從いて來たのは、何の爲だと思ふのだ。みんな、お前さんの身の上を氣遣つて、お前さんの落着く所を、見屆けたいと思ふ一心からぢやないか。いくら、大戸の御番所を越して、もうこれから信州までは、大丈夫だと云つたところで、お前さんばかりを、一人で手放すことは、出來るものぢやねえ。尤も、かう物凄な野郎ばかりが、つながつて歩けねえのは、道理なのだから、お前さんが、此奴だと思ふ野郎を、名指してお呉んなせえ。何も親分乾兒の間で、遠慮することなんか、ありやしねえ。お前さんの大事な場合だ！　恨みつらみを云ふやうな、ケチな野郎は一人だつてありやしねえ。なあ兄弟！」

みんなは、異口同音に、淺太郎の云ひ分に賛意を表した。が、さう云はれて見ると、忠次は尚更撰みかねた。自分の大事な場所である丈に、彼等の名前を指すことは、彼等に對する信頼の差別を、露骨に表はす事になつて來る。それで、選に洩れた連中と――内心、忠次を怨むかも知れない連中と――共儘、再會の機も期し難く、別れてしまはねばならぬ事を考へると、忠次は如何うしても、氣が進まなかつた。

忠次は口を銜んだ儘、何とも答へなかつた。親分と乾兒との間に、不安な沈默が暫らく續いた。

「あゝ、いゝ事があらあ」釋迦の十藏と云ふ未だ二十二三の男が叫んだ。彼は忠次の盃を貰つてから、未だ二年にもなつて居なかつた。

「籤引がいゝや、みんなで籤を引いて、當つた者が親分のお供をするのがいゝや」
當座の妙案なので、忠次も乾兒達も、十藏の方を一寸見た。が、嘉助といふ男が直ぐ反對した。
「何を云つてやがるんだい！　籤引だつて！　手前の樣な青二才に籤が當つて見ろ、反つて、親分の手足纒ひぢやないか。籤引なんか、俺あ眞つ平だ。此麼時に一番物を云ふのは、腕つ節だ。おい親分！　くだらねえ遠慮なんかしねえで、一言、嘉助ついて來いと、云つてお吳んなせい」
四斗俵を兩手に提げ乍ら、足駄を穿いて歩くと云ふ嘉助は一行中で第一の大力だつた。忠次が心の裡で選んで居る三人の中の一人だつた。
「嘉助の野郎、何を大きな事を云つてやがるんだい。腕つ節ばかりで、世間は渡られねえぞ。まして、此れから、知らねえ土地を遍歷つて、上州の國定忠次で御座いと云つて歩くには、駈引萬端の軍師がついて居ねえ事には、どうにもならねえのだ。幾ら手前が、大力だからと云つて、ドヂ許りを踏んで居ちや、旅先で、飯にはならねえぞ」
さう云つたのは、松井田の喜藏と云ふ、分別盛りの四十男だつた。忠次も喜藏の才覺と、分別とは認めて居た。彼は、心の裡で喜藏も三人の中に加へて居た。
「親分、俺あお供は出來ねえかねえ。俺あ腕節は強くはねえ。又、喜藏の樣に軍師ぢやねえ。が、お前さんの爲には、一命を捨てゝもいゝと、心の内で、とつくに覺悟を極めて居るんだ」
閑雲の忍松が、此處迄云ひかけると、乾兒達は、周圍から口々に罵つた。
「何を云つてやがるんだい、親分の爲に命を投げ出して居る者は、手前一人ぢやねえぞ、巫山戲た事をぬかすねえ」
さう云はれると、忍松は一言もなかつた。半白の頭を、テレ隱しに掻いて居た。

さうして居るうちに、半時ばかり經つた。日光山らしい方角に出た朝日が、もう餘程さし登つて居た。忠次は、默々として、みんなの云ふ事を聽いて居た。二三人連れて行くとしたら、彼は籤引では連れて行きたくなかつた。やつぱり、信頼の出來る乾兒を選びたかつた。彼は不圖一策を思ひ付いた。それは、彼が自ら選ぶ事なくして、最も優秀な乾兒を選み得る方法だつた。

「お前達の樣に、さうザワ〳〵騷いで居ちや、何時が來たつて、果てしがありやしねえ。俺一人を手離するのが不安心だと云ふのなら、お前達の間で入れ札をして見ちや、どうだい。札數の多い者から、三人丈連れて行かうぢやねえか。こりや一番怨みつこいがなくつて、いゝだらうぜ」

忠次の言葉が終るか終らないかに、

「そいつあ思ひ付きだ」乾兒のうちで一番人望のある喜藏が贊成した。

「そいつあ趣向だ」大間々の淺太郎も直ぐ贊成した。

心の裡で、籤引を望んで居る者も數人あつた。が、忠次の、怨みつこいの無いやうに、然も役に立つ乾兒を、選ばうと云ふ肚が解ると、みんなは異議なく入れ札に贊成した。

喜藏が矢立を持つて居た。忠次が懷から、鼻紙の半紙を取り出した。それを喜藏が受取ると、長脇差を拔いて、手際よくそれを小さく切り分けた。さうして、一片宛みんなに配つた。

先刻からの經路を、一番厭な心で見て居たのは稻荷の九郎助だつた。彼は年齒から云つても、忠次の身内では、第一の兄分でなければならなかつた。が、忠次からも、乾兒からも、そのやうには扱はれて居なかつた。去年、大前田の一家と一寸した出入のあつた時、彼は喧嘩場から、不覺にも大前田の身内の者に、引つ擔がれた。それ以來、彼は多年培つ

て居た自分の聲望がめつきり落ちたのを知つた。自分から云へば、確かに後輩の淺太郎や喜藏に段々凌がれて來た事を、感じて居た。そればかりでなく、十年前迄は、兄弟同樣に賭場から賭場を、一緒に漂浪して歩いた忠次迄が、何時となく、自分を輕んじて居る事を知つた。皆は表面こそ「阿兄！阿兄！」と立てゝ居るものゝ、心の裡では、自分を重んじて居ないことが、あり〱と感ぜられた。

入れ札と云ふ聲を聽いたとき、九郎助は惡いことになつたなあと思つた。今迄、表面丈は兎も角も保つて來た自分の位置が、露骨に曝されるのだと思ふと、彼は厭な氣がした。十一人居る乾兒の中で、自分に入れて呉れさうな人間を考へて見た。が、それは彌助の他には思ひ當らなかつた。彌助も九郎助と同樣に、古い顏であつて、後輩の淺太郎や喜藏などが、グン〱頭を擡げて來るのも、常から快からず思つて居るから、かうした場合には、屹度自分に入れて呉れるだらうと思つた。が、彌助丈は自分に入れて呉れるとしても、彌助の一枚丈で、三人の中に這入ることは考へられなかつた。淺太郎には四枚は這入るだらうと思つた。喜藏に三枚這入るとして、十一枚の中、後へ四枚殘る。その中、自分の一枚のけると三枚殘る。若し、その中、二枚が、自分に入れられて居れば、三人の中に加はること出來るかも知れないと思つた。が、彌助の他に、自分に入れて呉れさうな人は、どう考へても當がなかつた。ひよつとしたら、並川の才助がとも思つた。あの男の若い時には、可成り世話を燒いてやつた覺えがある。が、それは六七年も前の事で、今では「淺阿兄、淺阿兄」と、淺にばかりくつ付いて居る。さう思ふと、彌助の入れて呉れる一枚の他には、今一枚を得る當は、何うにもつかなかつた。乾兒の中で年頭でもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは――自分の信望が少しも無いことがまざ〱と表はれることは、もう既定の事實のやうに、九郎助には思はれた。不愉快な寂しい感じに堪へられなくなつて來た。

一本しか無い矢立の筆は、次から次へと廻つて來た。

「おい！　阿兄！　筆をやらあ」

ぼんやり考へて居た九郎助の肩を、つゝきながら横に居た彌助が、筆を渡して呉れた。彌助は筆を渡すときに、九郎助の顔を見ながら、意味ありげに、ニヤリと笑つた。それは、たしかに好意のある微笑だつた。「お前を入れたぜ」と云ふやうな、意味を持つた微笑であるやうに九郎助は思つた。さう思ふと、九郎助は後のもう一枚が、どうしても欲しくなつた。後の一枚が、自分の生死の境、榮辱の境であるやうに思はれた。忠次に着いて行つたところで、自分の身に、いゝ芽が出やうとは思はれなかつたが、入れ札に洩れて、年甲斐もなく置き捨てにされることが何うしても堪らなかつた。淺太郎や喜藏の人望が、自分の上にあることが、マザ〳〵と分ることが、何うしても堪らなかつた。

かれは、筆を持つて、ぼんやり考へた。

「おい！　阿兄！　早く廻してくんな！」

横に坐つて居る淺太郎が、彼に云つた。阿兄！　と云ひながらも、語調丈は、目下を叱して居るやうな口調だつた。九郎助は、無態のことながらむつとした。途端に、相手に對する烈しい競爭心が――嫉妬がムラ〳〵と彼の心に渦巻いた。筆を持つて居る手が、少しブル〳〵顫えた。彼は、紙を身體で掩ひかくすやうにしながら、假名で「くろすけ」と書いた。

書いてしまふと、彼はその小さい紙片をくる〳〵と丸めて、眞中に置いてある空になつた割籠の蓋の中に入れたが、入れた瞬間に、苦い悔悟が胸の中に直ぐ起つた。

「賭博は打つても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな」

口癖のやうに、怒鳴る忠次の聲が、耳のそばで、ガン〱鳴りひびくやうな氣がした。彼は皆が、自分の顏を、ジロ〱見て居るやうな氣がして、何うしても顏を上げることが出來なかつた。

吉井の傳助は、無筆だつたので、彼は仲よしの才助に、小聲で耳打ちしながら、代筆を頼んだ。

皆が、札を入れてしまふと、忠次が、

「喜藏！　お前讀み上げて見ねえ！」と言つた。

皆は、緊張のために、眼を赫した。過半數のものに認めて居たが、それでも矢張、うぬぼれに捉つて居た。壺皿を見詰めるやうな目付で、喜藏の手許を睨んで居た。

「あさ、あゝ淺太郎の事だな、淺太郎一枚！」

さう叫んで喜藏は、一枚札を別に置いた。

「淺太郎二枚！」彼は續いてさう叫んだ。

又、淺太郎が出たのである。淺太郎が、此の二三年忠次の親任を得て、影の形に付き從ふやうに、忠次が彼を身邊から放さなかつたことは、乾兒の者が皆よく知つて居た。淺太郎の聲が、つゞくと忠次の澁い顏に、ニツと微笑が浮かんだ。

「喜藏が一枚！」

喜藏は、自分の名が出たのを、嬉しさうに、ニコリと笑ひながら叫んで、

「嘘ぢやねえぞ！」と、付け足しながら、その紙を右の手で高く上げて差し示した。

「その次ぎが又、喜藏だ！」

喜藏は得意げに、又紙札を高く差し上げた。

「嘉助が一枚！」

第三の名前が出た。忠次は、心の中で、私に選んで居る三人が、入札の表に現はれて來るのが、嬉しかつた。乾兒達が自分の心持を、察して居て呉れるのが嬉しかつた。

「何だ！くろすけ。九郎助だな。九郎助が一枚！」

喜藏は、聲高く叫んだ。九郎助は、顏から火が出るやうに思つた。生れて初て感ずるやうな羞恥と、不安と、悔恨とで、胸の裡が掻きむしられるやうだ。自分の手蹟を、喜藏が見覺えては、居はしないかと思ふと、九郎助は立つても坐つても居られないやうな氣持だつた。が、喜藏は九郎助の札には、こだはつて居なかつた。

「淺が三枚だ！その次は、喜藏が三枚だ！」

喜藏は大聲に叫びつゞけた。札が次ぎ／＼に讀み上げられて、喜藏の手にたつた一枚殘つたとき、淺が四枚で、喜藏が四枚だつた。嘉助と九郎助とが、各自一枚宛だつた。

九郎助は、心の裡で懸命に彌助の札が出るのを待つて居た。彌助の札が出ないことはないと思つて居た。もう一枚さへ出れば、自分が、三人の中に這入るのだと思つて居た。

が、最後の札は、彼の切ない期待を裏切つて、嘉助に投ぜられた札だつた。

「さあ！　みんな聞いてくれ！　淺と喜藏とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑はしいと思ふ奴は、自分で調べて見るとい〻や」喜藏は最後の決定を傳へながら、一座を見廻した。

誰も調べて見ようとはしなかつた。誰よりも先に、九郎助はホッと安心した。

忠次は自分の思ひ通りの人間に、札が落ちたのを見ると滿足して、切り株から、立ち上つた。

「ぢや、みんな腑に落ちだんだな。それぢや、淺と喜藏と嘉助とを連れて行かう。九郎助は、一枚入つて居るから連れて行きたいが、最初云つた言葉を變改することは出來ねえから、勘辨しな。さあ、先刻からえらう手間を取つた。ぢや、みんな金を別けて銘々に志すところへ行つて呉れ」

乾兒の者は、忠次が出してあつた裡から、銘々に十二兩宛を別けて取つた。

「ぢや、俺達は一足先に行くぜ」忠次は選まれた三人を、麾くと、みんなに最後の會釋をしながら、頂上の方へぐんぐん上りかけた。

「親分、御機嫌よう。御機嫌よう」

去つて行く忠次の後から、乾兒達は口々に呼びかけた。

忠次は、振り向きながら、時々、被ぶつて居る菅笠を取つて振つた。その長身の身體は、山の中腹を掩ふて居る小松林の中に、暫くの間は見え隱れして居た。

取り殘された乾兒達の顏には、それぞれ失望の影があつた。

「淺達が付いて居りや、大した間違はありやしねい!」

口々に同じやうなことを云つた。が、やつぱり、銘々自分が入れ札に洩れた淋しさを持つて居た。

が、忠次達の姿が見えなくなると、四五人に諦めたやうに、草津の方へ落ちて行つた。

九郎助は、忠次と別れるとき、目禮したまゝぢつと考へて居た。落選した失望よりも、自分の淺ましさが、ヒシヒシ骨身に徹へた。札が、二三人に蒐まつて居るところを見ると、みんな親分の爲を計つて、淺や喜藏に入れたのだ。親分

の心を汲んで、瀧や喜藏を選んだのだ。さう思ふと、自分の名をかいた卑しさが、愈々堪へられなかつた。

朝の微風が吹いて來て、入れ札の紙が、熊笹を離れて、ひら〳〵と飛びさうになつた。

「あゝ、こんなものが殘つて居ると、とんだ手がゝりにならねえとも限らねえ」

さう云ひながら、九郎助は立ち上つて散ばつて居る紙片を取り蒐めると、めちや〳〵に引き斷つて、投げ捨てた。九郎助の顏は、凄いほどに蒼かつた。

「俺、秩父の方へ落ちようかな」

九郎助は獨言のやうに云つた。彼は仲間の誰とも顏を合して居るのが嫌だつた。秩父に遠緣の者が居るのを幸に、其處で百姓にでもなつてしまひたかつた。

彼は、草津へ行つた連中とは、反對に榛名の西南の麓を目ざして、ぐん〳〵山を降りかけた。

彼が、二三町も來たときだつた。後から聲をかけるものがあつた。

「おい阿兄！　稻荷の阿兄！」

彼は、立ち止つて振り顧つた。見ると、彌助が、息を切らしながら、追ひかけて來たのであつた。彼は彌助の顏を見たときに、烈しい憎惡が、胸の裡に湧いた。大切な場合に自分を裏切つて居ながら、また身の振方をでも相談しやうとするらしい相手の、圖々しい態度を見ると、彼はその得手勝手が、叩き切つてやりたいほど、癪に障つた。

「俺、よつぽど草津から越後へ出ようと思つたが、よく考へて見ると、熊谷在に伯父が居るのだ。少しは、熊谷は危險かも知れねえが、故郷へかへる足溜りには持つて來いだ。それで俺も武州の方へ出るから、途中まで付き合つて呉れねえか」

九郎助は、返事をする事さへ嫌だつた。默つてすたてら歩いて居た。

彌助は、九郎助が機嫌が惡いのを知ると、傍へ寄つた。

「俺あ、今日の入れ札には、最初(はな)から嫌だつた。親分も親分だ！　餓鬼の時から一緒に育つたお前を連れて行くと云はねえ方はねえ。淺や喜藏は、いくら腕節や、才覺があつても、云はゞ、お前に比ぶればホンの子僧つ子だ。たとひ、入れ札にするにしたところが、野郎達が、お前を入れねえと云ことはありやしねえ。十一人の中でお前の名をかいたのは、この彌助一人だと思ふと、俺あ彼奴等の心根が、全くわからねえや」

默つて聞いた九郎助は、火のやうなものが、身體の周圍に、閃めいたやうな氣がした。

「此の野郎！」

さう思ひながら、脇差の柄を、左の手で、グッと握りしめた。もう、一言云つて見ろ、拔打ちに、斬つてやらうと思つた。が、九郎助が火のやうに、怒つて居ようとは夢にも知らない彌助は、平氣な顏をして寄り添つて、歩いて居た。

柄を握りしめて居る九郎助の手が、段々緩んで來た。考へて見ると、彌助の噓を咎めるのには、自分の恥しい卑しさを打ち開けねばならない。

その上、自分に大噓を吐いて居る彌助でさへ、自分があんな卑しい事をしたのだとは、夢にも思つて居なければこそ、こんな白々しい噓を吐くのだと思ふと、九郎助は自分で自分が情けなくなつて來た。口先丈の噓を平氣で云ふ彌助でさへが考へ付かないほど、自分は卑しいのだと思ふと、頭の上に掩いて居る晩春のお天道樣が、一時に暗くなるやうな味氣なさを味はつた。

山の多い上州の空は、一杯に晴れて居た。峰から峰へ渡る幾百羽と云ふ小鳥の群が、黄い翼をひらめかしながら、九郎助の頭の上を、ほがらかに鳴きながら通つて居る。行手には榛名が、空を劃つて蒼々と、聳えて居た。

常に新問題を提供して若き婦人の

婦人公論

（定價五十錢 郵税一錢五厘）

指導者たる高級婦人雑誌の二月號

中央公論社發行

（創作）

■長篇小説 冷淚……正宗白鳥

■感想 夫婦……武者小路實篤

■短篇小説 避□の如き戀……江口渙

■新作劇評 白い鳥……楠山正雄

■長篇小説 女怪……宇野浩二

■南洋土産 赤い蹴出しの男・跣足の女……近藤廣子

■男の罪か女の罪か（誘惑された二人の女の話）

（一）昔から誘惑された我儘の女……阪井一紅

（二）變な手紙を寄越した女學生……内藤詮一

■藝妓撲滅論を讀みて……岡本治

■異國情調に生きた女……高須梅溪

■新歸朝土産 歐米婦人の腐敗墮落……廣井辰太郎

■新時代の新貞操論……帆足理一郎

■漏電（火事の原因で一番多いと言はれる漏電に就て一般婦人への注意）の話……工學博士 澁澤元治

■碧眼の混血兒を抱いて……醫學博士 岡畯二

■『拒婚同盟』批判

■主として拒婚同盟の企圖に就いて……平塚明子

■娘共を引連れて加盟せん……三角錫子

■結構な事には違ひないが……長谷川如是閑

■無益ではないが効果は無い……富士川游

■もつと根本的な仕事を……永井柳太郎

■効果の程を懸念する……三宅安子

■精神に於て賛成します……山田わか

■今期議會の大勢……田川大吉郎

藤森成吉氏著

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區裏神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區元數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本鄉區本富士町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　四條西洞院　前田大盛社
名古屋市富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

○定價　金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、萬年社、電通社、信賴社
三誠社、東亞通信社

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十年一月三十一日印刷納本
大正十年二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話（小石川一四四／小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

